明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治四十二年十一月二十日増刊（毎月一回廿六日印刷納本）

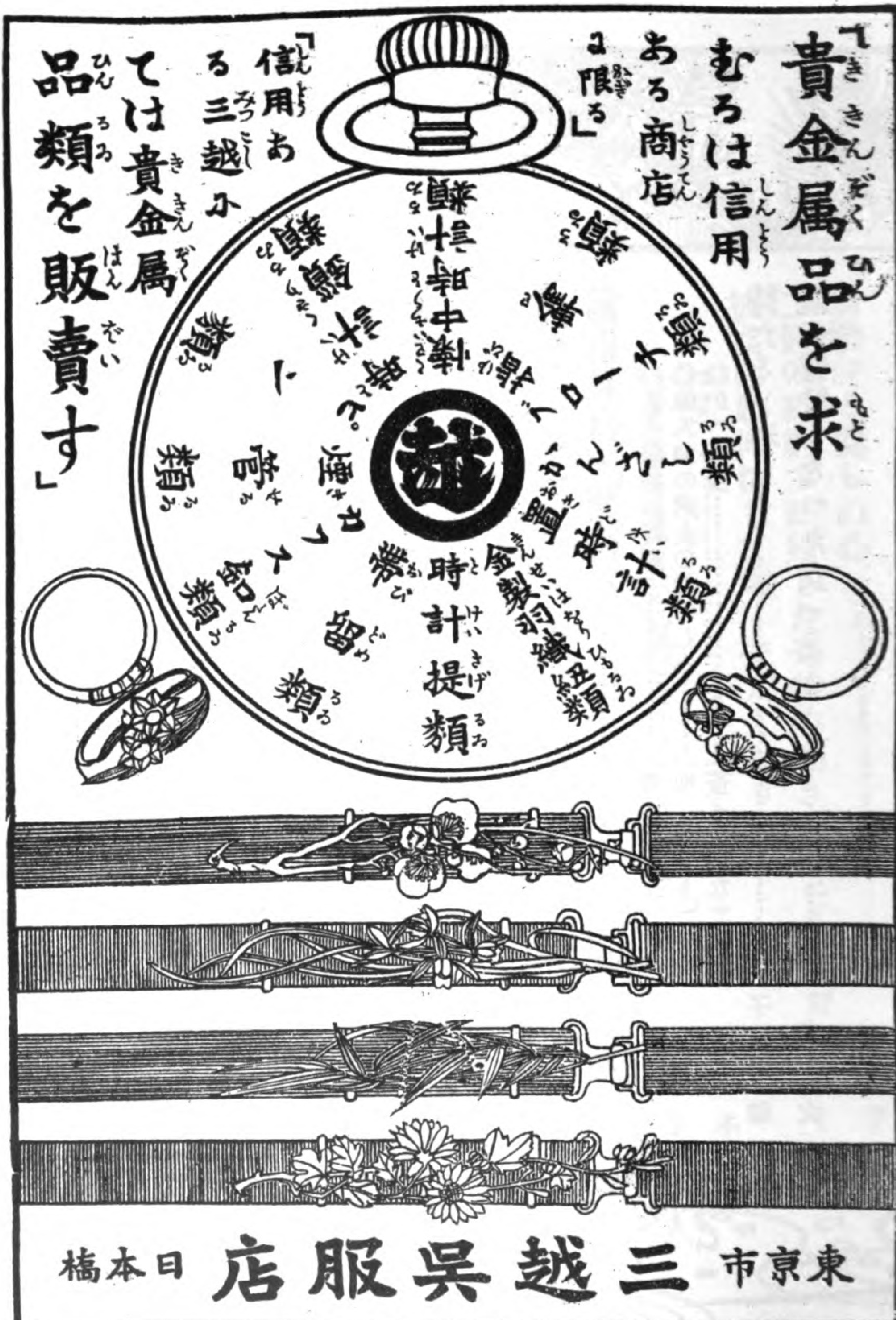
女學世界

嫁にゆく人

十一月十五日發行

第九巻
第拾五號




「貴金属品を求むるは信用ある商店に限る」
指環類
ブローチ類
かんざし類
置時計類
金製羽織紐類
時計提類
帯留類
カフス釦類
煙管類
ピン類
時計鎖類
懐中時計類
「信用ある三越にては貴金属品類を販売す」
東京市　三越呉服店　日本橋

女學世界 第九巻第拾五號 嫁にゆく人目次


高等化粧料
ローヤル水の特長
ローヤル水は最も進歩せる最新の新方法に由て造られし化粧水にして其原料は總て皮膚に有效なる材料のみにて組織せし者なり故に皮膚に對し特殊の働きをなす
ローヤル水は愛す可きスミレと白バラの芳香を有す故に此水を用ゆれば香水を要せず
色を白くし
ローヤル水
あれを治す
定價
大(五十錢)小(二十錢)
中(卅五錢)▼郵税八錢
……郵券代用一割増
東京市京橋銀座一丁目
發賣元 佐々木商店
振替口座三二三〇番
電話新橋四七二番

諸病治療 **救急箱**

醫師 糸左近 考案
藥劑師 川島廣治 監修

最近の救急箱購求者一例

清國北京公使館　日本醬油株式會社　松平直之殿
韓國統監通信管局　臺灣彰化廳　乃木希典殿
京都郵便局　西園寺公望殿　池田謙三殿
大阪稅關庶務課　梨本宮家殿　尾崎行雄殿

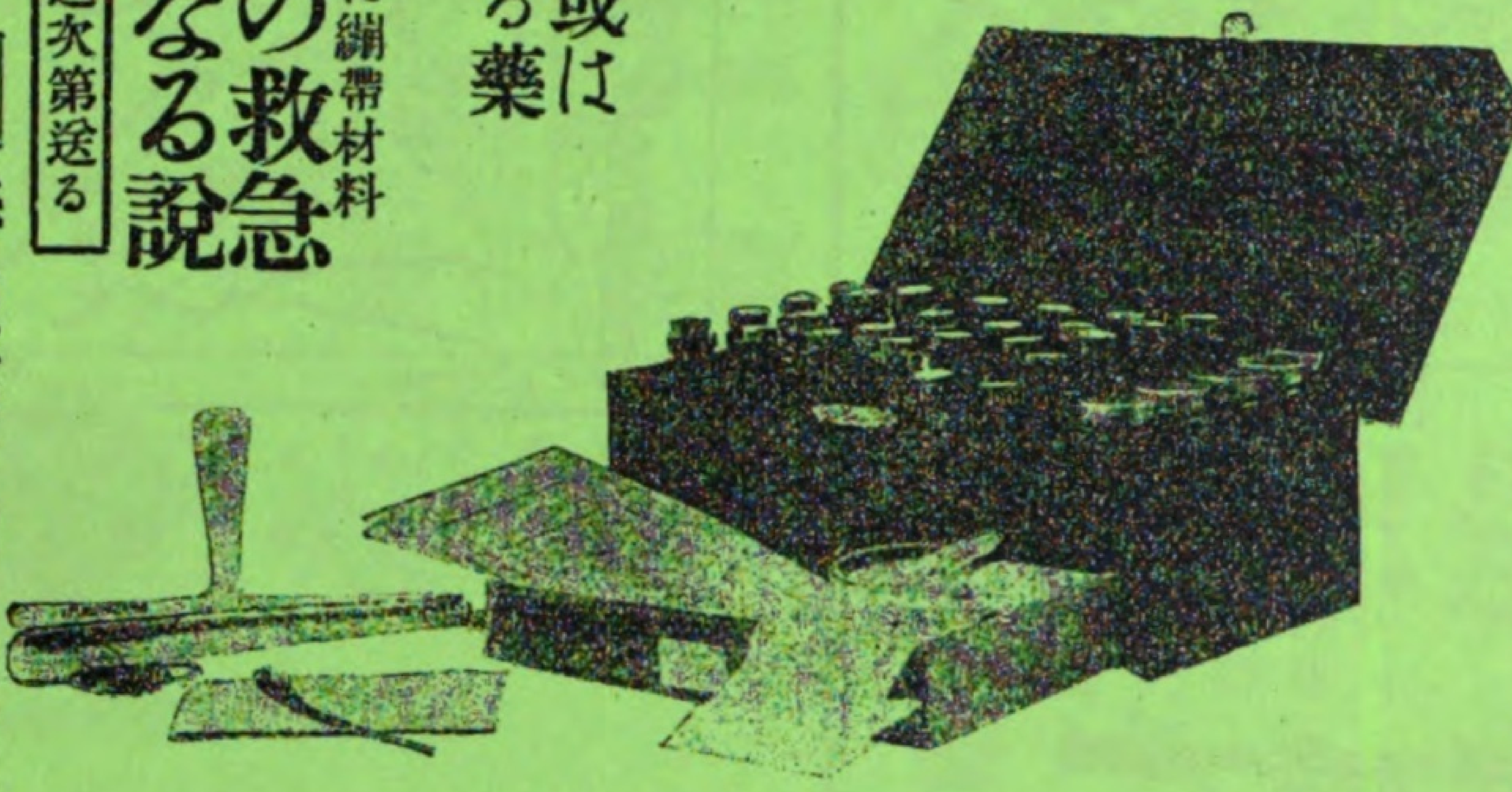
救急箱は能く家庭の安全を保護す

例へば子供が小刀で指を切たとか、お三どんが鐵瓶を引くり反して火傷したとか、小僧が二階から落て氣絶したとか奥さんが癪を起したとか其他頭痛がする風を引た、目がまわる、腹が痛い、胃が痛む、腹が下る等の場合救急箱一個があれば毫も醫者の手を煩はさず如何なる素人でも即座に治療してしまう事が出來る

救急箱は總ての病氣或は負傷の場合に必要なる藥品を網羅す

内容は日本藥局方の藥品三十種と他に繃帶材料調劑用器械若干と**糸左近先生著の救急療法と稱する平易なる說明書を附す**

尚詳細は申込次第送る



價格

特製　金七圓　小包料四十八錢　臺清韓六十錢
並製　金五圓　小包料三十六錢　臺清韓五十錢

體裁

特製　長サ九寸巾五寸五分深サ五寸總ワニス塗栗色箱ニツケル金具附
並製　長サ八寸巾五寸五分深サ三寸五分ワニス塗赤色木製箱ニツケル金具附

發賣元　東京市京橋區三十間堀三丁目十一番地　『電話新橋五〇三七』振替九六六九六番　**敬愛商會**

（一〇三）



御婚禮
御化粧

御婚禮御化粧は御下命に從ひ館員(婦人)出張お召物に配合よろしき樣且つは御素顔を損ぜぬ樣自然美を旨として御化粧いたし候物にて歐米最新式に則り材料一切は本館獨特の品を撰び翌朝に至るも剝げ又は浮く等の患はこれなく候間續々御用命仰せ聞け被下度偏に奉願候



衞生美顔術
御婦人洗髮
美顔術用化粧品化粧具直輸入販賣

東京市京橋區竹川町十二番地

理容館本部

(電新三八〇四)

女(いの二)

國民寶典

實用家庭百科全書

製本既成　見本申込次第進呈

東京 精美堂

主治効能

慢性胃病新薬

大廣散

脾胃虚弱。飲食進まず。虚勞。痰せき。ぜんそく。吐氣。くだりはら等の諸病に用ひて効驗ある事神の如し總て性質虚弱の人は持薬として常に用ゆれば益壽延年の効ある事疑なし●定價試用分金拾錢三日半分金參拾五錢三十日分金貳圓八拾錢

發賣本舗 神奈川縣三浦郡中西浦村秋谷 輕部廣吉謹製

●博文館圖書陳列所……館内にあり

肺病患者の福音

醫科大學薬學專攻 薬學得業士金澤巖著

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

●本法は 女髪結師安部歌子女史

二大奇方剤

ちぢれもくせもも
はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法剤にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇剤なり住復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十七 濟世園

第五回

通信教授 會員募集

産婆學講義録

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勳四等 ドクトル 渡邊鼎

規則要郵券二錢

産婆科六ケ月卒業
看護科四ケ月卒業

東京市四谷區内藤町一

東京産婆看護婦講習會

女(いの三)

紅薔薇



實用新案特許第七六二二六號

子宮あらひ器

兼 懷中湯タンポ

『別名溫滌器』

東京産科婦人科病院長従三位勳二等醫學博士濱田玄達先生實驗御證明
産科婦人科岩佐病院長正三位勳二等男爵岩佐純先生實驗御證明
産科婦人科櫻井病院長 醫學士櫻井郁三郎先生實驗御證明
産科婦人科専門 獨逸醫學博士新井古芳先生實驗御證明

これまでの子宮あらひ器(ユルリガートル)は不便不體裁でありますから折角御求になつても使用が疎になりますが弊店發賣のこの『子宮あらひ器』は體裁優美で使用簡易、携帶便利でありますから

一般御婦人方には一日も缺く可からざる必要品であります



特色

▲この子宮あらひ器は旅行先の旅館或は汽車汽船の中でも自由に使用が出來ます
▲この子宮あらひ器は懷爐形に出來て居ますから何人が見ても子宮あらひ器とは見えません
▲この子宮あらひ器を使用すれば花柳病に感染する憂がありません

子宮あらひ藥

新井古芳先生處方▲この藥は最新に新井博士の發見せられたもので御婦人が子宮を洗ふ場合にはせひ必要のものであります

價格 特製ニツケル製横口上等桐箱入金貳圓也　並製ニツケル實用向製金壹圓也（送料八錢市内無料 臺灣清韓三十錢）

附屬品 ●子宮あらひ藥一ダース四十錢●半ダース二十三錢●あらひ器入袋絹天製金三十錢

發賣本舖 東京市京橋區三十間堀三丁目十一番地（電話新橋五〇三七 振替九六九九六番） 敬愛商會 全國藥店販賣

女(ろの一)

女（ろの二）

女（ろの三）



レックス石鹸は今や社會の一般を通じて愛用せらる
英國参實用浮
レックス石鹸
REX
SOAP FLOATS
佛國製
ケーバ
石鹸
香水
CHIKUMA
REX
REX FLC
REX
MNIUM
ケーバ石鹸香水とは世界の美人國なる佛國より輸入す

女(ろの四)

嫁ぐ人





特殊の効能

高尚なる角形壜にしてペーパ外装に至る迄總て斬新にして頗る美麗を極む

原料を精製しあれば皮膚の弱き人又あれ性の人でも少しもしみることなし

清水の如く見ゆれど使用後一分間にして美しき淡白色を呈し天然の白色美人となすべし

用法極めて簡易にして化粧下（まゆはけ）を要せず即座にむらなく化粧し得

鉛・亞鉛等を混和せざれば少しも衛生上有害ならずして日常之を用ゆれば自然と皮膚を艶美ならしむ

本舗 東京日本橋區通鹽町 大和屋

女（けの一）

毎月一回

文藝倶樂部

一日發行

拾五巻第拾五號 ((内容)) 十一月一日發行

洋裝菊判 紙數三二〇頁

口繪 ●木版摺錦畫原色版 ●寫眞版十頁挿入

定價金廿五錢 郵税貳錢五厘

小說

▼落伍者……(春汀畫)……三島霜川

▼兄思ひ……(春帆畫)……麻村電波

脚本

▼元治の秋……(古洞畫)……岡本綺堂

▼喜劇 家内安全……(清方畫)……山田春塘

【演藝界】●落語家一と昔(松田竹嶼)●演藝當座帳(岡鬼太郎)●演藝事蹟四谷怪談(猪熊入道)●義太界往來(黒法師)●釋界もつかひ(森曉紅)●變對話(椒山藤作)●氣障餓鬼(瀬戸[illegible]太郎)●日本一の文樂座、岡村柿紅……

【活社會】●大阪南地の蓉組(愛川漁夫)●陶器繪師(四六郎)●大連彩票珍譚(仰月生)……【長廣舌】●秋刀魚の話(若草居)●鴨物語(柳生)●寄席のビラ(ま、さる生)……【忙中閑】●珍食會の記●本誌(惡案外史)……【講談】●面婦阿鶴(一立齋文車)……【新流行】●冬の仕度(近藤蕉雨)……【落語】●お茶汲み(柳家小せん)……【募集落語】●落ち天(寛王)……

【百花園】懸賞俳句△俳句△句相撲△狂歌△狂句△都々逸△端唄△小品文△一口噺△滑稽問答室△懸賞沓冠當選披露△新題缺欠文字

東京 博文館 發行

女(はの二)

中學世界 第拾貳卷第拾五號 增刊

第二文藝號

十一月二十日發行 | 全一冊 洋裝菊判 紙數二百四十頁 | 正價廿錢 本號限り 郵稅三錢

口繪 水彩畫菊版二倍大（石井栢亭作）繪葉書（懸賞當選作）

寫眞版 年少作家と畫家中の秀才數十名

表紙 懸賞當選一等作

本欄

紙面を極度に開放した本欄は、年少作家と畫家の自由文壇であつて、明暗、濃淡共に、現代的色調を帶びたる思想と情熱とは、各樣の形式を以て發露されて居る。彼等が如何に語り、思ひ、感じつゝあるを見んとするならば、この一卷を措いて他により便宜の方法はない。

第二文藝號は實に當代青年界の思潮史である。

作品の種別は、短篇小說、論文、敍事抒情文、詩、繪畫等に大別せられ、一々擔當選者の鑑賞と評價の下に、排列せられてある。

附錄

正宗白鳥、小山内薰、水野葉舟、薄田泣菫、兒玉花外

與謝野寬、吉江孤雁、田山花袋、前田木城、西村渚山

（以上諸氏の小品と詩と短篇小說）

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

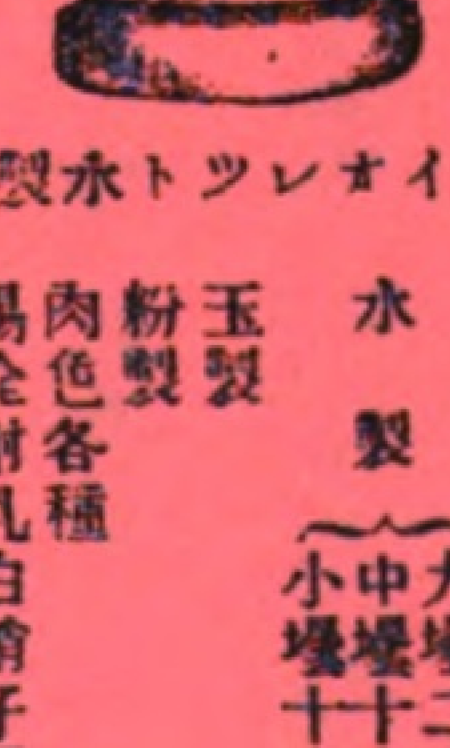
壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

れり製（大壜二十錢 小壜十二錢）
水製（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ淸々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 **壽美禮あらひ粉の特性**

罎詰 綠、藍、紅彩蝶番ひ 八錢
別製罎詰 五拾錢
大袋 二錢
小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨得の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標

西洋白色くなるあらひ劑

SUMIRE
WASHLNG IOWDFR

壽美禮あらひ粉

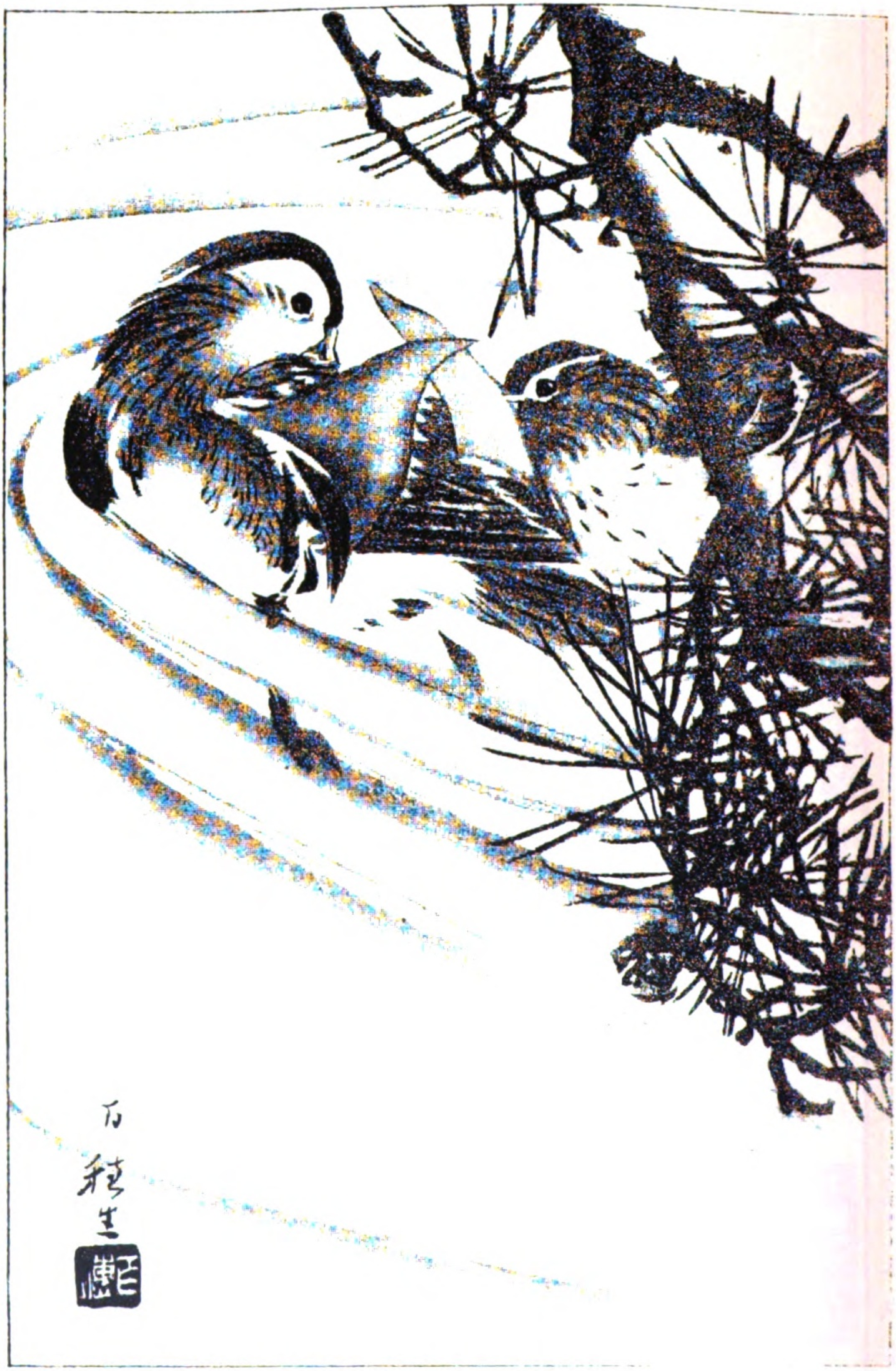


製造本舖 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製 （電話浪花二一七六五番）

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求め被下度候

（廿の四）

鴛鴦



平福百穂筆

庭の宴



福田岑僊筆

◀幼年畫報第四卷第拾五號增刊▶

十一月十五日發行

ニコ〳〵婆さん

さゞなみ作　三郎畫



ニコ〳〵婆さんよい婆さん、いつでも笑つているばかり、ニコ〳〵ニコ〳〵ニイコニコ、ついぞや怒つた事がない、悲しい時でも笑つてる、太郎や次郎わ婆さんを、どうにかたくんで怒らせよ、腹立つ所が見たいとて、手をかえ品をつくしたが、婆さんやつぱし笑つてる、ニコ〳〵婆さん怒らない、悲しい時にも笑い顔、嬉しい時にわ猶の事ニコ〳〵ニコ〳〵ニイコニコ、これでわ仕様がないわいと、太郎も次郎も手を引いて
今度は一所に
ニイコニコ。

菊判美麗畫本
石版極彩色刷……十六頁
活版二色刷……十六頁
光澤寫眞版……四頁

正價一冊金拾錢
郵稅一冊五厘

東京本町　博文館　振替口座東京二番

少年世界 第十五卷第十五號 定期增刊

十五卷紀念號

本文百三十六頁 口繪寫眞版豐富

《十一月十五日發行》

正價金十錢 郵稅壹錢五厘

少年世界生れて滿十五年の歳月を經たり、天下に少年雜誌多しと雖、本誌の如く長壽にして而も年は一年毎に發展進歩するもの他にありや、之本誌が天下に向つて大いに誇とする所、茲に第十五卷紀念の微意を表する爲め、一部特殊の増刊を企てしもの、又多年愛讀の諸君が厚顧に酬ゐんと欲するのみ、乞ふ左記の目次を一閲して其内容を判じ給へ。

本文目次

東京日本橋 本町 三丁目 **博文館** 振替口座 東京 二四〇番


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
ヒゲタ印醤油
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港


ウヅラ石鹸
東京ヨコヤマ町

女(にの四)

山内侯爵夫人禎子



名家の令嬢



和田豐子
（日本礦業會長理學博士和田維四郎氏令孃）



松山釜子
（老國手松山棟庵氏令嗣）

最新美顔用化粧水原料

化粧香水

プラチナ

○プラチナ…は衛生化粧の原理に基づき最新大發明の美白原料液なり
○プラチナ…は牛乳中の主成分たる乳素と果實汁の美白原素の合劑也
○プラチナ…は皮膚に必要なる滋養分を悉く併有せる濃厚原料液なり
○プラチナ…の香料は花卉浸出法に依て採集せる花精エセンスなり
○プラチナ…の實質は實用香水として殊に毛髪用に適し毛根を養ふ
○プラチナ・の塩味は皮膚上の殺菌作用顯著にして吹出物等は消滅す
○プラチナ…を鹽分なき軟水又は湯に點滴せば直に乳劑化粧水となる
○プラチナ…の容器は最新式にして一滴づゝ正確に計られる仕掛なり
○プラチナ…の十倍乃至五十倍は牛乳製化粧水と同等なる効力を有す
○プラチナ…の數倍量は濃厚美顔料液として皮膚を滑澤艶麗ならしむ
○プラチナ・の數滴を洗面の湯水に點滴し用ふれば肌理能し色白くす
○プラチナ…は意匠の斬新體裁の高尚優美なる實に破格の價値を有す
○プラチナ…の取扱店は全國到る處の小間物店化粧品店藥店にあり

發賣元 東京橫山町 天野源七

—（定價金參拾錢……郵劵代用一割増し遞送無料）—

宮內省御用達

天下一品

最上醬油

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女（ほの一）

婦女必讀の大全書

第十一編 **編物指南**
女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十三編 **教育お伽噺**
少年世界記者 木村小舟君著

第十五編 **家屋と庭園**
內山正如君著

第十七編 **女子作文法**
遠藤ふみ子女史
松崎ふく子女史 共著

第十二編 **婦人の生理と衛生**
青山學院教授 牧野濟子女史著

第十四編 **女德の養成**
前田長太君著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養**
農業世界記者 鹿野化骨君著

第十八編 **子女の教養**
私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

第十九編 **家庭の趣味**
文學士 大森兜山君著

第廿編 **家庭遊戯法**
【第一編】室內遊戯の部＝●作字遊び●通信遊び●軍師拳●通辯者●指環捜し●年中行事●百足遊び●文句綴り●旅行談●一分間演舌●毀れ木像●毬撞き競争●捜し物●文章綴り●十二支廻はし●趣寄せ●折物競争●暗夜の狩人●面責り●物盡し●釣り喰ひ●煎餅の喰ひ競べ……外八十項【第二編】室外遊戯の部＝▲蓮華遊び▲御馬遊び▲兎遊び▲水車▲手巻き▲熊と猿▲雁打ち▲場所取り鬼▲廻り鬼▲鐵道遊び▲池の鯉▲輪拾ひ▲南瓜割り▲隠れ鬼▲蛙飛び競争▲友捕り鬼▲不倒翁……外廿五項【第三編】季節遊戯の部＝◎春季遊戯（十六項）◎夏季遊戯（十四項）◎秋季遊戯（十四項）◎冬季遊戯（廿六項）【第四編】英語遊戯の部＝◎考案遊び（十三項）●早口ことば（九項）●英字遊び（七項）●英語遊び（十八項）●英文遊び（十八項）●英文學遊び（五項）
高橋忠次郎君
松浦政泰君 共著

第廿一編 **書道手引**
歌道書道專攻 大和會々長 井田秀生君著

第廿二編 **歌の手引**
大和田建樹君著

第廿三編 **刺繡術指南**
刺繡術專門 磯村大次郎君著

本町三丁目 博文館 振替貯金口座 東京二四〇番

名家の令嬢



右　首藤靜子（日本銀行理事首藤諒氏長女）

中　淸岡和香子（子爵淸岡龍氏令妹）

左　首藤文子（日本銀行理事首藤諒氏次女）

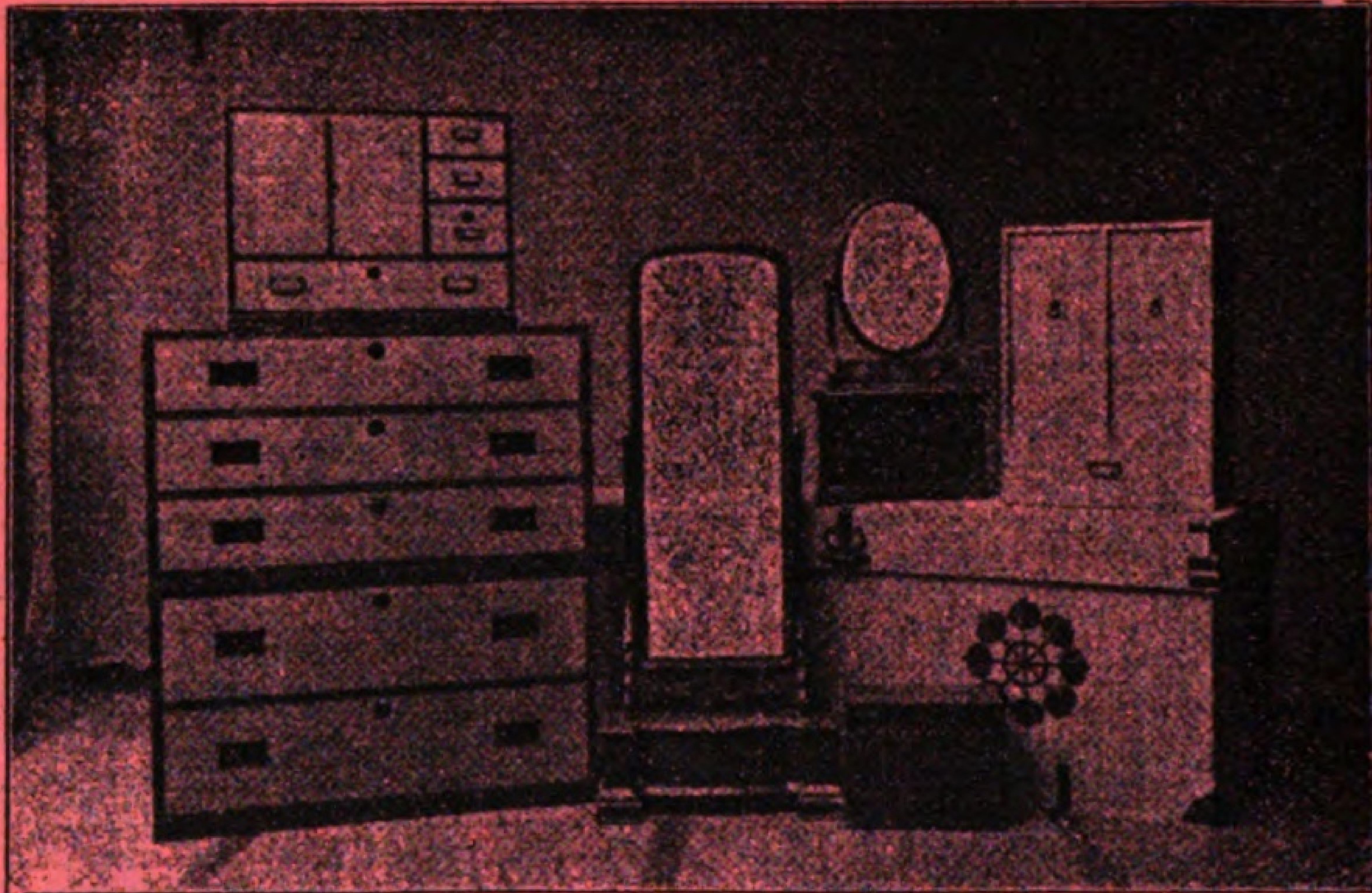
名家の令嬢



上亀井千代子（有栖川宮家扶亀井滿成氏令嬢）中宏爲佐子（米穀取引所理事宏虎童氏令嬢）下神田百合子（男爵神田乃武氏令嬢）

數代老舗

▼御申込あらば**簞笥目錄**送呈仕候 送費二錢



東京市京橋區金六町

鷲塚高等簞笥店

電話新橋五百七十一番

三階建

▼本店階上には**陳列場**の設あり 正札販賣



女(への一)

★文學博士井上哲次郎君　文學博士遠藤隆吉君序★

大學院學生 文學士 岩橋遵成君
文學士 豐嶋要三郎君 共編

東洋倫理 修養寶鑑

全一册洋裝
三六判上製
紙數約七百五十頁
價壹圓拾錢
小包料八錢

船を行ることを知つて未だ舵を操ることを知らざる者はわざはひなるかな、萬卷の書を讀破すとも未だ心の饑ゑたるものは憐れむべし。故に君子は學を修めて身を修めざるものを却け、身を修めて心を修めざるものを惡む。確乎たる東洋倫理の基礎は此の身を修め心を正するにある耳、何ぞ又他を言はんや。然れども今や新時代の文明がもたらす衒學者流の惡風は滔々として青年學徒の思想を攪亂し、諸流學派の混戰はいよ〳〵新進者をして多岐望洋の嘆あらしむ、夫れ人の身を謬るの憂ふべきは學問の人を謬るより甚しきはあらず、吁又寒心の極みならずや。此時に當つて一部の「修養寶鑑」あり、彼の世上紛々たる倫理學説の多岐多樣なるは吾等の言ふ處にあらず、苟も古聖賢が致知躬行の餘後世に埀示せられたる訓言は悉く收めて此一卷にあり、青年學に志す人の座右に備ふべきは勿論、彼の徒らに机上の空論に彷徨する倫理學者の如き一度び此書を繙かば、濶然として迷夢を覺醒せられたるの思あるべし

本書要目

第一◎自己編　第二◎家庭編
第三◎社會編　第四◎國家編
第五◎武士道編　第六◎雜録編

博文館　東京日本橋本町三丁目　振替口座東京二四〇番

女（への二）

養畜手引

十一月廿日發行

洋装菊判　紙數二百四十頁

口繪三色版石版寫眞版豐富

正價金貳拾錢

郵税（本號限り）三錢

東京本町　博文館

農業世界　第四巻拾四號　増刊

大家畜は農家に勞力と乳肉とを給し、小家畜は以て副産的收入を擧げしむるも、飼養管理の宜きを得ざれば成功の域に達す可らず、本書は之に就き如何にせば最も易く畜力を得、如何にせば畜産の收入を大ならしむるを得べきかの方法を、極めて平易に親切に且つ實行し得らるゝやう詳述し、其内容の豐富にして有益廉價なる農界未曾有の好著述なるを確信す、營利に念ある農業家は是非一本を座右に備ふるの要あらん其内容左の如し。

△牛、馬、羊、山羊、豚、兎、蜂の種類、飼養、蕃殖、取扱、利用、治療法

△燻肉、煉乳、牛酪、乾酪、粉乳等五畜産の製法販賣

△牧草の種類、栽培、調製、貯藏

△副業的飼畜と牧畜業の經營



（三）


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
最上醬油之元祖
開業貳百六拾五年
上
千葉縣銚子町
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

女（への四）

名家の令嬢



東郷澄子
（故海軍中將東郷正路氏令孃）



伊東初子
（子爵伊東二郎丸氏令孃）

宴席の裝飾



實業團の一行を待ち設けたる米國スポケーン市歡迎宴席の設備

最上醤油

キハク印

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハク又キハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

美人となる新輸入の化粧薬
グランドクリーム

定價
大瓶 金壹圓
中瓶 金五拾錢
小瓶 金參拾錢
各送料三本迄八錢ヲ要ス

一 顔や肌へ塗れば色白く艶や美しくすべ〳〵となる
一 手足にぬれば「ひゞ」や「あれ」もきれゐになる
一 白粉下として鉛毒を消しのりよく斑を生せず「そばかす」ふき出物は痕なく自然に消ゆる



不思議な化粧薬
グランドクリーム
試用として壹壺金貳拾錢外に送料貳錢

芳香を永く保つ
星美人香水 本舖

東京市日本橋區瀬戸物町二十四番地
中岡太洋堂
電話本局千二百〇八番

女(その一

現代の婦人は

斯の如き書を讀まざるべからず



鳩山春子女史序文　前田雪子女史著

巴里婦人の交際振 奥様の顧問

全一册三六判
紙數四百四頁
正價四十八錢
郵税六錢

花園に下りて花の一枝を折らんとせば、先づ必ず其が中の精粋を取るならん、本書は歐米交際界に花の王と稱せらるゝ巴里婦人の輕妙なる應對振、訪問振、談話振、舞踏振を始めとし、宴會法、婚姻法、外出法等あらゆる禮法を網羅したれば、苟も文明の禮法を學ばんとする奥様方、特に未來の外交官夫人となるゝ淑女令孃方は一本を購求し給はゞ、二十世紀の社交界に立ちて華々敷く活動することを得べし。

田村江東君著

活動せる 實業界の婦人

全一册洋装菊判紙數二百四十頁
巻頭實業家婦人寫眞版挿入
正價金三十八錢　郵税八錢

(内容)

△勤勉力行の化身：三枝かれ子△文明の美化・菅川英子△發明家の妻：仁科終子△内顧の憂なき婦人：山崎ため子△獨立自尊の標本：篠原よれ子△隱れたる偉勤：川合こう子△黒りボン：伊藤なか子△時計の針の弛みなき妻：服部まん子：△夫婦共勵の醫師　篠田せい子△白牡丹の姉妹：松田八十子大西琴子：△寧ろ嬢衣な縫はん：秦利舞子△準備教育を受けし嫁：佐藤歌子△才德並備の良妻　龜井まき子△商業教育の産物：富成梓子△福德圓滿の内儀：槙田織子△商賣繁昌の秘訣　内田とめ子△夜店の女書肆：片桐なか子△實踐躬行の才女：山崎きみ子△白芙蓉：丸茂宗子△此母にして此嫁あり：大橋きよ子△妙齢の女書記・秋山德子△中洲の西大后：佐々木頼子△光榮ある讃衣の元祖　茂野蝶子△實業家の理想的婦人：雨宮信子、同てる子

福田琴月君著

●當世 奥様氣質

再版

洋装四六判紙數二百頁　正價卅錢　郵税四錢

(目次)

◎奥様十種
◎人の噂
◎結婚前の某嬢に答ふ
◎大みそか
◎土産日記
◎奥様となる事は易く奥様たる事は難し
◎あはれな誇り
◎會社員の奥様
◎母より
◎霜夜
◎奥様の失望
▲餘興
◎滑稽鰻の蒲燒

東京本町
博文館
振替口座番號
東京二四〇

(の二)

やんやと御評判のある先生いらずのおけいこ本

惣菜料理のおけいこ

成立學校學監嘉悦孝子女史述

婦人の一番大切なお仕事は毎日の煮たきでしよう其中でお氣骨折升のは副食物でしよう例へ一本の大根一尾のお魚でも料理法一つで美味不味に成升のは知れた事ですが其料理が費が少く共手數が掛り升と毎日の事ですから面倒ですが此本には日本料理は申迄もなく西洋支那料理等の手輕で美味い物丈を極親切に書いてある實に便利な御本です

東京うへの、しのぶ川主人述

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

豆腐のお料理

豆腐に大層な滋養分が有事は申迄もない事此本には料理の數が百九十種材料は僅か一丁のお豆腐で料理方は皆違ひ升から倦る様な事なく衛生によく美味く是が實際の惣菜

英國メエリー、エム、ウヰルソン女史及 松波女史合述

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

洋食のおけいこ

此本が大層賣升譯は材料が牛肉や豚肉に限つた譯でなく費が少なく手輕に出來十三四の嬢様にでも解ると申す譯で其他に料理の心得や御客に出し方食べ方なども書いて有升

近定主人 屋中定吉述

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

さつま芋お料理

皆様のお好なおさつです御酒を召上る方が御嫌ひになるのは料理の仕方が御惡いからです此本に書て有升のは上戸も下戸も喜び甘い鹽梅で百廿種の珍らしいお料理が出來升

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

裁縫のおけいこ

專門大家七氏合述

有觸れた裁縫の本と違ひ升是は何も御存じのない嬢様方が御覧に成ても解る様にして有升今迄に斯云ふ本は有ません是が始めてゞす例へば赤ン坊の襦袢の裁縫丈でも十九頁から書て有升もの其悉敷さは御察し下さい

ねずみや主人野村福藏述

全壹冊價參拾五錢郵稅四錢▲總かな付繪數二百個入美本

足袋裁ち縫いのおけいこ

此頃足袋のお高い事一足お買になる價で三四足も出來升よ此本に名高い鼠屋の足袋形が五文から十二文迄十八種附て裁縫の事から紳士が悉皆書て有升から何人にもよく解り升決してよい加減な事は申しません足袋形だけでも五十錢の値段がありますよ

井上秋江女史述

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

漬物のおけいこ

此頃は漬物には好時節又漬物のないお宅は有升まい此本は其漬物を美味くする漬方です別に費か掛る譯でなく極手輕です同じ青物でも色々漬方をして家内中を喜ばせて下さい

梅田竹次郎述

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

和洋菓子製造のおけいこ

日本菓子は申迄もなく西洋菓子等を有合道具で手輕に出來て美味い物丈百五十種を極く親切に書て有升本は買つたがお菓子は出來ぬと申す様な事のないのを受合升又お贈物に手製のお菓子等は一層のお慰みと思ひ升

全一冊價廿八錢郵稅四錢▲繪入總かなつき美本

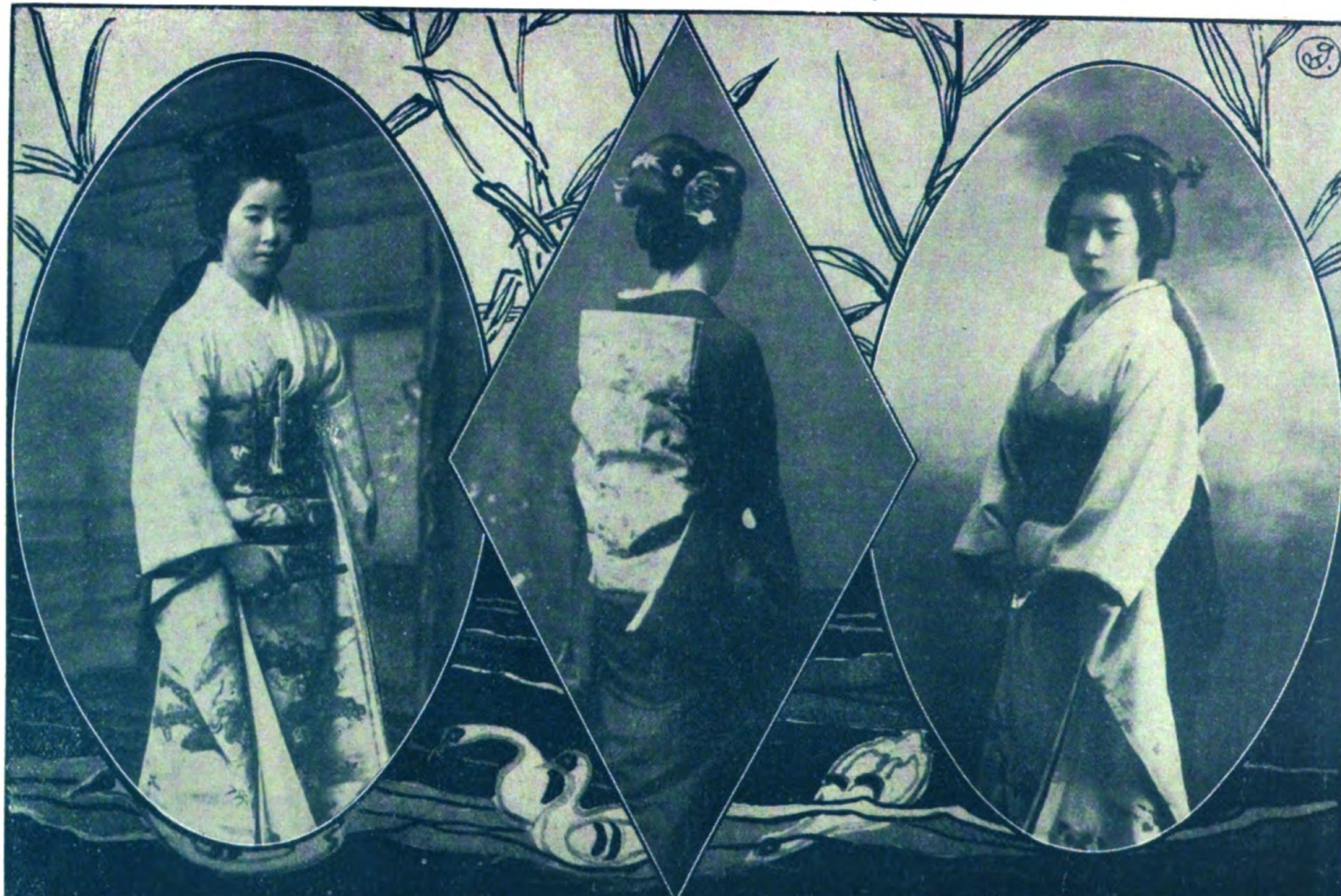
發兌元 東京日本橋數寄屋町九(振替口座三三七二)六合館

妙齢の舞姫



セシー、パツトマン嬢　ニナ、シーヴイング嬢　フロレンス、ダツドリー嬢

嫁ぐ人



右　岩山かし子（盛岡豪商岩山剛氏令孃）

中　中川まつ子（近江草津豪商中川氏令妹）

左　川俣清子（常陸大田町豪商川俣氏令孃）

歳暮賣出し

十二月一日より

本年の仕入れものは悉く格安にて尚見切反物寄せ切等各種販賣仕候

日本橋區通旅籠町（電車ならば人形町か小傳馬町）

大丸呉服店

國の遠近を問はず御注文に應じ可申候御注文案内書は御一報次第御送附可仕候値段に二樣は無之候

新柄帶地。友仙。陳列會

十一月十五日より引續き陳列仕候

御婚禮時季なるがためか非常の好評に有之右延期仕候

女（ちの一）

實踐女學校々長
下田歌子女史著

家庭文庫

全部十二册

下田歌子女史學東西を究め一種超凡の新智識と新卓見とを以て現に子弟教育の道に從事せらる本書各編皆な精實を極む故に他の空論と異り上下を通じて一般社會の家庭上に適用するは勿論なり全部十二冊皆是れ著者が多年の實驗上より出でたる者如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるかを驗せられよと云爾……………………

◎全部書目

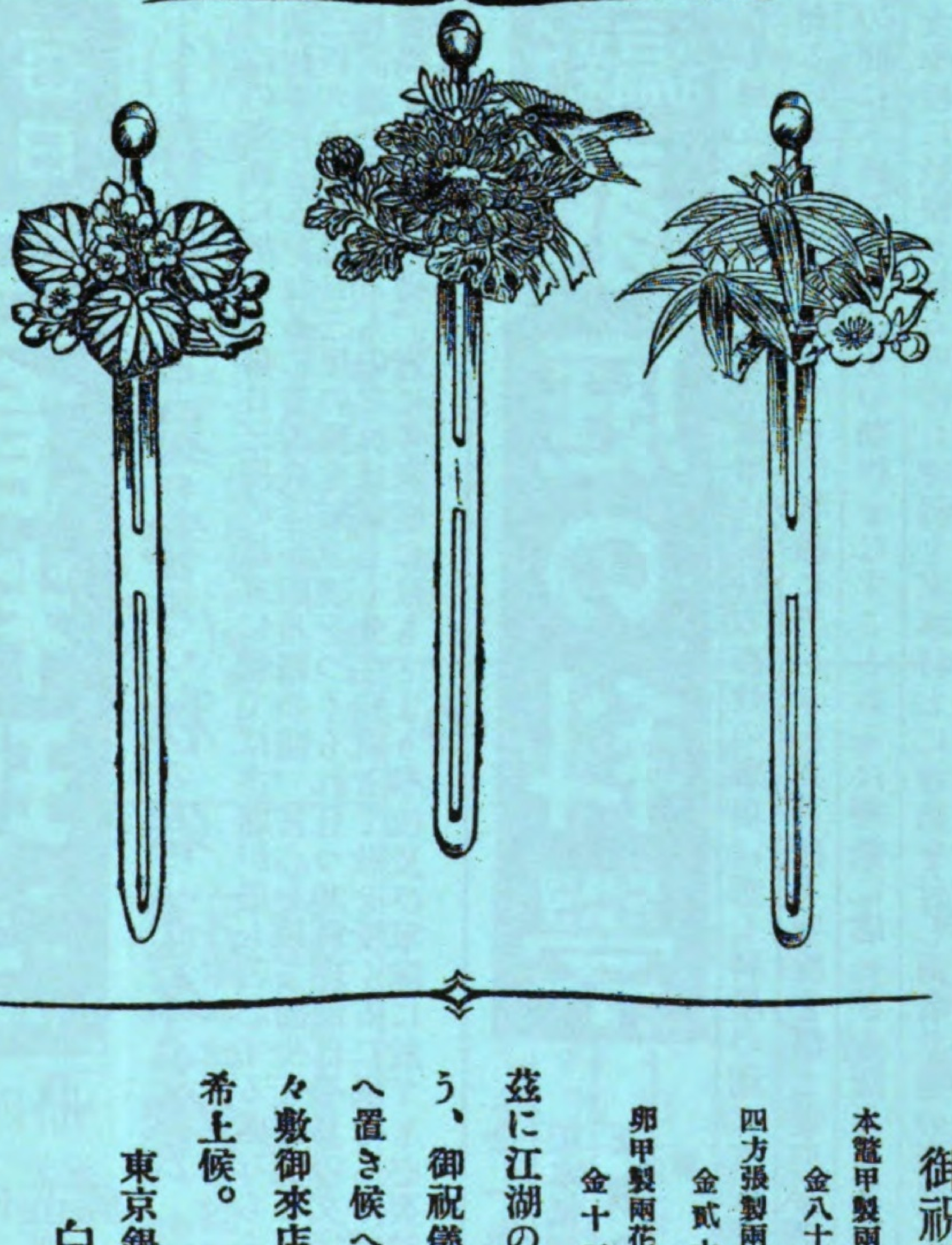
第一編 女子書翰文
第二編 女子普通禮式
第三編 詠歌の栞
第四編 料理手引草
第五編 婦女家庭訓
第六編 母親の心得
第七編 家事要訣
第八編 女子手藝要訣
第九編 女子普通文典
第十編 女子作文の栞
第十一編 女子遊戲の栞
第十二編 家庭教育

每編和裝上製美本
紙數各…三百餘頁
正價一册金參拾五錢
郵稅一册金八錢宛

發兌元 東京本町 博文館

(ちの二)

御婚禮用髪飾



（ちの四）

御祝儀用櫛笄簪

本鼈甲製兩花附櫛笄簪　一揃
金八十五圓より金三百五十圓

四方張製兩花附櫛笄簪　一揃
金貳十五圓より金四十圓

卵甲製兩花附櫛笄簪
金十五圓より金三十圓

茲に江湖の御嗜好に應じ候やう、御祝儀用髪飾品各種取揃へ置き候へば、吉例により賑々敷御來店御用命被仰付度奉希上候。

東京銀座尾張町
白牡丹本店
電話新橋 五五一番 五六二番
振替口座四三九二番



嫁に行く人



私の緣談

初しぐれ

○

お互に學校を卒業した其春の事であつた。さる外交官の花嫁として榊樣の寫眞が突然新聞に出た。嘘、こんな筈はないと云つて内々聽き合はして見ると眞實である。それに續いて松浦樣はある教育家へ、上森さんは畫家に、四十人程の卒業生が直ぐバタ〳〵になつて終つて半年程の內に片附かぬのは心臟が惡くて結婚の出來ぬ美佐子樣と妾とそれから外に四五人、かう年下の人がどん〳〵嫁かれると何か自分等が取殘された樣な氣持がする。況して學校に居た間は姉妹同樣にして卒業式も濟み寄宿舍を引拂はねばならぬ樣になつた時誰しも眼を泣き腫して「何時々々迄もね……必とよ！」と堅く約束した人が一度別れると碌々手紙も下さらぬ始末。若しお互の友情の溫い時「こんなにして居ても半年程でお互に忘れ合ふのだ！」と誰が疑つただらう？　一旦別れて終うと今度會つても、もう昔の樣な隔の無い言葉遣をする人はない。同窓會で松浦樣に遇つた時、「旦那樣は？」と肩に手を置いて聞くと、紅くなりなさるかと思つたら、どうして〳〵。「良人は只今横濱へ參つて居ります」と眉根一ッ動かさずに答へられたのには、もう我身との間に越ゆる事の出來ない溝が出來た樣に思はれて情なかつた――ア、お嫁付なすつた當時こそ貴女が戀しいとか、遇ひたくても遇へぬ今の身はとか始終手紙も來たが軈て暫くして此方から御無事ですかと問ひにやる樣になつた。其返事には大抵夫の從兄が來て居るとか夫の出張の準備で延引したとか云つて見えたがそれが此頃の手紙は八代が可愛ゆくなつたとか、立つ樣に成つたとかお子樣の事

計り、ア、斯うしてお互の愛情は友達から夫へ、夫から子に遷り行くものではあるまいか。

懐しい學校時代を考へる度に何時も思ひ出す話がある。卒業の前年であつた、春の或晩五六人が寄宿舎の火鉢を圍んで話をしたが仕舞に妙な事を云ひ出した――と云ふのは眞暗の部屋の眞中に屛風を立て蠟燭の火で獨りづゝ鏡を見ると未來の夫が見えると云ふのである。皆々面白半分、宿直の××女史には極々内密で、舎の隅の明部屋に蠟燭を點けて鏡を立てた。籤を抽くと五番目が片岡樣で最後が妾、一人々々そつと行つては歸つて來る人で妾は軍人よ。アラ私の見たのは髯の美しい人、眞實よ！と眞面目な方もあつた。「私のお婿樣は眞黑よ」と云つたのは片岡樣。そりや其筈・鏡の硝子を拔いたから……と誰かゞ白狀して皆々お腹を抱へた。そして片岡樣の綽名をお姫樣と云つたのを其後誰云ふとなく黑皇子と云ふ樣になつたが……

其人迄がもう子持になつて此前外で遇つた折、オヤまだ貴方何處へも入來しやらないの？と聞かれたのには情なかつた。こんな事を種々考へると自分が、かう愚圖々々して居るのが譯もなう齒痒く思はれる。

と云つて妾にも可なり緣談はあつたがさう伯母や知人の勸める樣に手輕に纏める事は出來ぬ、勿論何時迄も母や兄の厄介になる積もないが偖思ひ切つて！と云ふ氣は如何しても出て來ぬ、ア、女は教育する物でない！との嫌味や嘆息は嫌程聽いた。中には此緣談を逃してはと母も云ふし自分でも不足の云ひ箇所の無いのもあつたが、何か其外に待つて居る或物がある樣に思はれて、どうも氣乘がせず何時も有耶無耶の内に葬つて終う。

或時伯母が來て母と二時間餘りも話をして居た事がある。こんな場合には妙に座敷が氣にかゝつて、有りもせぬ用事を作へて襖の外迄幾度も行つて見るそして後に我が子供らしい所作を笑ふのが常である――母が「一寸」と云ふので中に入ると伯母は例の如く煙管をはたいて居た。此人の癖として物を言ふ前に先、首を竦めて充分烟草の煙を喉に入れる、そしてフーと吐き

乍ら、ポンと吐月峰をたゝき、次の一服をつめて始めて口を切る。

短く云ふと伯母の話は斯うであつた。伯母の親しい人にさる會社員がある、其人が又、身内同様にする人に佐野と云ふ人があつて日露戰爭で急に金を拵らへ今は遊んで居る——伯母に云はすと遊んで居ても關はぬ程結構なのだ相だ——長男は今朝鮮に行つて居るが次男はある私立の大學を卒業して家を持たうとする。と云ふ丈の事である。……それに脊のスラリとしたハイカラで……と伯母は他所事の樣につけ加へた。而し是丈では恰度昔噺の始まりを聽いた樣に其人が如何したのやら亦態々私を呼んで話すどんな必要があるのやら一向分らぬ。

伯母の言葉には伏兵があるが、私も少々のすね者ーそんな甘い手でパツと顔を赤くして俯向く樣な事はせぬ積り。こんな時には妙に向ふをじらしたくなつて「そして其人がどうしたの？　伯母樣」と我乍ら白々しく云ふのに驚く。すると母が見兼ねて「お前、こんな所へ行く氣はないかいと仰るのだよ」と。それに尾いて伯母が「第一男が好くつて金はあり……」と獨語の樣に云ふ。

此伯母にとつては財産とハイカラと程難有い物は無いと見える、今此人が若ければ流行の洋服に赤い襟飾でも着け濡鼠の樣な頭をして居る人でさへあれば、誰にでも戀着したらうと忌々しい、何か自分迄同じ樣に見られた樣な氣持がする。

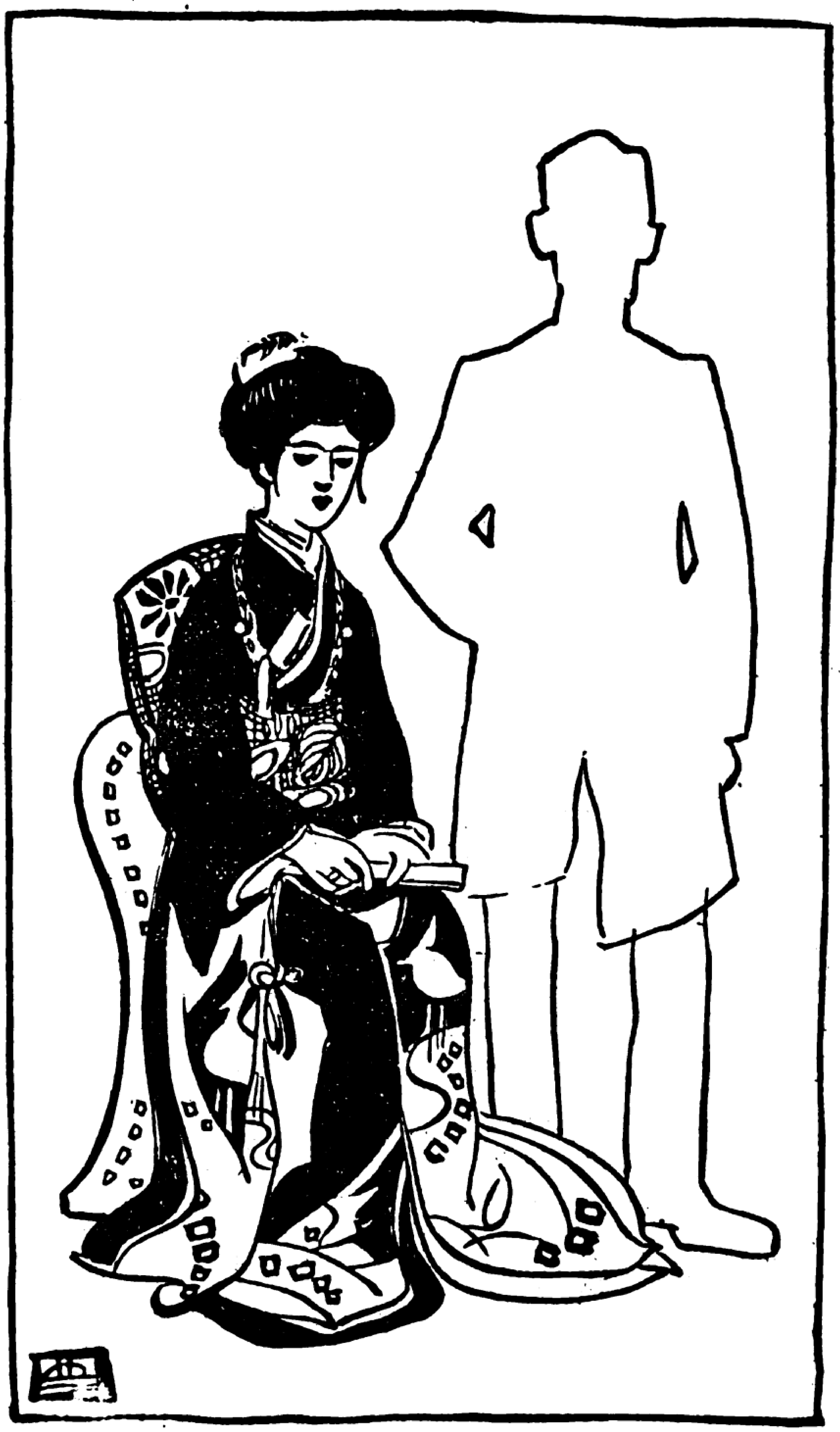
「そんなに善くても財産家は私の性には合ひませんわ、伯母樣」と妙に當こすりの樣に云つても「ホ、何關ふ物かね、向ふが望んで居るんだもの……」と一向通せぬらしい。

「向が關はないでも此方が關ひます」と云ふとホヽヽと嫌に笑ひ乍らスーツと烟を吸つて、軈て例の如くポンとはたいて

「ホヽ、財産のあるのが嫌ひ？　今嫌でも赤ん坊でも出來て御覽、お金が一番結構になりますよ、赤ん坊は直ぐ出來る、」と煙草で黒くなつた齒を見せてハヽヽヽと笑

ふ。何が不愉快と云つてもこんな場合に赤ん坊なぞと云ふ事を聴く程不愉快な物はなかつた。「兎に角妾は嫌ひです！」と云ひ切つて終ふ。

何かに紛らはして座を立つと「氣の高いのも結構だが良い加減にしないとね……」と半、忌味の様な伯母の言葉が聞える、そして妾は恐ろしく不快を感じたが心の奥には何處か思ひ存分我敵を辱めた折の様な快さが潜んで居た。



妾は態と氣を落付け机の前に坐つて有り合した本に眼を落す、自分では心を鎮めた積だが紙の上に何が書

いてある事やら。どうしても考が先刻の出來事の方に引張られて行く。妻は小さい時から片親で出來る丈氣儘に育つて來て、初の内こそお母様も何かと自分の躾を直さうと力められたが、此頃では只「學校に居る間はかうでもなかつたが……」と時々云はれる計である。

ア、自分がもつと温和しい氣象でさへあれば、或は今迄の縁談の何れかを決めて、もう今頃は樂しく暮して居たかも知れぬ、が此三年程の間苦勞をし貫いた妻にはもう乙女らしい情の泉は涸れて終つた――とかう思ふと自然と頰に涙が傳はつて來る――と云つて別に悲しい事も何にもない。殆ど自分で自分の心持が分らぬ。

かと思ふと一方では「何時迄斯うしても居られまい。假に結婚するとすれば？……と云ふ風な全く正反對な問題を考へて居る――實を云ふと心の底には好奇に嫁つて見たい樣な處がある。而し亦恐ろしい樣な心細い樣な心持もする、眞個の處、當時の私には何時迄も處女で居ると云ふ事が一番貴い物の樣に思はれて居た……家庭の人となるのは、どうも今迄の教育……殊にこの三年に受けた教育が水泡になる樣で辛い。

一體どうしたら良いでせう？と一角重大な問題の積りで或日美佐子さんに話して見たが、勝氣な其人は「何れにしても理由が無いぢやありませんか」と事もなげに云つて「それとも獨立すれば格別……」と笑談の樣につけ加へられた。私は未だこれと云ふ問題を自分で解決した事がない、否極つまらぬ事にでも何れにせうかと迷ふのが常で先、他人の考を聞かうとする、聞いても云つて呉れない時は其人の言葉の端を意味のある暗示の樣に解釋し、それに從ふ事にして滿足する。

獨立！獨立！ともうちやんと其氣になつて居る。一つの事の計畫を立てゝ種々と其事に就て想像するのは嬉しい、でいろ〳〵と自立をした友達の話を纏めて自分の未來を組立てやうとしたが只考が上滑りをする計で一歩踏み込んで考へる事はどうしても出來なんだ。而し獨立、獨立と思ふ丈では氣が濟まぬので、側に人が居たら驚く程の聲で我身に宣告するかの樣に幾

度も繰返した、實は變り安い我心の不安に耐へられなかつたのである。

○

其日から五六日は驚く程の熱心で自分の自立の問題を考へて居る、そして方々へ頼み廻つた揚句、ある會社の事務員に缺員があると知らして呉れた人のあつた時、マー心の變らぬ内で！とホッと胸を撫で下した。

偖其次の月曜から私は愈愈カシミヤの袴、毛繻子の事務服と云ふ扮裝で見習となつた。どんな仕事でも初の内は珍らしいので、古參の人がこんな無味乾燥な事



をーと云ふに關らず何でも面白い、それに其境遇相應な程僅な事にも一々自負を持つて居て例へば、貴女は初としては手が早い」とか何とか云はれると滿更惡い氣持はせぬ。

亦古參の人にも若い人が幾人もあつて僅の暇を盗み、談話室で新聞を見たり雜談をする、そして課長さんが早く歸つた時なぞは皆集つて阿彌陀籤を抽いたりした。こんな生活をして居ると恰度學校時代の様に何も考へずにドン／＼日が過つて行く、今迄よく奉公する女が若い身空を燻つて居

てよく苦に成らぬと不思議に思つて居たが、私でも其頃のよく寢られた事、晝の間の立ち續けに足は棒の樣になつて話する間でもあれば眠むたい、「眠むたい」より外何も考はなかつた。

初めの手當としては八圓もらつた、實の處自分の腕で儲けた金は此時が初で天にも昇る心地とは此事であらう、急に母を悦ばせたい樣な氣がして母の木綿物を一反それに日頃欲しい書物等を買つたが借遣つて見ると案外僅で、もう少しあつた方が結構だと思ふ。

そして其後も是等の品物を見る毎に、アヽあれは自分の腕で買つたのだ！　と自立する我身を心強く感じた。

而し思つて見ると妾は生活の方には困らぬ位置に居る故良い樣なものゝ若し衣類、身の廻り迄此內から割かねばならぬのであればどうだらう、と思ふと獨立の前途も餘り幸多き物では無ささうである。而しこんな事を思ふ樣になつたのは其後の事、社の仕事に飽き飽きした時分であつた。

○

會社へ出てから四ヶ月程後、一つの事件が起つて來た。と云ふのは夕方私が通りを歩いて居ると名を呼ぶ人がある、見ると私が學校で御厄介になつたし又母の懇意にして居る〇〇先生、珍らしう車の上から、「これから貴女のお宅へ行かうと思つて居たのだが……」と云ひ淀んで生徒に苦い質問をされた時の樣に顏をしかめて思案して居られたが、軈て少し笑ひ乍ら「一層お母樣に來て頂かうか、どうか一人でね……」と仰つた。一人が妙に氣にかゝる、正可行儀が惡いと叱られるのでもあるまいし……と何氣なう母に云つて笑つたが私は邪推が深い、もうチヤンと或方に引きつけて解釋して居る。

隨分突然な話であるが矢張緣談であつた。先生の知人が今度辯護士を開業するに就ては是非妻が入るが餘り體の弱くない人をと云ふ注文、流行の衞生美人と見込まれたのは餘り難有くはないが、而し急ぐから大した不同意がなくば見合丈しては如何と云ふ話。

妾は例に依て例の如く生返答をして居ると何時もならば強てと云はぬお母様が今日に限つて八ヶ間敷くお勧めなさる、私は辯護士なぞ、口計で中の空虚な、恰度煙爐の様な者だと思つて我乍ら洒落が面白かつたが此場合さうとも云へず、而し餘り勧められると妙にふツと其氣になるのが私の癖でそいぢや良い様にと云つて終つた。と云つて別に嫁く／＼と決心した理でもなく、云はゞ、今迄の事が母にも氣の毒で義理の様な積りで云つた迄の事。只氣休めにグヅ／＼進行さしてさへ居れば中途に何か妨害が入つて來るだらう位の事を頼にして居た。

見合と云へば極内密にするので只先生の方と打合をした丈、それ迄の三日は流石に其事を考へぬ理には行かなんだ、と云つて元々私は眞面目に考へては居ないので乙女らしい羞みを感ずる様な事は絶えて無かつた。

身態も可成質素にして其朝、母と一緒に先生の家を指して出かけた、お母様が先に立つて格子をガラツと開けられると驚いた様に鈴が鳴る、平生はどんな場合でも恥しくないと自分でも信じそれを誇として居たが流石こんな事に馴れぬ身は意氣地なく胸が躍る。

見馴れぬ靴が叮嚀に一足揃へてあつて、ハヽアと思ふ間もなくスイと下女が出て來て丁と打合のしてあるかの様、何卒此方へ……と改まる。

隨分變な物だつたが母に隨つて二人の人にお叩頭をすると妙に耳が熱くなる様に覺える、家を出る時は半端笑談の様にどんな風采の人か、向の極惡くなつて視線を脇に遷す迄見詰めてやらうと思つたのが偖かうなると一生懸命である、心の底で自分を嘲る聲にやつとの思で頭を上げたゞ肝腎の向は斜に坐つて居て洋服の縞が見えるばかり。

其處は「ハイ見合に參りました」と云つて顏を突合す事も出來ず、先生は白々しう四方山の話を持出される、私の一番弱つたのは始終先生から話かけられた事で、學校を出てから幾年になるとか、何處々々へ行つたかとか話の種が盡きてくると何でも聞かれる、そし

て流石場合が場合丈けに一々顔を上げて答へねばならぬが顔を上げて居る間はどうしても其人が私の横顔をジロ〳〵見て居ると云ふ自覺を去る理には行かなんだ。

三十分程して其人は手際よく座を立つて歸つたが私達は秋の日が低く映る頃迄話をして居た、電車に乘る時分は早トップリと暮れて電氣は火が點つて居る、其晩は何だか寐苦しい晩であつた、少し風を引いたか、頭がシン〳〵痛んで、いくら寢返りをしても何かに押へつけられて居る樣な氣持がする、そして體を動かす度に乾き切つた鼻や唇を蒲團の綿埃が容赦なく襲ふ樣に思はれた。

次の朝、必と母から其事に就て感想を問はれるだらうと豫記して居たが、昨夜以來母は一言も其事に就て口を開かぬのみならず、お互の話が自づと昨日の事の方へ滑つて行くと反つて母の方から避ける風が見える何れ問はれる事ならば早い方が良い、憖默つて居られるのは宙に吊るされて居る樣な物である。

次の日になつて始めて母の方から口を切つた、何時知つたのか、向は私さへ承知ならば話を纒めたいとの事。と云つて私は之と云ふ考もない、強て行く氣もなければ亦達て行かぬ氣でもない、有體に云へば或る大きな事情が來て何れへなりと決めて與れるのを暗に願つてゐた。こんな調子なので今度と云ふ今度は母も眞劍になつて、責めつ賺しつして二三日の後にはもう何と逃れる口實もなくなつた、少し母の涙を見る氣でさへあれば斷るのはわけもない、而し斷はつた後でア、あの時嫁つて置けば……と後悔する場合が起つて來る樣な氣がすると云つて「ハイ」と云ふのは自分で自分の運命を決する樣で恐ろしい……とこんな事を幾度も繰返し繰返し考へて日を過して居る間に、ふと來たのは豫て其人の事を問合せて置いた人からの手紙、仰に從つて種々調べたが本人に於ては少しも申分がない、辯護士の試驗も倦まず撓まず六度迄受け、遂に月桂冠を得し程の人故、其不屈の精神も略察せられ候ーと恐く云へば落第を賞めてある。さり乍ら……と次に、家系


おどる胸

の方は面白からず……と云ふのは森吉ー辯護士の實母の同村に居るのが手が片方動かず、田舍の事故妙な取沙汰をすると意味を含めて書いてある。

かうなると、其方面に神經過敏な母が承知し相にもないが、それを確めると同時に、散々勸められた母にすねて見たくなつて「片輪の一人位良いぢやありませんか、此上家に居てお母樣に心配をかけるより……」と云ふと『お前はマー』と頭から叱かられた。

○

其後二ヶ月程して妙な事があつた。

品川の美佐子さんを訪ねて、明るい中に向ふを出たのが例の停電で意外に遲れ日比谷邊で街にも電車にも火が點いた、外は雪にでも成り相な模樣、土曜日の夕方で一杯の乘客、私は車掌臺の直脇に小くなつて肩掛で手を煖めて居ると遽だしく乘込んだ夫婦がある、見る――ト斷はつた森吉と云ふ人でないか、そして女は私の直前の紐に下つて居る。痩ぎすの女で派手なコートを着、一番の丸髷に赤いてがらをかけて居るのが、電車の搖れる度に、手袋をはめた腕も露に、前に立つ男に向つて『怖いわ――貴郞』

妾はこんな不快な有樣を目撃した事がない、身體中の血が一時に頭へ昇つた樣、そして忍ぶべからざる侮辱を蒙つた樣な氣がした。ふと氣が附くと電車は止つて居る、見ると須田町で、乘客の大半は下りる。今の二人はもう影も見せなんだ。

それから二三日は名け樣もない苦痛に壓せられる樣な日が續いた、我と我心の愚さは不絕、嘲笑つて居るが其心持は止まぬ、それに用事をして居ても態と手荒くして、辛抱强い母が『お前も氣隨な、靜におし』と云ふ迄滿足が出來ず、そして日頃ならば默つて居る處を心にもなく口答をして、後に机の前でキユーキユー聲を立てゝ泣いて見る、而し泣いた後は氣が濟々するのが常で赤くなつた眼を鏡に寫して、ア、何を泣いたのだらう？と無暗と可笑くなるのも一度ではなかつた。

○

處が廿三の今年の春あつた縁談が私の今の境遇の基となつた。此三年程の間もよく變つたが場合に應じ常に自分を省みる事が出來たが、只其昔、何となく人懐しい僅な事にも直顔を赤らめた乙女時代の事を考へると思はず慄然とする、そして今斯く我身の行末が定つて見ると、アアよく露骨な誘惑者に出遇はなんだ！と重荷を下した時もである。前と同じ様に決し兼ねたが別に期待する様な而も期待せぬ様な支障も起らず、ドン〳〵事件が進行して終ふ――偖何日何日と式の日迄決まると妙な物で進んでゝも行く氣になる。



思つて見ると自分の考は様々に變つて居る、勿論茲様にホッと息をつく。

待つ一ヶ月は何も手につかぬ、妙な心持に待たれる様ではあるが一日一日、日の經つて行くのが恐ろしい、そして我家の懐しさが、ひし／＼と胸に答へて來る。一生の思ひ出にと母様は出來ぬ中から種々仕度をして下されるに是もせう、あれもせうと偖どれをして良いやら、一の事を初めてもこんな事はして居られぬと何か外に大事な仕事が殘つて居る様な心地がする。で急しげに行李を開けたり抽出を拔いたり、かと思ふと小學校時分の日記や作文が出て來ると今迄さ程興味を惹かなんだ物が無暗に面白く一時間でも二時間でも方方散らけた儘それを貪り讀む。

かと思ふと今迄晴々して居た心が理由もなく淋しくなる事がある、さうなると立つても居てもゐられぬよく嫁に行く身が！と叱られたがウッカリと考へ込む、それが自分の事でも他人の事でもない、考へ込んだ後でふと氣が附くと、ハテ何を考へて居たらう？と思ふ、そして亦呆然と何か考へて居る。——

或時品川の美佐子様が見えた、事があるが折も折、箪笥を打返して調べて居る時、其名を聞くと電氣に觸れた様に掻き集めやうとしたが勝手を知つた其人は早其處に立つて居られる。

「どうなしたの」と問はれるのに「エヽ大掃除」と隨分妙な答をしたが別に怪しみもせず「さう」と云はれた切り。話は外の方へそれて終う。眞箇の處「お嫁入り？」と圖星を指されても弱るが少くともそれと感じてもらひたかつた、さすれば此方から打あけるのも容易であつたらうに……とう／＼其一條は終迄語らなんだが話をして居る間も何となく物足らなんだ。其お歸りがけ、戸口へ送つて出ると其人は蝙蝠を開け乍ら

「木村さんがお嫁入りさなるつてね」と云はれる

「あの評判のあつた處？」

「さうなの、此度見たら思切り冷かして上やうと思つて……」と一寸意地惡い目付をされる。

「苛める物ぢやないわ、そんなに……」と云ふと美佐子様は一寸愕ろいた様に目を見張つて軈てさよならと云つて歸られた。

○

こんな風にして三月の或夜池の端の某亭で私の式は滯なく濟ませたが豫ての打合の通り、其晩直ぐ夫の在任地なる京都へ發つ事にした、私の荷物はもう送つてあるので只身の廻の物を包として、夫は皮のトランクを前に置いて六臺の車が威勢よく新橋さして馳け出す、空は雨となり相な模樣、街の火が赤く夢の樣に流れて行く、出がけに母が『お前、寒くないか』と問うに『イ、エ』と答へたが車に乘つてる間は寒いとも熱いとも分らぬ氣持であつた、頭から耳へかけて火々する程熱い、けれども兩手を頰にあてゝ見ると氷の樣に冷たい、そして何も無い事にビク〱する。



其内に車は停車場構内に入つたどの人もどの人も皆自分を見る樣に思はれるので頭を下げて降りる、時間があるので皆々待合室に入つたが其時敷布を片手にかけ煙草を燻らし、笑ひ乍ら伯父と話して居た夫の面影を未だに覺えて居る。

『向へ着いたら直ぐ手紙をお出しよ』と母が云ふ、『早い物、此間迄子供としか思つてなんだ人が……』とシンミリ云つたのは好な方の伯母であつた

「ほんとに早い物ですね……」と後で受けたのは煙草好の伯母で「此次東京で遇ふ時はもう可愛いゝのが出來てますよ」と云ふと皆々笑ふ

妾はハッとして若しやと夫の方を見たが其人には聞えなんだ樣子、勿論良い氣持はせなんだが以前程不愉快に聞こえなんだ。差詰困るのは初めて其人に口を切る時何と云はう？こんな事に苦慮し乍ら夢の樣に列車に乘り込み其人の向に伯父に指圖されて坐つた樣に覺えて居る、見ると女の人は窓が高いので目から上しか見えず伯父の頭丈が高く出て居る、……汽笛が鳴つた、すると急に母に云ひ殘した事がある樣な氣がして窓に手をかけたがもう遲かつた、

伯父が禿頭から帽子をとつて「どうか宜敷く！」と夫に云ふと其人は笑ひ乍ら「大丈夫！」と云つた樣に覺える。そして其笑顏を連けながら立つて窓を閉めた……私はこんなにして半日の永き旅に上つたのである

（終）



當世七人娘

うき雲

◎艶子

父は當時メキ〳〵と賣出しの實業家なり。

その昔柳橋の小辰といへば嬌名全都にかくれなかりしその人の腹に生れたる身は、もとより醜からう筈もなく母そのまゝの二重まぶち、小づくりながらふるひ付きたき許り美くしければまだ十三の少女の頃より明治のクレオパトラ、今小町などうたはれて、森田艶子の名は忽ち虎の門の花と匂ひぬ。

一年二年と經るまゝに、いよ〳〵評判たかまる程にいでやこの名花一輪いかにもして我が庭に移し植ゑん

とあさり給ふ貴公子おはせば或はまたゴム輪の俥にゆられて通學ふその姿に、あはれ胸かきみださるゝ青年もありけり。

「向ふ通るドーターの、三人連れのその中で……」とうたに作られ都下幾千の學生が口の端にのぼさるゝ頃となりぬれば、あどけなかりし少女ごゝろもいつの程にか楊貴妃ジヨセフイン何のそのてふブライトとかはりて朝な夕なの御化粧にも、たしかにこれまでの二倍の時は費さるゝ。

殊にはかみかざり身のまはりなど如何ほど費を盡せばとて、もとより金にいとめの無き身の上なれば、人工、自然相俟つて楚々たる容姿はなほ一きわの光を添えつ。

されば日毎にかゝる緣談の口はまだ肩あげもとれぬ頃よりふる程なれど、それも短しこれも足らぬ、凡そわが生涯を捧ぐるほどの人ならば先づ第一に子爵以上の美男子で、係累とては祖父ひとり有つてもならぬ、それで若手の外交官をして娘が先に云ひいだせば兩親もそれに贊成して、このうちどれか一條件缺けてもとある程の緣を片つ端からはね散らかしぬ。

これではどうも手がつけられぬ、鐵の草鞋で探せばとて迚も注文どほりの人はあるまじ、よしや首尾よく見出したところで、それほど揃つた人ならば、何も好んで成金などから娶らずとも、先方からお斷りと來るは必定と日常世話好きの誰れ彼れも呆れ返つて手を引きつ。

或はまた悶ゆるばかりこがるればとて雲にかけ橋、かすみに千鳥、いづれは叶はぬ戀なりけりとブロークンハートを叫ぶ青年もありて今は早、花もふゝきの二十五歲といふに、かつては濱の眞砂のそれならねどもいつ盡きるとも思はれざりし申込のいつとは無しに、ハタと杜絶えぬ。

學生時代にはあんな女がと見くびりたりし同級生だちも、みなそれ〳〵の治まりは付きて殘るは此身たゞ一人、と流石の小町も心あせれば親も思ひは同じなれども今更にどうぞ御世話をとは世間に對して言もせず

つまりは詮方つきて漸くこの人とたづねいでしは、その家の遠縁にあたる者なるが御當人はチトマイナスの生れながら親兄弟のなきが取柄と昔の氣焔どこへやら、この縁まづは首尾よくとゝのひて、山と海との別莊二ヶ所なほ幾萬かの持參金付にてめでたく御輿入ありしときゝぬ。

◎なか子

某高等女學校の女敎師先生、厄年を眼前に控へたるほどのすがれ花なるが、どうした風のふきまはしか風情もなげに引つめたりし前髪の、この頃では見まがふばかり突出し、さしも學校名物と音にひゞきし薄あばたも凹みのわかぬまで塗られたれば笑くぼのすゞなりてふ綽名、今はいたづらに空しくなりつ。



これはまたどうした事と敎員室でさゝやき合へば生徒間でも目をそば立てゝ今度は校内七不思議の筆頭になどの提議もありけり。

どうしても此の變化の原因を究めずば止まじと、あらゆる手段つくしてよく〳〵探ればあゝよめたりな〳〵、道理でこそ講義の度に引張りだされた獨身論が、いつの間にやら良妻賢母主義に變つてきた譯だわと上級生のひとりは言ひぬ。

そも〳〵この先生、全校四百の眼の玉にキヨロ〳〵と見張されつゝ格別のしつぽもとらへられず、月の二十三日には金二拾圓也を無事に頂戴する身の上だけあ

りて検定ながらも一とほりの素養あれば、なつめ頭の校長閣下が御覺えのほどもつたなからず、試驗點數を心配する生徒間には、おまじないが利くからとてこれもなかなかに受けは良かりし。

されどとかく儘にならぬは浮世のならひ、しぐれわびしき秋の夜を壁にかけたる鏡とにらみくらしながらあゝ恨めしきは造物主の惡戯なるかなと流石の先生が袂ぬらせしもそも幾たびか………。

動機とは奇妙なものなり、ある日フト雜誌の廣告により、美顔術の効果を信じてよりは忽ちにして心機一轉、その後は學校がへりの二時間を理容館の一室において、一ケ月十五圓の受術費もつゆ惜しからず、たゞ我が身の上に幸の來よかしと、ひたすらに祈り祈れる甲斐はありけり。

さらば其の幸とは何？　まさか菊石の消え去つた譯にもあらず、それはさる私立大學の學生にして學資の幾分を補助してくれる婦人ならば容貌の美醜もとより問ふところに非ずてふ、候補者があるがとの人の話なり。生れてはじめて縁談といふものうけてはじめて見合といふものしたる時には、敎壇の上でこそシチ六つかしき理窟をこね給ふ先生も、たゞ胸とゞろかすばかりにて、とも角もこゝに婚約はなりしとか。

六つ年下の未來の夫にあかれまいとて彼の若返り樣………けれど女とは馬鹿なものねと運動場では寄るとさはると此の噂のみいとかまびすしくて……

◎美　都　江

父も母も夙く世を去りたればこゝ十とせのあまりは祖母の手一つにて兎も角も肩上げとる程とはなりつ、とり立てゝいふ可き程の美貌でもなけれどたゞどこやらに忘られぬ愛嬌のあれば嫁に婿にの話も相應にありけり。

さるをこのおばゝ樣まだ御自分が花はづかしき十六の昔、美都江が祖父にあたる人を懸想ひそめて何とか山の御神易が凶とあるにもかゝはらず強ひて嫁ぎたればこそ死水とつて貰ふ可かりし人にも先立たれる、不

運つゝき、されば我が手にのこる最愛の美津江こそは大の大の大吉でなければ迚もやられぬと力みかへれり。

陸軍士官、會社員など至極似合と思はるゝ縁談もいくたびかありたれど、その度毎に、石龍子、赤法師はおろかなこと、およそ良いといふ評判のある易者の許は片つ端からみて貰つて後でなければ返辭のできぬといふ譯故、思ふ樣にはこぶ筈なくまだそれのみか易は吉でも琴比羅さまの御みくじが氣にかゝるなどゝいふ難なるものなれば、月日はいたづらに彩りかはりてことし二十三歳の秋までも未だに良緣とゝのはず。さすが御神易のばゝ樣もどうやら此頃は我を折りたる樣にてチト年のいつた分別者でこの祖母ぐるみ引とつてくれる人でさへあらばいつ何時でも進せませうと專ら運を待ち給ふよし……。おせつかいながら御紹介申せしついでには御望みのかたもおはさば此の浮雲が御媒酌いたすはつゆ苦しからず候。但しそれは殿方に限り申す可く候。

◎彩　子

身はなにがし子爵家の長女と生れてよそめには何不足なき姫君ながら生みの母を多喜と呼ばねばならぬ妾腹の身は人にしられぬ苦勞もありけり。

嫉妬ぶかき母君は己が腹を痛めたる妹姫のやぶにらみ醜きに反して彩さまがおのづからなる美しさをば一方ならず憎みたまひ加へては父子爵の愛が日に〱美しき母子の上に傾くに八ッ當りして學校がよひの持物にまでめだちて隔てをつけ給ひつ。

されば召使のたれ彼れもまあ彩さまがおいたはしいとかげでは云へどその身にかゝる損得を思へば矢張り表面は奥方樣の御意にめす樣にと御機嫌とりて立ちまはりぬ。

彩樣十八の春の暮、今の世にときめき給ふ某の大臣が令嗣夫人にしてこれも名だゝる人橋かけて強ひての懇望ありたれば子爵のよろこび一方ならず律儀なる三太夫の老婦はヤレ姫樣の御運が向いて來たとうれし涙

までこぼしたるが、不思議や御息所の眉はひそみて、かぶりは横にのみ振られたれば話はそのまゝお中止となりつ。

さかしき(?)奥方は其の後も縁談のある毎に何とか難癖つけて引のばしながら一方ではでき得る限り手をまはして妹姫が御縁の程をいそがせ給ふ。

此の矢先なり、殿樣育ちの子爵の君に、持つて生れた山氣がわざはひして、フト馴れぬ相場とやらに手を出し給ひしが非運の原因、御諫言申せしとて永年忠勤をぬきんでたる三太夫にも暇とらせて、いよ〳〵募る自暴遊蕩に債鬼ヒシ〳〵押寄せて今は早御家の根じろも危くぞ見えける。



此處にまた某侯爵家の若殿にして學習院在學中よりあだ者いくたりか蓄へて不品行のありたけ盡し給ひし從五位樣あり。子爵家の窮狀を洩れきゝて多年の望みを達す可き好

樣は今とをどらん許りに打よろこび、もし彩樣を賜らば僅か數萬の金圓ぐらゐ結納がはりに進じませうと人を以て言ひ入れ給へり。

あまり打つけなる云ひ分に父子爵も今は悔悟の涙にくれつゝ。

「一歩まちがへば禮遇停止の恥を受くるは免れぬこと父を助けると思つて侯爵家に嫁いではくれまいか」と謀り給へり。

けなげなるは彩樣の心よ、わが身一つをにえとして父君の名譽が保ち得らるゝならば、潔くも決心して惡びれたる樣は見せず、我からと進んで荒める家庭の人となりぬ。

さる程に移ろひやすきは男心と何とやら亦も五位樣には三月たゝぬ間にあれほど御執心でめとり給ひし奧方をよそに、例の持前の癖は出たれど、もとよりこの人をとめざして嫁ぎし此の身ならねばと彩樣つゆほども氣にし給はず、されど半身不隨の老侯爵がいま猶手離し給はぬ三人の御部屋には痩せるほどの氣兼しつつ同じ邸の内に味氣なき月日をすごし給ふとか、さても美人は薄命なものと同族間の噂とり〴〵。

◎かく

凡そ今から三十何年の昔、つれ添ふ人に逝かれてよりは忘れがたみの一粒種をかよはき女の手一つにてともかくも成人させし程の勝氣者なり。その當時多くもあらぬ遺産を以て建てたる貸長屋一棟、その收入には手を付けず賃仕事して得たるものにて爪に火をもす樣なる生活なれば今は相應に小金を蓄めて家作の數四五軒はあり。

まして伜は去る商店の一番々頭去年の暮にはお春といふ嫁さへ迎へし程なれば、もしこれが世間なみの女ならヤレ〳〵これで一安心、いつお迎へが來ても亡き人へ手柄話もできる譯だと孫の守りでもするところなれど、此の人なか〳〵樂隱居などは大のきらひ「此の出しやばり婆と同居ではお春もさぞや氣兼だらうからもしも緣付く先もあらば家を出たいと思ひます」とあ

る夜ふたりに切り出しつ。
張りつめた氣がゆるんで幾分をかしくなつたのかと考へても見たれど日常のそぶりは露ほども疑ふところなければ、
「お母さん笑談ぢやアない、今から嫁にゆくんですか」と伜夫婦も目をみはりつ。
「なアにね、嫁にゆくと云やをかしなもんだが、たゞその今まで淋しく暮したからこれからは茶器友達でもほしいといふのさ、その方がお前方にも私にも兩爲めといふもの」
云ひ出したが最後、後へは引かぬ勝氣者、みづから信玄袋片手に諸方を賴みまはりて漸く見つけ出したる花婿樣は當年取つて六十八歲、理想どほりの高利貸とやら、まさか文金高髷にお振袖でもあるまじけれど御仕度をさ〳〵怠り無く高砂の尉と姥との樣なる新郎新婦の御婚禮は近々八百勘に擧げらるゝ由。
笑止や世には斯かる花嫁御寮もおはしますなり。

◎多根子

一度夫と呼びたるは去にし日本海の大海戰に天晴名譽の死を遂げたる〇〇巡洋艦の小參謀△△大尉その人なりけり。
いまだ彼の君ガンルームの花形としてもてはやされし頃よりお茶の水の明星と謳はれたる、美しき多根子とは互の胸に忘られずなりて二人が噂は少壯士官仲間に知らぬ人なく意地わるき同僚等よりはからかはれ羨れありもせぬポケツトの底をはたきてビーアおごらるれしも幾度なりしとか。
出雲の神が粹なさばきに首尾よく兩人の願は叶つて華族會館に披露の宴かねて、評判高かりしそれだけに先輩知己友人等よりの贈り物も山とつまれ衆人羨望の的とはなりしがあゝそれも束の間、花に嵐のたとへに洩れず忽ち征露の役は起りて天にも地にも替へがたなのなつかしき君は海底の藻屑と消え果てつ。
また十八のうら若き未亡人の悲嘆たとふるにもの無

くあゝ浮世はげにや夢なりけり。我身獨りどうして永らへる甲斐やあると、日夜ひたすら泣きしづみてさんざん一家一門を困らしたれどつまりはまあ〜とて一先づ湘南の波しづかなる實家の別墅へと引とられつ。さる程に月日の小ぐるまのめぐりめぐれば人の噂も七十五日、尼になるの何のと駄々をこねたる多根子の上も絶えて知るよしなかりしが聞けばまた此頃の小春日和に枯れたる枝も返り咲して下ろすとさわいだ黒髪は再び艶やかなるローマに結び上げられ親子もろとも第二の夫さがしに餘念なしとか。



「海軍はもうこり〜故今度は法科か工科出身の若年に限るとは餘りに蟲のよすぎる話、誰が、ヒト浮氣つぽい古物なんぞ脊負ひ込むもんですか」とはいづれ口さがなき京童が云ひ草のまゝぞ………。

◎米子

前世には如何なる業を晒したればか生れもつかぬ、すが眼に加へて兎口といふ、念入細工、ありやアどうしても珍世界ものだなどゝ人のかげ口いつとは無しに耳に入れば聞く親の身は切らるゝ程かつらき想ひなり。不具な子ほど不憫なものとやら如何ほど姿は醜くとも學問だけは一とほり授け三術の術物も持たすことならまさか貰ひ人のない事もあるまじと父母ふたりは血眼になりて知れる限りへ頼みまはりつ。

心あたりの無いでもないがあれぢやアどうも先方へ氣の毒らしくて言ひだせないからなアとはこれも出入の去る人の話、が、矢ッ張り天は公平なり、この程候補者としてある人より話のありしは村役場の書記を勤むる男にて年は二十九無係累、左の短きか右が長きかチト歩く時の恰好悪きが玉にきずなれど血統正しきは保證いたす、お米樣がやさしき氣質を見込んでの懇望なればと打つて付けた樣なる縁談にそは願うてもなき幸福と親も本人も大乘氣、めでたく祝言あげたるは遂四五日前のことなりとか。

全く縁とは異なるものなり御二人連れの散歩の樣が見たい樣ねと人は云ひぬ…………げにや女に屑なしとはよく云うたもの、さらば醜き浮雲も時の來るを心しづかに待たんかな。



社會觀察

結婚媒介所に行つて見た記

覆面記者

私に一人の妹がありますの、

實は主人の妹で、私よりも門松をくゞる度數の多き事、既に三回の多きに及ぶといつた人ですから、小姑は鬼千疋と申しますけれども、二千疋位の價値があるかもしれないのですよ、但しこれは兄嫁たる私の考へだから、金箔附ではありません、つまり此人の爲めに結婚問題が起つたのですが、ずゐ分面白い事がありますから御聞き遊ばせ。

私だつて當家に嫁ぐ迄はなか〳〵の氣焔家で、或時には想ひを高き夢の樓閣に畵いたり、心を現世の物質的眩惑にあやうくしかゝつた事もありましたので、もう〳〵一生を獨身生活で送つて、敎職といふ淸い仕事で過して見度いと念じたり、又は一歩も五歩も退ぞいては、猫糞臭い糠みそ女房で送らうかと、今時の言葉で申さば生意氣ながら煩悶と云ふ事も、經驗無きにしも非らずですよ、其内どうした拍子か、多分出雲の神樣が面白半分のいたづらか、或は御親切か、私共の名簿に朱點を引て下さつたので、今では此有樣なのですよ、省みれば僅々三ケ年の「お神さん生活」ですけれども、自分はこれで可なり「女房哲學」の一派を立てたと信じて居ますの、人樣は奇拔な事ばつかり言ふと仰せになりますけれ共、全くなのですよ、お惚けぢやございません。

△妹の心のぞき

いくら人前で立派な事を申しても、年が年ですから大分に考へて居るらしいのですけれども、私共はもう婦人としての、到達す可き理想の境を認定して『徐行して居るんだから、結婚問題なんぞに、貴重な時日を

浪費するなんて馬鹿らしい、詮じ來ると當世の人で、私が一生の愛を捧げる人は誰だか？、或は無いかもしれませんね、女だつて百年の苦樂、唯人に依らなくつても、人格ある人類の一員としての使命を果たすのに何も結婚しなくちやならない事もありますまい、全く「社會の罪」だわね、どうせ過渡の時代だから、なんて勢ひ當る可からずですけれ共。

內々よく注意して居ますと、妹はね私共に內々でいろんな寫眞を撮つて、友人達に送つたり、求めて人に交際したりして、好配偶者を得る事に腐心して居る樣子が、あり〳〵と見えすいて居るんですよ、そこで良人の申樣が振つてるぢやありませんか。

「どうも花嫁の候補者先生、自分の年を考へずに無暗と若いのを要求したり、氣位が高いのでどうも困る、赤門出の秀才でも、突出し、五十圓になるやならずで嫁に七十圓も百圓もする帯をねだられちやこまつちまふしさ、御面相は我輩の血統ぢや、いふ迄もなく實にもう賣れ殘りの代物で、大見切に見切らなくちやいけないぞ。目白邊にいつて見ろ、大見切一山幾銭の連中が肩で風切つて歩い



金と結婚　圖

て居らあ、」

ほんとに口が惡うござんすからね、人様に對しても此通り、私もうひや／＼致しますんですよ、妹の第一條件が、

神主、牧師、僧侶は死んでもいや、と申て居ますの、外交官か何かの連中をと思つて居るらしいのですが、それは駄目ですよ、何故と申せば、

此頃の外交官の若手は、里のしつかりした家からでも嫁を迎へねば、交際費がやり切れない、と仰しやるのがもう普通になつて居るさうですもの、妹などの様に年はふけたし、持參金なんて申すものもあるでなし、継子があつては猶更いやだと申しますし、ほんとに一日のびに困つて居るんですよ。

國の兩親はもう一日も早く安心し度いから、早く／＼と申ますけれ共、犬の子や猫をやる様にも行きませんし、私共が餘りに冷淡な様で、心苦しく思ひますけれ共、致し方もなし、妹の心は段々に荒びて來る、實にいやもう困つたものでございますよ。

初めの内は人様もいろ／＼と御親切に仰しやつて下さいましたけれども、此頃は誰も相手にしては下さらず、以前の候補は今はもう奥様を御迎へになつて、お子様迄ある方もあるんですから、致し方なしに妙な方面から運動をする様になりましたのですよ。

或夕方主人と散歩に出かけますと、四辻の電柱に、文官と廂髪の令嬢の肖像を書いた側に、結婚媒介所、四谷傳馬町十一番地實壽庵とあるのを見付ましてね、主人が一かばちか、一ついつて見ろと申ますので。

朝日新聞に出て居た與二郎の嫁探しの様に、愈々婚探しとでかけました。

私わざと丸髷に致しまして、成可くじみな風を致して、此大任を果す可く四谷見付で電車を下りました。商家の廣告看板を見ながら行きますのが、どうしても其番地に、それらしいのが見付からぬ、そこで同番地に下駄屋がありましたから、

此番地はもう外にないでしょうかと突然に問ひまし

たら、買物でもするかと思つて、世辭たら〴〵出て來た主人が、番地はさう飛び離れてゐるものでもござんすまいと、つつけんどんな申様、どうも私はむつと、腹の蟲が頭を持上ましたから、さうですかと、ずん〴〵出て行きましたが、後で思



ふと、鼻緒の一足も買つて、徐ろに聞けばよかつたなあと、今になつてどうする事も出來ない此侭歸つたらば、餘りに短氣ぢや無いかと叱られるは極つた事と、歩きながら考へて居ますと、ふと國民新聞に高砂舍の媒介によりてと云ふ題で、花婿花嫁の新婚寫眞が二三度出たのを記憶致して居りますので、或る交番で聞きますと、

うすあばたの巡査さんが、片頬に笑ひを含みながら、一丁ばかりさきの八百屋の角を曲つて左に行くと、太田と死斯燈が出て居ます、其家へ御出なさいと敎へられましたので、そこへまゐりました。

△主人と會見

案内を乞ひますと、二階から下りて來た主人が、早速迎へて下さつて、先づ初對面の挨拶を致しまして、つく／＼と其主人の風采を見ますのに、四十餘りの若味の走つた、金縁の眼鏡をかけて、八字のひげの美しい官吏上りの樣な人、なる程此人が出雲の神樣の代り、卽月下氷人の勞を取つて下さる奇特な方かと存じました。

此家へ來る人の要件は、申さずとも知れて居ますけれ共、私はかう申しました。

「近親の娘を嫁がせ度く思ひますけれ共、地方の者であつて知己も同じ樣な書生上りで思ふ樣にも參りませんので、つい御盡力を願ふ樣になれば結構ですが」と、申入れましたところが、

其主人なる人の申のに、

「もう御緣は妙なもので、雲を摑む樣な事かと思ふと、とん／＼柏子で案外に早くまとまつたりするものですが、大分に、男の方からも申込みがありますから、其内から御撰びになつてもよろしい、また猶手廣く御研究になつて、他に良緣が御ありの時には其方に遊ばしても、それは御勝手ですが、とにかくに規則を御一覽になつて、御協議の上御申込み下さい」と机の上の折カバンを引寄せて、活版刷のものを出して居る、

△どうも進物の澤山ある事

暫時話しが止んだので、床の間の方を見ますと、鰹節の箱だの、菓子折、砂糖袋など、目出度い紀念の水引かけたのが、いやはやどうもすゐ分に積れてある、なか／＼に盛んなものです、主人は、

「先日も陸軍の大尉さんで、一組結婚式がすみましたが、まあ御陰樣で都合もよく、今迄に御世話をした向

でも、末始終まあよろこんで下さると云ふ有樣なので、手前などでもそれが何よりのよろこびなんです」と話しながら、

「どうか此紙をよく御覽になつて、指定の欄内に其事をお書き込みになつて、御申込になつて戴き度い、其時に金一圓を頂戴しますが、これは其話しの爲めの音信や、電車代であります」

猶最近の寫眞を一枚そへて御出し下さい、ずつと御話しが進んで、いよ／＼御見合となりますれば、手前でなさつても、又他の場所でも、事務員が出張致して御便利を計ります。

いよ／＼成功となつた時には、先づ嫁女側から十圓婿方からは、身分職業に依つて應分の報酬を申受ける都合になつて居ります」と

私共によく理解の出來る樣に、話しをして與れましたので、一まづ主人と相談の上と思つて規則を貰ふ、

高砂結婚媒妁主意舌代

婚姻は人の道を重すの始で、言換へれば人生の義務であり、又家庭の生活を營むことの根本であります、相當の年齢に成つて獨身で居る程世に不幸な事はありません、然し日本の是迄の慣習を見ると、大事の結婚を只だ／＼人樣に依賴し、他の周旋して與るのを待つて居つて空しく年老いて仕舞ふと云ふ憾がありましたが、時勢が進んで世の中が忙しくなると、人樣も暇を割いて熱心に此事に骨を折る事も出來なくなりますので、一層不便を感じます、それに都會の地は別けても各地の方の御寄合ひですから。相手の不案内の爲め、年頃に成つても良緣が見付らぬといふ憂ふべき傾向があります、乃ち本社は時代の趨勢に鑑み、媒介機關の必要を認めて開業したもので、其期する所は婚緣を求むる男女の間に立つて、媒酌の勞を執り、眞面目に親切に御世話する考です、さすれば世の中に獨身の不幸の方は減じ、且社會に利便を與へて、國家の爲めにもならうと思つて、茲に新たに開業したものであります。

本社の營業方針

一、本社の目的は結婚を望むお方の爲めに最も着實なる方法を似て紹介斡旋の勞を執るのであります、故に從來の桂庵的營利的の媒酌所と同じに觀られては困ります、寧ろ之が改良を計りて、世に本營業の模範を示すつもりです。

一、本社の特色は親切を旨とし、秘密を守りて迅速正確に御世話致すことであります。

一、本社は相手方を最も精密に正確に調べて、決して誤りの無きことを保證致します。

一、本社は御申込になつた方々の御名譽を重んじて住所氏名は秘密に致し、御會見濟の上、双方の御承諾なければ、決して漏しは致しません。

一、本社は双方御會見濟の上否や無き上は一層御銘々に於いて誠意に相手方の身元を御調べを願ひ、本社の調査と違はなかつた上にて縁を結んで戴きます。

一、本社は申込があれば親切に周旋を御世話申しますが、併し成功しなければ決して報酬は申受けません尚ほ本社に御依頼中他に御周旋あれば誠に結構な事で、決して否やは申上げぬのみか報酬等も申受けません。

一、本社は申込の方より特に御依頼あれば、普通身元調の外に相當實費を申受けて戸籍謄本、土地家屋謄本等其他綿密な調査も致します。

一、本社の斡旋に依り芽出度く御縁が定つた後、特に御依頼あれば、御結納の取次、婚禮の調度用具の調達も致し、また婚姻手續の代辦も致します。

規約

一、申込方法　本社へ御申込になるには、原籍地、現住地、身分職業氏名年齡、營業程度、技藝、父母、祖父母、兄弟姉妹の職業氏名年齡、初婚再婚の區別、子の有無、家族の人數、資産及本人の收入額、支度の有無、并に希望の要件等を認めたる申込書に履歴書と寫眞とを添えて、本社に御提出下さるべし、但し申込書の文字は虚飾を去つて最も正實に御記入を願ひます、若し調査の上で違つた廉を發見すれば遠慮なく訂正を願出でます。

一、申込料　本社は御申込と同時に照會郵便料、出張車代等の實費として金壹圓を申受けます。

一、會見料　成可く本社に於いて御會見を願ひ席料は御思召で決して金額の多少は申上ません。

一、出張會見費　他に出張會見の節は社員出張實費金五拾錢を申受けます。

一、成功謝金　成功報酬は各位の御身分に應じ豫め協定致します、但し御申込者の情状に依ては無報酬にても致します。報酬は結納品受授の際申受けます。

營業種目

一、結婚の媒妁
一、結婚式場媒妁人の責任
一、戸籍謄本土地家屋謄本等其他綿密なる調査
一、婚禮に關する一切の器具貸付
一、婚禮式場の用達
一、婚禮仕出し料理の調進
一、髪結髷師の御用
一、婚禮支度買入の御用
一、婚禮荷擔御供の御用
一、戸籍移動の手續
一、本社の關係せざる婚姻に身元調査のみの依頼に應ず
一、右の外婚姻に關する御用は何なりとも引受致します

本社は誠實に媒介の勞を執れる爲め幸ひに皆樣の信用を博し明治四十年一月開業以來、當四十二年五月まで本社の手に依つて芽出度く御縁の

着ばつたものは既に二百組以上に達し、其後陸續申込ありて隨つて其數多々あります、御身の御方様は年の老幼、容貌の如何に拘らず御遠慮なく御申込下さるべし、本社は責任を以て必ず親切に御世話致します。

明治四十二年九月

東京四谷區須賀町十一番地
高砂社主
出雲大社中輔教　太田綱次郎
（電話番町七百〇二番）

別に「高砂結婚依頼書」といふのが一枚ありましたそれには原籍地、現住所、族籍職業氏名年齡、學業程度、技藝、家歷、祖父母氏名年齡、父母職業氏名年齡、再婚なれば其理由、兄弟姉妹職業氏名年齡或は婚嫁先、子孫氏名年齡、家族員數、雇人數、戸主の資産本人の資産、支度程度、月收額若くは生活程度、酒煙草の好否、重なる親戚、成功報酬、希望、」の各欄があつてそれに項目をしたゝめ依頼人の姓名を記入するやうに出來て居ります。

この二枚の紙を貰ひ受けて歸りました。

無論妹には内々です、萬一知れた時には大變ですからね。

高砂社の主人の話しを聞きますのに、ずゐ分年を召した方でも話し友達が欲しいとか、お茶飲み友達が欲しいとかいつた樣な有樣で、六十以上の老令嬢か何かしらぬが、大分面白い申込もあるさうです。

宅の主人が「男子側の申込人はどんな顔ぶれか」と、聞きましたから、私は高砂社で聞て來た通り、學士、辯護士、醫師、軍人、實業家、官吏と申ますと、もう社會の各階級皆んなだなど申て、大笑ひを致しました。

二三日の内に一圓を添へて申込みをしようといふ事になつて居りましたが、或時新聞を見て居ますと、大分に求婚廣告が出て居る、時々取つて、面白半分に讀んで見ると、

年三十會社員、月收百圓、二十より二十五迄、普通教育ある淑女を求む。

なんてのがある又

高女卒業年二十三、容貌普通　體强生活に困難なき親切なる方に嫁し度し、委細面談希望の方は當人來談下名迄。

と女はどこ迄も女らしく出て居る。

九月の何日でしたか、たしか讀賣新聞に二號活字で、實業世界主筆の、野依さんの求婚廣告が出て居たので、ずゐ分若い連中の話しの種子をにぎわして居ましたが、理想の淑女を得られたかしらと申ますと、主人が「そんなに氣にかゝるなら、一寸電車でいつて聞て來たらいゝだらう」つて、大笑ひを致しましたが、全く人の事でも氣にかゝりますですよ、ほんとに櫻の花も一盛りで、結婚もうまく取り合せのつかぬもので、就職とか、生活難の問題同樣、今に幾多の才子佳人といへ共、社會が進歩するに從がつて、結婚難の叫びも高くなつて行くのでしよう。

歐米の樣に、オールドミッスばつかり多くても困つたもの、此廣い東京に嫁の欲しい人、婿を求める女、幾人あるか知れませんが、何しろお國者の集合して居るところですから、不便で、其爲空しく嫁期の過ぎ行くのを怨む樣な場合もあるのであらう。

さうして見ると、高砂舍の樣に營業的ではあるけれども、專門家が出來たのは誠に結構な事ではありませんか。

△いよ〳〵申込み新聞にも廣告

そこでいよ〳〵一圓を添へて先づ申込んで置て倘用心のために某新聞にも求婚廣告を致しました、其文句の内に多少持參金を出すも可と、夫が附加して置たのです、勿論照會封書としてある、知人の宅へ屆く樣にして置きましたところ、もう〳〵驚きました。

中には面白半分のもありましようが、一日の申込が約三十人位はありますのですよ、或手紙などには「持參金を欲するの卑劣なる精神は日本男子としても持たざれども、目下企圖しつゝある事業の爲めに、使用するを許可さるれば、幸甚、何物か之れに過ぎん、」といつたのもありました、何しろ世の中の風潮の一部分がよく分る樣な氣が致しまして、不安心の樣にも思はれるし、まだ其方は何れとも決定致して居りませんが、

今日も某新聞紙を見て居ますと、求婚廣告がある。

そして御望の方は來談として、

四谷須賀町十一太田。

としてありますの、どうも不思議でたまらない、太田は正しく高砂舍であつて、私共でも既に依賴してあるのだのに、更に廣く新聞紙上に其候補者を求めるのであるか。



先日の話しでは、男子側にも各種類の人の申込がある故、其寫眞と履歷とを御覽の上御話しを初めましよう、といつたのに……。

然しこれは、此家に依賴してある男子では、氣に召さないので、更に新聞の力を借らるゝのか、それに

しても太田としてある？

どうも私の胸には、一種の妙な考へが往來してまゐりました、とにかく夫とも相談の上でとは存じて居ますけれども。

廣告を利用するのなら、何も媒介所の手を借りるにも及ばぬと思はれるんですが、しかしながらめつたな事は申されませんから、此位に致して置きましよう。

私共夫婦が妹の身の治りに就ては、此位ゐ心配致して居りますが、まだ〳〵生みの御兩親の内には、あはれ行秋と共に、紅顏のあせんとする令孃方のために、どんなに御心をおつかひになる事かと、そんな上迄思ひ合されますのですよ、物は食べて見ろ、人には添つて見ろ、

女を捨てる鍼は無い。

など丶申ますけれども、結婚はいやが上にも大事をとる可きは申さずとも、人生の大禮苦樂の路の分れる處ですが、今後どうなりますやら？

皆様も一度媒介所へいつて御覽遊ばせ。



またよい事が見つかるかもしれませんよ……



お嫁入仕度の相談

鶴龜子

もうそろ〳〵お嫁入の時期になりましたね
どうも呉服屋も拔目がありませんね
今川橋の松屋の陳列を御覽になりましたか、なかなか美しう出來て居りますが、萬事簡略にと申す今の世間に、華族とか、よほどの舊家か、金滿家でもなくちや、あんなに一から十迄お仕度をなさるうちはありませんでせう、此お仕度に就て

△面白い例ひ

があるでせう、宅の娘にはもう夏物冬物、萬事萬端取揃へてつかはしますといふのでどんな立派なものが來るかと待つて居ますと。

黒塗の手箱の中に、扇子と炬燵とが入れてあつたといふ昔話しがありますが、此仕度なんて考へ樣でどうでもなるものですよ。

△無用の品

でわづかに其當日だけ用ゐるものへ、數百千圓の金をかける方もある樣ですが、とにかく社會に於ける位地身分を考へて、出來るならば永遠の爲になる樣な物にして、無用の物を省略する樣にだん〳〵となつてまゐるでせう。

△上方の風習

上方と申ても、一般の御話しですけれ共、私共の普通中流以上ですと、
式日夫婦盃の時には、すつかり白裝束なのです、地合は綸子か羽二重で、裲も何もすつかり白で致しますの。

其意味は申迄もなく清淨潔白、或は生家を死して出で、歸嫁したのだとか、兎に角莊嚴なものですが、私の親類の娘に色の餘り白く無いのが此通りに致した時手に白粉を付けなかつたので、いやに手ばつかり印度人の借物をした樣で、側でひや／＼したと、今でも一つ話しに致して居ります。

△色直し

の時に下着を白、上衣は緋ぢりめん、又は緋綸子に黑綸子に、目出度い縫模樣の丸帶。

裾は緋裏の繻珍、又はちりめんですが、これは以前と異なつて、帽子も綿帽子だし、恥かしげな初々しいお嫁さんが、一しほ可愛らしく見えるものですよ。

△着換へ

三度目にはやつぱり

下白、中緋、上衣はちりめん、或は紋羽二重の据模樣で、帶は厚板繻珍等です。

△髮飾り

私共の方は例ひ年は若くても、既に人の妻となるのであるからと申ので、大丸髷に結びまして根掛は紅白のくず引。

くし笄はべつかふ、

前髮の兩側にびら／＼の下つた小さいかんざしをさしますが。

家に依るとおしどりとか申て、高島田の上に毛のかかつた樣なのに結つたりする向もありますが、此頃は地方の人にも出入が多くて、土地の風俗もだん／＼と簡略一方に移り行く有樣になつて、此頃では束髮の人もあるといつた有樣です。

△其他の道具

先づたんす、長持、鏡臺、針箱、用だんす、下駄箱三つ組盥、食器類等で、これでもたんすが二棹も三棹もある、長持が白木と黑塗となると夜具も二流れとい

ふ風になる。

其上に琴だとか其他たしなみの樂器類、ずゐ分九荷十一荷の大荷で、五千圓も八千圓も入費を要する樣なのもありますけれ共、

並一通りに致せば、まあ〳〵今時でも五百圓以上千圓迄で兎に角取揃へる事が出來ようと思ひますが、私は誠に驚きましたのは、



何と申のか存じませんが、先日も或結婚式に列しましたが、變な心持が致しましたよ。

婿方は相當な地位のある官吏であるのに、着物が縞物で、羽織だけが紋付。

後で聞きますとまだ大學を出たばつかりで羽織も袴も、絹のは初めて新調したのだと申て居ました。

私共の國でしたら、中は中、下は下なりで、金巾でも禮服はやつぱり紋服に限つて居りますが、東京など

△東京風か簡略方か

はどうしてぞんざいに致すのでせう、花嫁の方も初めつから色物の紋付に帶付きで、これはまあ〳〵裲なんて一度切りの不經濟なものを用ゐないのはよろしうございますけれ共、今日結婚して、明日から、下宿住居も出來ず、夫婦で大久保か四谷、雜司ケ谷邊の借家を探し歩くといつた樣な場合が多いのですから、此方もよろしいでせうけれ共、

田舍の土氣の拔けぬ私共は、今少し叮嚀にした方がよい樣に思はれますね。

或方は仰しやいましたよ。

結婚は人生の大禮であるから、出來るだけ立派にし度い、借金をしても永遠の紀念のために立派にし、日本の趣味を充分に發揮した法に依り度いものだ。

萬一費途が多くて借金が出來たら、夫婦協力して其返濟に盡力したらよいではないかと云つて居られましたが、理想としては面白い考ぢやありませんか、それも其人々の考へにある事ですけれども、いくら世が進んで、輕便を貴ぶと申ても、稼業的の媒介所や、料理屋等で合衾の式をあげるといふのなら、いつそ日比谷大神宮か、或は基督敎會堂でもよろしい、謹嚴な場所を撰み度いものぢやありませんか。

然し一概に東京と申ても、長く此地に住んで御出になる方や、立派な地位に御出になる方は、それ相當の家風家例もある事でせうけれ共、私はたゞ一般私共の樣な書生上りの間によく行なはれる範圍を申上たのでございます。

△衣服髮かざりの品々

先日或友人の宅に慶事がありまして、衣服や調度買入の相談をうけましたから、參考迄に申し上げて見ませうか。

△白牡丹と三井屋

決して流行を追ふなんて申す向ではありませんけれども、櫛一枚でも新調するんだから、やつぱり信用のある店で求めようと申すので。

高髷、丸髷、束髪、と三種の髪飾りに就て調べて見ましたが、なか〳〵お安くまゐりませんのは、細工が一體手が込む様になつたのか、品質に價格があるのですか、とても眞物は買へませんから、まがひで間に合して置かうかと申た位でしたが。



△高髷用かみ飾り

		白牡丹	三井屋
両花付櫛笄	一組	350	140
		30	30
		15	10
花付さし込簪	一本	55	35
		25	15
			10
同　前ざし	一本	12	10
			7
			4

根がけ紅白丈長

△丸髷用髮飾り

櫛笄	一組	280	50	5	150	80	5
平打ざし	一本	20	15	10	20	15	3
前ざし	一本	15	10	3	10	7	2
てがら							
根がけ珊瑚珠							

△束髮用髮飾り

三枚櫛	一組	30	20	3	15	7	3
たぼ櫛	一枚	18	10	5	10	5	2
リボン							
花束							
或は束髮ざし簪	一本	15	7	3	10		2

女の子には金がかゝるとこぼして御出でした、何れも圓以上なのを御覧なさいまし。

此頃は背貝、蒔繪共に其模樣はだん〳〵と精巧になつて來て、中でも兩花などは松竹梅か、四君子だけれ共、竹、蕗、芭蕉、桐、片ばみなどで渦卷模樣も昨今大變に流行して來た樣だと店員の話し、一時は廢れ氣味に見えたけれ共、此節ではまた古風を貴ぶ日本の粹を忘れぬ、といふ風で、なか〳〵高尚になつて來た向もあるさうですが。

又或向ではずゐ分身分のある方でも、たつた一度切りの品に入念にするよりも他の物に金をかけた方がよいと仰しやつて。

高髷用の兩花付などは、全く中物ばかりを求められるところもあるさうです。

本べつかふが一番高價で、甲張り、卵甲、と云ふ順序になつて居るさうですが。

白牡丹などですと、第一流の小間物店ですから品位等には元より、十分詮議がしてありませうけれども私共の樣なものは餘りお結構過ぎて勿體無い樣な氣がしますので、三井かかねやす位なところが求め易い樣に存じました。

然し高いの安いのと申のではありませんよ、つまりお金と品物と、御身分と好みと云ふ相談でなくてはいけませんからね。

私はさう思ひましたよ、此頃は何處でも賣品の價格表の樣な物が小冊子としてありますから、豫じめそれに依つて、大體をとりきめてまゐる方がよろしいと。

△衣服の好み

これも亦裾模樣や何かを懸賞で競ふといふ風で新規新奇といふ樣になつて來ましたけれ共、一般普通に致したらとんだ物入でもないですから、私共は稼業向の人が春衣の模樣に頭を煩はして、突飛な好みをするのとちがつて、じみな考へを以て高尚で、優美な樣にこれまた身分や年頃に應じて見立てたいと思ひますね。

今日は慈善會、明日は何々の婦人會と、御出向の多い方は別問題で、私共の樣に紋付なんて一年に三度か四度位か着ない者が、まして一重や二重のものが餘り派手に致して置たら、後々で困りますし、そんなに年年新調の出來るものでもありませんし、其内に流行はずんずん變つてまゐりますから。

そんなにあわてゝ、一度にたんすの底にしまふにも及ばないと存じますよ。

それに夫が七十圓や百圓の俸給で、一家を支へて行かねばならぬのに、其妻の帶一すぢに費つてしまはねばならぬと申のは、ほんとに釣合がとれませんぢやありませんか。

ですから一時目の前よりも永久變らぬ點に注意して置たいと存じました。

御免下さい、いつでも、貧乏な內幕が現れますのね其方なんかは私共と考へが同じでしたから、左樣です褶なんかもまあ一日だけですから、止ませうといつて止めになりました。

今川橋の松屋では、嫁入道具一さいの價格表と、其求め方や、撰び方を冊子として配付するさうですから參考になるであらうと思ひますよ、これから御仕度遊ばす方には。もう私共のやうに一度すんだ人は、拜見するはつかしですわ。

人に交はる時の心掛け

とも子

今日の貴婦人中には、歐洲風に倣つて、面會日を定め、大抵其日にのみ、來賓を接待せらるゝ方もあれど這は上流社會の一部分に止り、一般に行はるべくもあらねば、先毎日不時に訪問の客あるものと思ひて、毎朝、茶、煙草、煙草盆、又火鉢等を備へて、其用意をなし置くべし。且菓子等も、夫々下婢に命じ置きて、客の前にて彼是と指圖すべからず。

△取次は來客の容子の如何にかゝはらず、叮嚀に應接せしむべし。始め横柄にして、客の姓名を聞き、俄に待遇を異にするが如きは、誠に片腹痛き事なり。若し不在或は病氣等にて、面會なし難き事情あるときは、殊によく其來訪を謝し、慇懃に斷りを言はしむべし。總て召使の不愛想なるは、其主婦さへ心づきなく推測らるゝものなり。さりとて又、餘りに差出たるも見にくければ、常々よく敎訓し置くべきことなり。

客の座敷へ通りたる後は、直ぐに其履物をなほし、正しく揃へ置かしむべし。若し然せずして、其歸るときに、履物の取亂れ、或は小兒などの踏あらすが如き事あれば、大に客の感情を損ふものなり。

△客と對話するときは、常に意を用ゐて、客に不快の念を起さしむべからず。又話の途切で、手持無沙汰となる事あらぬ様にすべし。さりとて多忙なる人を、會釋もなく物言ひかけて、無理に引止むるはよろしからず。又客と對話中には、他の用事を辨するが爲に、客のみを席に殘して別室に赴き、或は時々席を離れて、しみ〴〵落付かざるが如きは無禮の限りなり。又談話中屢々時計を眺め、或は早日も暮れなんとすなど言ひて、其歸りを促すが如きは、最も甚しき無禮なり。

△客に湯茶を侑むるには、よく其程を見はからひて、漫りに强ふべからず。飲み干す傍らより、間斷なくつぐことは、却つて大に客に迷惑を感せしむることあり。

△不時訪問の客に、酒食を侑むるときは、長く引とめ

て、立派なる料理を調へんよりは、寧ろ手輕にして、速なるを宜しとす。

△客の來りし時、若くは去らんとする時に、聲高く笑ひ、或は耳語き、或は指さしなどすべからず。縱令他の事にても、客は己の事と思ひなして、甚だ氣色を損ずることあり。又客の容貌、髮形、服裝等の品評をなすべからず。此事常々よく家内の者に注意して苟にも斯る行ひなき樣にすべし。又客の來りし時は、自ら出て之を迎へ入れ、其歸り去らんとする時は、必ず玄關まで見送りて、其門を出るまで内に入らぬを禮となす。但し甚く身分の違ひたる下輩の者ならば、自ら送迎するに及ばざるべし。

△良人と共に客に應接するときの心得　良人とともに其同僚、朋友等と談話するときには、常によく良人の心を酌みて、よきほどにもてなし、さし過ぎず、將た足らぬことなき樣にすべし。若し客の我に物言ひかたらんときには、詞寡に誇りがましからぬ樣にて應答し決して良人をさしおきて、我先口を開き、出過ぎたる擧動あるべからず。女の我賢げにさし出て、良人を蔑ろに振舞ひたるは眞に惡く、爪彈きせらるゝものなり。

△良人に代りて客に應接する心得　良人に代りて賓客に應接するときには、其來意を審かに問ひ置きて、良人歸宅せば、漏れなく之を傳達すべし、又若し良人より言ひ置かれたることあらば、誤りなき樣其意を其方に通ずべし、濫りに己の意志を混入すべからず且主人の不在を叮嚀に謝して、客の歡心を失はざる樣注意すべし。されど男客に對するには、殊に溫和なるが中に嚴然たる威儀を具へて、苟且にも侮り輕しめざる樣にすべし。さりとて良人の富貴を笠に着て、倨傲の振舞あるべからず。

△學友に對する心得　學友など舊き好みある友に訪はれたるときは、よく往昔の友情を溫めて、隔てなく待遇すべし。假令彼は沈淪し、我は富貴の家に嫁ぎたりとも、苟且にも驕り高ぶりて、之を輕蔑すべからず。

△他家を訪問する時の心得　他を訪問するには、近親親友の外は、公用若くは、さり難き急用を除きて、早

朝或は夜間にすべからず。且食事の時刻をも避くべし。其談話の時間は、一時間くらゐより長からざる樣にすべし。殊に多忙なる人を訪問したるときは、其用件のみ語りて、速に歸るべし。是といふ用事も無きに、長長と語り續くる氣樂の客人にも、隨分迷惑するものなれば、己も亦用無きに長居して、人の妨げをなすべからず。されど、特別に親しき間柄にて、眞心にて引留むるを、強面く立歸らんも餘りに情なかるべし。此等は宜しく便宜に從ふべきなり。又取次人、奴婢などにも、叮嚀に挨拶して、横柄なる言辭を用ふべからず。

△案内　他人の家に案内なく戸を開きて入るは無禮なり。必ず取次を乞ふて、其案内に從ふべし。不意に戸を開きて、室内の取亂れしところなどに入込むは、我も人も迷惑することなれば、よくよく注意すべし。尤も近親々友等は、一々取次を待つにも及ばざるべし。

△着席　席に着くには、成るべく遜りて、下席に着くを禮とすれども、亦主人の勸めに從はずして、無理に片隅にゐるも無禮なれば、程よく其言に從ふべし。殊に己より身分卑き人々と同席せしときなど、餘り下席に着けば、他の人々着席すること能はず。大に困却すべし。又人の出入通行すべき處、或は障子、襖などを開閉する場所には坐すべからず。

△談話　談話中他人の姓名を呼ぶべからず。貴人には其官位を呼ぶべし。例へば某大臣の家に伺候したるときは、唯大臣とのみいふが如し。

△食物　主人よりすゝめられたる食物は、成るべく少しにても食ふを可しとす。取りて與へられたる菓子などの食ひ難きときは、紙に包みて持ち歸るべし。

△先方に取込事ありし時の心得　家内に病人其他取込事あるか、或は何か心配の樣子あるときは縱令我用件は辨せずとも、速に退き去るべし。

△他の饗宴のところへ知らずして行きたる時　此場合には、重ねて來るべき由を取次人に言ひおきて、速に辭し去るべし。若し時日を延ばし難き火急の要事あらば主人主婦の接待の間合を待ち用件のみを簡短に述べ深く其妨げを謝して歸るべし。主人若し強ひて引き留むるも、大抵は辭し歸るを宜しとす。

△親戚朋友の人の嫁したる時　此場合には、先方の家風折合などのよく知れぬほどは、屢々往きて餘り狎々しく振舞ふは惡し。特に其良人舅姑などの不在の折はよくよく注意すべし。



私のは平凡

松　風

(一) 縁談

學校も去年卒業して今は閑な身、双葉會へ佛語の稽古に行くのと、一週間に二度神田の先生へ國語の御講義伺ひに行く外は、土曜日にピアノの先生を御待ち申す計り、お友達は皆婦人會の、慈善會のと御出掛に成るが、我家では母様が厳格て被在るから、餘り出歩るきは仕無い、會と云つても同窓會と竹柏會位、其間は母様の傍で裁縫の稽古と家事の御手傳、折々赤坂の姉様から義兄様は出張のお留守で淋しいから、宿りに來よと、御使が來れば其時計りは、母様も異議無くお許しに成るから、直様仕度して車夫の亀吉が、父様を銀行へ御送り申て、歸るのを待ちかねて出掛ける。

日曜には、兄様が横濱からお歸りに成るので家は賑やかに成る、夕飯後の運動には三枝か關口をおねだりして、時間が早いと、活動寫眞へお伴するのが樂しみ

今日銀行で長島の話に、爲替課の松田は將來有望で殊に品行方正の評判だから、須磨子を遣つてはどうだと云つたが、あれなれば見込は有るし、行々は支店長に成る人物だ、聞けば母親と異母兄が一人居るきりで係累は少ないし龍動の支店長にでも成れば、洋行も出來るから須磨子も喜ぶわいと、昨日御飯後茶の間で父様が母様とお話に成つてたのをちらりと訊つた。

此頃は何だか私の縁談が澤山有る様だ、此春寫した寫眞焼増したのも、もう一枚きりだから此間の袷の振袖で寫してお出でと、母様が仰つた。縁談といへば、兄様は御自分の同窓だから、竹村さんが大の贔負で第一お前の望み通り次男だ、國は却々の舊家で、兄さん

が相續して兩親も有るが隱居の身で、竹村君には若干か財產を分けてくれるのださうな、そして一人は東京で嫁が貰ひ度と云つて居る、今でこそ伯父さん處に居るから、あんな前掛かけて、番頭の樣な風をしてゐるが、家内を貰つて家を持てば人品は善し、資產はあるし却々ゼントルマンだ、夫に僕等と違つて、伯父さんとこで、實地の經驗を積でゐるから、間違ひつこ無しさ、嫁を貰へば、直ぐ店を出すのだと云つて春中から國のお父さんが來て本石町へ普請を急いでゐる、最早大方出來上つて、此間行つて見たが中々立派だよ、實業家に限る、官吏など位倒れで仕方が無いと、頻りにお勸め成さる。

銀行員もよし、實業家もいゝが、私は軍人が好きで何と云ふわけも無いが、姉樣の御話が一番善い樣に思はれる。

此間赤坂へ行つたら義兄樣が、須磨ちやんも、もうお嫁に行てもいゝなあ、軍人は嫌いか、僕の處へ來る梅本は未來の大將だよ、今陸軍大學へ入學の準備中だから、須磨ちやんの樣な人が內助してやれば屹度成功する、須磨ちやんは商人や官吏より軍人の細君が適當だと仰るし、姉樣も、梅本さんも眞實にいゝわ、幼年校も士官學校も一番で卒業したし、家へ來る青年士官の中で、あの位おとなしくつて出來のいゝ人は外に無いとしきりにお譽め被成る。

「だけれど、評判のやかましやのお姑さんの御機嫌が私には取れないわ。」と申せば、姉樣は、

「何のお姑さんの一人位、家など御覽なさい今でこそお元さんもお嫁に行つて、母樣は二郎さんの方へ被入てるが、私が嫁入た時は兩親に弟と妹、夫でも恁う圓滿に暮してゐたぢやあ有ませんか、親の無い子は世間に一人も無い、其位のつとめが出來無くつて恁う仕升と。」向きに成つて仰る。

金モールの參謀肩章掛けた馬上ゆたかな陸軍士官も惡くは無いと思つた。

是迄は隨分のん氣に暮して居ては嫁に行くなんか別に深い考も無く、まだ／＼と思つて居たが、愈う緣談

女(りの一)

故川上眉山君著

巖谷小波君
石橋思案君
校訂

武內桂舟畫伯裝釘

眉山全集

博文館發行

◁全部完成▷

幽艶にして清逈なる眉山氏の筆は、眞に明治の華文なり。況んや其想、おのづから當代に重きをなして、而も逌爾として追らざる所、我文壇の重鎭たり。今や斯人亡くして、其著作單り金聲玉振の響を傳ふ。本書に收めたる諸篇は、孰れも當時文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にせしめたるもの實に之れ我が讀書界に於る珍璧にして、而してまた明治文壇の異彩ある大作家が面影なり

第一卷目次

▼雪折竹 ▼大盃 ▼奥様 ▼いさゝ川

▼風流狂言記 ▼書記官 ▼船橋 ▼碧水志

▼お駒 ▼絃聲 ▼うらおもて ▼柴栗 ▼逸樂篇

▼有明 ▼鹿の子絞 ▼うつせ貝 ▼黄昏

▼青葉 ▼島田くづし ▼寢覺 ▼塵影

第二卷目次

▼梅紅葉 ▼野人 ▼二重帶 ▼鶴澤橋

▼左卷 ▼行衞 ▼一軒百姓 ▼三銃士

第三卷目次

▼春宵 ▼虚僞の價 ▼爪木折 ▼絞小袖

▼落葉 ▼春潮 ▼片影 ▼三人男

▼澪標 ▼萬平 ▼凡人男 ▼妖艶

▼弱氣質 ▼希望 ▼小妾記 ▼喜劇仙臺平

▼裏座敷 ▼明眸 ▼小町紅

第四卷目次

▼新家庭 ▼同胞 ▼魔道 ▼昔の戀

▼梅の寮 ▼一夜天下 ▼寶の山 ▼千紅萬紫

「眉山全集」は春陽堂と本館とに於て分割して刊行せる者にして其所載の項目も從て異なり本館發行の分のみにても眉山の大作を網羅せるも全集の名に對しては兩者を合せて完璧となす而して其釘裝も同一なれば之を同架に陳れて少しも外觀を損ふことなし

全四册洋裝菊判
總クーロス上製頗美本
每卷紙數約八百五十頁
價各壹圓八拾錢
小包料各拾貳錢
全部價六圓廿錢
外に送料を要す

（りの二）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替東京二百四十番 博文館

東京帝國大學文科大學講師 佐佐木信綱君撰

日本歌選

上古の卷

洋裝四六判總クロース上製紙數約三百餘頁 正價八十錢 郵稅六錢

上下二千載、我が國文學の精髓として、國民が趣味好尚の中心たりし和歌は、その載籍の傳はれるもの凡そ幾千卷。その歌數に至つては無慮幾萬首。爲にこれを悉く渉獵せむこと、專門の士と雖も容易ならず。研究に志ある士をして、むなしく望洋の嘆あらしむ。佐佐木氏乃ち日本歌選の計畫あり。古來の選集家集はた諸書に散見するものゝうちより、各時代各作家を代表すべき作品を選出して、わが國歌の精髓を示さる。氏が該博の學識と、嚴密なる批評眼とは、よく傳統あり歴史ある我が二千年の和歌を縮撮し、選出し得て餘蘊なかるべし。茲に第一卷上古の卷。稿成りて刊行せらる、即ち上世歌史の第一期第二期、紀元前より天武帝までの歌謠を輯錄す。而してこの兩期の作は其數少く、かつ普く諸書に渉りて採輯せるものなきを以て、本卷は特に例外として、撰擇を用ゐず、紀記を始め風土記その他の古書よりすべて輯錄せり。從つて本書は、上古歌謠を研究せむとする士にとりて最も完全なる資料たり。かつ卷末に、上世歌謠の概觀といへる論文を附し、第一に出處製作時代に就いて論じ、古來の假託の作を辨別し、第二に兩期の歌謠の性質とその變遷とを論じ、第三に祝詞壽詞語詞に就いて論じ、第四に兩期の歌謠研究の歴史を記述せり。又附錄として、研究の參考書目、及び時代句數歌體等によりて分類せる表、時代と作者とによりて分類せる表等を添ふ。わが國文學を研究せんとする人和歌に志あり、歌學を學ばむとする人の爲に必須の書なり。

佐佐木弘綱翁遺著 佐佐木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊

洋裝四六判美本 紙數百四十六頁 正價二十八錢 郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐佐木弘綱翁の遺著にして國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追ひて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歷史として、作歌の模範として、獨習用に又高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。

佐佐木信綱君著

歌學論叢

全一冊

洋裝四六判總布製 美本紙數五八〇頁 正價金壹圓 郵稅八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講ぜらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て「和歌と時勢」「和歌の將來」「歌學の根本」「上世の和歌」「歌格の研究」等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、「人麿と赤人」「貫之」「西行」「實朝」「景樹」等を論評し、或は、「仙覺以前の萬葉研究」「戸田茂睡」等精細なる考證あり。或は「萬葉集の女歌人」「建禮門院右京太夫」等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又「六人部是香」「大隈言道」「野村望東尼」等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國分學史上に一新事實を提供せるもの。其他「萬葉集私見」「近世歌人雜話」「家集のいろ〳〵」等すべて廿篇、五百八十頁にわたり該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

東京本町博文館

(りの三)

名家小説文庫

明治の世新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵きて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の温雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸す。本館此處に思ふところあり、**名家小説文庫**を發刊し、每巻千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし、價を廉にし、遂次刊行して、以て讀書社會の渇を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

第一 第二 露伴叢書 前編 後編

既成發行

裝釘 洋裝菊版 總布特製

前編（五百七十二頁）正價金貳圓 小包料拾貳錢

後編（九百九十頁）正價金貳圓 小包料拾六錢

前編目次

後編目次

（りの四）

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

坪内文學博士序
土肥春曙君譯

新譯 社會劇

本書は『形影』二幕『名札』三幕『浮浪』四幕及び『遺言』一幕の四篇を含み、今回新設されたる文藝協會演劇研究所の教科書として用ゐらるゝもの。本書は著者が登場研究の經驗により、直に實演に適せしむ可く、少からざる苦心と用意とを以て執筆せるもの。本書は彼國に於て一般に好評を博せるものゝ中、殊に學校、家庭の私演朗讀等所謂アマチユアに適當なる物を主として撰擇せり。本書は新社會劇を研究せんと欲する初學者に取りて唯一の新楷梯なるを以て、苟も劇に志せる者は、本書に依りて、私演朗讀を試み見よ。西劇の新味を會得すると同時に、我が將來の藝壇に資す可き清新の演法は自ら其間に發明せらる可し。

全一册

洋裝菊判上製
紙數約三百五十頁
▼近刊▲

石橋思案君序 海賀變哲君著

日本文學遊戲大全

本書は我國の文學に關する遊戲の凡て網羅し一々其の解說、作法、作例等を最も平易に記述したるものなれば、いかなる初心者と雖も一讀して會得するを得べき近來の好著にして、收容せし種類は左の如し。

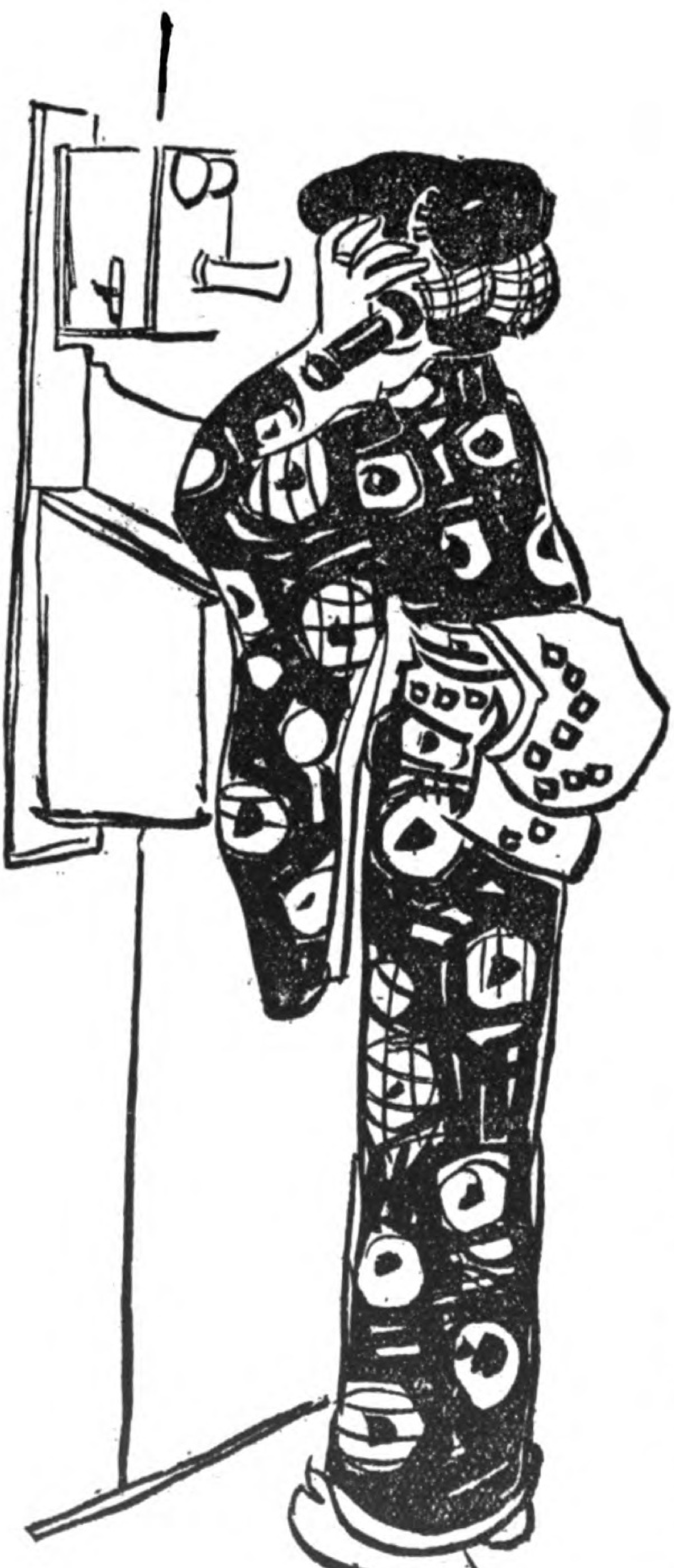
(一)語呂合(二)謎(三)ものは附(四)廻文(五)無同學(六)前句附(七)下句附(八)冠附(九)沓冠(十)物名(十一)隱句(十二)考物……隱語…判讀考物……變讀考物……重讀考物……雜稱考物(十三)文字鎖(十四)鸚鵡返しと天狗俳諧句(十五)短對句(十六)(附錄)福引……一口噺……滑稽問答

四六版石版
表紙美本
紙數三百餘頁
▼近刊▲

女（りの六八）

が我身に迫つて來ると、ちつとは其方面の考へもしなければならず、去年の卒業試驗以來した事の無い心配が出來た樣で何だか氣にかゝる。

だ、いづくともなく桂花の薫りがする、窓を明けると鶺鴒が色付初めた楓樹の枝うつりして鳴く。午後から、母樣は杉田さんへいらつしやつてる間、



(二)　友のうへ

小春日和の麗かな日影が映してうすねむりが出さう

羽織の縫かけをはしめる、此間からの縁談に就て、くだら無い想像をしたり、お嫁にいらつしやつたお友達のうへを思ふ。

軍人は淡白して金錢上の事かれこれ云はず、淸麗でいゝつて、大の軍人好きで嫁入つた多滿子様も、旦那様が大層なしまりやで、下女を置ては不經濟だとて、大尉で下女も使はず、二人位の御飯は焚火より、炭の方が得だと仰るので、焜爐で御飯をお焚に成のだつていくら二人ぎりだとて、使ひ走りから洗濯まで、一切一人でなさるのは、大抵では有まい、旦那様行軍のお留守中、那麼代々木村の淋しい一軒家みたいな處で、よくお一人でお留守居が出來た事、だからあのお美しい方も手は荒れる、日に燒けてお色は黑く成る、でもあきらめのいゝ多滿子様だから、人間は境遇に安んじなければと、平氣で、

「いゝ什麼して毎日お風呂に這入たり、お白粉の化粧品のと世帶持ちは云つて居られ無いわ。」

と仰つたが、僅か半年であのおしやれな、おたしなみのいゝ方が見違へる樣にくすぶつてお仕舞被成つた、いくら功五級の大尉殿でもあれでは厭だと思ふ。

左樣かと思へば、萬事に細かいと云ふ商人でも、從弟のお靜さんの良人の様に、大腹中で、ホネームーンから歸るともう金庫の鍵から、銀行の小切手迄一切、お靜さんに渡して、オイ懐中へ小遣ひを入れといてくれ、と仰るのださうな、夫はお靜さんの技倆が有て任せても安心と信用されたのだらうが那麼人も有るから一概には云へない。係累の無いのを望む方も有るけれど、餘り何も無しではまさかの時に困ると思ふ、私の次男主義と云ふのも、實は姉様の御仕込で、次男なれば何れ兄様が家督相續をして被在るから、凡ての表立つた事は本家でして下さるし、兩親も其方にお出だから姑舅のめんどうが無くつて、氣樂だ、豈夫御兩親や兄様の手前さう無鐵砲な事も出來ず、滿一道樂でも初めた時、意見して頂くと、恁ういふ都合のいゝ處から割出したのでと仰つて私も成程と次男說に成つた。

榮さんの嫁入つた處は、眞實の獨身、何も無いと云つたらなんにも無いのよと、榮さんも仰つたが、御本人に見込が有ると云ふので嫁入つたが、夫は〳〵は氣樂で、お里のお母様も婿を貰つた様だとお喜びで、あ

れも持つて來やう、之も無ければ不自由だらうと、お道具でも日用品でもお里からお運びに成る、月給も澤山お取りで被在るから、お暮しも派手で、召物も流行を追ふ、旦那樣はお優しいからお氣樂にお出歩きは出來る、同窓會には皆樣のお羨みの的に成て被在つたが好事魔多しとやら、旦那樣肺病で僅か一年と立たぬお病ひで、おなくなりに成つた、其跡のお氣の毒さ、御親類も無ければ遺産も無し、皆お里でお世話被成つて當才の赤ちやんを連れて、お里へお歸り、其頃は兄樣のお嫁もお出來に成つたので、何を云つても出戻りの身、嫂樣へお氣兼成つて、肩身をせまくお暮し成る、眞實にお可哀想、夫を思ふと獨身も考へもので有る。

美保子樣はほんとにお氣の毒な、だが女の虚榮心も餘り過ると、飛だ事に成る、お容姿の著いのと、高等教育をお受けに成つたのが、仇に成つて、那麼事にお成りなさつた。

學校に被入る頃から、私のハスは博士か華族でなければなんて、仰やつた、さうしてホネームーンは歐洲へ行くのだから、語學の一通りは知らなくてはと、卒業後英佛獨の語學からピアノ、ダンスのお稽古に御熱心で有つた。

あのお品のいゝ、京人形の樣なお顔立、お年は廿二と伺つたが、什麼見ても十七八のおつくり、お雛樣のやうに、白襟をいくつも〳〵も重ねて、紺上矢絣のお召に鴇色繻子のおみ帶立矢の字に、お髪は鬢から取つた大前髪に、ふつくりとした桃われ、二寸の白丈長に大きな銀の平打と紅薔薇の生花の樣な簪、恁うつんとおすまし被成た御樣子あれが料理店の娘さんと見えやうか、恁うしても華族のお姫樣、だがお家相當に粹なお内儀さんにでもお成りなされたら、反つてお幸福で有つたらうに燃える樣な虚榮心につけ込まれ、欺された樣な結婚を成つた。

然し、其當時は、嘸お得意で有つたらう、私の處へも、横濱の婚家から英文で新婚お披露の夜會の招待狀を下さつた、友子樣のお話に、當夜の來賓は外人七分日本人三分で、美保子樣は、お友達殘らずお招待被成

つたが、お出に成つたのは友子樣一人で有つたさうな、式場は紅白の縮緬で柱を飾り、電燈まばゆき席上へ、美保子樣新郎に手をとられ、數寄をこらした洋裝のスカート長くお引きなされ、滿足に輝やいた其の樣子、實に何とも云はれず、あのお容姿が一層引立つて天女が天降つた樣、實に見惚れて仕舞つたと仰つた。

お住居は山の手の御本宅で、和洋折衷の大厦高樓御良人は日々海岸通りのお店へ馬車で御出勤、日曜日はお二人自働車で根岸邊へ御運動にお出かけに成るとやら。

侍女が二人、其他下女下男、コックなど四五人の召使ひ、何處へ行にも侍女が付て來るから、窮屈だと仰るとか。

まあ〳〵美保子樣も隨分思ひあがつて被在つたが、待てば海路も日和とやら、とう〳〵本望成就、嘸御滿足だらうと、お友達が寄ると羨ましいやら、お噂とりどりで有つた、夫が一年たつやたゝずの翌年のお正月お里の性の秋月美保子樣で年始狀を請取つた時の私は實にいひしらぬ感にうたれ、無形の教訓を受けた。

其後友子樣に、一體美保子樣の御結婚はどうなさつたのでせうと訊つても、流石品性の高い貴婦人で被在るから、只「ほんとにお氣の毒お可哀想な事でした」と斗り、

秋の日の暮れ安く椽の梢に夕陽は落ちて紅葉の色が一しほ榮えた竹藪で百舌がけたゝましく鳴き出した。

縫上げた羽織をたゝむで、針を數へ乍ら時計を見る父樣のお歸りにはまだ間が有るが母樣はお留守だから早い目に立つて、胸に呟ひ附て、例の樣にお居間の火鉢へ火を入れ牛乳とチヨコレートを運ばして置く、勝手へ廻つて、仲に夕飯の獻立を聞て栗のキントンの皮剝を手傳ふ。

剝き乍らふと這麼事を思ふ。

父樣と母樣とどちらが先へお歸りに成るだらう。母樣がどうもお先の樣に思はれるから左樣と定めて自分の都合のいゝ樣に今度の緣談を占つて見る。

栗は皆剝けたがまだお歸りは無い。

おや車の音がするどちらだらう、お歸り――と龜吉の聲、あらまあ父樣がお先にと當がはづれたと思ひ乍ら、玄關へお出迎へする。

（三）見合

此間から杉田さんが度々被入て、竹村さんのお話がずん〳〵進む樣だけれど、私は一向進まない、どうも自分がお嫁に行くなんて氣になれない、先方の御兩親が、お國からお出に成つて、明日は日比谷公園でお見合だつて、母樣は仰る。私其樣事恥かしくつて厭だわ、と申てもお聞に成らない。髮は日本髮がいゝ、束髮など御兩親がお嫌ひに違ひ無いから島田にする樣にと仰るが、實は可成嫌はれ度のだから、頭が痛う御座い升と云ふ、口實で前髮の思ひつきて出たマガレットに、三吋の赤のリボンを結ひ、着物も先樣は田舍の方で、じみ好きだと思ふから反對に、大柄の紋御召に洗朱の糸錦の帶を立矢の字にしめて母樣と兄樣に連れられて、有樂門で車を下りた。

兄樣は何か心得顏に先へ立つて被入る、鳥渡時計を御覽に成つて、花園へお這入りに成つた、打合せの時間に早いらしい。

菊の花壇はまだちらほら咲きはじめた處で雁來紅が盛りの色をしめてゐる、草花の花壇には西洋花がいろいろ咲てゐる、簪に欲しい樣なのや、花束に仕たいのが澤山有る、處々に秋の七草の混つてゐるのも可愛らしい、芝生には、小さい西洋花が縺取りをした樣に咲てゐる。

「まあ蘇鐵が多く成つたねえ。」と母樣が仰る。

お國から被入たといふ御兩親、まさか赤毛布式とは思は無いが、田舍のお爺さんお婆さんを想像しながら此處を出て、萩の亂れ咲く、池にそうて、噴水の方へ行くと、三橋亭に白髯の威厳のある老人と、上品な五十恰好の婦人が、若い紳士と連れ立つてこちらを見てゐる、後の方に杉田さんもお見えに成る樣だ、兄樣が傍へ被入て、御挨拶を被成る、はて不思議と思ひ乍ら母樣の方を見ると、鳥渡目くばせを被成つた、はつと思

ふと顔が熱つて胸が波立つ、兄様が妹でとお引合せに成る、叮嚀にお低頭をする母様が御挨拶被成る内にそつと見た。

我家では兄様のお友達が被入ても、私など出た事は無いから、竹村さんも　寫眞で拜見した計りお目に懸るのは今日はじめて、金縁眼鏡に旅行のセピロ、同じ高商出でもうちの兄様の無骨なのとは大違ひ、氣のきいた風で被在る、お鼻の高い、緊と結んだ口元は思慮が深さうに思はれる。六つの目で見られるのだと思ふと隨分のん氣な私も身がつまる樣で恥かしくてたまら無い、池の鵝鳥や家鴨の噴水に目をうつして早く歸り度と心で祈る。

暫くして皆様は一緒に連れ立つて正門でお別れする兄様も今日は大層眞面目で被在つた。

一家の取締りをするには、あんな若い嫁では不可ぬと仰る事請合ひと思つて大安心、重荷を下ろした氣で居ると夕方杉田さんが被入つた。

「本人は勿論御兩親も御同意で、わけてお母さんは男の子計りで女の子が欲しいと思つて居たのに麽那可愛らしい嫁が是非欲しい、文雄も大層望んでゐるから、何卒先様へお話を願ひ同じくは滯在中に婚禮式を擧げたいと杉田さんをもつてのお話し。

土藏へ衣服を仕舞に行かふと思つてお座敷のところでふとこんな事を聞いた。

程なくお客様はお歸りに成つた、母様何とお返事を爲さつたらう。

ランプの傍で女學世界を擴げて見たが、心愛にあらざればだから、何にか書て有るが一向分らない「奥様がお召で御座い升」と婢が來た。

さあ大變胸がドキ〳〵して呼吸がつまる樣だ。と思ふと先刻のセピロの紳士が目に浮んで來る、高等商業の出身、兄様の親友、次男、新築の家に夫婦暮し、系圖正しい舊家、兩親はある、己惚では無いが、先方から話が進んで來たので有る、あゝ什麽しよう今は私の返事一つで有る。

こゝが運命の岐路、とつくり考へ樣と思つても胸の

動悸がいよ〳〵高ぶる計りちつとも考へがまとまらない、わけも無く部屋をあちこち歩いて見る、姿見の前へ立つて前髪を梳いて見たり、机の前へ坐つて雑誌をパラ〳〵開けて見たり、自分乍ら何をしてるだらう。

(四) 家庭訓

よべの雨に名殘りなく、空は瑠璃色に晴れたが、めつきり寒く成つた。

縁側に玉の鈴の音がする私も新聞を持つて日向ぼつこのお仲間入りをする垣根の白萩露を帶びいひしらぬ風情が一輪挿しにと鋏を入



れたら袖にはら〳〵と散りかゝる、もう活けられない盆栽の棚へ目をうつすと黄薔薇が一輪枝ぶりがおもしろいから、枯葉を二つ三つ拂つて床に置く。

私はいよ〳〵商人の家内として活動する事に定まつた。

今日は三越が昨日下見したものを、持つて來るので永田町の伯母樣に見立て頂かふと思つて、お出を願つた。

まあ お座敷へと御案内申せば、「こちらで結構ですよ。」と、母様のお居間へ被入る、母様は此度の買物の

帳面を繰つて印を付て被在つた、「まあよく早く出られましたねえ。」と、お眼鏡を取つて火鉢の向ふへ座蒲團をお拵えになる。

伯母樣は母樣の末のお妹、伯父樣は○○會社の外交の方へお勤めで却々交際も廣く、伯母樣は親類中での才女・當世風な快活な方、澤山なお髪を油氣なしの束髮にして、お召の替り縞に、素鼠のコントラスト織の帶を少し下目に締めて被在る。

お話は私の縁談の事計り、傍に居るのも何だかきまりが惡いから逃げ樣とすると、母樣が「ちと伯母樣とお嫁に行く心得でも聞かしてお頂きなさい。」と仰る、伯母樣は「なあに須磨ちやんなど平生母樣のお躾は善し、學校で家政學や經濟學の講義は聞て居るし、卒業してから家で、實地のお稽古もして居るから、何も云ふ事は無いけれど、夫ではお嫁に行てからの心得でも話しませうか。」とお笑ひに成る。

晴れやかな秋の日がガラス越しに映して、花瓶の菊の香がほのかに薫る、内は銀瓶の松風の聲、外は小鳥の囀ものどかにて、

第一良人の職業に趣味を持たなければいけませんねえ、商人に嫁つたらば、自分も其氣に成つて、どこ迄も内助の功を立る樣に、是迄のお孃樣風などさつぱりやめて、まあ鹽原多助の妻のお花、あれも餘り極端だけれど、振袖を切つて河岸へ着た薪を運ぶ、あの位の氣概が無ければ不可ない。さうかと云つて、いくら世話女房だとて、世帯話の持ち切りでは、糠味噌臭いと嫌はれますわ、主人が外から歸る頃には、髮でも梳で付て着物も着直し、座敷の掃除もして花の一つも活け子供が有れば早い目に乳を飲ませて機嫌よく遊ばせ、綺麗さつぱりとしてお待ち申す、お勤め向きのお話でも、商用のお話でも、差支ない程にお相手をし、お好きな酒肴を手拵て、靜に夕飯を上る樣にすれば、あゝ家庭は樂園なるかなと、お思ひ成れ外へ寄らうと思つても、あゝして待て居るものをと、つい家の方へ足が向く樣に成り升。

夫が反對に、一日の勤から歸ると、子供はわい〳〵

泣く、家内はガミ〳〵叱る、其人の様子と云へば、髪を振りかぶつて、子持とは云へ胸をはたけ、前下りに着物をぞろ〳〵引ずつて、出て來る、家の中は足の踏み場も無い位取散らして有る、之ではいくら我家でも興がさめませう。

または交際で醫者を呼ぶとか、おもしろからぬ處へお出の事も有うが、家を外におぼれて仕舞と云ふのは矢張り家内の梶の取り方が悪いのですよ。

お歸りが十二時過にでも成らうものなら、腹が立つて立つてたまら無いと云ふ様に口もきかず、恐ろしい鬼女の面相でくつてかゝられると、旦那様も「えゝおもしろく無い。」とつい又足がそれると申すもの、それはお歸りが遅いと腹も立ませうがそこを女らしう素振にも出さずお風呂にでも還入て、平生より一層美しう御馳走も澤山こしらへて莞爾にお迎へ申せば、慇懃にして待てくれたか、氣の毒な早く歸れば善かつたとよし口に出さないまでも心では乾度後悔成さるに違ひ有ません。

だが紙治のおさんの様なの、あれが貞女だつて仰る方も有升が、あの時代は知らず明治の今日では餘り馬鹿馬鹿しい様に思はれますわ。子供の着物や自分のもの迄賣拂ひ、其金子で醫者を請出させ「そしてお前はどうする。」と問かれて「子供の乳母が飯焚だと思つて置てくれ。」等とは、いかに夫の爲だとて餘りの様に思はれ升わ、然し良人が夫迄に身を持ち崩すと云ふのは多少妻にも責任が有りませうか。

何しろ男の方は外で眞面目なだけ、家へ歸れば寛がふといふ心持ちで被在るから、左様四角四面な三つ指でなく家庭は安息所なり樂園なりと、思はせ申のが肝要ですよ。

夫々夫婦と成つたら同化し、同化されなくては、とても圓滿な家庭は得られません、中の善い方で似た者夫婦と云ふのも趣味一致を左様申すのでせうねえ。

だが女は何より柔順で愛嬌が無くてはいけませんよいくら學問も有り容姿が善くとも、ツン〳〵と無愛嬌なのは、禁物、いつも莞爾々々と樂しさうな顔付と、

春の様な、あたゝかい心持こそ家庭の慰藉者たる細君の美點だと思ひ升わ。

「須磨ちやんなどは愛嬌者だから、こんな人をお嫁に貰つた方は幸ねえ。」と、伯母様はお世辭を仰ると、母様が「どうして〳〵欲しい物が調はないと、プン〳〵恐るのだからねえ。」とお笑ひに成る。

　駒が敷居越しに手をつかへ「三越が參りました。」と申すのでお話も夫でお仕舞に成つた。

(五) 結婚後

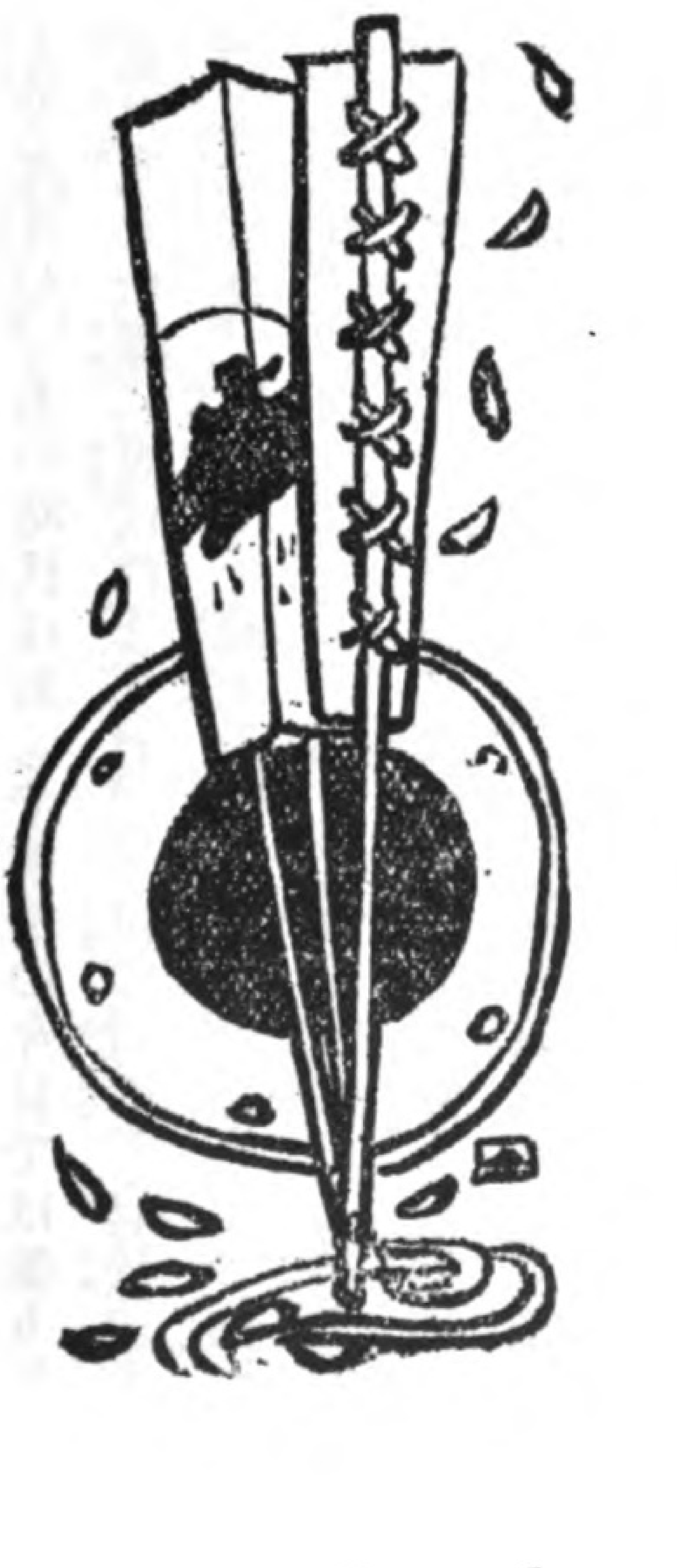
「須磨子さんは眞實に幸福で被在る。」と仰る方が有ると兄様は「僕の目は高からう、實に先見の明有りだ。」と御自慢被成る。

伯父様は伊會子の處世法が功を奏したのだとお笑ひになる。

姉様は須磨ちやん位運の善人は少ないと仰る「何故でせう。」と訊つたら、先頃話の有た梅本さん、此頃聞けば、奉天の會戰で戰死被成たつて、無論金鵄だけれども少しで未亡人に成る處だつたわ、人の運といふものは分らないものねえと仰つた。

母様はどうも縁談計りは、いくら詮鑿しても氣をもんでも双六の賽子の目の様なもので振つて見なければ何が出るか知れないと仰る。

眞實に私は幸だ、店の方は日に月に發展するし、今は花子と一郎の二人の子持ちで、人に羨まれる圓滿な家庭を作つてゐるがどうやら阿母様の家庭敎訓が成功を助けた様にも思はれる。



豐殼女の結婚

榮子

「眞實に可愛らしい兒だつたよ。」
と、先日も伯母さんのお話で有りました。
　さうでせう、自分も朧氣ながら垂髪の頃に。
「美しい子ですね。」
と、妾が後に居るとも知らず、小學校の運動場で、女教師たちが話し合つて居たのを聞いて歓んだことが有るのを記憶して居るほどですから美しかつたには美しかつたのでせう。
　小學校の先生がたは公平な人達ばかりで、どの子を可愛がつて、誰を厭ふと云ふことはなかつたでせうけれど、美しい子は幸福です、妾は學校中の先生に可愛がられて、一年生の時からずつと級長を云ひ附けられ毎學年優等の證書が貰ふことが出來ました。
　それで、いよ〳〵此の三月に小學校を卒業すると云ふ年の一月でした、教室へ入ると、受持の先生が卒業生の將來をお尋ねになつたことが有ります、何分不意でしたから隨分お答に窮した方が多かつたやうで、實は妾も其の時は海のものとも山のものとも極つて居なかつたから、何う答へたもので有らうと思案中、お隣の方が、
「何うするか解りません。」
と、答へると、
「まだ定めて居ないぢや困るで無いか、よく宅で相談して置きなさい。」
と、先生はたしなめて置いて、
「吉川さん。」
と、妾の名を呼びました。
　妾も「まだ解りません。」と正直に云つた方が善かつたのですが、何うも此の際さうと告白するのは情ないやうに思はれたので、つい口が辷つて、
「師範學校に入りたいと思ひます。」
と答へて仕舞ひました。
「それぢや、最うボツ〳〵試驗に應ずる準備を仕なく

ちや否けませんよ。」

と、先生に氣付けられて、妾は今更はつと思つたのです、と申しますのは宅でもまんざら話のないことは無いのですが、おつ母さんは絶對に反對で、

「女にも學問は必要に違ひ無いが、宅の身分では小學校さへ卒業したら澤山です、師範などへ行つて勉强するより裁縫を習ひに行きなさい、女の月給取なんて嫌ひ〳〵。」

と、何時も被仰つてゐました。

この二三日前もまた此の話が出ると、お父さんは何う思ひなさつたのか、盛に學問の必要を說かれたので妾も心强く思つて、將來の女子には獨立し得る素養が大切であると云ふことを先生から聞いたまゝ話しますと、

「御飯の種に仕たい爲にする樣な學問なら尙更何にも成りません、いづれ女は嫁に行かねばならぬから、身分相應に其の準備をする方が大切です、獨立の素養と云つても學問に限つた譯でも有るまい、現に彼の裁縫の御師匠さんを御覽なさい、立派に獨立して遣つてるでせう、女は裁縫さへ充分出來るやうに仕て置いたらどちらへ倒れてもはづれつこなしです、學校の先生になるより裁縫を達者に仕て置く方がいくら女らしくつて宜いか解らないのに、貴夫まで其麼ことを云つて呉れては困ります。」

と、おつ母さんがむきになつたので、お父さんはアハアハ……………と御笑ひに成つて、話をおそらしなさいました。

こんな風ですから、父上も心から師範學校に行くことは賛成して居て呉れ無いことが明かで、たゞ妾の考にとゞまつて居たことです。が、學校の先生がたは、

「師範學校に行きなさい。」

と、時々勸めて呉れて居ましたので、妾は只先生のやうに成りたいと許り、是非に師範へ遣つて貰ひたいと思つて居たので、今も先生にうかと左うは答へたものの、さて急に心配で耐らなくなりまして、それから後

の時間は何を習つたやら、宅へ歸つて何う云つたものであらうと、それ許りに頭を奪はれて居ました。すると、退校時間が來ると先生がお話があるからつて、將來學校へ入らうと思つて居るものを殘して、それぞれ準備の方法をお話なさいました。

外の方々が最う希望の學校へ入れたやうに、嬉しさうにお話を聞いて居るのを見ると、最う辛抱することが出來ないやうに成つて、お話半ばに逃げるやうに歸つて來ました。



其の夜、妾は大層熱が出て、とう〳〵翌日も頭が上がらず、五六日と云ふものは熱に浮かされて、さつぱり何が何やら解らずに過しましたが、妾が氣が附いた時は家内中のものが枕もとで心配さうに坐つて居ましたので、不思議に思ひました。

それでもいよ〳〵床をはなれるやうに成つたのは、それから一週間ほど後のことですが、その間におつ母さんの考が何う違つたものですか。

「早く丈夫になつて、師範學校へ行く準備をするのだよ。」

と云はれるので、ます〳〵不思議に思つて居ましたが、後で聞くと妾が熱に浮かされて、その事ばかり云つて居たので、伯母さん（おつ母さんの姉）がおつ母さんを説いて下さつたのださうでした。

其の後、妾は一生懸命になつて勉強しましたので、幸ひ希望どほり師範學校へ入ることが出來ました。

その時の嬉しさと云つたら、たとへやうも無かつたですが、今では、

「なぜ、師範などへ入つたのだらう、おつ母さんの云ふとほりに仕て居たら、最う子供の二三人も出來て、幸福に世をおくつて居るだらうに。」

と、後悔しても仕方が有りませんが、師範でも妾の成績は善い方でした。只在學中にぼつてりと肥えて來たので、小學時代の可愛らしいと云はれた面影は何時か臺なしに成つて、面の色なども黑くなりましたけれど自分には左程氣になりませんでした。

日曜日などに宅に歸ると、

「丈夫さうに成つたね。」

と、お父さんが云へば、

「女は身化粧も大切ですよ。」

と、おつ母さんはまた女だけにそれとなく氣をつけて呉れるほどでした。

が、學校へ歸ると、どちらかと申しますと、不容姿な方が多くて、殊に書生肌の方が少なくなかつたので、つい〳〵自分も女のたしなみを忽にすると云ふ譯では無いが、學生時代は斯う無くては成らないもの丶樣に、容姿には頓と氣をつけませんでした。

自分に云ふのは異なものですが、それでも師範學校を卒業した時は、まだ〳〵年も若う御座いましたから、外の方よりは幾分か美しかつたのでせう、舍監が特に卒業後の心得をお話し下さつた節にも、

「美しい方は失敗し易いから。」

と、前の卒業生の話になぞらへて、將來の注意を與へて下さつたものでした。

しかし、小學時代のお友達で、裁縫を習ひに行つて居られた方々などは、自然に大人らしく、お化粧などもお上手に成つて居られるものだから、まだ學生らしい風を見て、兎や角とお噂なさつて居なさると云ふことも聞き込みましたが、教育の足らないものは仕方が無い位に思つて居たものです。

つい隣町の小學校に通勤することに成りましたが、子供が俄に大人になつたやうで、何だか勝手が解らないのに閉口しまして、隨分大弱でしたが、一月二月するうちに何うやら様子が呑み込めましたので、勤の方は始のやうに苦にならないことに成つたから、高等師範へ入學を志願しようと思つて相談しますと、これには兩親や兄ばかりで無く、伯母さんも反對で、

「女は嫁に行く時機を失しては成らない。」

と云ふのが、理由の主なるものでした。

妾は一時それを不滿に思つたもの丶、考へて見れば何時までも獨身で居る譯にも行かないから、遂に高師へ行くことは思ひ切つて、近所に和歌の先生が居なさつたので、そこへ通ふことに仕ました。

妾の學校には女の同僚が七人あつて、その中のお一人は最う四十歳位でせう、女學校の出身ださうで、なかなかしつかり仕た方で、女の首席ですが、この方の夫は矢張小學校の先生と聞いて、妾は異様に思ひました。

○子さんが、

「妾などは小學校の先生を夫にする位なら、いつそ獨身で居ますわ。」

と被仰つたときに、なぜにまた小川さんは彼麽夫に嫁いたので有らうと思つて見たのですが、そのなぞは解けませんでした。

小川さんの外は皆さん獨身の方ばかりで、だん／＼お心安う成るにつれて、妾も遊びに行けば、皆さんも宅へお出で下さるやうになりまして、いろ／＼打ち明け話も承はることが出來るやうになりました。

ある日、常子さんが見えて、

「昨日ね、小川さんが嫁に行かないかと云ふちや有り

ませんか、それでね先方はと聞いたら、區役所の雇吏だが見込のある方だと云ふのです、いくら見込があるからつて、雇吏ぢや高が知れてますわね、餘り失敬と思つたから厭味を云つて置いたけれど、腹が立つて仕方がないのよ。」

とのお話、何誰も同じ考だなと思ひましたが、常子さんの希望は實業家だと聞いては何うで有らうかと危ぶまれますので、それとなく實業家の家庭は餘程趣を異にして居るらしいから何うかなどゝ申しますと。

「ナニ大丈夫ですわ。」

と、深く自信なさつて居なさるに感服して、なほ承はりますと、あの不愛想な人づき合ひの惡い勝子さんまで、實業家を望んで居ると聞いては、常子さんの希望も無理でないと思ひました。

人様のことを云ふもの〻、當時妾もなか〱高から止つて居たもので、何でも相當の地位を占めて居る人に嫁きたい、左うでないと、折角學問仕た甲斐がないと思つて居ましたから、卒業の冬のことでしたら、昨年師範學校を卒業したと云ふ方から縁談を申し込まれたのを、お父さんがお斷り下さつたと云ふことを聞いて、非常に滿足に思つたです。

が、翌年の春、伯母さんの心安う仕て居る家に嫁を探がして居ると云ふことで、その家は田地もあれば善い山林をたくさん持つて居て、息子さんは極く氣質の柔しい人だから、嫁に遣らうで無いかと、伯母さんがおつ母さんに話されたさうで、お父さんも彼の家に貰うて下さるなら、誠に結構だと云つて居るから何うかとおつ母さんがひそかにお尋ねになりましたけれど、息子さんとやらは何んな方やら、殊に教育も餘り受けて居ないらしいので、兩親とも進んで居なさる樣子が却つていぶかしう思はる〻程で、翌日は例のとほり學校に出て居ますと、門前の街道で牛の暴れて居るとやら運動場で子供が騷いで居ますので、何心なう柵の外を見ますと、一人の色の黑い若者がやう〱牛を取り鎭めて牽き歸るところでしたが、

「あれは藤森と云ふ大家の息子です。」

と、同僚から話されて、では彼の方が伯母さんからお話が有つたと云ふ人かと思ふと、妾は思はず面を赤めました、いくら身代が有るからつてまあ彼麼人の所へ誰が行くものか、伯母さんも餘りだと思つて、宅へ歸ると、すぐ斷つて下さいと云ひ出しましたが、なかなか兩親はじめ伯母さんが拗く勸めるので、弱つたことが有ります。

それから後も帶に短し襷に長しとやら、度々方々から話があつても思ふ様に皆の考が一致しないものですから、かれこれするうちに妾も二十四と云ふ年になりました。



おつ母さんはしきりに年を苦にして、いら〳〵思つて居なさる様子ですけれども妾はまだ一年や二年遲れても理想の夫に嫁ぎたい、今更つまらぬ所へ嫁いでは面目ないと思つて、わざと無頓着を粧つて居るものゝ内心でははら〳〵思ふ様になつて、學校へ出ても何だか面白く有りませんのに、その歸り道で向ふから來る若夫婦が、立派な衣裳をつけて、子守に子を負はせて來るのを見ると女の方は確に時子さんと云つて小學校を一緒に卒業し

た方で、藤森へ嫁いだと聞いたまゝ、氣にもとめずに居たが、睦まじさうに何を話してか笑つて居る樣に、何か見せつけられたやうに情なく、宅へ歸つて室に入ると、人知れず涙を滯したことが有ります。

それから何う云ふものか、反抗心ばかり高ぶつて、家に居るのも面白く有りませんから、誓約年限を終つたのを幸ひに、京都から此の地に轉勤した時も、生涯獨身で居やうと決心して來たのでした。

しかし、女の獨身生活ほど憐れなものが有りませうか、脇目には氣樂さうに見えませうが、今茲は最う三十歳の妾さへ、夜分に買物にでも出ようものなら、すぐ彼れ是れと噂さるゝ種となるから、一擧一動氣兼ばかり、まあ自分と籠の中へ入つて居るも同じことで、うつかり遊びなどに出られたもので有りません。

かてゝ加へて行末のことを考へると、全く暗黒ですから其の心淋しさと云つたら有りません、夜深けてふと目覺むるときなど、何時も涙です。

世には姑がむつかしいとか、夫が同情に乏しいとかいろ／＼小言を云つて居る方もあるけれど、何の慰めも無い獨身者にくらべたら、いくら幸福な方か解りません、と申したところでお嫁に行つて居らるゝ方などには兎ても解らないかも知りませんけれど、多くの讀者の中にはきつとうなづかるゝ方が有らうと思ます。

先輩の中には獨身生活を主張さるゝ方もあるやうに承つて居ますけれど、それは其の主張者のやうな心強い方の實行さるゝことで、わが行末を案ずるやうな心弱い女の耐へられるものでは有りません。

誰れでも左うでせうが、二十四五になるまでは、案外呑氣にかまへて居らるゝものですが、六七となると俄に人知れぬ辛さを感じて來まして、今までの空想を捨てますけれど、最う斯う年が行きますと思ふやうに尚更行きませんから、あせればあせるほど人の笑草となるに過ぎません。

だから生意氣なことを申すやうですが、女は婚期を失はぬやう、身分自覺することが大切だと思ひます。

妾などはいくらか容姿を賴みにして居たのが、大き

な過ちでした。

妾はそれでも幸ひと或人の仲だちで、近日嫁（と云ふのも可笑しい婆になつて居ますけれど）に行くことに極つたので、行末の暗黒が取り拂はれたやうで、つい此の記をものする様な氣にもなりましたものゝ、何だかそは〳〵と人にくすぐられるやうで、充分に落つかれないものですから、さぞお讀み苦しかつたで有らうと思ひますけれど、少しでも御參考になることが有つたら、此の上の歡びは有りません。

どんな所へ行くかつて？　それはまだ秘密です、この年になつても花嫁さんには違ひないのですもの、笑つちや厭ですよ。

○結婚

結婚といふものは恰も鰻筌（鰻を捕るに用ふる竹筒）のやうなものだ、初めは入れやうとして骨を折り、入つたら直ぐ出す事の心配だ。

○嬉しる

唖の人と聾の人とが思ひ合つて、やつと夫婦になつた、是がほんとにいふ可らざる嬉しさである。

○酸素

酸素は動物の生活に無くてはならぬ物であつたが久しく發見されなかつたと、教師がいへば、生徒は不審して、「先生、見付らなかつた間は如何して生きて居たんです。





當世見合の聞書

月下氷人

某理學士の夫人

エ、私共の見合の經驗談をしろつて……天機漏す可からずですね、私はずゐ分恥かしいと云ふ事を知らね、お轉婆さんでしたが、もう〳〵見合なんて事だけはどうしてもいやでしたよ、冒險的かもしれませんけれ共、兩親なり親族で十二分に取調べて下さつて、其人の寫眞でも見ればもう澤山、

それで直覺的に此人へなら嫁つてもいゝと思へばそれを信じるのが、神秘ぢやありませんかね、でも私しずゐ分出雲の神樣に御苦勞をかけましたのですよ、やつと定まつて見ればもう、貧乏くじを引當たのですから、進退茲に谷まつて居るんですよ、いゝえほんとうですよ、

私がさうでしたね、學校を終へた年でした。茶の湯の稽古をして居る時分に、一つありましたの、申込みかね、先方は大きな小間物屋の一人息子でせう、

いやですのよ、あなた、私もう商人なんて大嫌ひ、加ふるにです、小間物屋の若旦那なんて、日陰の草の樣に蒼白い、ひよろりんさんですもの。

でも親の命故仕方なしに、ぢや私は私で茶の湯をするんだ、見たけりや勝手に御覽なさいといふ氣で、居ましたから、妙にすまして肩をいからして、つん〳〵としてやりましたのよ、どうぞ御目障りになる樣にと思つてね、まあ人の惡い事……

其人が絹の着物でぴか〳〵するものを下げて、居るんですもの、まるで俳優の出上損ね、世間にはあんな者でも好きで嫁に行く人があるのでせうか、と思つ

て見ると、餘計に町人風情がと妙なところで、武士は喰はねど高楊子氣質を出したりなどして居ましたが、幸ひにして計略圖に當りどうも活潑で御出になるけれ共、商人として手前共へ御迎ひ申ても御氣の毒だからと、體のよい事を申した。まあ善い按排でした、第二號はね、當方の御失敗ですよ、

つまりこれは何にも知らずに居て、私のおてんば性を看破されたのですもの、堪りませんわ、丁度春の初めでした、お友達の家で、ある夜かるた遊びをするからと、案内がありましたので、今迄餘り行つた事はなし、夜分に出た事もありませんでしたが、親族の様な間柄でしたから、兩親の許しを得て供を連れて參りましたの



其時にね夕方から左の奥歯が少々痛んで居ましたけれ共、出かけたところが、段々と頬がふくれてまゐりましてね、下ぶくれならいゝけれ共片頬ぶくれぢや仕様が無いわ、と大笑ひ大元氣で、七八人のお友達ばか

し大亂れに亂れて、源平の戰ひを致しましたの、

私しまける事は大嫌ひなのでせう。

それに丸山さんて方が、どん／＼おやりになるのが癪に障つて、さんざ邪魔をして上ましたの、一番多くさわいだでせう、

讀手は其家の御母樣で、どちらか御存じの家の品のいゝ老人の方が「若い御方は御盛ですわね」と一心に見て御出になる、

私の方は白で源氏だのに、どうも形勢不振だから、皆さんしつかり遊ばせよ、源氏が敗るといふ事は歷史にもありませんよ、平家を全く滅亡して西海の壇の浦迄、追ひ出さなくちやなど〻、一流の長廣舌を振つて、大變に愉快に遊びました後、十時前に迎ひが參りましたので歸りましたが、友達が後でそつと話しましたが、今來て居られたのは相田さんと云つて其御子息は外交官試補として、今は支那の某地の領事館に御出になり、前途有望の外交官で、お嫁さんを探して御出になるので、

罪だけれどもかるた會をして、皆樣をお招き申たけれども、候補者としては私が推されて居たのに、頰を張らした上にさんざ負けた殘念さに大雄辯を振つて、味方の軍の士氣をはげました其勇氣に、あの老人樣は驚いたのでせう、今其人のところへでも行つて居れば、今頃はニユーヨークに居るんですけれど、十日の菊で仕方がない、つまり緣が無かつたのでせう、

けれ共私し其時に申ましたですよ、

自分の子の嫁を母親が探す樣な姑さんなら行かなくつても殘念ぢや無いわ、ともう無邪氣な無責任な事ばつかり申て暮して居りました。其後しばらくそんなお話しはなかつたのですが、其年の十一月頃です、海軍の少佐といふ人から望まれましたの、

其時ですか見合なんて無しで、勿論寫眞は見ましたが年が四十いくつ、

田中宮相と小林孝子さんと程、澤山なちがひでないけれ共、一寸二十以上もですもの私の父とそんなに違はぬのみか、母よりも年上の人でせう、

これは両親も二の足であつたので、これもお流れになりました、

其時分理科に居ました母方の従兄の或人にどうだと、これは親類中で話しが初まつたのですよ兄なんかゞ冷かして、どうだこれなら見合の必要も無いだらう、なんと申ますので、私し血族結婚なんてしませんよ、と勢のよい事を申て居ます内に、いくらか真面目に人生の問題も考へて見る様になりまして、当年の英雄たる私もこゝにかぶとを脱いでつまりお神さんになりましたの、



愚亭は即ち其人ですよ、

あのね主人が私の事を愚妻々々と人に申ますから、何かそれに対する好文句をと考へた末でね愚亭々々と申上る様となつたのです、

それでもなか〳〵やさしいのですから、女天下などぢやありませんよ、御無理、御道理でかしこまつて居ますけれ共、此通りのおしやべりですからね、留守となるといろんな事を申て一人で大さわぎして居ますのよ、

残り物に福ありと申ますけれどもね、私の経験によるとやつぱり親や長者のいふ通りに

十中の八九分迄は、温和な性質を持つて居る方の方が御仕合せな樣ですよ、

なまじつか生意氣な事を申立てゝ、一時は大變に、勢力當る可からずの私見た樣な者でも、其結果が此通りでせう、まだ／＼ずゐ分ひどい方がありますよ、それはまあ一寸品行が惡るかつた爲でしたけれ共ね、

私しでも今別に不足がましく感じては居りませんよ口が惡いだけで、夫唱婦和の模範的家庭だと自任して居ますよ、ホヽ…………

次は某將校の夫人

「もう學校も終へたのだから一度は島田に結んで御覽」と母にいはれた後、頭の變な氣持なのを耐えて島田に上た日の午後でした。

珍らしくも四谷の伯母が參りまして「おや／＼美しく出來た事、それでは坊主枕は駄目だね」と冷やかされました、

といふのはね、伯母の家へ泊りに行つた時に、普通の高枕が出たのを、夜中に端へかねて座ぶとんを三枚ばかりくるんで、枕にしたのを見付られた、つまり私の失敗談ですの、

何か御馳走をと思つて、島田に結つたその人が竹棹を肩げて裏の無花果をとりて行きますと、歸つて來ますと、伯母はもう歸つてしまつたので、殘念に思ひましたが母が

「今日夕方から、本郷座へ行く事になつたから」と申されました、何だか知れぬが、日頃滅多に無い事とおもひ私餘り芝居なんて見た事がありませんので、面白くてうれしくてよろこんで居ますと、母が「島田も折角だけど、やつぱり束髮の方が見馴れたせいかいゝやうだね」と申ましたので、私はすかさず、

「ちやこわしましてもようござんすか？」とすぐ以前の廂にしてしまつたのですよ、

其内風呂に入りまして、前髮のくせをとかして居ると。

「少し白いものをはいて御出、どうしてお白粉がいや

なのだらう、いくら何でも見つとも無いから」と、申ますので御園撫子で一寸まねばかり、顔を叩いて居ますと
「頸にもお塗りなさい」
と、今日はずゐ分世話をお焼きになるけれども、芝居に行くのがうれしさに、だまつて御意の儘にして居ると、濡れ手拭で直して下さつて、
「衣服は出してあるよ」と仰しやる。
私の大好きなお召のがちやんと揃へてある、「もう少し衿を抜かないと、まるで猪の様だ」とか何とか、後ろから引張つたり、脊中の皺をのばしたりして下さる、私は別に何の氣も付かずに居ました、
母樣は今日は久し振りで、御うれしいのだらう、それにしても、伯母樣はどう遊ばしたのと、云ひますと、一寸用があつてお歸りだつたが、あちで御目にかゝるだらう、と仰しやる
「ではあの折角の無花果を、どうしませうか」
と問ふたら、
「ほんとにまあこの人は、まるで子供だね、」と笑つて御出になる、でも四谷



の伯母樣の無花果のお好きなのは三歲の童子でも知つて居る位なのですものね、母樣は何だか、いそがしげに、

「半巾を忘れぬ樣に、白バラよりも紅葉か何かの方が髮にうつりがよいから」と、もう出かけて居るのに、今日に限つて餘計な事ばつかり、

「變な方だわ」と口の內でつぶやいて、其儘母樣のお後から家を出ましたのですよ。

もう私が末つ子で、父親は亡し兄達は大阪の方に居ますし、東京には母と私と女中切りで、暮して居た頃でしたからね、

電車を下りて、本鄉座に入つた時には、夜の部の二場の幕があいたところでした、

伯母樣はもう先きから御待兼ねで、場所もちやんとしてらつしつたので、私が一番前に出て横向になつて見て居ますと、

「君さんは、さう横に向かずともつと、さう〲左りの方を、さうだと後ろの方もよく見える」と、仰しやる、私し後ろへ行きませうか、と申たら、

「何よろしいよ」と、其儘見て居りました、なか〲面白い、何だかよく分りませんけれども、何でも女天下とか何とかで、ずゐ分こつけいなので見物人はもうもう笑つてばつかし見て居るやうな有樣、あんな事が實際あるのかしら、と思はれる程、肴屋のお神さん紳士の若夫人、古武士の樣な御老人の皺の寄つた方迄が皆んな大威張で女權擴張をやる、御主人達はもう頭が上らない、ほんとにお腹の皮がよじれさう、

其内にも、伯母は何か知つた方でも御出になるのが見付かつたか、しきりと頸をのばして向ふばつかり見て御出になる、

私は三人分のお茶を入れて、一番好きな栗饅頭をいたゞいて居ますと、となりの家へ人が來ました、多分親子らしい、

五十位の束髮の品のいゝ方と、三十位の色の黑い眼ばつかりぎら〲光る大きな男の方とで、丁度自分は口一杯に栗饅頭を入れて居たので、餘りきまりが惡く

て一寸横を向きました、其時に伯母樣と其女の方とがお辭儀をして、どうも先刻は、お電話を難有う存じました、と小さい聲でいつて御出になる、

おや〳〵御存じの方かしらと思つて、私も一寸默禮だけ致しましたきりで、相變らず面白い芝居を見て居ましたが、一寸後ろを見ると、隣りの方が二人とも私の方ばつかし見て居られる樣な氣がして何だかいやな氣持がして妙に胸がをどつて來ました、

其後ですかもう此位で御察し下さい、

これがあの御見合だつたのですもの、



今の良人ですよ、其時澄まして居たのは色の黑いのは、軍人の本質だと申て笑ひますけれども、ほんに私いやな人だ、と其時思ひましたよ、見合の話しは場所をどこにしたらいゝだらう、なんて四五日前に相談があつたさうですけれ共、いつそ知らさ無いでといふので、特に芝居にしたので、私のね、右の方の耳の下に、一寸した傷がありますが、それを見えぬ樣にと、苦心して左り向きに坐らせたのだと、何も彼も種子明し、ほんとに私こそ何にも知らないで、人形に使はれ

たのですよ、私共の樣なものは、初めから承知ではとても見合の一幕は演じられませんが、此頃の方はみんな平氣でいろ〳〵と御話しなどをなさるさうですね、都合よく行けば目出度しですけれ共、萬一駄目となると、兩方ともいやなものでせうよ、西洋なんぞは初めつからのお友達でそんな事はありませんけれどもね、日本などのは眞面目に考へると、なかなか危險なものですわね、

どうにか、一般にもつと適切な方法が必ず〳〵必要になりますでせうよ、

それに寫眞だけでは、私共が考へても何だか、ものたりませんしね、やつぱり世が進み人の性が進歩して行くに連れて、もつと自由に、そして高潔な男女交際こんな事を申すと叱られますけれども、親と親、家長相互の監督に依る、交際の下に巧みに、意中の人を得る道が、開けるかもしれませんよ、然しこれはどうぞ誤解をなさらずに聞て下さいましね。

次は某文官の夫人

まあ面白い事を仰しやいます事、わたしやもう二人の子供の母なんですもの、其お婆さんの昔物語りなどを、よつほど御馳走して戴かなくちやなか〳〵申上られない樣ですよ、

私は高師の出身なので、長く名古屋の女學校に勤めて居たのでございまして、其時分の視學官、今の事務官の奧樣が、私と同窓の方だつたので、個人としてよく出入を致して居たのです、

皆樣もよく仰しやいますけれ共、國元では心配を致しまして、いつ迄も教師では困るから、早く嫁けて行かぬと、段々と年を重ねて、まゝ子のある家にでなくちや嫁く事が出來なくなる、女の盛りはもう過たぢや無いか何も月給取りの娘のあるのが自慢では居られぬ親に安心させようと思ふなら、一日も早く良家を求めて與れるようにと、もう手紙の度毎に申てまゐりますので、親しい間柄であるもんですから、其視學官の

奥様にも御話し申たりして、もし拾つて下さる方があつたらば、と存じて居ましたのです、別に理想だの、望み好みはありませんけれ共、やつはり軍人や、實業家よりも教育事業にたずさはる人をと存じて居ました、

或時に遊びに伺ひますと今福岡中學の教諭をして居る眞野と云ふのは、實に君子といふのであらう、やゝもすると才子肌となりたがる當世の教育界、稀れに見る德望家だ、ほんとに見上た人だと仰しやつて、よく色々な人の寫眞と共に見せて戴いた事もありましたが、或時、「あなた眞野と一つ結婚してはどうです、物質的の滿足はどうかもしれぬが、精神的の滿足は私が保證します」と切にすゝめて下さつたので國へ手紙の序に申てやりましたところ、親の方からも取調べを致して何分の返事をするが、兎に角結構な事であると、贊成してまゐりました。



わたくしは每年夏期休暇になると、式の翌日出立して、國に歸つたものですが、此度は其爲に留まりまして其奥樣の家に置て戴きました。

其時分寄宿舍に居たものですからね、今から思つて見ると年はつかり取つて居ても、妙に處女生活に暇を告げるのが名殘惜しくて、日が迫つて來るに

従つて、いつそ見合を取消したい様な氣も致して見たりしました、

又變に氣が浮立つて、制し切れないで、學校へ行つて一日ピヤノを叩いて遊んだ事もありましたよ、扨いよ〳〵會見の當日、日曜日の夕方がまゐりました、

お風呂に入つて仕度を致して居りますと、御主人が「いよう花嫁の候補者君、御役目御苦勞様、眞野はもう大丈夫だから、お嫁さんの方が今度の試驗官だどうぞ何分御手やはらかに願ひますよ」なんてもうもう人を槍玉に上げて御出になる、奥様は「あなた餘りな事を仰しやるものぢやありませんよ」と仰しやりながら、私の前髪をとかしたり「まあ少しはうすくおはきなさいよ」なんてもう四五年も手にした事の無いお白粉迄出して下さると、いつた所へ又主人が、

おはな向けは何にしようか、

「鹽煎餅一荷に、煎豆一俵、此位にとめ置きませう」

と、あれ程嚴格な方でも、奥様の前ではもう〳〵じようだんばかりいつて御出になる、と御門の戸が開いて、砂利を踏む靴の音がするぢやありませんか、

臺所から下女が、八百屋が梨を持つて參りましたと申上に來る「おやさうまあ、嫌な八百屋だこと、私し全く眞野さんだと、思ひましたよ」と互に大笑ひを致しました、

十分ばかりを立つて今度こそ當の御客樣が御出になつたのですよ、私は初めからお座敷に居た方がよいと仰しやいましたから、其方に居ました、

にぎやかな御主人に導かれて、御客人は入つて御出になる、私は只默禮を致しましたつきり、これは家内の友人だと紹介を致さる。

いや初てと落付た聲で、挨拶されるぢやありませんか、私もうだまつて頭を下げて居りました、下げた頭を上ると眼線のやり場が無いので、思はず向ふを見ると、視線がはたと一致する、奥様は御主人と顏を見合して、にこ〳〵して御出になる、穴あらば隱れて入り

たいとは、其時の私の心持でしたよ、

「おや〳〵月が上つた、少々縁端に出ませうぢやないか、眞野君一寸あれを見給へ」と、指さして御出になる、奥様は皆にお茶をお注ぎになつて、「何もありませんが、水菓子でも出しませう」つて臺所の方に御出になる。

暫くすると「さうだ、あの新刊の教育書を君に批評して貰らう」と、書齋の方に御出になる、たつた二人きり取殘されました、

後にはたつた二人きりですもの、其きまりの惡い事といつたら、御話しにもなりませんでした、「どうも若い時には、學校も大分苦しいですね」と先方から話が初まりました、そして落付て平氣で居られるので段々と私も釣り込まれて、いろ〳〵お談話を致しました、其内に御主人も御出になるし、奥様が御菓子を持つて御出になつて、しばらく四方山の物語りを致しました、

其方が私の前にある茶碗の冷めたお茶を庭に捨てゝ熱いのをくんで下さつたり、

「さお上りなさい、僕なんぞ此通り」と無邪氣に、むしやむしやとお菓子をいたゞいて居られる、

奥様は思ひ出した様に、

「あなた横田様も、御結婚遊ばしたさうですね」と仰しやる、御主人は「さうだ何でも教會でやつたさうだよ」

「汝は妻を愛するか汝は夫を愛するか、なんて手を握らせたりするんだつてなあ」と大笑ひ、「ぢや眞野さんが、奥様を御迎へになる時には、何といつて御返事をなさるでせう」と、今度は奥様が仰しやる、

「さうだねオーイエスとでもいふさ」

と御夫婦とも御人の惡い、さんざ私共をいやがらせて御出になる、意外に御話しがはずんで、だん〳〵遲くなりまして、十一時前に眞野さんは御歸りになりましたが、其後で、

「ね、そんなに嫌でたまらない程の人でも無いでせう」と、小さい聲で聞かれましたから、

「私どうでもよろしうございます」と、やつと他意の無い心を表しましたが・

先方でも無論不足なしで、只今では此通りです、私などはほんとに仕合せかもしれませんよ、お見合なんて後にも先にもたつた一度、

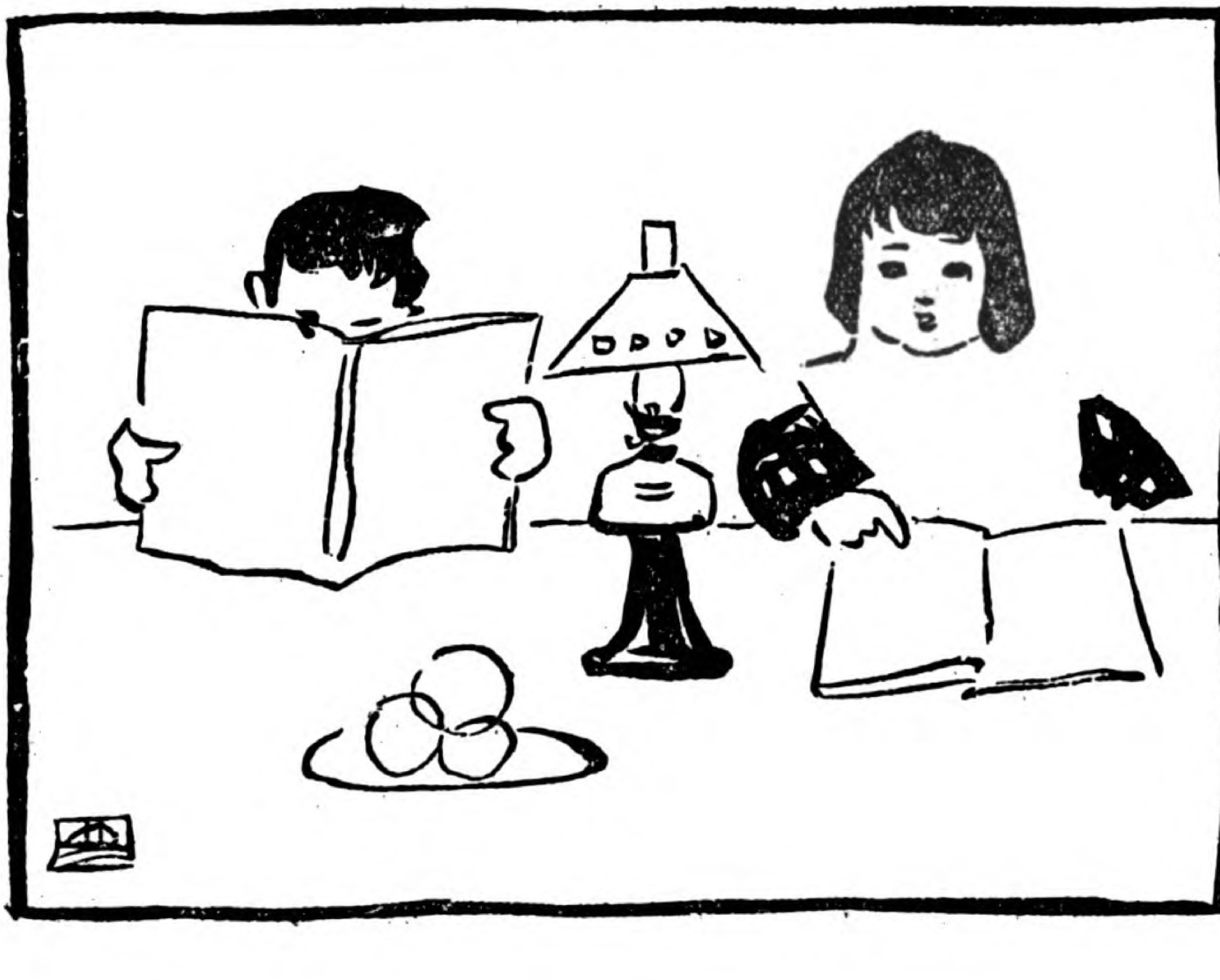
そして女學校、師範、と寄宿舍生活ばつかり致して、家庭の實務なんてほんとに疎漏でしたけれ共、新家庭はたつた二人きりでしたし、

夫が優しい方ですから・別に大きな聲もされずにどうかかうか、致して居りますのです、

やつぱり人樣がいろ〳〵と仰しやつて下さる時外に已むを得ぬ事情の無い限りは・女は結婚を致さねばなりますまい、

私共の友人中にも、ほんとに今になつて後悔して御出の方がずゐ分ありますよ、

さうですとも獨立なんていふのは、女學校卒業前後の考への淺い時に言ふ事でせう、三十近くになりますと、一種淋しい感じがするさうですものね、



古今結婚の變遷

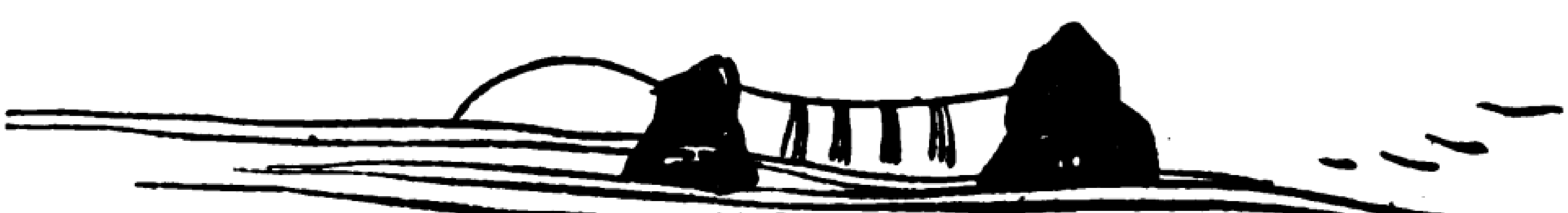
考古博士

△最も古い時代の結婚

婚姻制度の沿革を調べて見ますと、色々面白い事があります。ずつと昔野蠻種族が諸方に割據して部落を爲して居た時代には、一部落の土民が他の部落へ侵入して婦女を奪ひ取つて來るとか、或は一部落の中に婦人があるときは、男子が互に喧嘩をして勝つた者が其れを占領するといふ様にして居つたもので、歴史家は此時代を稱して掠奪婚の時代と言つて居ります。斯の時代には勿論所謂婚禮なるものもなく、夫とも付かず妻とも付かず、只だ自分達の欲するまゝに男女が相逢ふて居たに過ぎませんから、婦人には貞節を守るといふ念もなく、社會も亦之を求めはしませんでした。近頃迄結婚の儀式を行ふ際に、或は石を投げるとか、或は藁鞋を投げつけるとかして之を祝ふといふ慣習のあつたのは、即ち此の掠奪婚時代の遺風であつたのです。

△知らぬ間に人の妻になる

掠奪婚の風習が漸々衰へて來ると、今度は家事に使用する爲に婦女を買ひ取つて男子の所有物にするといふ風の思想が發達して



參りました。即ち結婚といふものを全く一般の財産を賣買するのと同じものに見たもので、其の賣買は娘の父と夫となる男との間に行はれて、娘は自分の知らぬ間に人の妻になつて居るといふやうな有様でした。歴史家は此時代を稱して賣買婚の時代と言つて居ります。此時代には甚だしい所では、婦女の定價を定めた法律さへありました。例へばイスランドの古法に於て、少なくとも一マルクの價を以て婦女を購求したのでなければ法律上正當の婚姻と認めないとして居たなどは其一つであります。

△娘を進呈する結婚

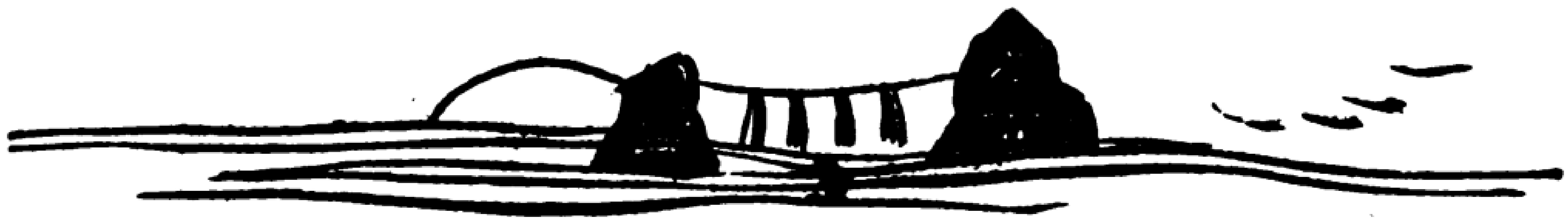
其後社會の風潮が漸々人權を重んずる様になり、婦人を賣買するとは以ての外だといふ考が起つて、婚姻は兩親或は祖父母等の尊屬親の者が婦女を其夫たる者に贈與する即ち進呈するものだと云ふ風になつて來ました。歴史家は此時代は稱して贈與婚の時代と言つて居ります。けれども之れは只婦人を賣買しない事にした迄の話で、贈與するといふのですから、矢張婦人を財産の様に心得て居たもので、賣買婚の時代と五十歩百歩の違ひに過ぎません。今日我國に於てもまだ此の贈與婚の時代の思想が全く失せない事は皆様も御承知で御座いませう。

△新らしき婚姻制度

然るに近世に及んで、婦人にも亦人としての權威を保たせなければならぬ、婚姻は必ず男女雙方の承諾で成立つものとしなければならぬといふ思想が發達して、婚姻制度の上に一大變革を來しました。歴史家は此時代を稱して共諾婚の時代と言つて居ります。歐米諸國の現今の婚姻制度は即ち此時代に在るのです我國に於ても、從來兩親の許婚と言つて本人に謀らずに取定める樣な事もありましたが、其後追々男女の共諾が必要とする樣になり、今日の民法では歐米諸國と同じく共諾といふ事が婚姻の成立に大切なものとなりました。

△歌垣の折の結婚申込

以上は各國に通じての婚姻制度の大體の變遷ですが、是れより我國のみに關する沿革を尙ほ委しく述べて見ませう。昔は我國では婚姻の事を「呼ばひ」又は「呼ばふ」と申しました。其頃の風俗として市に鄙に野に山に、春花秋月の折々に、或は神々の祭禮などに、若い男女が打集ふて互に歌を唱和しながら舞ひ遊んだもので、之を歌垣とも歌かゞひとも言ふて、其中にはやんごとなき高位貴人も立交つて居られました。此の歌かゞひの折に、男の方で之は自分の妻にもと思ふ女のあつた時には、先づ其女を呼びかけ、自分の姓名を告げて婚姻の申込をしたもので、それで呼ばひとも呼ばふとも言つたのです。斯く呼びかけられた女は、其男が



自分の夫として差支ないと思へば、先づ其父兄に告げて許しを受け、許可された時に自分の髮飾の押木珠鬘を男に贈つて婚約の證據と致しました。そして婚約が調ふと、第一に新郎新婦の住むべき家を造り、それから結婚の式を擧げたものです。素盞嗚尊が稻田姫を娶つて須賀宮を造り給ひ、此處に移り住んで夫妻隱に八重垣造るの御歌を詠ませられ、大國主命が出雲で八野若姫を娶らんとして先づ住むべき宮を造りしなど皆此例で、後世嫁を「御新造」と云ふのは之に基くと申します。

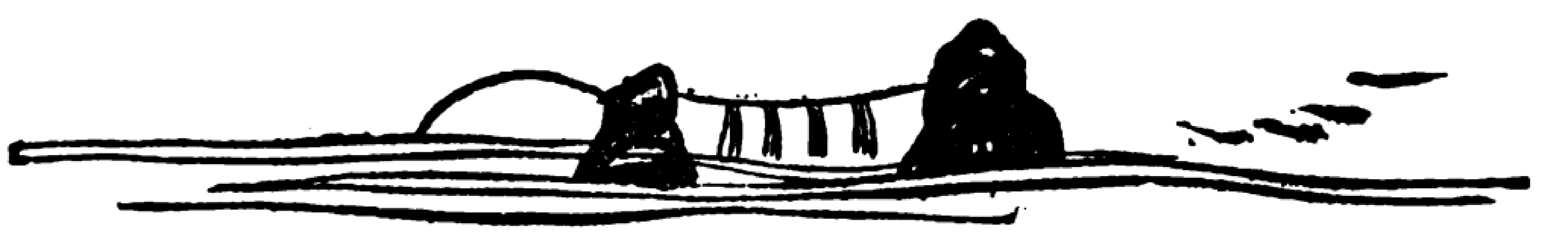
△吾はもよ女にしあれば

當時の習慣は男は數婦に見えたけれども、女は必ず一夫を守つたものです。須勢理姫が夫大國主命の旅に行くのを送つて「吾が大國主こそ男にませば何處にも妻持たらせめ、吾はもよ女にしあれば汝除きて男はなし汝除きて夫はなし」と歌はれ、垂仁帝が丹波より五人の女を召し給ひ、景行帝が美濃より姉妹二人の女を召し給ひ、此外代々の天皇が後宮に數人若しくは十數人の女を召したまひし事などが其の例證です。尤と斯かる風俗は獨り貴族權門の人々にのみ行はれて居た事ではなく、下々の階級も一樣でした。支那の書物で我國の事を記した後漢書によると、「倭は韓の東南大海中にあり、國に女子多し、大人は皆々五妻、或は二、或は三、女子は淫せず妬せず」と云ひ、又山海經の註に

一男子數十婦」と書いてあります。斯の如く男は數婦を娶るの自由を有して居るに反して、女は一夫を守るの義務を負ふて居た習慣の起源を案ぬるに、男子は戰爭で多く死亡して女の數が男に比して著しく多かつた事、男子は若き女又は美しき女を愛するものなのに未開時代の女子は男子に較べて早く老いたる事、男子は自衛上子の多きを望む事、等の理由ある上に、尚當時は天孫人種即ち我々の祖先が皇澤に霑はざる諸國の熊襲や梟帥や土蜘蛛を征討した時代を餘り隔てゝ居なかつたので、此征討者即ち我々の祖先は、勝利者の威勢で國内到る處で歡迎優待を受け、當時の父兄は斯かる勝利者と婚を結んで勢力を占めやうと計り、婦女子も亦斯かる人に愛せられて勇者の妻となり勇者の子を産む事を無上の誇りと信じ、人も許し世も許した事が緣となり、それが久しく行はれてゐる間に習慣となり、遂に風俗を造つたのです。尤も風俗は一夫多妻ではあつたけれども、當時に於ても繼嗣を重んずる心から、嫡妻は他の者に比べて權威が強かつたもので、其の名稱も嫡妻をこなみと言ひ、後妻をうはなりと區別して呼びました。

△儀式は極めて簡單

婚姻を取結ぶに媒介人を要し、又婚約の證據として後世の結納の意味の物を贈つた者は、是れは古代からの習慣で、仁德帝



が雌鳥皇女を納れて妃となし給ふ折に、隼別皇子を媒介人となされ、雄略帝が若日下部王の家に行幸なされた折に、途で獲た犬を妻問の物と言つて下し賜はつた事などが其例であります。婚姻の儀式は極めて簡單なもので、纔に連結とて男女互に盃を取交はす丈でありました。其饗應には机代の物と云ふ酒饌を饗するのみで、今から見ると儀式といふほどの設けではありません。

△支那から學びし婚姻法

其後支那との交通が追々盛になり、彼地の文物制度が輸入されて、孝德帝の大化二年に始めて良民賤民（奴隷の如きもの）の結婚に就ての法を定められました。之が我國に於ける最古の婚姻法で、其條文は左の通りであります。

良男良女の共に生める子は離婚の時には其父に配し、良男の婢（賤民の女）を娶りて生める子は母に配し、良女の奴（賤民の男）に嫁して生める子は父に配し、奴婢（賤民同士）の生める子は母に配すべし。

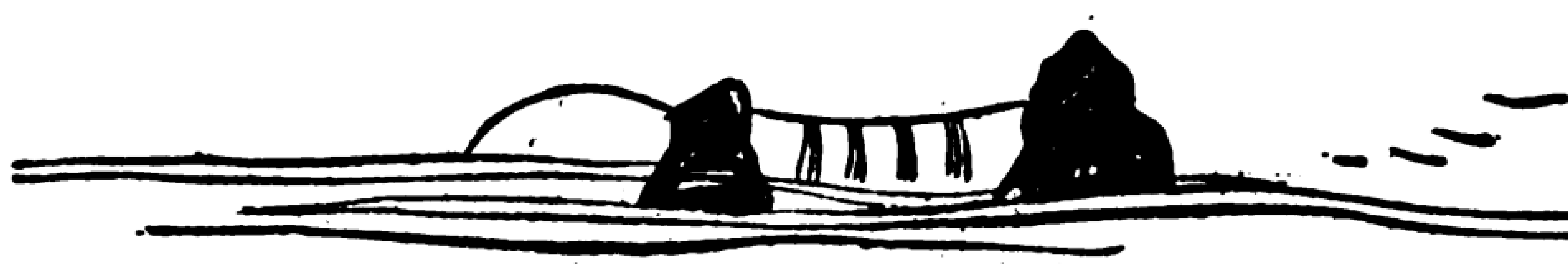
當時は社會の關係がまだ複雜ではなかつた爲に、婚姻法の如きも極めて簡單なもので、此の外は專ら習慣に依つて處事の取締を爲しました。

右に云ふ賤民とは餘程古くからあつたもので、其中には、犯罪のために處刑されし陵戸、叛逆人などの子孫を沒官したる官

月、家長に使役される家人、及び父兄の爲に賣られし者又は借財の爲に自ら身を投じたる者と戰爭の折に捕虜となつた者とを含む奴婢との四種類あります。此中政府に屬する者を公奴婢と云ひ、王臣以下百姓の配下にある者を私奴婢と云ひ、前者は賣買を禁じてありましたが、後者は賣買は勿論、生殺與奪とも其所有主の隨意で、其待遇は牛馬と少しも變る所がありませんでした。我國に於ける人身賣買の傭は實に此の奴婢の制度に基くもので、尙此不條理至極の觀念が長く我國の人心を支配して、人買ひとなり、人商人となり、遂に婚姻には賣買婚の風を作り、女子の人格を全く無視されて、長く一個の財產扱ひを受けて居たのです。

△王朝時代の五百年間

此頃迄は我國では總ての事を重に不文律の習慣のみで處理して來たのですが、支那との交通は漸く歸化人を生じ、從つて此等の歸化人を官吏に任用する必要も起り、國内の出來事も段々複雜となり、金錢の貸借物品の賣買なども頗る發達して來て、最早單に慣だけでは取締がつかぬやうになり、茲に孝德帝の朝に時の刑律學者に命を下し、支那の唐制に準據して始めて大化改新の法制を定められ、後天智帝が聊か改削を加へられて近江律令として發布され、更に文武帝の大寶年間に再び改正されて發布



になつたのが大寶律令と申して我國最古の成文法であります。されば其の内容は殆んど支那の制度を採つたもので、僅かに我國の習慣を加へた位に過ぎません。同令中の婚姻の成立に關する條項はざつと下の樣なものです。

一、男子は年十五歲以上、女子は歲十三歲以上に達すれば婚嫁を許す。

一、婚嫁には必ず婚主を定む（婚主とは女子の祖父母また父兄の如き家長をいふ）。若し婚主となるべき家長なき時は隨意に之を定むる事を得、男子亦た之に同じ。

一、婚姻の成立は婚主の承諾により諸近親に申告すれば足る

一、婚姻の日妻の持參せし財產及び夫婦相共に勞働して得たる財產は、常に夫の所有に係る。

一、婚主の承諾を得ずして結婚したる者は笞五十に處す。

一、婚姻を約して聘財（今日の結納なり）を受けて其の約束を變ずる者は笞五十に處す但飲食物の贈物は此限にあらず。

一、妻を妾とし、女家の婢を妻とする者は徒刑一年に處す。

一、監臨の官其の監する所の女を妻とすれば杖八十に處す。

一、人の妻を娶り及び之に嫁する者は各徒刑一年に處す。

一、七去の事由あるも三不去の理あるに猶は強て離別する者は杖八十に處す。

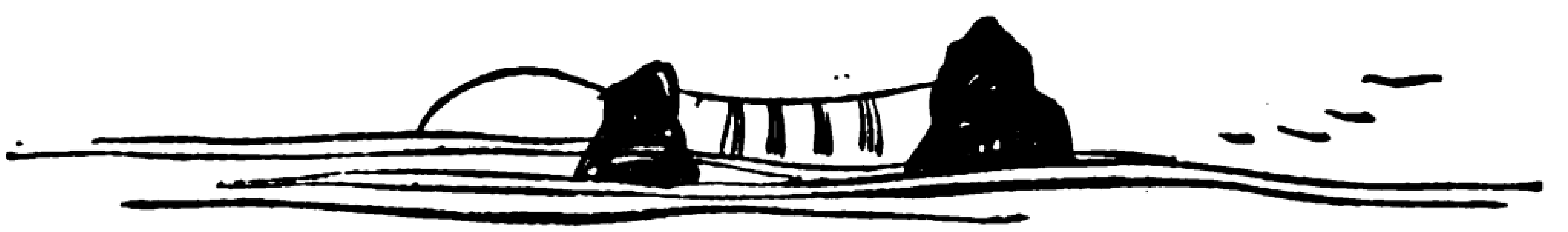
一、妻ありて更に娶る者は徒刑一年、女の家は杖一百に處す。

此外皇族の婚嫁に關し、又其他に就て種々の定めあり。

茲に掲げた大寶令は王朝時代の前後五百年間施行されたもので此間婚禮の式作法には元より移り變りはありましたが、婚姻法は少しも改むる事なくして續けられ、漸く武家時代に及んで之に代るべき幾多の式法法度が出て大寶令は自然と廢止になりました

△武家時代の變遷

源頼朝が天下の政權を執つた時には、京都から三善康信を招いて武家取締りの規則を拵へましたが、婚姻に就ては別に前代と變るところもありませんでした。其後源氏が亡びて北條氏が執權となりまして、貞永年間に貞永式目と云ふ規則を發布しました。此式目は專ら北條氏の支配してゐる武家にのみ適用したもので、婚姻に關する條項は、僅に武家が其所領の一部を割いて女に持參させた折に、其夫が死亡した時又は其女が死亡した時には其所領は如何に處分するかと云ふやうな規定ばかりで、武家以外の百姓町人に就ては別に新らしい定めはありません。其後後醍醐帝の朝に制定された建武式目も又前の貞永式目と同じく重に武家の取締をしたものです。足利氏が政治を取るやうになつてからも、婚姻法には差したる變更はなく、唯輿入れの方法に就て聟取の式が廢れて嫁取の式となり、且其式か以前に較べると甚だ複雜鄭重になつたゞけであります。



△戰國時代の弊害

武家時代の八百年間は其中ば以上は年々戰亂が打ち續て、男子は常に攻城野戰の事にのみ從ひ、之につれて男子の權は强く女子の權は弱くなり、加ふるに群雄割據の餘風は家に重く人に輕く、家長の權をして家族を自由に處斷するほどの境に到らしめ、加之、佛教の女子に冷酷なりし觀念は、此等の思想と抱合して、遂に女子は物件と同視され、當人の意に適しようが適すまいが、そんな事には頓着なく、父兄が命ずるまゝに一生の苦樂を他人に委せるといふ果敢ない境遇に陷りました。尙此以外に於て當時の女子に多大の同情を寄せべき事があります。それは當時戰國の習ひとて盛に婚姻政略をもちゐまして、相互に行動を牽つた事です。此婚姻政略には二つの事情が含まれてゐました。一は女を人質の意味で嫁にやるのと、一は女に間者の役をさせる爲に嫁にやるのです。此等の實例を當時の書物に求めますと非常に澤山御座います。

△太閤と家康の法度

足利氏が亡びて德川氏に移る前後六十年間は豐臣秀吉の大閤式目といふのがあるだけで、他に貞永式目との兩式目を用ゐて居たのですが、此の大閤式目も其大部分は武士の取締法で、婚姻に就ては單に「男女の仲立、十六七迄斟酌あるべき事」の一

條があるだけで、外には何も規定してありません。次で德川氏が天下の政令を握るやうになると、將軍家康は慶長二十年に武家諸法度を布告して一萬石以上の大名の私に婚姻する事を禁じ、更に元和元年に公武法制應勅十八ヶ條を發布し、婚姻に就ては左の如く規定しました。

公家より武家に緣組のこと關東へ相達し將軍家より沙汰に及び其上にて取組申すべく、若し其儀之なく取結ばれ候に於ては其罪申付べく候、緣組の上も猥りに家中の繼き其沙汰仕り候儀相聞え申すに於ては重罪たるべき事(下略)、

尚德川百ヶ條に於て左の如く規律を設けました。

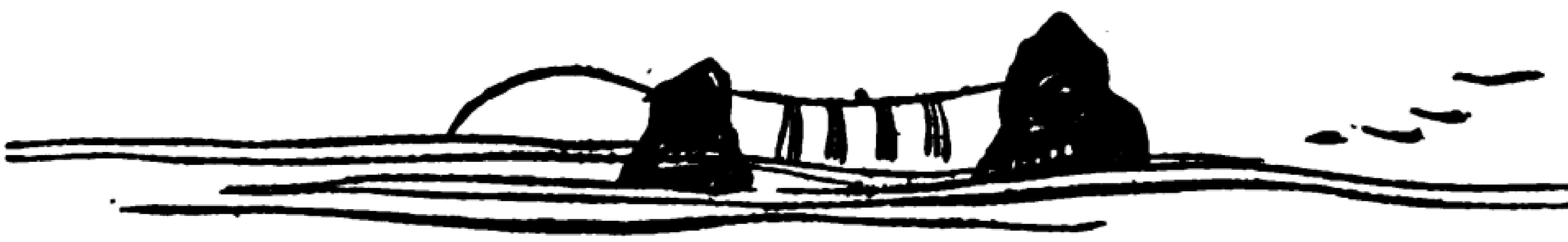
男女室に居るは人の大倫なり。十六歳獨居すべからず、媒酌を求めて婚姻の禮を結ぶべし、然れども同性を娶らず家筋血筋を擇び緣を結ぶべし。

妻妾の差別は君臣の禮を以てすべし、天子十二妃、諸侯八嬪、太夫五嬙、士二妾、其以下は匹夫なり、古聖之を禮記に記す、古今の帝典なり(下略)。

以下の百姓町人に對しては豫じめ之が律令を示さず、事件の起る度毎に其取締法を出しました。

△三界に家なき時代

當代は家長權の最も極點に發達した時で、家長に對しては家族は負擔する義務はあれども、主張する權利とてはなく、就中、女子にあつては三從とて家にある時は親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老ひては子に從ふの制裁を受け、一生の大事を定むる婚姻に就ても父兄が行けと命ずるところなれば否應なしに其命に從はればならず、嫁した先で舅姑の意に滿たないと、舅姑去りといふ厄に遇ふのでありました。斯かる境遇ゆゑ連添ふ夫が不行跡の事がありましても、何處〱迄も辛抱しなければならぬものでした。女は三界に家なしとか、或は女子とは柴の凝りである等の俚諺は實に當時の女子の境遇を說明したものであります。



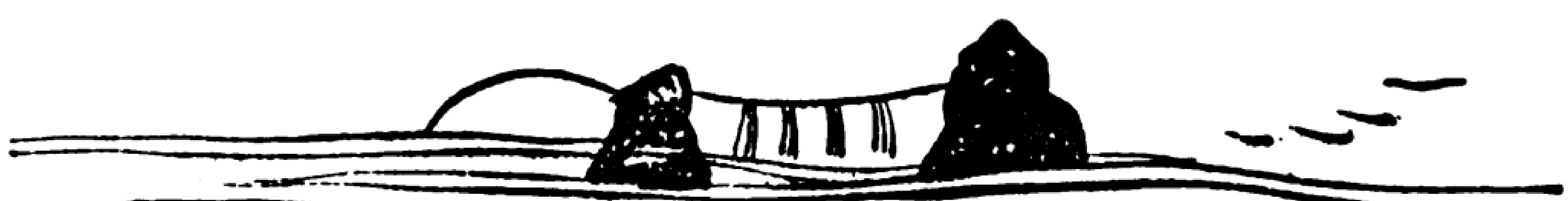
△明治維新の大改革

女子の人格を無視し、無理往生に結婚を強いる風俗は、實に亂暴とも不法とも言ひやうはありませぬが、明治の維新は總ての制度を根底から破壞しました。婚姻法の如きも亦空前の大改正を施されました。明治四年に新律綱領といふ法律が出ましたが、此れは彼の大寶令が唐制に依據したやうに專ら支那の清律を基として定めたもので、其精神は必ずしも我國の人情風俗に適したものではありません。例へば妻妾の區別は君主の禮を以てすべしといふ慣習があるのに、新律綱領では妾を置く事を公然と許したのみならず、之が差等を設くるに、妻を一等親とし、妾を二等親とする規定でありました。尤も同令は身分に關する規定は少

く、犯罪に就ての制裁が多くありまして、婚姻に關しては重に大政官の布告で或る事件の起る度毎に裁斷を下しました。斯くてある間に、明治十四年に、つい一兩年前迄施行されて居た舊刑法が發布されて、新律綱領は廢止となり、自分の法律に就ては佛國からボアソナードといふ學者を顧問に聘し、法典調査會を設けて佛國民法の精神を採り、それへ我國の習慣及び代々の法律の意味を加へて民法草案を脱稿實施致しました所が、世間に於て法律殊に民法を制定するには佛國四法の精神を採るよりも獨逸の法典に則る方が完全であるといふ議論が起り、其うちには我國にも有名な法律學者が續々出て來まして、研究詮議の結果、遂に佛國法を棄てゝ獨逸法を採る事に決し、益に實施致した民法は廢止となり、之に代つて明治三十一年に發布になつたのが即ち現行の民法です。

△現行婚姻法の精神

婚姻に關する規定は民法第四編第三章にあり、第七百六十條から第八百十九條迄五十四ヶ條に亘つて明記してあります。其條文を紹介する前に現行民法に於ける法の精神を一寸申上げて置く必要があります。それは他事でもなく、由來我國の戸主と家族の關係は恰も主人が家來に對するやうに苛酷を極め、嫁に遣るのも聟を取るのも全く戸主たる父兄の自由勝手で、婦女子は唯其命に從ふより外はなかつた事は前にも云ふた通でありますが、現行民法では此制度を全く改正して戸主が何と命令しやうが、婚姻をする本人が不承知なる以上は、決して其命令に從はなくとも宜いとした事であります。然し乍ら、男女共に適婚齡に達したゞけでは、複雜した世間の事を判斷するには其智識はまだ十分でなく、或る妻を選み夫を定めるに就ても自分のみでは危險があるから、或る年齡に達する迄は父兄又は後見人の承諾を要する事になつて居ります。



△民法の規定

左に婚姻に就ての重なる規定を列擧致します。

一、男は滿十七年女は滿十五年に至らざれば婚姻を爲すことを得ず、

一、配偶者ある者は重ねて婚姻を爲すことを得ず、

一、女は前婚の解消又は取消の日より六ヶ月を經過したる後にあらざれば再婚を爲すことを得ず、

一、姦通に因りて離婚又は刑の宣告を受けたる者は相姦者と婚姻を爲すことを得ず、

一、直系血族又は三親等内の傍系血族（伯叔甥姪の間）の間に於ては婚姻を爲すことを得ず、

一、子が婚姻を爲すには其家に在る父母の同意を得ることを要

す、但男滿三十年女が滿二十五年に達したる後は此限に非す、

一、婚姻は之を戸籍吏に屆出づるに因りて其効力を生ず、

一、人違其他の事由により當事者間に婚姻を爲す意思なき時及び當事者が婚姻の屆出を爲さゞる時は無効とす、

一、詐欺又は強迫によりて婚姻を爲したる者は其取消を裁判所に請求することを得、

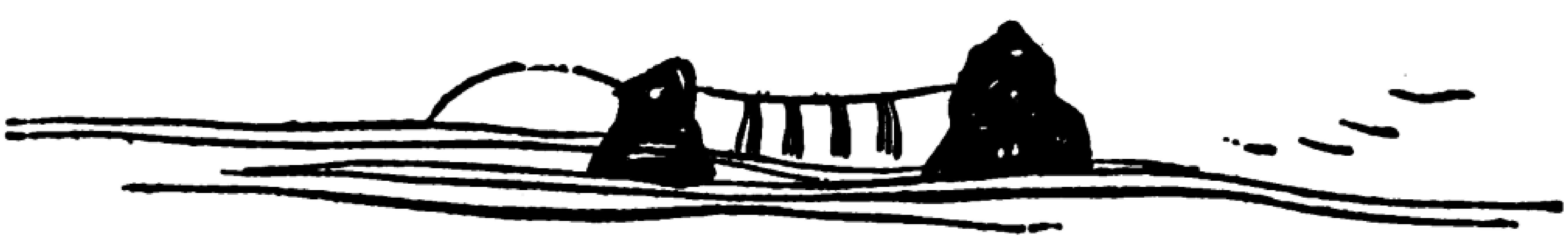
一、妻は婚姻に因りて夫の家に入る、入夫及び壻養子は妻の家に入る、

一、妻は夫と同居する義務を負ふ、夫は妻をして同居を爲さしむることを要す、

一、夫婦は互に扶養を爲す義務を負ふ、

其他色々委しい規定がありますが、茲には略します。

要するに我國に於ける婚姻法は、其始めは全くの自由婚姻制度であつたのが、中頃支那の儒教主義が輸入されて干渉制度となり、更に戰國時代と爲つて女子の權利は男子の爲に蹂躙せられ、佛教の禁欲主義は之と抱合して女子を輕視するやうになり、女子は外面菩薩の如くで内心夜叉の如く、七人の子を爲すとも女に心許すなとか、或は子を生むとも腹は借りものであるなどゝ云ふあらゆる侮辱迫害を加へられたのですが、民法の制定と共に再び元の自由婚姻制に戻り、此の不遇より脱出することが出來たのであります。



△蚤と蠅と蚊

むかし或る俳諧師の許へ客の來り附合を始めけり、下女は毎度ながら其客の永尻にて附合せを始むると、夜をあかす事あるを厭ひて。

世の中にいらぬは蚤と蠅蚊いし
とまつて食ふて人を寢かさず

と口吟みければ彼の客は早々去りしとぞ

△假千金

むかし或るやんごとなき御方にて　動もすれば物の直打することを只管に好みたまへる人おはしけり何物にても總て目に觸るゝ毎に必らず其直打をなし、給ふこと常なりしが如何にも見苦しき癖なりとて友達なる人これを諫め物の直打する事は商人のなすべき業にて士君子たるものゝ爲すべき事にあらずといへば彼の御方は實にもと悟り給ひて曰く、誠に御教示辱じけなし、足下の一言は實に假千金たらん。

嫁入前の處女のたしなみ

ゆかり

△不斷の行儀作法は朝早く起き出で、盥嗽手水し、髪結はぬ内人に逢ふべからず、事により逢はで叶はぬ事あり、故に早起身じまひすべし。

△客の來たる時遲く出まじきなり。

△戸障子の開明け、あらくすべからず。戸障子の出入は跪ひて引くべし。あとも篤と閉て置くべし。

△人の手拭で汗ぬぐひ、扇、楊枝、履物使ふべからず是も時によりて苦しからぬ事あり、されど返す時の心得あるべし。楊枝は借りたりとも返すまじきものなり。

△人の書く文讀む文ともに見まじき事。

△人の密かに物語する體ならば早く其場を立退くべし座を遠ざくるがよし。

△文書く事、假名勝にいやしく書くべからず、しとやかに奕くしく書くべし人の文讀むことは眞名、やつし字などにても讀み兼ねざるやうに心がけたまふべし。

△男は買ふに及ばず、女同士なりとも人の顔をじろじろとながむまじき事

△打解顔に聞はず語、懺悔物語すまじき事、まして人事そしりなどみだりにせまじき事。

△貴人の前にて扇使ふまじ、汗ぬぐふまじ、痒ゆき處をもかく事あるまじ、若し堪へ難き時はそつと手をやり強くかきて二たび手をやらぬやうにすべし、又洟かむまじき事、されど汗、洟などの出づる時は次へ立ちてとくと整ふべし、若し立たれざる時は我慢すべし故に貴人の前に出づる時は前以て十分闕へ出るべし。

△人前にて爪取り、髪なでつけ、帯仕直しなどすべからず、人前にて洟かむ時は下座の方に向きてかむべし

△庭へ下る時は飛石のある庭は地を踏むべからず、石の上を歩むべし、築山などへむざと上るまじ、すべて木草の花うつくしきとてあまり傍へ寄見て吸呼のかゝるほどにすべからず、まして手などさわるべからず。

△掛物其外道具の類物知顔にむざと褒むべからず、只

心に褒むる體、感じたる機然るべし

△人に誘はれ行く時は、先方の衣裳より勝りて華麗に扮打べからず、凡そ振り合聞き合はせ押はかりなどして相應にすべし。

△物事作法知り顔にすべからず、何事も指圖など、自慢らしくすましたる顔付を爲すまじき事。

△身に薫物をこむる事はほのかにすべし。甚だしきはあしく、香ひ袋などもあまり高きは却つてうるさきものなり。

△座敷の最中にさし出でたるは惡し、片隅に這入りたるは初心なり、手そぼり、鼻を鳴らし、茶碗を弄びなど又退屈したる顔など顋はにし人の物言ひかくるに返事うはの空なる事あるべからず。

△人の小刀、鋏、など借りては拭ひて返すべし、筆など使ひたる時は後を拭ひ毛先をよくなをし置くべし。

△人の寢むしろ布團ゆめ〳〵踏むべからず況して人の足など踏み越へなどする事吾が子とてもすべからず、すべて踏む物は履物、越ゆるものは敷居の外なしと心得べし。

△人の物語の中へ出で他のはなし堅くすまじき事なり又人の物語進ひたりとて後より我知り顔に語り直すべからず。

△盃の出たるを見て座を立ち去るべからず、しかしこれも時によるべし、貴人の前にては用もなきにさいるい立つべかず。

△膳に据りて箸を取る事人より遲く取りて人より早く置くべし、されど斯く心得てあまり遲く取り早く措くは惡し少しの違ひと心得べし。

△上座して苦しからぬ人も一應は辭退してする〳〵とは上るべからず、又辭退すぎてさま〳〵と人に强いられるはあしく出過ぐるは無禮なり、其場の見合せ肝要なり、相客の上下我身の程をはかるべし。

△膳に据る時確かと正面にすわるあしく、膳を少し左の膝の方へよせる心持にてすわり、さて右の手にて飯のおほひを取り左の手にうつし、又右にて汁の蓋を取り、飯の蓋と重ね膳の左わきに置くべし。

△いづれの菜を喰はんと見合すことは、迷ひ箸とて嫌ふなり、何にても口にあるを喰ひしまひて外の物を食ふべし。口に物ある内に食ふはこみ箸とてきらふなり
△餅は楊枝にさして食ふべし、又指につまみても食ふべし。
△麺類を食ふ事汁を置きながら一箸、二箸すくひ入て汁を取あげ食ふべし其後は汁を持ながら入て食ふべし
△吸物、初献には汁を吸ひ後實を食ふべし二献目は實を食て後、汁を吸ふべし。
△菜は左の方より食ひそむべし菜より菜を食ふ事は渡り箸とて嫌ふなり。
△飯碗の中より外所眼を使ふべからず。
△挨拶もなく打傾きて食ふは犬喰とて卑しむものなり
△挨拶は度々いふも悪し、一時にわや〱といふは聴苦きものなりよきほど〱を見合て輕く挨拶あるべき事なり、口の中に食物ある中に挨拶言ひかけられたるは大に迷惑なるものなり、大口に食ひて含みながら物言ふは大に見苦しきものなり。
△鱠の酢をかたく吸ふべからず、同じくけんを食ふ事ゆめ〱あるまじ。
△二三の膳の汁を食ふ時はその膳につきたる菜を喰ふべし外の菜喰ふべからず。
△香の物は湯の菜なれども湯の中へ入て喰ふ事あるまじ、同じくは食はぬがよし。
△味噌の物、鹽辛の類、汁のたる物、箸の汚るゝもの食苦きもの挾み難きもの、歯香の高き物は斟酌すべし
△辛子、山椒、其他辛らき物、香ひあしき物食ふべからず。
△腰を屈め、俯向きなどして食ふべからず。
△給仕の人を待たせ置き汁を吸て出し、又通ひ汁を代へて持出でたるを取りて直ぐに食ふべからずこれはうけ吸ひとてせぬ事なり。
△料理の内に魚の骨などなき様にする事、婦人客に對する馳走なり、若し骨などあるを膳に出し置き、かさなどに置くことさるまじ塵などあるとも同じ事なり、隨分器物の中にてよく見て骨なき所を食ふべし。口中

より骨を撰り出すことあるべからず、すべて食ひすまひたる料理の内にて骨又は嫌ひな物あらば平壺又は汁椀など蓋のさる物の中へ入て蓋をして置くべし、決して喰ひ荒したる儘にして置くべからず。

△又燒物などにて若しむしりたる所あるとも見苦しからざる樣にあるべし。食ひしまいたる箸は鼻紙にて拭ひ置くべし、膳の内何にてもしづくの滴れざる樣注意すべし。

△すべて膳の上に物を零すは大の無しつけなり。常に朝夕の食事の時好みて膳の廻り綺麗に食ひつけ置くべし、晴れの座敷にて俄かに謹み行儀にせんと思へば却つて心あらたまりて、過ちの出づるものなり。



かへり咲

苔のはな

第一信

ゆく春の、かたみと眺めし、庭の遅櫻もはかなや、よべよりの嵐に、あとなう先立ち行きて、世は、又もや、徒然の思ひねに、立ちかへり候、久し振り、嬉しき御音信に接し、おなつかしさは、まづ、涙より、流れいで候、さるにても、いづこよりか、吹き傳へけん我が思ひ、我より求めし悲しみは、我に、かへると、覺悟して、色にだに現はさで、此年月過し來り候ものを、さすがは、よろづ見拔、見通の君、意くの外は、ござなく候、かくては、此まゝに、なほ、口ぬぐひ置かんも、あまりに、隔てがましう、況してや、今日を限りの紀念にも候へば、御胸騷がせんは、勿體なけれど、いでや暫しの、御辛抱願はしう候、あはれ、思ひ出の、春や昔、君を送りし、其のかへさ、石井先生に伴はれ、初めて列りし和歌むしろ、おぼつかなげに三十一文字、數を苦にしての、なすりがき、其手すさびの何處がよくてか、あはれ、めでたき筆のあや、えがたき才筆よと、一際、聲高う、賞め給ひし人や誰、……由來五ケ年、君にすら、え明かさで、心ひそかに、捧げてし我が生命、明暮、面影のさまよひて。及びもつかぬ高き身分の、かつは、いとしの君さへおはす人と、知りつゝもなほ、斷ちかねたる迷ひの糸、おぞや。神を怨み、世をそねみ、はては、亡き父母の最後さへも怨めしう、いく夜か、狂ひねの袖、絞り候ひけん寄邊渚の捨小舟、入江の春もなきものを、何樂しみに、うき世の海に棹さし候べき。心は、とくに、定め候ひつ、世も人も、打ちすてゝ、行方はいづち、聞くさへ、問ふさへ、覺束なう、足の、まに〳〵任せ候はん。たわけ者との御笑ひは、とくに承知、あすといはず、今宵より、最終の列車にて、……？ さらば、これを最後の便りと、御覽下されたく。御行末までも、幸あれかしとは、此期までの私の願に候。さらばこれにて、なつかしの君、さらばよ。

第二信

さまよひ歩き、深ひ流されて、思はぬほとりに、いつかまた、うき世の秋を迎へ候ひつ、時定めぬ村雨の、落葉の上を、たゝく夜などは、いとゞ、哀れの身に泌みて、いえやらぬ、古きいたでの、折にふれては、苦しう候、都をいでゝより、やがて半年一昨日より、ここ、深山路の、古寺に、暫しの假宿り、いたし居候、佛の前にて、イエスの神祈るとは、世は、面白きものに候、あるじの僧は、延暦寺の高弟とやら、白髪雪を戴き、何となう、高潔、さすがは、と、見る度毎、感にうたれ候、都をいでゝ、初めての心安き宿、心ゆくまで滞在して、心清めんと存候、再び浮世に、船出せよとは、あるじの僧の、勸めに候へども、などて、かかる事の、え出來候うべき、此心の底知らぬが佛とやら、なか〳〵に苦しう候、此世にての縁は絶ちし皆の私、君のみは、いかにも捨てがたう、又筆を取りし次第に候、其内にもまた〳〵、いづちよりか、御耳さはがせ候はん、あはれと許しませ君、オ、なつかしの君、さらば。

第三信

「春は花、いざ、見にごんせ東山……」まことや色香爭ふ京の春、花に醉ひ、花に浮かされて、世は太平無事に候、雨を促しての荒川堤、おぼろ月夜の櫻が岡、さすがに、なつかしう候、私去年、宿りせし寺に今年の正月まで起き臥して、日毎、夜毎の訓誨に、修養せられし我が品性狂はしかりき去年の心の、うら恥しう、始めて悟りし浮世の務、折ふし寫生旅行の途すがらとて立ち寄りし、西の都なる青年畫家、姿、心も、美しう、若き人にも似やらぬ動作に、あるじの僧のまづ、心うたれ、又となきことなればと、强いての勸め、我も亦、にくしとにもあらねば、遂に、諾して、そかしや、香嗅き御堂の、廣間に、經の唱へと、讃美の聲と心に答へて、一世一度の三々九度さすがに、盃もつ手は、慄ひて胸の動悸は、あやしきまでに、高う候ひき。かくて二月の末打連れて京へ下り、三條の川邊に、新室しつらへて、こゝに、移り棲み、見つるとには候は

ねど、まづ、不足もなう、やさしき夫の愛の手に、神の恵みの御庭に人もうらやむ、樂しき日を送り居候、思ひ出すさへ、昔の我心のをかしう、折々語り出でゝは、笑の種といたし居候。世も春なれば、家も春、遠くとも汽車の便も候へば、一度は、かならず、御來遊待ち入り候、主人よりも山々宜しくと申添へ候可祝。

第四信

因果の小車は、巡り〳〵て世も、我も、再び秋に逢ひ候、淋しき片破月に、雁なく夕は、云はずもあれ、尾花が末に、おく露の、袖の干る間もなう、好める敷島の道にすら、たどり入らむの心も、いたしあへず、消えも入らまほしう存じ候いかなる神の御攝理のもとに、生ひ出でし、此身にて候やらむ。不運とも、不幸とも、よく〳〵前世に惡業のおはし候ものか、生れいでし其日より、家は荒蕪のうき枕、父にも、母にも、早う、死に別れ、浪のまに〳〵漂ふ折柄を、慈愛の御手に救はれて、十七年の春や秋、苦勞の苦さへ、露知らぬ身とは、さても萩の上風よ、誰か知るべき萩の下、思ひの風は、いと荒く見ぬ父母のなつかしう、其最後のみじめさは、人傳なれどいぢらしう、血潮は高うおどりいで、胸の扉の破れしはいく度かくてもなほ、理想とやらは、いと高う、人一倍に、末は、天晴政事家の令夫人、日本教會のたゞ中に、衆目、集むるビヂチングドレス、披露の宴は、いと輝かしう紅葉館に、新婚旅行は世界漫遊、ダイヤの光、白金の色、榮華を一身に集めんと、頼みしものを我が願、遂に一大空想に終り候、かくての我、遂には、やさしき戀にすら、え勝たでいよゝ悲觀の人となり、心ざまさへ、かたくなに、笑止やかよわき女の分際にて、浮世を遠ざからむとは、かくてもなほ、神の恵は深う候て、深山の寺に、救ひ出され、漸く頼るべきかげ、求めいでし、ああ、其快樂すら、いみじうも、短かう候ひしかな、頼みがてなる男心とは、いふさへ、なか〳〵に、心苦しう候、あすよりはまた、此家を收めて、元の世捨人、いとはしと見し都の地、踏み入らむ折も候はむ

流れての末はいづくか浮草の

花さく春にあふよしもがな

第五信

絶えて久しかりし妙子の君、なつかしかりし我が姉上、數ふればはや三年、まこと、戀しう、なつかしう候、さても、變り果てし我が境遇、其間の、たゝずまひと問はせ給ふか、そは、あまりに、つれなう候、ただ、昨今の樣子にて、よろづは、御推察あらまほしう候、我爲には、蘇生の宿、第二の故郷たる、かの深山の寺に、程遠からぬ、こゝも亦寺、宵々毎の閼伽の水も、三年越に、汲みなれて、あるじの讀經は、此上なき樂しみ、片言交りに、はひ廻る、可愛き者すら、つきまとひて、日に增しさとる法の道、悲しき事など、露候はねば、また、飛びたつほどの喜びも候はず、いと平和に、さながら、春の海のごと、假りの世の、假りの宿りとも、おもほえず、平和、まこと、平和に過し候、何某大臣の北の方を氣取りし身の、浪風にうたれ、流されて、遂に、里寺の房守とは、世は、かうしたものと、つく〴〵、思ひ合され候、落着く先は、天國の、それよ、エデンの花園にては、漸う物心づく頃よりの、憧れに候ひしものを、これはまた、極樂淨土の蓮のうてなに、坐せむとは、さても〳〵、面白の世に候アーメン捨てゝ、南無阿彌陀佛、晝は幼子を背に落葉かき、夜は村人集めての說敎に、木魚うつ役も每度に候、靜に結ばれし緣なれば、靜に過し候はむを、此度こそは、いよ〳〵終りの棲家に候べければ、まづまづ、御心安う思し召下され度候、





待たるゝ春（上）

花子の姉

私は、今、嫁ぐ人即ち私の書かうとする女主人公妹花子の、生立を、本題に入る前に聊か記す義務があるのです、私の妹は、腹異でございます、腹異といふ二字の中には色々悲惨な意味の、往々包まれて、たとへば秋聲の作の題はつい忘れましたがむの陰氣臭い、木暮の妹に、お新といふ不規律なのがあつて、同居人と心易くなるやら、遂には青木某と家出して、行衛不明になつたなどゝいふ、つまりは家庭の複雜やら、成さぬ中の母親と、義兄との衝突やら、財政の不如意やら、色々の原因が、よつてたかつて、一お新を此の如きに終らしめたのですが、私の美くしい妹、飯山小町と賞めらるゝ處女は、何の〳〵、高家の令嬢達には眞似べくもありませぬが、心情の可憐なる、容姿の楚々たる、彼女は、私一家のプライドたると同時に、飯山町のプライドたる事は疑を容るゝ餘地はありません、アーヴングの「村のほこり」たりし處女は、秋野の露の如く、もろくも散つて、双親に歎をかけ、若き戀人をして徒らに悶えさしたでせうが、家の花子――我家と町のほこりたる處女は、これよりの春を都までもと祈つてをります。お話がちと餘事に渉りますが、飯山町といへば、藤村の「破戒」で皆様御承知の筈です、北信の極山の中の一小邑で、千曲川のほとりにおかれた眞宗寺の多い町です、私の生母は田舎から嫁つて、農事や、養蠶の外には、何も知らない女でしたが、

私の十五の冬、亡くなつて、二度目に來られた母さんは數多のお寺の中でも一二といはるゝ格のある寺の奥に生れて、お嬢様で育つた人でしたが、最初のは死別で、もう一生後家を通さしてといはるゝを、檀家の

勢力には叶ひません、一同の勸告で、私の父様の後妻として來られました、十五の小娘は、其時如何に光榮に感じましたらう、光明寺から母様が嫁る！　父様が校長様だからこの榮譽が荷はれたのだと、幼い時から佛敎に歸依して、理も非もなく寺方を難有がつてゐた私は、新しい母様を得るにつけ、父様の聲價を獨で高めてをりました、この尊い、お綺麗な母様はやがて、光るやうな女の兒を生まれまして、其時の御歌に、

こん春を、都路までも、匂へかし、
　信濃の奥の、ちこさくら華、

花子と命名されて、蝶ならば春野のそれ、花ならば都路迄もと、未來を願はれて、大切に育てられましたが私が聟養子を迎へました彌生の、あくる月、母様は片手に私の手を握り、片手に花子の頑是ない手を取つて、たのむ〳〵の御聲も幽かに、あの世へ旅立ちゆかれました、多分去年失くなられた父様の跡を追ふて行かれたのでせう、私は生母に肉の恩をうけて、この母様に靈の惠を與へられました、かくて、かくして五歳の花子は、私を母と慕ひ姉とまつはりて、健やかに、恰度十五の春をはり秋を迎へて、「破戒」の丑松が、父の聲をきゝたいといふ、飯山の小學校の後庭に、「信濃の春は遲けれど、秋たつ事はいと早し」の唱歌をうたつたり、又は丑松が自己を告白したあたりの敎場にも出入して、詩人は萬づを意味あるものと、筆につゞられた處を、何の考もなく遊び戯むれて、心ゆく許り少女の樂をくりかへしました。

私の夫は繼母様の親類なり、私の心のたのみにするに足ると思し召して、何の御心配も無いやうなりしがさすがに、花子の遠い將來を思はれて、やはり御寺の二男か三男に行末見込のあるのを許嫁にしておきたいと再三の相談でしたが、私は有爲轉變の世の中に許婚の果敢なき事を說いて、是許りは頑としてきかず、爲めに母様の眉のあたりに、珍らしい御不滿の色が浮びましたが彼の初野に心を移した東吾や、房さんを捨てて死に至らしめた運命や、侯爵夫人と伊豆山にかくれて、病の人を思死に、死なした男の事を思へば、許婚

の却て、多恨多涙に、終るを怖れおのゝかれて、是のみは、花子の爲、必死の力を盡して、反對しました、何として、美くしい罪もない處女に、宮の惨酷や、蓄子の狂がくりかへさせられませう、感謝して下さい、花子さん、是から私は御身の夫として、不足の無い青年を見つけて上げます、御身の春はまぼろしの春に非ずして、現實の春をお目にかけます、母樣は都路迄もと、祈られたならば。

「ものいふな」と歎へられた時代はすぎて、女性でも物を言はねばならず、虞美人草の中なる漢學者の娘は、ものいはざりし爲めに、一生の戀、一生の運を取り損ねんとしたでせう、私は御身が十二三の折から見ると次第に、冷やかに、次第に淡く、異性に見ゆるを、たとへば鬼にでも食はれるやうに、お嫌ひなさるが、家へ遊びに來る學生の中で、どなたが一番お好き？女は十五にもなれば少しは好嫌がありませう！　十三で女御に參られた御方もあり、十四で戀の焔に身を燒かれた娘もありました、たけくらべの美登利が、初戀は十四の秋ではありませんか、時雨ふる某が家の門口で、友禪ちりめんの小切、ながく、ながく、恨そのこすといへ、これは情史の第一頁として、止むを得ません、私は今更痛恨に堪へぬは二十歳の春迄、戀てふものを知らなんだ、今でも戀などは、知りません、女のすがれといふ世になつて、甘き戀の味を知らないのは、誰のせいでせう、嚴格なる父、謹直なる母、「ものいふな」と歎へられたからです、女の盛は十代で、情の時代とすれば廿代は理の時代です、卅はもはや覺醒の折で、色も香もない、中途半途、一番嫌な時機でせう、私は美くしい義妹に、女の春を多く樂ましめたく、唯二十代のみを生命とする女に、悔ながらしめんとて、私は御身を、十八の春、嫁ぐ人たらしめんと希望するのです、されば、十七歳の春を始めとして十七歳の冬迄、處女としての快樂を 恣 にさせたく、心を勞して居ますが、琴ひくも、人の前ではいや、裁縫も男の方——知人のはいや、兄樣が中學校の先生だから、日曜毎に大勢遊びに來られるの、姉樣は、なぜ男

の生徒を優待なさるだらうのなどの疑問が、御身の胸に往來してゐますのね、詞の節々や、立居振舞に、いやだ〳〵が私には能く讀まれますが、それがはたして、眞實でせうか、經机の若い女主人公は、醫學士のあまりのすさびの惡く、さてありての後を戀しく、一生を經机の前にくらしたではありませんか、花子さん、私は若い學生一人、一人今こゝろみの最中ですの、いはゞあの人達は、私に試驗されて居るのですよ、今二三の人を擧げて、處女心にうつして見せませう—

Aさん

尊大な風があるのは大地主の息子故、顏は男らしき美貌、熱情もこもれるやうなれど、かういふ人には、媚を呈する處女こそ似合はしけれ、沈んだ花子さんとは、性も合うまい、それに大百姓だけあつて、親類縁者の多い事、あすこでは白綸子の裾も襟も年に一度はかけ更へるとか、婚禮、葬式、うるさいやうで、況して跡取の坊ちやん、取りすました傍に、ものいはぬ嫁樣では、一族のうけもよろしくあるまい。この人は農學士になるとやら。

Mさん

丸々と太つて、快辯を弄ぶあたり、其胸にはさこそ若き血汐のたゞゆるならん、夫を先生々々と慕ひて、私を叔母樣々〳〵々々と親しげに寄りかゝる風情は、恰ど、自分の弟で、私は眞實の姉のやう、このお兒（十八九の青年を捕へて、このお兒でもあるまいが）には、一つの菓子も半分わけて上げたいやう、父樣は裁判官だつたが、轉任後は其儘寄宿舍にそらるゝ故、ホームシツクおこさるゝが一段と可憐で、「われから」の奧樣が霜夜の御あはれみとは事異れど、千葉が田舍の姉ぢや人の格で、お世話して上げたい、いつも子供らしい事いふて笑はるゝ人なれば、靜な花子さんの未來の夫と、ほのめかしたいが、待て暫時、男子はたゞの一人、姉樣が女子大學に二人、妹さんがおまけの方迄よせて三人、オヽいや〳〵、鬼のまゐ何千疋といふ事でせう、

眞平々々。

Kさん

頭腦の明斷なる、決斷力に富める、そして寡言で、若いのに似合はぬおそろしい眞面目、他の人々の思ひも付かぬ、質問を放たれて、先生少し困る時もある、それでも毫もいやしめる風はなくて、飽く迄研究の態度を取らるゝところ、まあ凡人ではない、其上文章が巧くて、和文は女らしいとてかゝず、形容詞澤山の漢文をつゝとつて、そこは未だ中學生、よろこんでをらるゝ、女は大嫌とて、私に手をついて、お辭儀を形許り。奥様とも叔母様ともいはれた事は無い、ほんとに女嫌の方ねと、私陰でいま〳〵しさの餘り批評すれば、口輕のさるお友達が、叔母様K君は約束した女があるのですと、きいて、二度びつくり、すべての女性を侮辱するが如きは、一人の女性に眞心を呈す爲めと、さとつて、今のお方は賢い〳〵。



Hさん

運動好きで、大食家で、話好きで、背は高く、色は淺黑し、こんな方が早大か、三田の校舍をくゞつて、練磨怠りなくば、亞米利加でも英吉利でも、露西亞でも、ものゝ美事に破つて、運動界の覇者と崇められように、惜しい事にはお家に霜をいたゞく、双親が、この人によりて老を養はれんと待ちあぐんでをらるゝ、多分卒業後は、二部生となつて、師範校の籍にはいるのでせう、學科もよく出來るし、性質に申分はないが、財産といふものが少しも無くては、萬一の時に、慘い眼に遇はねばならぬ、せめて、家屋敷とか、公債とかゞあればよいに、外に兄弟は無し、厄介は無し、もし、家の花子さんをお嫁にといへば、あの親達は嘸喜ぶでせうが、それにしては夫婦共稼で無くては、拙い、人形にすこし靈魂を打こんだ位の小娘では益に立たぬ、それこそ今流行の女事務員か、小學敎員の免狀もつたもので無ければならぬ、でも大勢の中で一番優しい、風邪をひいた時、中橋の實母散が宜いと母親が敎へたといつては持つてきてくれたし、花子がブランコから落ちて、少しの傷をうけた時も、心から案じて、美事な林檎をよこしたし、(其時花子はお禮も何もいはなかつたが)まあ人情からいつても、厚いといはねばならぬ、家貧うして孝子出づとは、昔の人の詞だが、僞りならぬ事である、無財産と小學校の先生――對大地主の跡取で未來の學士――若くは法官の子息是も未來の法學士對學者肌のKさん、(かういふ人にエンゲージした女性は世界の尤も幸福なものと思ふ)一寸文學思想があつて、色々の出版物を讀んで居るはこの方のみ、恐らく高師の試驗でも受けるつもりでせう、望まばいゝKさんなれど、先約ありては已むを得ず、よしや花子に非常の機敏と嫻雅とが備つて、恰も芳枝姫の手より東吾をうばひ、房さんより許婚を離し得たる女性の魔力ありとも、私が傍についてゐるからには、其非行は敢てさせぬ、若き女が若き男を戀ふるは自由なれ共、主あるものを思ひ且つ慕ふのは大なる罪です、

十五の花子は、すべての異性を嫌つて、所謂經机の二の舞をふまんはあまりにあはれなるまゝ、そこはすがれても、覺醒の時機に達した私といふものが、保護者として付いて居ります、私は花子に、春の曖昧を早く知らせんとして、數名の若者を擧げましたが、愛の神は妬の神です、未だ適當の人をお現しになりません、まして一夜の春雨に、浴さぬ處女心、堅い莟のやう、一陽の春風にあはぬ、十五の處女は、心さながら、氷のやうではありませんか、しかし、私は石のやうともたとへませぬ、又水のやうともいひませぬ、石は未來永遠石其儘です、水は天地のあらんかぎり、水其儘です、やがてひらく時機、解くる機會の來るを信じます、花子はいつ、天の甘酒に酔うでせうか。

待たるゝ春（下）

十五の花子は人形の花子でした、十六の花子は多病勝の花子で、すくなからぬ心勞をしましたが、幸に事なきを得て、是も父母の君達が、草葉のかげよりお守りなさる故とよろこびました、沈默はいよ〳〵沈默となり、ものいへど敬へる私に服從しながら、益々異性を見て、いやがるではありませんか、しかし十七の花子は、甚しく變りました、彼女はたしかに、あるものにふれたに相違ない、それは越後の國は高田町に師團のおかれて、若い士官達や、數百の健兒は、軍馬の嘶勇ましう、富倉峠の嶮を越えて、雪中行軍として、飯山町に宿泊いたしました、愛の神樣は、軍服勇ましき士官に形を借りて、華やかな劍、輝く肩章は、そゞろに單調なる四方の風俗と異りて、處女の心を酔はしめた、されば北信の天高くすめる星に號令の響く時、士官の聲は得ならぬ香を吹きおくりて、處女の血汐は湧き立つたでせう、憐れんで下さい、都の手振や風俗を知らぬ田舎の娘は、若々しい軍人の姿に、切實なる戀を味つたのです、こちらから願つた譯では無いが、それぞれ宿泊所を指定されて、私の家は、陸軍歩兵中尉が來られました、もし世にいふ如く出雲の神樣が、えにしの緣を結び合はしてそらるゝなら、花子と其中尉は、

この時正につながれた折でせう、今でも忘れません、高島田に結つてお給仕に出た風は。丸で見合といふ格です、英雄と美人も仰々しい形容ですが、一は國家の干城、一は即ち飯山小町、綾羅の袂とでもいつておきませう、恥かしさうに、ひかへる、かなたに、無雜作な、而し、稍々氣まり悪相な恰好でお吸物に手をかけらるゝ、お相手の私の夫は、何氣なく世間話をして、飯山の地勢から、千曲川の治水問題やら、餘り山の中で人間が開けない事やら、又話題はちよい／＼と變つて、花子の方向に及ぶやら。軍人に似合はぬ御酒の弱い方で、ほんの二三杯で、ほんのりと櫻色になられた頃を、夫は下へ一寸行きし折、寒月空にかゝつて、こほる雪の夜を、二人は欄干に、唯二三歩を離れて、この時、花子の前髪ゆらめき、士官の眉が動いたでせう、二人は胸と胸とに、何を映じさせましたか。

「貴女は、いつ迄もこの澤山の雪の降るとこに居たいの、行きませんか東京へ、僕が連れて行かう」

「あの兄や姉に別れまして」

「會ひたければ、いつでも會して上げる、今は僕もやつぱり雪の高田に居るが、其中には東京へ轉任するのだ、きつと連れて行くよ、貴女がいやといつても連れて行くよ」

「それでは、お屋敷へ小間使に上がりませう」

「小間使！　こんな上品な小間使なら、僕の家には不必要だ、それではやつぱり、止しとするかね」

花袋の書いた「生」の若き士官は、東北の町に若き琴ひく娘を得て、母親が瀕死の報に接した汽車の中ですら、其妻を忘れ得なかつた、其士官さんは、娘の心のみならずして、肉迄をも捕へた、何と不遠慮な人ではないか、それでもこの娘が身重になつて、東京へ來て、二人の姉（嫂達）の世話で產をしたが、長兄の妻は生みの子なく、仲兄には女の兒のみなるを、安々と大きな男の子を生み落した手柄といふより寧ろ、かくて人がこの世に產れ來る運命をおもへば「すべての事皆ゆるさる」と名高き哲學者の仰せになつた語も、決して今の世にいふ道德と相容れぬ譯は無い、道を說く

人は、さま〴〵に敎へるが、事實となつて現はるゝ者に對し、人間は、何も故障をいふ事が出來ぬ、罪によつて、生れたものも、自ら手を下せば、罪者となる。

こほれる欄干に、どんな甘いさゝやきが、繰返されたか、知れるは、寒月と、千曲の水のみでせう。然し是は、ほんの五分時、そしてもし其士官に妻あらば、又は許婚の淑女あらばと、取越苦勞をなさる方もありませうが、軍隊を珍らしく又光榮あるものとして迎へた高田町の新聞紙は、赴任當時の士官達の



概略をかゝげて、暗に家庭の話題に上らせました、榛田國雄氏、是は今千曲川のさゝやき、神秘の歌を花子が琴に合はせて居る人の姓です、東京には母君が一人、兄弟とて外にはなく、係累の極すくない由はかねて承知してをります、嬉しい緋一つこした越後の事情をといぶかしがる

方もありませうが、信濃の人の血は、半ば越路より傳はり、又越の美人の血汐も、信濃の祖先が送つたものに相違ありません、弟たり難く、兄たり難い、國と國との間柄です、まして昔の御大名時代はいふも更なり、寺方では重もに姻戚の關係が結ばれて居ます、何で若い娘や妹を持つ親兄弟、光榮ある軍隊の消息をおろそかにしませう、春田中尉と、飯山小町の間に、甘き戀のさゝやきがあつても、誰がまた一點の非をうつものが御座いませうか、こゝに於いて、私は徒らに「ものいふな」と敎へおかざりしを感謝します、しかし「生」の士官のやうな放逸はゆるしません、再び座敷は夫と私とが賑々しく會話に花をさかせて、若き士官は其夜、旅枕に波をきゝながらとはいへ、靜けき眠に入りました。

人間は、ちよつとの對面にも眞摯の人か、薄情の人かゞ克く解ります、又是を解るだけの常識を備へていなければ、活世界に立つて、渡つていく事は出來ますまい、さても春田中尉に對しての、越の美人は無意味のもので、北信の奧深う可憐の花に、やがての春を知らんのおもひは、花子が生れし時、母樣が祝福あるやうにと、およみになつた、あの和歌が、預言になつたのでは無いでせうか、もとより、源氏の君が須磨明石に、さすらひの折柄、うつくしき明石の上を得たとは、場合が違ひます、紫の上を戀ふあまりに、琴の音にあこがれ、めなれ給はぬ浪の音に、唯何とはなしに、人の戀しうおはしましつると、聊かおもむきを異にします、ブライトオフブレーヂの田舍少女は、ものいはざりし爲めに、秋野の露ともろくも散りて、双親に歎きをかけた事は、前に申しました、我家のほこり、町のほこりなる、花子は、よしや士官の口から、花やかな詞をきかず、詩のやうなさゝやきをきかないでも、何物をたしかに得、何物をたしかに味ひました、草葉のかげで、母樣は、ほゝゑまれた事とでせう。

婦人の數は多過る米國あたりでは、結婚に就いての運動が烈しく、目的す男子の歡心を買はんが爲め、趣味の一致を心掛けて、音樂好きの者は音樂を、遠洋航

諧を好むものは、つとめて其知識を研き、すこしの油断も無い相です、果報はねて待てとは、あまりに悠長な詞で、生存競爭の激しい廿世紀にはむきません、ふとんきてねたる姿や東山とうたはれた、京の祇園の夜櫻にも、電燈の力を借るではありませんか、運動を怠る人は、自ら凋落（さう、德田樣の題はこの凋落でした）を招くより仕方が無い、金も學問もあつて、己は國會の椅子に必ず坐られると、確信してゐても、運動とい



ふ附屬物が無ければ、誰も見むきません、國家は國家を廣告し、學者は學說を廣告し、智者は智を、美人は美を、何でも彼でも、廣告の世の中、語を換へていへば、運動の世の中です、一門に、博士を二人、學士を三人婿に持ちて、ほこれる母夫人は、よほどたくみな運動家とききました、いくら才媛でも、名門の令嬢でも、ものいはぬ限りは、人が知りません、娘をもてる母親は、自己の心を欺かぬ範圍に於いて、娘の爲め

に先づ廣告の旗をかゝげねばならず、アルプスの高嶺へ、健氣な旗押したてゝ、登りゆく青年の抱負、斃れても止まぬ決心で、娘御の爲め盡して下さい、かの自己を賣るに、尤もつとむる藝者の、手練手管なるものは、徳義にそむく事も甚しいが、其美を廣告し、其娯を示す爲めの、行爲は、寧ろ婦人の本分かと思ひます、嫁ぐ人には、此の心掛が第一の要素で、私が花子にそれとなく敎へおいた、秘術です。

相互の胸に、和らかき想をいだいて、眠れる一夜は、明けて、士官の行軍の途にのぼりゆき、雪中の試驗無事と結了しました、越えて三日、近頃押しつけがましいお願ながら、どうぞ、花子樣を僕に下さい、といふてきました、人を中に立てたり、儀式張つた事は若い士官の煩はしく思うところでせう、私共は高田町に知人も多い故、念には念を入れてと、尋合はしたところ、あの君ならば、學力といひ、家柄といひ、操行といひ、一點難ずべきところは無い、それにしても花子樣の幸福は、幾多の親々に失望させる事ならん、との返事を得ました。

我が處女の快樂を多からしめんとして、異性に近づけやうとつとめ、巧言令色といふやうな意味でなくとも、女は女らしき態度になるを祈つて、夫が中學敎員の故に、若い學生達をよせて、それとなく敎へても、蕾はいつ迄もつぼみ、氷はいつかな解けませんでした。

花子は大方おくての方でせう、あれから二年の月日は、霜になやめる菊の花のやうで、旭の惠に遇はなければ、人爲では及びません、美くしいがお品ぶる、綺麗だが勿體ぶると、人の評判をきく毎に、あゝもうすこし砕けてくれゝばと、心痛した私は、經驗の乏しいものでした。あれから飯山の中學を出て、Aさんは高等學校の入學試驗に首尾よく合格して、やがての後は角帽を、北信の天地にほこるでせう、Mさんは父樣の退職で、どうやら目的が達せられぬとか、女子大學のお姉樣方や、まだ女の兒三人もかゝへて、母御の御苦勞は並々ならぬと察せられます、それこそ、廣告の必要がある、いたわしいのは、Kさん、中年の私にす

ら、女一人に對する愛の爲めとて、見るのをさへ厭はれたものが、何といふ、薄情な婦人でせう、あの位確りとした男子を捨てゝ、金滿家の令夫人となりすましてをられるとか、Kさんには君江を苦しめた高濱のやうな執念さはありません、斷然とあきらめて、學問の方は中學を終りとして、實業へはいられました、今は上海にをられます、時偶花子樣は御壯健かと、うつくしい繪葉書がきます、失戀者の胸の内はどんなものでせう、それから、何だかすまない、可哀想なやうなのはHさん、私は可憐な花子を、遠くへは手離せ得ないから、氣心の知れた人へ嫁りたいと、いつたのを、胸の奥深く印したものと見え、この人の口から折々謎のやうなことをきゝますが、本人が子供だからと一時のいひのがれをしておいて、話を外へそらせます、書くのを忘れたが、師範の二部を卒業して、去年から、飯山小學校の教師となつてゐます、雪中行軍のあつた折、若い士官のお宿をするときいて、非常に驚いたさうです、利發な息子故、何事か默示をさとり得たでせう、しかしこの人に、やるのくれるのと口へ出して、いつた覺は無く、何も憂うるにはあたらないが、高坂の鎌さん見たやうに、失望をせねばよいがと、案じられます、「十三夜」のお關が上野の夜道に、運命に泣く、ところ、あはれではありませんか、萬づの神樣佛樣に、Hさんの幸福を祈ります。人形のやうな少女は、生あるものとなり、春まつ事のもどかしさう、つくばの峯のあなたには戀しき君のましましてと、「八犬傳」の濱路がおもひのやう、花さんは、雪と閉されたる、富倉峠そのみ眺めてゐます、春待つ處女の心、どんなに、たのしいでせう。又嬉しいでせう、雪消を待ち、花子は嫁ぐ人となつて、士官のもとへゆきます。(完)

妹の爲めに言はんと欲するところを悉く言つてのけたり、花多くして實少く、理窟あまりありて事實極めて乏し、數多の小說によつて一篇の小說を作りたるがごとし可惜く

親の犧牲となつた娘

無名女

○

姉上の御婚禮がすんで、未だ一年と經たない中に、自分の緣談が持ち上つた、御兩親は今日も茶の間で何か密談、時々父上は困つたを繰り返され、母上は其の度毎に眉をひそめては、心配さうに考へ込んで居られる、餘程御兩親の御氣に召さぬ事らしい、祖母上はと見れば御居間の八疊で、例の氣難かしい顔を何故か、昨日今日は一層いら〳〵しうなされて、何か小聲で呟きながら、手觸りも荒く縫物をして居られる、自分は此の緣談に關しては御兩親からも祖母上からも、未だ何のお話も無いのであるから、知る筈は無いのであるが、人の耳は早い者、今日妹がゆくりなく學校の廊下にて聞いたと云ふ噂で、自分は最早や氣脫けした人の如く、一時は只茫然としたのである。校中一の辯舌家でもつて、自負して居る柳田さんが、あのね、一寸皆さん、此の四月優等で卒業した野山信子さんね、そら三年の花子さんの姉樣、あの方が今度田舍へお嫁入りなさるつて、御良人は人も有らうに、中學を卒へた計りの小官吏ですとさ、校中一の美人だつて評判の高かつた人も、斯うなつちやもう駄目ですわね、實際お姉樣が學士夫人で、御妹の信子さんが田舍になぞ嫁らつしやるのは、如何いふ理由でせうね、私なら一言の下にはねつけて終ふのに、なぞと邊り關はず高々と言ひ出したので、其れを聞いた妹は、身も縮む思ひがしたとの事、自分は只もう頂上から千仞の谷に投げ込まれたように、良久しうは身動きも出來なかつた。夢になれ、夢になれと眤と心を押しつくるが如く祈りて、靜かに此の上は御兩親のお話を待ちて決心せんと思ひ定めた、而して柳田さんは如何して此の事を知られたかと疑つた、柳田さんの姉君は自分の同窓なれば、今より訪ひて聞かんかとも思ひ見たれど、然る輕々しき事して、却つて嘲けりを招くやうの事ありては、恥かしき極み、殊に友は數月の後には高等官夫人となるべ

き人、知らざりし時はかくてもあれ、小官吏のと知りし上は面皮厚くも爭でさる事の出來べきぞと思ひ直して、只恥かしさに顏を赤らめ、口惜しさに身悶えしたのである。忘れもせぬ、母上は、自分が卒業した時莞爾やかに、信さん私は軍人が好き、殊に尉官の人が氣に入りましたが、お前さんは如何つて、お聞きだから、別に考へが有つたでも無く、只ほんのお菓子をねだる心持ちで、お母さんのお好きな者は何んでも私好きと云つたら、さも滿足さうにお笑ひなされたが、後にて聞けば母上は、其の時早くも某中尉を胸に描いて居られたとの事である、で自分は今日迄無論軍人の妻になるものと喜び勇み、何時ぞや兄上から、信さんは實に決心の強い雄々しい氣象になつたね、僕なんぞ三舍も四舍も避けねばならぬと諧謔はれた事さへある。

○

よしや斯かる話の兼ねてより無きとても、よもや田舍の小官吏の妻になるなどゝは、夢にも思ひ設けぬ事であるに、自分は只もう自分の事ではないように思ひ惑ふたのである。斯くて身を悶えし時、不意に姉さんと呼ぶ聲するに振り返り見れば、妹の花ちやん、につこりして御兩親が茶の間へ來るようにと、命せられた事を傳へた。

是非もなし、今は世を恨みじ、人をも恨みじ、自分は只運命の神を恨まねばならぬと思ふたのである。田舍には只一人父上の兄上、即ち自分の伯父上がある、それは早くから知て居る、子供が一人もないのも知て居る、夫婦共々世に容れられぬ頑強の人、可なりな資産家にて有りながら、儉約だとか、やれ吝嗇だとか言ひ囃されて、近隣の人々に爪彈きせられて居る事も知つて居る己れも心より、只だ一人の弟をさへ疎み、勝手な名の下に父上と今も往來を絶つて居るのである、祖母上が伯父上夫婦と兎角折合惡しく、その爲め祖母上が遂い我を折つて自分等と同棲されたのは一昨年の春、雪消の澤に若菜摘む頃であつた。

○

而し如何に頑強の人でも、寄る年浪には勝ち難いも

のか、六十の年を數へては、少しく心細さを感じたるか、去年の暮に世話する人の有りて、今の養子を得たれば、良き嫁もがなと亘方探りたれど、血筋分けし人に似合はしきがなければ、昔氣質なる伯父上夫婦の血統絶えては、先祖に申わけなしとて、交渉は遂に自分を襲ふに至りし由、兩親の不贊成は云はずもがなれど、血統を重んずるは我國上古よりの强固なる掟、殊に骨肉分けし兄上如何に非道の人なりとて兄弟の情は又格別そを打ち破らん勇氣もなく加ふるに祖母上は弓張月の如き、腰に力入れて何を愚圖／＼撰り好みする間柄ぢやあるまいしと、怒鳴り立づるにぞ兩親は自分を不憫とは思ひたれど、略ぼ承知したれば事の次第をよく熟考してと母上は憐れみを帶びてのお言葉母上とても血を吐く思ひであらう。

○

玆に於て自分は全く絶望した、母上の今の此のお言葉聞かざりし中こそ、一縷の望繋がれてあるように、何處やら心强くも思ふて居たので有つたが、此の時一時に身體がふら／＼として動悸のみ頻りに烈しく、耳根まで炎の燃ゆるかと計り赤うなつた顏を、兩手に抑へて夢の如く現の如く、自分の室へと退いた。一週の間は唯病める人の如く、髮も取り上げず、食も進まず悶えつ泣きつ、考へつした、思へば自分程變れば變るものは有るまい、今日迄の理想を未練なく捨てゝ、又境遇に合する新たなる理想を力脱けた胸に描かずばなるまい否々今後の自分は理想も向上も入らない、只田舍の細君として泡沫の如く過せばよいのであらう、ある單調なる生活、向上なき生活、理想なき生活に、如何で堪へるであらう、而し思ひ直せば此も浮世の習ひなるものであらう、嘗て學校時代倫理の時間に、先生が何と云はれた、己れ一身の向上理想を極度に發達せしめんが爲めに親兄弟を泣かしめてまで遂げんとする人がある、一朝成功の曉には世間の人はもとより新聞紙上にて限りなき稱贊を與ふれば、斯くて得し月桂冠は抑も何の價値がある、已に道にはづれたり、德義に背けりと、あゝ此のお言葉は自分の腦裡深く印象せら

れて、今に忘れぬのである。

○

さらば如何にすべきか、此の義理合我とても青春の血は湧き胸は躍るものを、さはれか弱き細き此の腕にして、女心に義理の柵、ぞれ打ち亂しかき破る力もなし、只此の場合我を犧牲にして、父母に報はん。斯く思ひ定めた時失望落膽の涙は止度もなく落ちた。

○

秋風一陣立ち初むる時、南向の室にてお召の二枚綿入を母上と縫合せしてありけるに、折柄親母上顏を出されて、其樣な柔か物ばかりでは田舍に行つてから役に立たぬ、それよりは木綿物の手織縞を澤山用意するがよいとの御注意、手織縞とは今始めて聞きし言葉なれば、如何なる者ぞと女中を遣して之を求めた。厚ぼつくれたる目方重き縞物縫ふに指皮がはげるだらうと心配せられた。

斯かる衣服着て水仕の業に至るまで、一人でせねばならぬのかと思へば、決心せし身も涙ぐまれた。

賑はしき都生活も、今一月の後には田舍生活と變せねばならぬ、横濱に居ます臨月なる姉上の御手紙にて、遊びがてら來るようにとの御催促なれば、御見舞を兼ねて御暇乞申上ぐる爲め、行くべきなれど、今は何の顏ありて姉上に見えて麗々しく物語り出來ようぞと、自ら遠慮しつ。親しき方々より御招待に預る事も多けれど、皆厚意を深謝してお斷り申上げた、勿論自分とても人に背いて音無しに只一人田舍に行く積りである、御兩親も其丈は免して下さるであらう。

○

斯くて我は田舍の人となつた、聞きしと見しとは大なる相異、聞いて極樂見て地獄、とはよく云つたもの如何に決心はせしものゝ、極端なる單調にして無作法呑氣にして趣味なき生活、あゝ其上父母は只々入る事を謀りて出づるを防ぐの人、働くをのみ知りて慰藉の法を知らぬ人、偶に此方から氣を利かせば、目に角立てゝの惡口雜言。

嗚呼何に向ひてか向上すべき、何を樂しみてか滿足

すべき、花々しき賑しき都生活に眷戀たりし自分は事の相異に泣いたのである。

○

霜寒き朝、素足に細き藁草履、味噌漉し笊を前掛の下にならまだしも何の隠す必要やあると、公に豆腐屋に走る程、遠き井よりは水を汲み來る、水道の水にて育ちし我の手桶擔ぐは今が始め、長き棒を肩に二つの桶を擔ぎては、只喘ぎ〳〵て細き此の肩の拔けもやすると、痛きも母の苦き顔見るよりは責めてもよしと耐えて忍んだ。

○

かくて自分は下女の如く身心休まる暇もない、良人は地方の中學を卒へしとかにて、多少は趣味も合ひ、話も合へど、無口なる上、身體最も弱く、時候の變遷には床に就くを例とせば、二人分の仕事は皆自分に負はされるのである、其の都度養父母の勝手推量言葉の烈しさ、其は常とは思へ共、又新にひし〳〵と胸痛く感じて、嫌厭の情は頻りに起り、物蔭に寄つて幾度となく涙の目を拭ふたのである、かくても自分はまめまめしく半年の間、悲しき顔一つせず、性來強からぬ身を奮ひ起して働いた。

而し慰安なき此の生活を、二十に足らぬ我の此の先き、永く續けて行く事が出來ようか、日毎今日は今日はとあるにあられぬ心地もすれど、弱き夫を思ひ柔しく自分を愛して下さる心の中を思うては、僅かに勇氣を奮ひ起して、自分は只夫の爲めに生きて働いて居るのである。



結婚前の僞らぬ心

荒びはてたる我が心胸

きみ子

十月十五日

あともう十八日——今朝取り止めのない夢から醒めると、此の考へが直に胸を壓した。斯うした處女の生活は、泣いても笑つても、もうあと十八日しか私の生涯にはなくなつて仕舞つた。

人妻——處女の純潔と自由を拂つて贖うて、悔のないものであらう歟。が何んと云つても仕方がない、女と生れた上は、「家庭」と名をつけた體のいゝ牢獄に、一度は囚へられなければならぬ、結婚と云ふ甘い束縛を一度は受けなければならぬ、お祖母樣もさう遊ばした、母樣も爾うなされた、其の孫、其の娘の私に、此の運命を遁れる事がどうして出來やう。

が御祖母樣が耐えた運命にせよ、母樣が屈服した習慣にせよ、戀の歡樂も味はゝずに、十八、十九の若さで戀の墳墓に落着くのが私は悲しい、係蹄に着けた美味には唇も觸れないで、係蹄に掛つて仕舞ふのが私は口惜しい。結婚て何？ 立派な地位の方を御仲人にしたり、婚約の指環を取り交したり、三々九度の御盃をしたり、立派な晴れの禮裝をしたり、夫んな事が結婚？ 嘘々、結婚の中味は——結婚の眞相は生の滿足を得心づくで求めると云ふ丈でせう。中味があんまりつまらない事だから、儀式だの、禮服だのつて、綺麗な上塗をして、お目出度いの何んのつて、ごまかして見る丈けなんだわ。野合と結婚と、野合には此の上塗りがない、結婚には上塗りがある、それ丈けの差違しか私には考へられません。

あゝけれども今更どうなりませう、せめて此の十八日の間でも、處女として享受し得られる丈の歡樂を味ひたい、出來る限り自由な生活がして見たい。

斯んな悶々した物思ひを銜け込み乍ら、午前中に昨日から仕掛けの、琥珀織の帶をやう／＼仕上げた。今

日は五の日故、早お晝飯戴いて、生花の稽古に行く、菊を一杯生けました。先生の御宅の花壇に、コスモスの花盛り、繊くしなやかに、模様めいた青葉のなかに白、赤、薄紅の花が思ふこともなげに咲いて居る、此の花、此の葉を其の儘白絹に押して、洋服に仕立てゝ着たら、さぞ美しい事であらう。

歸途に電車がお茶の水で止ると、丁度三時少し過ぎだつたので、母校の門からバラ／＼と三人五人、キャシメルの袴に例のバンドの金具を光らせた、姿勢のいい人達が身輕に乘込んだ。私こんなデコ／＼の島田になんぞ結つて居て、知つた方に御目にかゝつたらどうせうと思つたが、幸ひ知らぬお顔ばかり、夫れが又却つて本意ない樣にも思はれて、淋しい氣がした。

羨やましい人達……けれど三年五年すれば、どうせ私の樣に、お母さんお祖母さんの頭腦にある、女と云ふ概念の型に、押し込まれずには居られないであらう丁度放し飼にしたお池の緋鯉見た樣なものだわ、解放したつて、矢張り飼はれて居るの、お飾りの緋鯉には自分で餌を探す事が出來ないものだから。

けれど放し飼でも善い、泉水の中でも好い、も一度呑氣に泳いで見たい、思ひ出しても愉快だわ、三井さん、神山さん、私の級には文學好きが多くつて、夫れが又中々巾を利かしたものだつた。トルストイだの、ツルゲネフだの、イプセンだの、オスカーワイルドだのつて、飜譯物を電車の中でも、十分の休憩時間にも夜お床の中でも、人目を忍んでは讀み耽つた、田山花袋、小山内薫、正宗白鳥、岡田八千代は、腕から云へばこんな階級には這入らなかつたけれど、女流作家と云ふ文字で、私達の心を躍らせた。あれは慥か五年の時だつた、あんまり讀みたくつて、お裁縫の時間に、苦しい思ひをし乍ら、夢中になつてツルゲネフの其の前夜を讀んだつけ。遙かな外國の、見知らぬ詩人の筆端に生れた女、エレンだの、ノラだの、アンナカレンナだの、私達の靈はこんな人達と大變近く住んで居た其の人達の心臓の鼓動が聞える樣に思はれた。夫れで却て血を分けられた肉身のお母さん、同じ乳房に育て

られた姉さん等とは、身體の接近て居た丈で、心は遠く離れて暮した。

三越へ月に一度は行かないと、時勢に置いてきぼりにされる樣で、心細いと云ふお母さん、木挽町へ變り目の度に行かないのなら、生きてる甲斐はないと云ふ姉さん達の心より、家の雲雀と可愛がつて與れる夫を捨て、眞實可愛いゝ子達を置いて家出するノラ、そんな人の謎の樣な行爲の方が、よく解つた氣がした。

それでも卒業すれば、姉さんと同じ樣にお裁縫と、長唄と、生花や、お茶に精出させられて、出來なくつてお母さんに叱られて、着物を拵へて貰つて、白粉つけて、姉さんがお嫁に行つた樣に、私しもやられる。私が行きたいからではない、お互が知り合つて居るからではない、世間の娘さん達が廿年頃には皆嫁入なさるから、財産が釣合ふから、本人が堅いから……中學を卒業したばかりの金物問屋の若旦那、身持ちがお堅いとか云ふもの〻――私だつて品行上では、人に一度だつて目もつけられた事はない、けれど誰も知らぬ私の心の中では、夢の中では、幾度か數へ切れない程、澤山の人を思つた、あの方が嫌ひと云ふのぢやないけれど、それより好きな人は今でも外にある、只父さん母さんを泣かせても、世間を棄てゝもと云ふ樣な、熱病に罹る機會がなかつたばかりだわ――夫れでも私は無垢の處女、私と日記より外には、誰れだつて指をさす事は出來やしない、あの方だつて、こんな事はおありなさらぬだらうか。なければ猶更私の樣なものを……お氣の毒だわ

濱町――濱町お降りの方は――

吃驚して飛び上つた、も少しで乘り過ぎする所。

道の序でに大和屋へ寄りました、美いちやんの御産見舞の爲。片言云ふ時分から、美いちやん、君ちやんで、二人は姉妹より仲よしで――隨分喧嘩もしたけれど――美いちやんがもうあと二學期で卒業と云ふ五年で、お茶の水の附屬をお退學になつた迄、踊りも、長唄も一緒、美いちやんが私家の子か、私が大和屋の娘か分らない位であつたのに、此の頃はとんと御不沙汰

大和屋のつい先きが停留場なのに、わざ〳〵反對の方角の遠い停留場へ行つて、大和屋の前を通らない樣にした事もありました。お腹を脹らせて、顏に汚點が出來て、血色の惡い、だる相な物憎い恰好に、濱町小町と迄唄はれた美いちやんがすがれたのを見るのが、眞實に悲しかつたので、女つて果敢ないものだわ、こんな耶母さんになんか聞かれたら大叱られだけれど、今日も行くのは恐かつたが、義理を缺いちやいけないつて昨日母さんにヤイ〳〵云はれたので。

今日が四日目ださうで、伯母さんも、吉さん（美いちやんの旦那）も嬉しくて堪らないと云つた風で、家中がそは〳〵して居た　產室は土藏座敷で、薄暗い上に屛風などを引き廻してあるから、猶更ら陰氣くさい油紙のにほひ、消毒藥の臭氣、しめつぽい、血臭さい空氣、何だか胸がどき〳〵して來た、伯母さんが莞爾して手招きなさるので、恐わ〳〵覗いて見ました。

美いちやんはグッタリした樣な風で、すや〳〵眠入つて被居る　直ぐ目に着いたのは其の側に並べた赤い小蒲團、ブヨ〳〵した皮膚に、薄い毛が生えて、顏なんかは赤くてクシャ〳〵してる小肉塊が、其の上に載せてある、女の兒さんだつて！　鼻が低い、目がドンヨリして居る、私はふと何時ぞや見た生理學の書の插繪を思ひ出した。胎兒發生及發育の圖、人間も、豚も蛙も、胎兒の中は酷似て居る、一ケ月、二ケ月目あたりは、眼だけチョンと着いた細胞、月を重ねるに從つて、頭が出來、ノッペラボーの所へ目鼻が出來て、おたま杓子の樣な尻こけの形になる、手が出來る、足が出來る、四肢を縮めて、頭をダラリ下げてすくんだ身を、ほその緒で僅に母體に縋つて居る十月頃の形態、あゝそれが、自然の力に壓されて、熟した林檎の地に落ちる樣に、美いさんの胎內から、此の世に出て來たのか。白い眞綿を被らせられた頭を振て、フギャアフギャアと、赤ちやんが俄に、ひき蛙が潰れた樣な聲で泣き出したので、美いちやんは目を醒した、蒼い勢のない顏へ、櫛卷にした油氣のない後れ毛がばら〳〵かゝる。「まあ君ちやん」莞爾した、いつも綺麗な白い齒が

何だか物凄く見えた、濱町小町と唄はれた人の、十九の秋の衰へよう——先刻お店頭で見た吉さんの、嬉し相な勝ち誇つた顏を思ひ出す、廿日鼠の樣な顏立、氣性も其の通り、御婚禮する迄は、大和屋の白鼠であつたのだ、美いちやんの御父樣が少し御存命であつたなら、彼な人養子になんぞしなくつても、濟んだらうにと思ふ。「好い兒、好い兒、おゝおゝ、乾度乳が欲しいのだよ」大切相に伯母さんが抱き上げて、美いちやんに渡す、美いちやんの白い、ふつくりした胸が押し擴げられた、目も見えない癖に赤ちやんは口で探つてチユウ〳〵吸ふの、私何だか見てるのが恥しかつた。

お產つて本統に苦しいものよ、子供になんぞ產むものぢやないわ、知らん顏してる男が眞實に其の時は憎かつたと美いちやんが云つて居た。

家へ歸つたのが五時、丁度髮結さんが來て居た、結綿に結ふ。美いちやんを御見舞した事を話して、「赤ン坊が眞赤な顏してゝよ」つて云つたら、母さんもお米さん(髮結)もお腹をかゝへて笑ふの、些とも可笑しい事はありやしない、「だつてさうだつたんですもの」つて少し私すねて遣つた。

「本統にお早いもので御座いますねえ、御婚禮の高島に御上げ申したのがつい此間の樣で御座んすに。あの時は私嚇つ丁ひましたですよ、あの好いお髮の前髮を分けましてね、ふつくり出して如何樣——鏡を覗きました、するとねあなた、ポロ〳〵泣いてなさるんでせうつい私も貰ひ泣して仕舞ひましてすの、本統に女つて判の惡いものでしてねえ」

「だけど可愛いゝのがお出來になつて、お母さんは御安心だわねえ、此の一年てもの、隨分あれで、人知れず御苦勞をなすつた樣よ、女はねえ、子供が出來ちや餘程の事でも、觀念するからねえ」つてお母さんがお被仰つたが、本統にさうかも知れぬ、美いちやんはもうあの人の事なんぞ、思ひ出しもなさらぬ樣になるかも知れない、思ひ出したつてもう大丈夫でせう。美いちやんには長い間片思ひに、密と思つて居た戀人があつた、私丈は知つて居る、「あんな番頭づれのお內儀さ

んになる位なら、私一そ死ぬわ」つて、始終お被仰つた、其の美いちやんが今は其の人の子の母、「脆弱よ、汝の名は女なり」だつて仕方がないわ。

おや時計がなる、もう十二時？　今日も又何にも面白い事もなくつて終つた、もう休みませう、あゝ今夜寢て起きれば……もうあと十七日！



二圓の結納で結婚した 奇特な働き人

萩野しづく

「清助にも、又何か配合はなくちやね、何が何だつて、もう三十を越してるんだもの、彼だつて決して欲しくないとはないよ。」

斯う言つて、世話好な私の母は、清助に相應な、容貌や學問などは如何でもいゝ、只働いて〳〵貧乏世帶を脊負つて行かれさへすれば、と言つたやうな女を、一生懸命になつて探し出した。家へ來る八百屋、魚屋さては吳服屋、髮結何にでも構はない。「かういふのがあるんだが、何か相應な口はないかね」と言つては、少し談話の筋が綻び初めると、根掘り葉掘り聞いて、直にも尋ねていても行きさうな口調だものだから、商人達は好い加減な箇所で、御茶を濁して歸つて了ふといふ風で、却々女房の口が見つからなかつた。

見つからぬ筈である。清助といふのはつい二三ヶ月前、秩父の山の中から飛び出して來た許りで、極く正直で勉強で身體こそ健康だが、脊は小さく色は眞黑、手と言はず足と言はず、何所も彼も瘤で固まつてゐる加之學校と言へば尋常小學の半分も終へぬといふ男であつた。火鉢の上へ翳した手などを見ながら、父はよく

「汝の手は恰で岩塊見たいだね」

と言つては笑つたものだ。

家との折合でも惡かつたらしく、その頃川越の停車場に勤めてゐた父を賴つて、十幾里の道を歩いて尋ねて來た。私の家では彼が父の生家に五六年も奉公してゐた緣故もあり、且は生家からの添書も持つて來たので――そんな風で又彼の家の事情、彼の性格に就てもよく解つてゐたので、快く承け容れて、何や彼やと働いて貰つてる間に、丁度停車場の洋燈掃除夫に缺員が出來たので、その後釜へ据ゑることにした。

四日勤めては一日休む簡單な仕事は、多年鋤鍬を振つて勞働した清助に取つては、頗る樂なものであつ

た。けれども何と言つても日給僅に二十錢、呑氣なとを違つては、食ふにも足りない。そこで彼は樂な爲事を樂なりとして、安閑としてゐては駄目だと思つた。この爲事の樂なのを幸、その餘暇をば働くまで有効に出來得る限り身體の續く限り、利用しなければならぬと決心した。この強い決心と旺盛なる努力とは、彼に一反何畝かの畑を借りさせ、閑散な時を見ては、麥を植ゑ、豆を蒔き、桑を植ゑ又摘み、あらゆる力を盡して、自分の城を築かせやうとした。本職に對して、ベストを盡したと勿論である。——それは列車の中の燈火や、停車場構内の幾十の燈火が、清助がその職に就て以來、清潔になり透明になり、燭光の強さゝへも增したと噂されたのでもよく解る。見る者聞く者、彼の非凡なる精力には、驚き感せぬものはない。かうして得た勞銀の一錢二錢の端金までも、一々父の手許へ預けると言つた行方であつた。私の父も母も世話甲斐のあつたのを歡んで、百日經つか經たぬ内に、さてこそ結婚談が持ち出された次第なのである。

かうしてゐる内に半年經つて了つた。清助にも幾干か貯金が出來、給料も一日二錢增した頃、ふとした事から嫁の口が懸つて來た。

「迚も食べられませんから……」

といふ本人を傍に置いて

「一人で食べられるなら、二人になつたつて矢張同じだよ」

と母は息子の嫁でも探し當てたやうに、大喜びであつた。何でも母の實家で懇意にしてゐる米屋の主人の姪とかで、川越から少し隔たつた、日東村の貧しい農家の娘ださうだ。

で、早速米屋へ行つて、向ふの様子を聞いて見ると年齡は二十六とかで、今まで他所に奉公してゐたが、今は家で働いてるといふこと、顔は決して美いとは言はれないが、色は白く、髮の毛の豐富なとは時々結ふ髮結も褒す位だといふこと、年齡も田舍としては可成取り過ぎて了つたが、要するに支度の出來ない爲で、外に何等の理由もないと、——など言ふのを聞いて、

當方からも清助の現狀、精力家なることや、四邊の賞者になつてゐることや、前途有望な男だなど〻話すと、支度の出來ないのを御承知の上ならば、さう云ふ方に是非差上げたいと言つたやうな返辭を聞き、母は凱歌を擧げて歸つて來た。

他の人が何とか彼とか言つて揶揄すると、母はムキになつて怒つて

「何と言つたつて、この縁談は屹度私が纏めて見せるよ」



と言つて、中々熱心なものであつた。

夜になつて米屋の主人が私の家へやつて來て、恰度好い鹽梅に阿捨（その女の名）が夕方やつて來てそのま〻泊り込んでゐるから、直にも見て頂きたい、何なら明日にも其の方にも見て頂けば、これ程結構なとはないと、頗る上機嫌であつた。母は

「私が貰ふんではないから、清助さへよければ好いんですから」

それから母と米屋の主人とは額を鳩めて、この機を

利用して、旨く見合を濟せて了ひたいと話し合つた。そして適當な手輕な、見合の方法に就て考へた。結局翌朝私の家から旨を含めて、米屋へ清助を使にやるから、その時娘を店に坐らせて置いては、といふことに相談を定めた。母はその娘が清助を嫌ひでもしたらと頻に氣を揉むと、米屋は

「何に私の方は彼が何と言はうとも、私さへよければ否應はないんですから」

と、一人呑込にして歸つて行つた。

翌日清助は恰度公休に當つてゐたので、朝飯を食べるや否や、早速米屋へ箕を借りにやつた。そして店にゐる娘がそれだから、よく見て來いと言ひつけてやつた。ぢき近所なので、物の二十分とも經たぬ内に、清助は箕を擔いで戻つて來た。

「如何だつたい？」

と母が突然聞くと、

「奥樣、どうも素敵です」

と言つて頭を掻いてゐる。

「素敵ぢや解らない、素敵に好いのかい、惡いのかい」

「それが惡いのです」

「奈邊が惡い？」

「蕎麥滓が一杯あります」

「まア……………」

と母は驚き且失望したが、やがて、

「汝、そんな美いの醜いのつて、よく考へて御覽！家一つ畑一枚ない汝に、何でそんな大した立派な姫樣が來るものかね。ものにはそれ相應といふことがあるものだよ」

半ば落膽しながら半ばは怒りの氣を帶びて猶諄々と說いて聞かせた。

「華族や富豪や立派な人は知らぬこと、裸一貫の男が縹緻好みをした所で始まらないぢやないか、それよりは其の人の心持だよ、氣の確固した、心のキチンと締つた、夫婦共稼をして、末を娯みに暮さうといふ女でなければ、決して良緣とは言はれない。月に泥龜、釣

り合はぬは不緣の原因と、諺にも言ふぢやないか、私は汝によく釣合つてると思へばこそ勸めたのだ。生中に少し容貌のいゝ女房を貰つて、朝から晩まで白粉や鏡と首つ引をして、い、い、ぢやら／＼して居られたら、汝、御飯も食べられないぢやないかね。さういふ口なら、私はもう御免を蒙ります」

とまで、母は口惜し紛れに、口を酷くして怒つたので、元來が從順な清助とて、遂々する／＼べつたりに承知して了ひ、

「何分御願ひ申します」



といふことになつた。

さア斯うなれば〆めたものだ、と母は思つた。詰らぬ障碍が起らぬ内に、早く式を濟まさねばならぬと思つた。併し清助が父に預けた金錢が五圓、彼の懷中に殘つてゐたのが約一圓、如何にも斯樣にもこの六圓足らずで、結納から其他の雜費まで間に合せなくちやならぬ、かう思つた時には、流石の母も吐息を吐いた。

仲が不和くて出たにしても、兎に角實家は實家であるから、一通り淸助の兄の許まで通知してやつた。折返し返事が來、次いで米一斗、挽割三升、味噌一樽が屆いた。返事には當日は出られぬから宜しく賴む、此の品些少ながら生計の一助として與れとあつた。

取り敢ず先づ二圓の結納を贈つた。さてこの次は家である。何ぼ何でも花嫁が來るといふのに同居では拙い、たとひ三疊でも四疊半でも、家がなくてはと言ふのが母の言分で、それは好都合に、停車場近くに長家が一軒空いてゐたのを借りた。田舎のこととて家賃は七十錢で、それでも六疊が一間に押入が付いて四疊半位の土間、土間とは言ひ條板敷になつてゐた、急性な母は借貸の約束が成り立つや否や、淸助をやつて綺麗に掃除させた。

善は急げとばかり、母と米屋との往復が二三度あつて、愈々此の次の淸助の公休日に式を擧げやうといふことになつた。無論、淸助には衣服一枚あるではなし結納やら家賃やら種々に費つて、六圓の金も何時か殘り少なになつてゐたし、新調所の騷ぎではない、損料を借りてさへも間に合ふまいと危まれた。仕方がないから當日の衣服一切は、私の父の古いのを貸すことにし、膳、椀、行李を携へて一と先づ彼は新居に移つた。

「汝、頭でも刈つたり、髯でもお剃りな」

いゝ、ゝ、もぢや〳〵した無頓着な顏を見て、母が笑つてゐる内に、其の日が來た。

非常によく晴れた日で、裏口から遠くつゞいた桑畑には、若々しい力強い靑葉の光が、潑溂の勢を見せてゐた。晩起きして、淸助はその日の仕度に忙しかつた。饂飩粉を二升計り買つて來て、不揃な延板や麺棒で、捏ねたり延したりした。母も朝から其處へ行つて何や彼やと世話を燒いた。

黃昏近くなつて、花嫁は米屋の細君に連れられて來た。服裝等も至つて簡單なもので、帷子に綿縮珍の帶前桐の簞笥や其の外の小物は、花嫁の弟が、米屋の車に載せて引いて來た。それでも酒に飯物、口取位ののは附近の小料理店から取寄せることが出來た。米屋

の細君と私の母とは、媒酌に接待を兼ねた形で、甲斐甲斐しく立ち廻つて、酒や料理を運んだり、三三九度の盃を交はさせたりしたのである。

虚禮から離れた自由な、充實した觀樂の聲は、唄となり、談話となつて交々換はされた。このむさ苦しい片田舎の茅屋にも、時ならぬ萬顆の華は咲き誇つたのである。

斯くの如くして阿捨は淸助が妻となり、淸助は阿捨から夫と呼ばるゝに到つた。是れ實に明治三十年の眞夏、日淸戰爭も夙に終つて新强國日本の勢、朝日の昇るが如き頃であつた。



＊　＊　＊　＊　＊

「見も知らぬ男と女を、東から西から連れて來て、所謂媒酌なる者が、好い加減に付き合せる。かうして出來た夫婦が、果して圓滿に各自の義務責任を盡して、夫婦なる者の本能を全うすることが出來るであらうか」

私達は近代青年の聲として、かう言ふ嘆聲をよく聞いてゐる。又實際此の方法を非なりとして、自ら泰西の自由結婚に則り、舊い形式習慣を打破しようと試みる人達をも見てゐる。しかし其の多くの場合失敗に了つてゐるのは、殆んど動かすべから

ざる事實であるらしい。して見ると、私達は如何して好いのやら分らなくなつて了ふ。

で、私はかう考へた。消極的な話だが、理論は別として、舊い習慣に從つてゐて差支へないと。あれだつて決して偶然に打つかり、偶然に夫婦になるものとは思はれない。宇宙間――いや何處だか解らぬけれども何處にか吾々の眼に見えぬ、人間の想像も及ばない偉大な力を持つて居る或る者があつて私達の運命を何等かの法則によつて、勝手に支配してゐるのだと。……そして其の或る者といふのは、永久に或る者で、神であるかも知れない、佛であるかも知れない、又神でも佛でもないかも知れないものだと。

清助と阿捨との縁の糸も、この或る者によつて旨く取り結ばれたものと見え、夫婦の主張はいつも一致すると言つたやうな工合であつた。清助の言ひ出すことは、阿捨は必ず喜んで迎へ、阿捨の獻策は必ず清助が喜んで取り用ゐた。

一緒になると間もなく、幾枚かの畑を餘計に借り入れた。茶摘、桑摘、種子蒔などには家を戸閉にして、二人揃つて畑に出ることも少くない。それでゐて清助の職務に對する誠實は、前にも增して上役の眼に映つた。阿捨も間々を見ては、他人の衣服の裁縫洗濯から機屋の糸を座繰でかへした。天の理も地の理も、人の和には敵はないと言つた、聖人の言葉は永久に眞理である。夫婦がよくも氣を揃へて極力働くさまをば、彼を知る人々は何樣にか羨んだらう。

努力の功は空しからず、金はどん／＼貯つて行く。隣近所の評判はよくなるばかり、停車場の上役からは信用され、一年許りの後には拔擢されて、倉庫の鍵を預る役となり、同時に日給三十錢に昇給した。この年桑葉は價が高く、麥は饒かに實つた。つゞいて男の子が生れ、私の家で孝太郎といふ名前を命けてやつたが清助夫婦の歡喜は大したものであつた。歡喜に亞ぐに歡喜を以てした此の新しい家庭は、花に花が咲いたやうな心持で日を送つた。

三年經つた。私の家では職業の都合上、東京へ出な

くてはならぬことになつた。で、少し許りの地所、家屋の差配など後事を清助夫婦に託して、四谷尾張町へ家を持つた。移轉の日など二人とも東京まで來て、荷物の整理に骨を折つて呉れた。

五年經つた、千載一遇の福音が、鐵道從事員の頭に落ちて來た。それは鐵道の國有で、皆相應の金にありついた。川越鐵道は買收にはならなかつたけれども、甲武鐵道と合併營業をしてゐた爲め、清助も數百金を貰つた。清助は夙に驛夫ではなかつたのである。この秋にも女の子が生れた。阿捨は私の家の小作料とか家賃とかの溜つたのを屆けがてら、子供の名を命けて貰ひにわざ〳〵來た。母は重ね〳〵の歡喜を祝つてやり子供の名は父が種々の本を引繰り返した末、仲子とつけた。

曾ては結婚の翌る朝、顏を洗ふ道具がないと言つて借りに來たこの夫婦は、

「御蔭さまでもう貯金も千圓になりさうですから、御安心下さいまし」

と言つてゐる。その晩は泊つたので、皆して愉快に、「努力」「辛棒」「和樂」と言つたやうなことを面白く話した。

昨年の夏、私の家では又更に四谷から目黒へ移轉した。この時も眞先に手傳ひに來たのは清助夫婦で、加之、清助に模倣つて結婚させた二三の人も來た。愈々移轉も終ひ、大方荷物も片付いた時、母は心ばかしの料理と酒とを持つて、皆の勞を犒つた。

席上父は酒を呷りながら、

「世の中は何より辛棒が大切だ、この清助が何より好い模範だ」

と盛に賞め讃へた。清助も阿捨も、嬉しさうな微笑を以て、人々と面白く談話をして夜遲く歸つた。

清助は今も驛夫世話役として、日給僅に六十錢の薄給だが、地所家作は三四ヶ所も持つて、正直で義理の確いので、多くの人から信用されて心豊に暮してゐる。


竹の下

彼女は如何にして輝やく夫人となりしか

深山木

文子様、昨日は久しぶりの御目もじいと〳〵嬉しうつもりし御話の數なか〳〵に盡き申さゞりしを、電車の進行早くしていつか乗換の須田町に殘惜しき御別、またの御面會の待遠うさ、近きうち御暇もおはさば訪ひたまはらずや、私もお伺ひ申し上ぐべく候。

まこと古往今來、結婚は女の一生の大事、生涯の榮春として、また目的とも考へられて女始めて此の世の風にふれてから十七八年、或は二十年の其の間の訓練教育はすべてこの目的の爲に成さるゝと申しても宜しかるべく、そもや未だ無心の七八歳頃でも、ふさ〳〵とした振分髪、やはらかな紅の頰、衣服の柄にも心をこめて美しく美しくとの心づかひ、まあ御可愛らしいとほめらるゝを喜ぶは何故、小學校から女學校、文字も立派に裁縫もうまく、お歌も詠めばお琴も彈く、お茶の心得お花の稽古、かよわき身にはあまるほど仕事のかず〳〵、姿かたちもたをやかに、花の顏、月の風情、身も心も僞なく汚なく何處に出してもひけを取らぬやうの親心はそも何故、まあ殆んどみなお嫁にやらうの準備に外ならぬと思はれ申し候。

かくの如くして、上は金殿玉樓の姫君より、下は賤が伏家の鄙少女までも、遂には奥方となりおかみさんと呼ばるゝのが女の身の定まつたなりゆきにて候へば既婚の婦人を訪ねて其の結婚經歷談を承り候はゞ、ずゐぶん十人十色の御談もこれあり候はんと存じ候。

夫れにつけても、あのそれこの夏、私を御訪ね下されし候をり、いぶせき門にはふさはしからぬ金紋ゴム輪の車の主は誰ぞと道ゆく人もあやしまむと思はれし、その流行づくめの奥様姿、三十を越したお方と申し上げしに、てもさてもお若さよと御あきれなされし、〇〇會社の重役〇〇氏夫人英子の君、と申せば、なにあの貧乏士族の娘と今の御身分うらやむ人は、すぐにかう申し候へど、實元から今のやうの御身分にてはなか

りし由、もう十年も昔の話とき〻候が、未だ故郷に居り候ひし頃より彼の君のお父上と父とは御懇意に致し居りしよし、其の頃彼の君のお父上は故鄕の縣廳に御つとめ遊ばし、さほど羽ぶりのよき人にてはなかりしとか、されば派手な方にて交際好の交際上手、殊に目上の人々とはわけてもお親しくあそばされし人の集まる場所へはきつとお出でになりし由、なか〳〵活動的なお方と聞き申し候、それで御令孃樣方を御縁付遊ばすとも、たゞ向からこちらの御令孃をと所望せらる〻まで、待つておいでにならず、なんでも活動的に積極的に、行末有望の人と見れば、こちらから道をたづね傳をもとめての御運動なか〳〵にて、英子の君とても同じ樣な運動で首尾よく〇〇夫人と御成り遊ばし候とか、〇〇氏もやはり私どもと同鄕の御方にて、その當時、某會社で若手にては有數の人物、風采も立派に頭も明らかなり、洋行歸の智識も廣く學問もありと御見込遊ばされては、などてか逃がしたまふべき、あちらこちらへと御奔走の甲斐もなう、見事お斷りも二度三度、されどその位にて閉口は遊ばされず、遂に御母上樣の御發案にて、とある占者の門をおたゝきなされしに、この緣談當地にてはむづかしと申し候へば、忽ち家をたゝむで海山三百里なんのものかはとこの東京に御引き移りになりて、(その頃〇〇氏は東京の本社におつとめなされ候ひしとか)御姉君等の立派な銀行家、高等官の御夫人としてときめきたまふ肩書をもつて、目ざす御方の恩師某先生にすがつての懇願、効果あらたかにして、あたるもあたらぬも一八卦、手だれの弓よりもよく見事にあたつて大願成就、英子の君は遂に〇〇夫人とお成り遊ばされしとか、それで絶世の御美貌あるにてもこれなく、人に優れし賢婦人の聞えもこれなく、學校は小學校を卒業なされしとやら、なされぬとやら、御姿とてもその頃は今ほどでなく、それは見られたものではなかりしとは人の惡口か知れず候へど、今は位置でみがゝれ黃金でひかり、女學校など卒業あそばされずとも廣い交際に智識もひろまり、さして御不自由もなしとかや、御容姿とても肥つてはお

いでなされど御背は低くけれど、こらし給ふ御化粧の美しさ、御召物とても四時をり〳〵の花紅葉、流行におくれじとの御心づかひは、ちよつとの御出ましにも見え申し候、おきまりの胸のあたりにきらめくはゴールドチエーン、美しき御指に輝くはダイヤのリング、二頭立黒塗馬車に悠然とうち乗りたまふ時など、何處からどう見ても天晴見事な貴婦人ぶり、と私がかう申せば兄などはすぐ、なにあの杓子顔の横ぶとりの、家鴨があるいてゐるやうな、裏長屋のおかみさんでゝも、あつて御覧と申し候へど、私にはとにかくお美しく、お重々しくなか〳〵お立派に見え申し候。

かくお立派づくめは御自身のみか、弟御様にはお蔭を以て大學まで御卒業、只今では或地方の高等官とやら事務官とやら、御兩親様にも女中の二三人も使つて樂々な御暮、母上様も好きの御芝居も替り目毎の御見物娘のおかげでとお喜び遊ばされ候よし、お孃様の御邸においでになつても、我が娘や聟よりも下座におすわりになつて、いつも〳〵御世話様にばかり相成つてとお世辭の口上澤山の由、それでも他人前にては、娘が聟がと呼び捨てに親御様の御威權のほどを見せ給ふとか。

文子様いろ〳〵さま〴〵の御話も多き世に、こんな風に運動してこんな所に嫁し、己が身のちいさき虚榮心の滿足のみか、父母兄弟までもお世話なさるお方も候ぞかし、之を知る人、或は大した御出世、おえらいとほむるもあり、そんな眞似はしたくなしと、けなす人もあり、その善惡いづれは見る人のこゝろ〳〵に、まかせおきて、私にはめづらしく感ぜられ候まゝ、お話し申し上げしにて候。

あまりにいろ〳〵のこと書きちらし候まゝ、いつしか四隣寂としてきこゆるは草葉がくれの蟲の聲々、あな夜もふけて候、さらばいざ、こゝらにて筆とめ申すべく、申し上げたきかず〳〵は再び御面會の日にゆづり申すべく候。さらば

十月なかば　京子

文子さま

新世帯を持つ人の心得

とし子

宏壯なる家に住ひ、美しき衣裳を着、毎日樂みて暮さんとは誰しも望む處なれども、通例の人にありて其の希望を滿足させん事は到底叶ひ難き事なり。されば人は其の日其の時の境遇に滿足して其の身、其の分限に安んずるの覺悟なかるべからず。人若し勸工場に入りて其の欲する所の物を求めんか。衣裳手廻品、頭髪の具、庖厨用、家具、小間物、其外種々の用具に就て一と品づゝ求めんとするも數十圓の金は立所に消え行くべし。若し入用の品を悉く求め備へんと欲せば數百千圓の金を用意して尙足らざるを覺ゆべし。それ使ふべき金は無盡無際にして猶購ひ得たる品はそれにて決して足れりとはせざるなり。譬へば一揃への庖厨用具、一揃への身の廻り、一揃への夜具、乃至一揃への文房具にせよ、これを一から十まで備へて完全無缺ならん事を望みたらば其の品數は夥しき數に及び爲めに其の取扱ひの煩雜にして手數を要する事一と通りにはあらざるべし、故に日用道具は及ぶべくたけ品數を省きて諸事簡便を主とし、品物の爲めに無用の手數を煩はさざるやう心掛くるぞ家事經濟の主眼とするなり諺にも戰場で飯食ふやうにせざれば世帯は持てずといふ事あり。世が文明に進むに隨ひて一般の衣食住は益々贅澤に進むは勢の然らしむる處ろなりとはいへ。さればとて食事の爲めに一日の大部分を費やす事は今日未だ普通の家計に於て實行し難きものなり。成程割烹に材料を撰び、烹煮の手間を掛け、器皿を整へ。食卓を飾り品數を並べ立てゝ體裁も立派にし味いも旨くして樂んで食すべきは誰しも願ふ處なれども、主人は元より職業上の用務に一日逐はれ、主婦は一家の用務に終日營々とし寒時には寒時の用務あり、暑天には又暑天の用務あり、一年四季一家内の雜務に鞅掌しつゝ日を暮らし行くは、まづ今日の社會一般の傾向たるべく、縱しや下婢奉公人を數多使ふ家々とても、それには又それ〴〵の用向多くされば、今日食物調理の爲めに一

日の大部分を費やすといふ事は用務のなき氣樂人の外には、まづ行ひ難き處ろにして、女學校出の新婦が新なる一家を組織せる場合にても、學校にて學び得たる料理法を樂んで、實地に應用するは、僅かに新婚後三四ヶ月位の間にして時日の經つに隨ひ家務の煩雜に追くに及べば、食物の献立などは自然と簡便の主義を取らざるべからざるに至るは、一般の習ひにして、まづ勢の然らしむる處といふべし。

人生生活上に尤も肝要なる食事庖厨の事に於て既に然りとせば、其他の家務に簡便主義を取るべきは勿論の事なり。衣服や髪飾りの品に新流行を逐ひ、身の廻りを飾り立てゝ萬人の眼にうらやまるゝやうにするか、又は髪を手づくねにして黝んだやうなる衣服を着世帯やつれして家の隅にくすぶりて居るがよきかといへば、誰れしも前者のやうに立派にありたく願ふ處なれども世の流行を逐へば一領の衣裳にも主人が一ヶ月の給料を擧げて費さゝるべからず、今日流行の鑄型に箝らんと欲へば朝から御化粧にかゝらざるべからず。費用は元より時間の經濟も又大したものなり。親がゝりのお孃さんならば兎も角一軒の家庭を整へて行く人の出來る事にあらず。さればこれも又例の簡便主義を取り、萬事を質素にし、實用を旨とし。着物は世間へ出て見苦しからざるまでとし。なるべく派手なる風俗を避けて實際の徳用向を考へざるべからず。大體今日の風習として兎角新流行に逐はれ勝にして婦人が衣て通るにも人前に出づるにも動もすれば衣裳の共進會たるの趣きあるは嘆かはしき事なり。流行の衣裳も一二年にして時代後れとなれば可惜綺羅を廢物に歸せしめ、流行また流行と碌々着もせざる衣裳の廢物が箪笥の底に祭りこまるゝが如きは誠に不經濟の極度にして、小にしては一家の出費、大にしては國家の損害たるべし。

衣食に就ての經濟この如し家計萬般に注意を要すべき事、擧げて數ふべからざるも、まづ要するに無用の物品は成べく購求せざるをよしとす。豈唯無用の物品のみならんや、一と通り有用の物品に考ふるものにて

も、十分思案の上にて、是れは是非とも無くてならぬ物と、前後の勘辨つきたる上ならでは、容易に手出しはならぬものと思ふべし。新世帯ならば知らぬ事、舊き家々にては大凡の物は持ち傳へて、其家に備はり居る事なれば、大抵はその品物にて我慢すべき筈なり。庖厨道具にせよ、座敷の用品にせよ、又は室内の修飾品、文房の具、手廻り品、何にても能く／＼注意して家に在り來りの品物を見極はめ、それにて我慢のなる物ならば、それにて間に合せ、まづ忍んで買はぬがよし、よく／＼時代後れの物にて詮方なければ新調すべし、併し一度興に任せて商店の物を買へば、其の費用は永久に亡ふ事と合點すべし。

總じて何品にても、少しは家の内に不足と思ふ程にして置くを、家事經濟の眼目とす、有り餘るといふ事は不經濟の始めなり、世帯の要法は物の不自由を忍ぶ處ろに在り。人と容物は何程ありても十分といふ事には行かぬものなり、又一の物に不自由を忍べば、其心萬事に行渡りて大なる得となる。第一家内に多くの物品を備ゆるは、甚だしく手數のかゝるものにて、一々之れを整理するといふ事は、多忙なる家にて難き事なり。さればとて、散亂すれば破損を招ぐ、一個の器物を納むるには、又一個の容物なかるべからず。其又容物には置所もなかるべからず。十疊の座敷も八疊に狹めらるゝは、之れが爲めなり、されば家財物品を購求するには吟味の上にも吟味をなしよく／＼注意して、家の失費にならぬやう心掛くるは、家事經濟の要領なり。世間世帯の活用として唱へ來れる買物の心得を左に摘記せん。

凡そ買物を爲すには可成く知れる處ろの商人より買取るべし、毎日消費し易き處ろの日用品は成るべく其の時の必要の需めに應じて買ふべし。多く買置をする時は餘分の消費をなすものなり。又時節の移り變りによりて不用となる品、或は永く家に貯へて味ひの變ずるものは少々づゝ買ひ求むべし、又一時的のものにて直ぐに廢物となる物を買求めざるやう注意すべし。買物は知りたる商人より買取るべし且つ商賣繁昌の

家に於てすべし。
買物は價安き直段の物を買ひて時に損ありと知べし。
買物は自己の知りたる品物の外買ふべからず。
買物を知人よりする時は決して直切るべからず。



買物の品を引換へんとする時は以前よりも惡しき品を得るものと覺悟せよ。
惣菜を買ふには能く家内の人數によりて定め、且つ其量は少し內端に見積るべきものなり。



嫁がぬ人

内藤千代子

私ねえほんとに口惜しかつたのよ。十一月の增刊には何を募集になるかしら、今度こそ天晴一等當選の榮をと心ひそかに樓閣をゑがき、樂んで待ちまうけて居たものを十月分の終ひのページパラ〲とかへして見たらまア「嫁に行く人」だつて。これぢやア手がつけられない、すなはち雜誌投り出して撫然たり、あゝ私にもこんな經驗が欲しかつた。

けれど考へたら萩香だつて嫁君の候補者よ。あら笑つちやアいや。ほゝゝゝゝ此樣周圍高でもね、生れてこゝに十七年、美しうはなくとも花乙女、世間が打捨つてはおかないんですもの。エ、自惚きつてるつて!!まア、聞いて頂戴、私はね、男を釣つてるのあやなすのと云はれるけれどこれは社會の罪ですわ。皆さんが惡いのよ、それア私の臆面なし、何誰をだつてお友達に、別けても西さん泉田さん（大學生）とは仲よしでよく遊びました。夕月淸き春の花野のそゞろ歩きや、星美しう輝く夜共に窓によつて藤村詩集を朗吟したりふとした動機で手を握り合つた事もあれば、雜誌の口繪を見やうとて頰すれふれた事もある、今から思へば疑はれたのも無理はないのだが、それにしたつて私、裏の畑の葡萄棚のかげであられもない、前齒で皮をむきむき砂糖黍をかじつて居るとこを見られて大笑されたり、木のぼりをして母樣に發見られあはてゝ飛び下りたはづみに引掛けて片袖引ちぎつて了つたり、ほんとにお轉婆な罪の無さだつたのに、もウ西さん達は盛

んにお友達から冷かされて被居るんですもの。初めは萩香も驚いてよ、私風情を相手と云はれて甘んじてそれを受けてる方達も方達なら、皆さんが私をそれ程お氣に止めて居らると云ふのも意外であつた。でこの時初めて處女の誇りといふものを自覺したんです、男だなんて威張たつて情の前には膝を折る。弱い女、まして鳩のやうな乙女、嘲けられても罵しられても手向ひは出來ぬ、直に膝を折つてひれ伏して足下に慕ひよ



る青年達の正直さ、紅や白粉を好んで用ゐ出したもその頃から。あゝ去年まで無造作な下げ髪に白りぼんなびかせてふざけまはつて居た萩香は一年後の今日此頃、長い袂を噛み乍ら物思ふてよる緣の柱に島田にあとが油じんだ。嗚呼昔から父親のない娘は嫁に貰はないつて、まつたくでせう。私だつて父様が御存命ならこんな女になりはしなかつた、が、果していづれが幸か、不幸か……あゝ、今日は、もう何もかもお話してよ。あら懺悔だなんてまさかまだ

懺悔する程の惡い事は致ませんよ。

昨は早稻田のポエトにラブし、今は赤門の秀才に秋波を送る……それは罪惡と名づくべきでせうか、

「……貴女はあまりセンチメンタル過ぎますよ、見る人を美しと認め見る人を戀ふ、乙女の熱い血が沸いて、憧憬、活動、濃い花やかな青春の標象代表、とは云へまだ卑俗な現世を知らない若い萩香さんが、令孃的想像で社會の人に對するのは實に危いものです。くれぐれ自重して下さいよ、それや母樣が信じて許してお置きになるんですから、安心して居ていゝんですけれど、ロマンチックな御性情なだけ、一時の情に馳せやすい可愛い方なだけ、私は心配で成りません……」とは藤子樣の手紙の度くり返される言葉です。いゝわ、私、何とでも云はれやう。散る花はまた枝に咲かうし逝く春はまためぐり來れど、私の妙齡はいつまでつゞく、否、何度ある、色あり香あり蜜あつて、心身ともに自由な今、あだに過してどうならう。

友よと呼ばれて兄と慕ふが何の罪、それアね、手箱に秘めた四十何本のあの玉章、そこらの道學者先生に一寸一通でも、眼にぶら下げたなら、卓をなぐつて「亡國のもと」とさけぶでせう。だけど、ねえ先生、「和肌の清きぬくみにふれもせで、さびしからずや道を說く君」つて歌御存じ。何、そのレター、ほゝゝみんな兄樣のよ、あら何故？　兄樣のですもの、お友達ですもの。幾人あつたつて不思議はないぢやありませんか。えゝそれや他人から見たらね、とても友情からばかしとは受け取れぬ文字もありませう、若い血をうづに沸かして、その甘い泉に醉ふ想思の間かと驚ろかれるやうなものもありませう。が、新綠燃ゆる青葉の森を床しと戀ゆる熱烈な若人達のことですもの、私はもウ馴れつこでこれが普通だと思つてます。時にはこれ以上いやみな文句の加はらない事もないが、それが無い時は矢張物足なく、事實これが樂しみなのね、淺ましいやうだけれどまつたくです。從つて御返事出すにも所謂甘つたるいと云ふんでせう、花やかな——隨分憧がるゝ樣な文句も書きますわ。

併しどうぞ御安心下さい。萩香は少女の生命をまで失なふやうな事は致しません。他目には危險と見えるか知らないが父樣なしの身は家事向きから交際上のことまで萬事母樣と二人で取りさばいて行かねばならぬのだし、それやこれや種々の境遇に接する機會が多いから、尋常の孃樣方にくらべては酸いも甘いもかみわけて居る。箱入娘や、あまりきびしい家庭に育つたもの程、誘はれやすく、まどはされやすいと云ふのは、何のわけでせう、些と足もとに氣をお附けになつた方がよくつてよ。

ですがね、墮落したり、誘惑されたりする人達も、決して無理はないんですわ。異性から優しい言葉をかけられて、誰しも惡い心持のしやう筈はありませんからね、はゝゝゝ　お恥かしいけれど滿員の電車のなかで席を讓られたつて、それが若い學生だと胸の血汐は沸き立ちます。

野菊さまぢやないがそんなクリストの

「――を見て情を起すものは、すでに姦淫したるなり」主義でやつたら、まア今の世にけがれのない人間でないことよなればこそ「べからず」訓なぞも發布さるゝのではありませんか。觀音樣や木ぼりの天女ぢやあるまいし、普通の常識をそなへたものなら、ね、決して浮いた心ではなくつても、恨み多き我が處女の身は慨して情にもろいもの、一寸眼と眼の視線が落ち合つたばかしでも何となく忘れかねるなんて……。

もと〳〵人は感情の動物、いはんや青春の時代に於いておや、でせう。血の沸く時にや沸かせるがいゝ、人を戀して悶えるならいくらでも悶えるがいゝ、夢は束の間、戀ははかなし、が、けはしき人生の行路に咲き出づるたゞ一本の、あはれ詩人は歌ふでないか、我が世の花を戀と呼ぶ……と。

私は戀の歴史を持たない者は、灰よりもあはれな人間だと思ひます。つて自分でもまだ纏まつた戀をした事はありません、いゝえ、この身心を捧げてまで戀したいと思ふ程の人を見出せないんです。エ、大原さん?、まア誰がそんな事を云つてしようがないのね。ホ

イハイ白狀してよ、それアね、まつたくあの君ならば戀人に持つて不足はないと、ひそかに思つた事もありました、けどたゞさう思つたばかしよ、だつて……だつて……思つて居たつて仕方がないんですもの。また此頃おわるいんですつてね、ほんとにおいたはしいわ。若うして、不治の病に泣く薄倖詩人、病苦の故ならずとも胸のなやみはしげからう。夜毎〳〵の御夢に立つは紅梅孃（澄さんの）俤か、妬しい氣もするけれどつくづく同情に堪へぬ。私のことも折には思出して下さるでせう、あんな御病氣の出るせいか、ほんとに溫和しいお坊ちやん育ちのなつかしい方でした。あゝ逝く春の落花の夕べ、二人は詩中の人であつたが……あのお近眼鏡を俯けては、美しい齒を見せてお笑ひなさる初心な御樣子があり〳〵と目に浮ぶ。あゝまた御見舞狀書かう、思へば澄さんはお羨ましいのねえ……あら何變な笑方して？　えゝ女に片戀はないもんだつて。串談ぢやなくつてよ。――可哀想にあの久子さんね、儘ならぬ浮世のため意中の人との緣談がやぶれてからもう半分自棄氣味であちこちからの申込みも一切嫌だでたて通してます、薄尾花や女郎花に露美しくも、月に風情の妬くとも……一生オールドミスで居るつもりつて泣て云ひました。桂子樣も生涯獨身で藝術の硏究に身を捧げると云つてゐらつしやるけれど、そこには矢張うつせみの雪子に似た悲しいわけが紛糾錯雜つて居るんです、人生一度は必ず戀のあるべきもの、處女に聞いて御覽なさい、みんな思がけぬ秘密を抱いて居るものよ、人間……まして乙女の身で理想や空想のないものは、むしろコンマ以下に近いんですわ。

ほほゝゝゝ、萩香みたいな女に増ゑられたら日本も滅亡だらうつて、まつたくね。ところがこゝに好いコントラストで御紹介したい人がある。元代樣……知つてらつしやる？　ほら背のひくい横肥りの方、私と一緖に歩くとね、淺草公園がはだしで逃げ出すつて。ほほゝゝだつてまるで十二階とパノラマをならべたやうだからですと。隨分ねえ。

もう廿三と云へば、青春漸く老いて……とさけぶ

に遠からざる――、いゝえ處女さびてるなんて柄ちやないのよ、同じお獨身でも秋甫女史なんか……あの方だつて二十五六でせう、けれど何處かにより附きがたいやうな沈むだ重々しい美しい――色にたとへたら紫ね、逝く春の花散る風も紫よ、若き子がなやみの夢の色……

が、元様は桃色とでも云はなければならぬ時代後れと云ふのかまア頭が幼稚なんでせう。熱血をどる樂しい花やかな青春時代をもそれと意識せず、更け行く年を惜しみもせず、いつも〳〵栽縫にこれ日も足らずといふ有様、私はこれで元代様にも趣味や理想と云ふものがあるかしらとつく〴〵ながめられる。



その世間の事情にうとい事つたらね、本郷座で不如歸をやつてねえ隨分泣かせるさうですよ、と云へば、あら左様ですか、私まだほとゝぎすの聲聞いた事がありませんが何と鳴くんでせう。串談にだと思つて、えゝテッペンカケタカ、オトヽコヒシヤ、つてよ、と云つたらそれをほんとにしてお了ひなさる、あきれて物が言へなかつた。赤門の花、とは吉原の美妓のことだつて。でも大門を知つてらつしやるのが不思議だ。

もつとも新聞に一ツ目を通さないんだもの、暇がないから暇がないからと有仰るけれど、なんの新聞雜誌を讀むぐらゐの暇、他から見ても有り餘つて居る。小猫や他家の赤ン坊あやす暇はあつても讀む間はない。萬事この不如歸式でやるのだから恐れ入るわ。御兩親揃つて何不足ない家に中學五年生の弟と四人の妹に姉と呼ばれる身があまり情ないではないか、それも私みたいに口ばかり達者な藝なし猿ぢやない、小學全科を優等で御卒業後、裁縫はもとよりお琴やお花、お料理までお稽古なすつたので何處へ出してもひけは取らぬ筈なのが、この通りいまだに思はしい御緣もなしでゐらつしやる。

これでいよ〳〵新夫人となつたら何うでせう、御飯焚きや洗濯なんぞばかりいくら上手でも、自分が上に立つて下女使つて一家を切つてまはすと云ふことが出來なくつちや當世仕方がないわ。やつぱりお姑さんのあるとこへ行つて、その指圖を受け乍ら小さくなつて暮さねばならぬのね、あゝ私は元代樣のやうにばかりは——ばち〳〵ッ、アッオ・熱ッ、マア吃驚した、火鉢の栗が跳ねたのだわ。一ッ上げませうか、熱、熱、美味さうに燒けてよ。興がさめる……ほほゝゝゝちや一寸私の三疊をのぞいて頂戴、机のまはりには墨だらけ手垢だらけの古雜誌を幾十冊となく積み上げ、鉛筆の削りごみとはぢけ豆の皮がさんらんし、硯箱は先日ついふみかいて了つて今ぢやパナ、ケーキの空折が御用をつとめて居るし、ペンもナイフもヘラも、簪もごつちやに同居し、インキ壺と白粉の瓶がおし並び、ゑのぐ皿にはお薩のなきがら。我ながら隨分殺風景ねえ。あれ、机の抽斗しを開けちやいけない。オホヽ……

……

私ね、此頃大變肥つたつて。さう見えて？　餘りお芋やお汁粉を食べるからなのよ、昨日も髮結のおまきつてばほんとに萩樣のお肥り遊ばしたことゝ、いまに頰べたなんか落ちさうで御座いますよ、此節はお目に掛る度肉がお附き遊ばすやうで……」なんて笑ふんですもの、口の傍をひねり上げてやりたかつた。此間ま

で、やれ萩様は蚊とんぼの干物のやうですの、守口大根の化物だのと弄かつたくせに。

あゝ岡さんから手紙が來たわ。鳥渡失禮します、先日の返事ですから！……。まア驚いた。驚いて了つたひどい方、ほんとに岡さん！「萩香さんは――おこつちやいけない――まアやきもちやさんの方だ。その方の優等生に成りはしないかと案ずる。萩香さんの「貴郞となる人は、餘程注意しないとヒドイ攻撃に合ふかもしれぬ、夜少し位お歸りが晩れたり、旅行でもして所用がのびて歸宅つたりしやうものなら、インキの跡も紅だと主張さるゝ側ぢやなからうか、コレはチト皮肉つて失敬――」

馬鹿にしてる。チットどころか大いに失敬な。おぼえてゐらつしやい、やきもちやきだなんて？

「僕は直言します、心にもない好言はならべませぬ。お氣に召すやうなチックでチカ／＼さしたり、憧るゝやうな文句をならべたりする事が出來ません、それはバカだからです、朴直でせうかな、ツマリ融通がきかない質なんでせう、當世に比例しませぬ。

あんな事を思はれたり、筆にされたりするのは女の事です、あなたは男にお成り申すのぢやないけれど、今少しあッさりと淡泊にやりませう……」

これではなんぼ私でも顔を顰くせずには居られないいくら直言だつてあんまりだわ、どうせ萩香は女だことよ、女が女らしいぐちを云つてもいけないのなら、何故會心の友だなんて有仰るんです。得がたい會心の友、手紙も度々差上げたい、の、世に會心の友の音信を聞くより嬉しきはなかるべし、などゝおだて上げたり、あたゝかい花のやうな人をチャームする樣な言葉に私には作られません、なんて弱い音を吹いたかと思ふと今度は、チックでチカ／＼的と罵倒された。

ほゝゝゝ勝手なもんねえ、口惜しいけれど可笑しくつてつい苦笑もしたくなる。だけどほんとに岡さんはもウ直ぐにも家庭をお作りなさらねばならぬ御年頃いつまで下らぬ私なんかと手紙の贈答なぞしてゐらつしやるんでせう。餘計な事だが氣になつてしやうがな

い……。あまり私がいろ〳〵な事を云ふので、僕の手紙に青春のぬくみがないの、砂漠の砂より甚しいのつて何のこつた、とおこつて了はれた事もある。僕は年のせいか萩香さんの若々しいのが羨しい、と眞面目で老人くさい事云つてよこされる時もある。よく岡さんには叱られるのよ。それがまた面白くつて！ 殿方つてわりに正直な溫和いものね、女の方がよつぽど罪が深いわ、とても極樂まで御一緒と云ふわけには參りません。可笑しかつたのは櫻田さんよ、男子のくせにおしやべりで貧乏のくせにおしやれでね畑違ひの文學論なぞふりまはし、女の御機嫌ばかし取らうとしてとうどう學校フオールした。私もあの國文學のお講義みたいなもの有がたく拜聽させられて弱つたの、櫻田さんは何と思つたか當時十四の自分を大人扱ひにして戀歌の品さだめなんかやり出すんですもの、何だかわけがわからず變な顔してまじ〳〵と見詰めて居たら、

「君、そんな下らない事云つて聞かせるのは止し給へ」と太田さんに叱られて随分すてきだつた。でも其後首尾よく理學士に成りましたと見え、パナマの帽子に白繻、白ネクタイかなんかできつとでなさい、この夏上京の時電車のなかでちらと見掛た。

あの時分仲よしで大好だつた法科の佐藤さん、私は大きななりしてよくあの肩におぶさつては、リボンを買つてくれとねだつたつけ。疑もなく嫉妬もなく無心で過し暮したあの頃が羨しい。

え〻萩香の理想……理想の良人……大變ね、あて〻頂戴な。え〻外交官！ 皆さんがさう有仰るけれど私不思議に思つてるくらゐよ、外交官は何處がそんなにい〻んでせう、軍人ですか、結構、一時は「武男さんで」夢中になつたもんですわ。けれど私、軍人にや向きませんね、

叔父樣や叔母樣は私の顔さへ見るとニコ〳〵笑つちや、やれ萩ちやんももう直き丸髷だの、十九は厄年だから來年の中に何うかしたいのつて、私腹が立つて堪んないの、まつたく本氣で心配してくれてるらしいのよ。

だけどあの人達の考はまるで違つてるんですもの、あのね、うちの親類はみんな商人ばかりなのよ、商人腹に生れて子供の時から腹一杯に慾をためて算盤はぢいて頭を下げるの外、文學趣味など爪の垢ほども解してくれる人はありません、美術家を父様に持つた私だけが只た一人變り者なんです、だから私叔父様達のお人眼鏡にかなつた、前掛がけのを良人に持ておかみさん」と云はれるくらゐなら、生甲斐もないと思ふわ。



併し……黒光女史や一葉様のこと考へると面白さうで商賣も嫌ぢやないんだけれど……あら、お隣の兄様がマーキュリーだからだつて。嘘よ、それやあんまりだわ。

とにかく學士なら何でもよ御座んすわ。貧乏だつていゝのよ。岡さんてばしきりにウアニニチーの塊かたまりつてこひどく攻撃なさるけれど、私あながち金紋付のお手車や馬車のリングのダイヤモンドといふものに憧れては居りません、交際場裡に雄飛せんの婦人會の大立者とならうのつて野心があるんでもありません。甘んじて家庭にうづもれるつもり、良人が學問と愛情のある人でさへあれば、屹度幸福なホームを造つて見せます。物質上の榮華なぞ夢にも望みませんわ、まさかいつまで星やすみれをなつかしんでも居りません

しね、
「ミッスで暮せる身ではなし、末は良妻賢母主義……
よ。」
だが私お嫁に行ける身分ぢやないの、それを思ふとつまらないわ、今些と財産でもあるとか當の御本人美人でゞもあつたら知らぬこと、學士の肩書でも持つた人ならなんで養子になぞ來るもんですか。御養子だつて和さなんかんはあれだけの御容色であゝ云ふ御境遇……それこそ何んな秀才だつて銀時計だつてお選び次第まゝになるものならお馴染甲斐に、どう
でも一人讓つて頂くんだけれど……。
おほゝゝゝゝ早く萩香の妻振が見たい？
まア馬鹿にしてるわ。はア、お望みとあればいづれおそかれ早かれ、スキートホーム日記でもお目に掛けませう。が、結婚は戀愛の墓と云ふ、胸の情火も燃えつくせば灰になる。冷たい灰になつて了つたらまた何んな氣の女に變らうやら。そのつもりでお交際遊ばせよ……………。



ゴム輪の車十二輌

不二子

一

光琳風の若松あざやかに浮出た黒中模様のお振袖に帯は褪紅色緋錦寫生の牡丹目覺る計に織出したのを矢の字にして髪は丸髷の一絲亂れず純白のリボン一際榮えた頭にも胸にも指にも燦として目を射るは寶石の煌黄金の光。

輝く計りに裝飾した己が晴姿を大姿見に映し見た私は我乍ら羞明しい程の思にそつと鏡の前を退つて長椅子に寄凭る。

「美しい花嫁さんが出來ました。」とて叔母樣が仰有ると挑めつ眇めつしてらしつた母樣は、

「之で高島田だと倚引立つのですがねえ。」と又しても高島田説をお持出しになる。

先刻から前髪を鏡臺の前で弄り廻して居た妹の玉枝樣は「ホヽ、隨分蠻カラお母樣ねえ、私が姉樣なら振袖なんぞ止して、洋裝で橙子の花を飾つた頭の上からからヴエールをかけて……」

「そしてお婿さんと手を組んで舞踏をしながら練出すのぢやなくつて?」叔母樣の御冗談で大笑に成つて了ふ。

思へば此賑かな中に居るのも今日限、明日は早や懐かしい御兩親妹弟達にも別れて只夫一人を頼みの綱に樂しくもあらうが責任の重い新生涯に入らねばならぬ私なのだ、小鳥のやうな處女の境涯、あゝ今更離れがたなの思ひがする。

「ねえ叔母樣から遣て見ると何だかもう手放すのが厭に成て了ひますねえ。」あら母樣も私と同じお心でゐらしたのだわ、エヽもう／＼私はどうしやう、

「そりや御尤ですけれど大庭樣へお上げになれば不二子樣はどんなにお幸福でせう、何も之が遠くへお別れになると云ふのぢやないのですもの。」

「あら、さうでしたね、ついつまらない事を云ました

よ。」思ひ返した様に仰有る母様のお言葉が又妙に悲しく聞える。

「まあ奥様御覧遊ばせ、玉枝様と、賤子様があんな事をオホヽヽヽ。」

「オヤ今夜のお稽古なのかね 玉枝様と、従妹の賤子様は今宵敎會で擧行する結婚式にブライドメード（花嫁の附添人）の役を勤める筈になつてるので今しも廊下を摺足で練習の最中、どういふ風に歩きませう等とすまして研究して居るのですもの。

手に持つお揃の花束より華やかな二人の裝は對の藤色矢車模様のお振袖に亂菊の派手な丸帯を立矢の字、クリーム色のリボンを飾つたマガレットの恰好まで同じ様、匂やかにも又目ざましい、丁度蕉園様のお畫が抜出した様だわと私が云へば「ちやあかうするとい丶わ、花束の代りにね、鳩を持て行て式の最中に放すのよ、皆様が乾度精靈鳩の形して下つたつて仰有るわ。」

オホヽヽ暢氣な玉枝様ね。

「大庭様は御洋服を召すかしら、ねえ不二様。」厭はしい名が耳に入る度に胸がドキリとする。「さうねえ。」と云てゐると洋裝好きの玉枝様が「そりやさうよ、大庭様……の兄様はお背がお高くてハイカラ様だから燕尾服がお似合なすつてよ、ヱ丶、乾度さうよ。」一人できめ込む。

「御免遊ばせよ。」お仲人の須川の小母様がお座敷から出てゐらして、

「まあ〳〵どうもお立派に出來ましたねえ、チヨツトお立ちに成て拜見な、あらまあ、おみ帯が大層引立て實にい丶事、お髪の恰好も何とも云へませんわ、おやお髷櫛のお見事な、白牡丹？でせう、浪の透彫に水玉は眞珠でござんすか、お時計のお鎖が大變お珍らしい、飾はダイヤでございませう、どうもまあ何から何まで申分なくねえ、不二子さんはすらりとしてお出でなさるからかうなさると一段御立派でゐらしつやるのねえ。」お世辭澤山な小母様、その癖御自分は點の打ち處も無い隆とした御風姿。

「おや、玉枝様と賤子様のお花束があつてお絲様のが

ござんせんね。」

「あのね姉様のはね松平様の淑子様が贈物にするつて御自身でお拵へになつてますのよ、今にゐらつしやるでせう。」

「松平様つて矢張女學館の？」

「エ丶、姉様の御親友よ、今夜ピヤノをお彈きに成る筈よ。」

弟の二郎様がバタ〳〵馳け込んで來て、

「姉様達ね、憲兄様が寫眞を取て上げるからお庭へゐらつしやいつて。」

「私は厭、又調戯れるんですもの。」

「い丶わ姉様紀念に撮して貰ひませうよ。」

「早く來ないと寫して遣らないぞ。」憲様（玉枝様の許嫁で一高の學生）が怒鳴り乍ら入つて來て。

「ヤア之は何處の姫君様かと思つたらミセス大庭で……。」

「よくつてよ、何とでも仰有い。」

「おや〳〵お嫁様が脹れたせ。」

「い丶わ貴郎の奥様はね御洋装で御婚禮遊ばすつてもう御披露があつてよ。」

「御生憎様だ、僕はアーメン黨ぢやないからね僕なんぞ純日本式で丁髷に裃着てやらかすんだせ。」

「ねえ憲兄様は向が岡のサレウで遣るんだつてねえ。」

二郎さんが何だか聞嚙つて妙な事を云ふ。

「ホ丶丶二郎さん、星ケ岡の茶寮ぢやないこと？」

「どつちでもい丶んだ、ねえ兄様は向ケ岡の健兒だね。」

「ハヽヽヽこりやアい丶。」

「餘り此方が賑かだから父様迄出てらしつた、臨時化粧部屋に當た私と玉枝様のお部屋は取散した上を此大入で足の踏立所もない位。

「や、出來たね、大分器量が上つたぞ。」つて今更らしく見上見下し遊ばす厭な父様、でもお顔には爭はれぬ御滿足の微笑が浮んで見える。

「小姉様達もお嫁入するのエ父様？」

「さうさ三郎も行度いかい？」

「僕は誰とするの？」
「お前は赤ん坊とするさ。」
「やだアあんな小公の泣蟲。」
「アハヽヽ。」
「オホヽヽ。」

二

六時の學式迄には未だ間があるので、私達三人はとうどうお庭の池の邊で憲樣のカメラの中に收められる私はこの思出多い庭に惜しき別を告げ度いので一人後に殘りて心行く計り思に耽つた、夕霞匂やかな春の宵妹とヴアイオリンを合奏たのも此所、望月の夜家内集ふて打興じたのも此所、扨は今日限り此心より葬らねば成らぬ事乍ら過し夏の夕法科の學生の岡田樣が人氣の無いを幸ひ甘い戀を囁いたのも此所なれば辛うじて奮ひ起した理性の力に素氣なくも拒絶して恨まるゝ身となつたのも此所、近くは此度の緣談成立て發表せられた翌日怪しい手紙を受取てつい好奇心に驅られて讀んで見たら教會でいつも顏を合せる高商の關樣から、思に逼つた胸の苦しさを縷々と述べたもので在たので何となしに恐ろしくなり思はず手紙を此池へ投込んだ事もある、その樂しかつたのも悲しかつたのも笑つたのも泣いたのも今は唯戀しい思出に成て了つた、無限の追懷に思を素して我を忘れてたゝずめば誰やら人の氣配がするに愕然として我に返ると何時の間にか淑子樣が嫣然と後に立てゐらつしやる。

「あら何時ゐらしたの。」

「ホヽヽたつた今、何を考へてゐらしたの？　君のやうでしたわ、お姿が。」まあさう仰有る御自分こそ君とも何とも云はれない今日の氣高さ紫陽花を飾つたボンネットの下から娘と鬢毛に遊ばした漆のやうなお髮のハラ〳〵と櫻色のお顏にかゝつて水色の御洋裝は譬へやうも無く艶かしい、腕環の寶石煌く雪のやうなお手に之はまあ水も滴れさうな見事な花束、眞白な生花のとり〳〵に青葉を程よく配つた中から得も云はれぬ和かな香氣が流れ出でる、雪と白いベルベットのリボン

を持てば地に敷く程に結んで下げた、丁度人ならば淑子様のやうな美しさ、否淑子様は此花の精かも知れない。」

「お約束のものよ、不出來ですけれど。」



「どうも難有う存じます、實に艶麗ね何よりも〳〵嬉しい贈物よ拵へて下さつた貴女の眞心と一しよに頂戴しますわ。」

「あらさう仰有るとお恥かしいのですよ、でも貴女がお持ち遊ばすと流石引立つて見えますわ。」

「まあお人が惡いのね、煽てたりなすつて、貴女こそ此花の精のやうですわ、學校でナーシスサスとお名の附いたのは貴女でしたもの、まあお座敷へお上り遊ばせよ。」小間使の由喜の紅茶とウエフハーを持て來る。

「否さうしちや居られませんの、直ぐ教會の方へ參つて水島さんのヴアイオリンと合奏て置く積ですのよ。」

「あら御苦勞樣です事ね、ちやチヨイト母樣を呼んで

御禮を……。」

「いゝのよ不二子さん、直ぐ失禮してよ……何ねえ、もう綾瀬不二子さんとお話するのも之限りですねえ、何だか殘り惜しい氣がしますわ。ッて私の手をお握りになる、私も今更に親友の懐しさ身に沁みるやう、心を籠めて握り返した。

「どうぞ末永う。」と後はあの美しいお目に云はせてやがて思返した樣に「御免遊ばせ。」と仰有つて小さい白靴の音も輕う飛石傳ひに美しいお姿は木蔭に消える、後にはホワイトローズの香のみほのかに薫る。

三

御兩親樣に永々御養育の御禮を申上て思はず晴着の袖に涙を落したが倘悲しかつたのはお玄關を多勢の女中や弟達に見送られて出やうとする時三郎ちやんが頑是なく。

「姉樣いつてらつしやい。」と云たのには一溜もなく泣かされた、目出度かる可き此門出にエゝ不吉なと心を勵ます下から又涙が滲む、叔母樣に。

「不二樣確然なさいよ。」と云はれた迄は耳に入たが後は唯夢心地、何處をどう走つて車が教會に着たやら覺えぬ間にふと妙なるピヤノの調が耳に流れ入るのに我に返れば身は須川の小母樣のお腕に支へられ乍ら白布を敷つめた會堂の石階を登り盡して瓦斯の光白晝を欺く、式場に一歩を踏入れて居るのであつた。先今宵此場でといふ感念が胸に湧く、聖壇に向て堂の左右に居流れた盛裝せる紳士淑女の其眞中を面も得上げず歩み入れば數百の視線は一齊に私の上に注がれた事を意識した、強い酒の香を嗅いだ樣に目はぐら／＼として花束持つた右の手は戰々と顫える。

ピヤノの奏樂がハタと止むと同時に私の身體は聖壇の前に、會衆を後にしてこゝ暫時の後には妻と呼ばれ良人と傅き奉る可き御方の左に並んで立て居た、今更優る面羞さの息をつく空さへない思ひである。

白き衣つけたる髭長き長老は徐々と壇上に現はれると瀏亮たるヴアイオリンの音に連れて「いもせそちぎ

る家の内……」の讃美歌が合奏せられる、斯心平生に復た私は並び立てる君の御粧　唯黒きが中に御顔と御胸のみ白う輝くを此上なく美しと見た。形容し難い一種の感が起る。

合唱終れば聖經の朗讀は厳かに始まつた。

「大庭潔！　汝此女を娶り神の制定に從ひて夫婦の神聖なる縁を結ぶ事を願ふや？……」

「我之を願ふ。」低聲乍らも斷然答へられた君の御聲に我胸は奇しく高鳴ると同じ質問に答へ奉た私の語尾は怪しく顫えたが神我心を知し召ば足れりと思ふ。

愕然と息が逼る様に思た刹那私の右手は良人に握られて「富にも貧にも健なる時も病の時も汝を愛し汝を護り……」嬉しき誓の御言は絶々に耳に入る。

此時私の念頭には天も地も時も所も皆感覺から拭ひ去られて只君と二人神の御手に縋るとのみ、強く御手を握り返して同じ誓を述たのも夢路を分け入る心地であつた。

續いてルビーを星形に嵌込んだ金色燦たる約束の指環は「此指環を以て汝を娶り我物を汝の物とす。」の誓言と共に御手づから左の無名指に嵌られた。

あゝ幾千代かけて君と妹脊のかため揺がぬ此しるしぞ我一生の寶である、斯て我心は永久に君の物と成たのである。

一歩壇上に進んで恭しく神の御前に跪けば滿堂寂として咳の音も聞えず、あはれ天使も天降りするかと計り崇高な氣は堂に滿ちた。

「神の合せ玉へるものは人之を離す可からず。」最後の宣告が會衆の上に下ると共に森嚴な式は終局を告げた長老に導かれて一室に入た私等は直ちに教會の記錄に署名をして再び會衆の前に現れる。

此度は眞正面から視線を浴び乍ら花の樣な Bridem-aid に傅かれ左手に花束右手に良人の御腕に縋つて面伏に歩を運べばピアノは美妙な曲を奏で出で、鴇色の洋服を召して花籠をお持ちに成たお人形の樣な嬢樣お二人兩側から私達目がけてバラ〳〵と花をお投げに成る堂を出れば屋外は夕靄匂やかに暮れて花の香流る

る朧夜の内にも外にも歡呼の聲滿ち渡る計りである。兼て設けた別館の一室へ通つて此所で茄子色扇面散しのお振袖に着替て恥かしい樣な樂しい樣な思を車に揺られ乍ら再びきまりの惡い思ひをしに上野精養軒へと向つた。

四

世の浮れ男等に觸れもさせる事かはと胸の扉堅く閉して居た昨日の處女は早や身も心も君に捧げ盡した今日の花嫁と成てこゝ新橋を將に發せんとする汽車の一室に樂しかる可き蜜月旅行の途に上らうとはして居る見送らうと云ふ人等を良人は態と固辭で煙るが如き春の朝を只二人心閑かに麻布の新居を立出た。

　血色の良いお顏に濃いお髭美しく縞絨の背廣擬りチヨツキに絡む金鎖もさまでけば〳〵しくなく飽までも男らしく紳士らしいお姿の良人に寄添て掛けた私の出立は鳩羽鼠に桐の花立枠紋御召の小袖を二枚、帶は鶸色地に濃納戸で線香の紫陽花、紫紺色紋縮緬の被布を被つて行儀よく膝の上に重ねた手には絹手袋を通して記念の指環が煌めく。

　同室は三十恰好の丸髷の貴婦人に供の女一人といふ靜かさを撰んで乘込んだのだが此平和は忽ちにして破られた、いざ發車の間際に消魂しく入來つた男女の客心憎やと見遣れば女の方は一見して只者で無いと知れたが其婀娜さ恍惚するやう、艶かな洗髮を櫛目あざやかな島田に結上げ目立たぬ程化粧た襟元は拔る程白い錆納戸縞お召に其色濃淡で菜の花を江戸褄に刺繍た上着にトルコ更紗縮緬を重ねて帶は美人草の更紗形を織出したゴブラン織、着附に一分の隙も無く唯もういゝといふ他はない、之に反して厭なのは男、金ピカづくめの裝、胸惡く私達を見比べてはニヤ〳〵笑ふ顏の無氣味さ。

　大森へ着くと四人共下車て了つたのでまあ嬉しいとお顏をソツと見ると良人も嫣然なすつて。

「さア何かお話をしやうぢやないか不二樣。」と仰有る何だかきまりが惡いので默つて笑つてゐると又誰か入

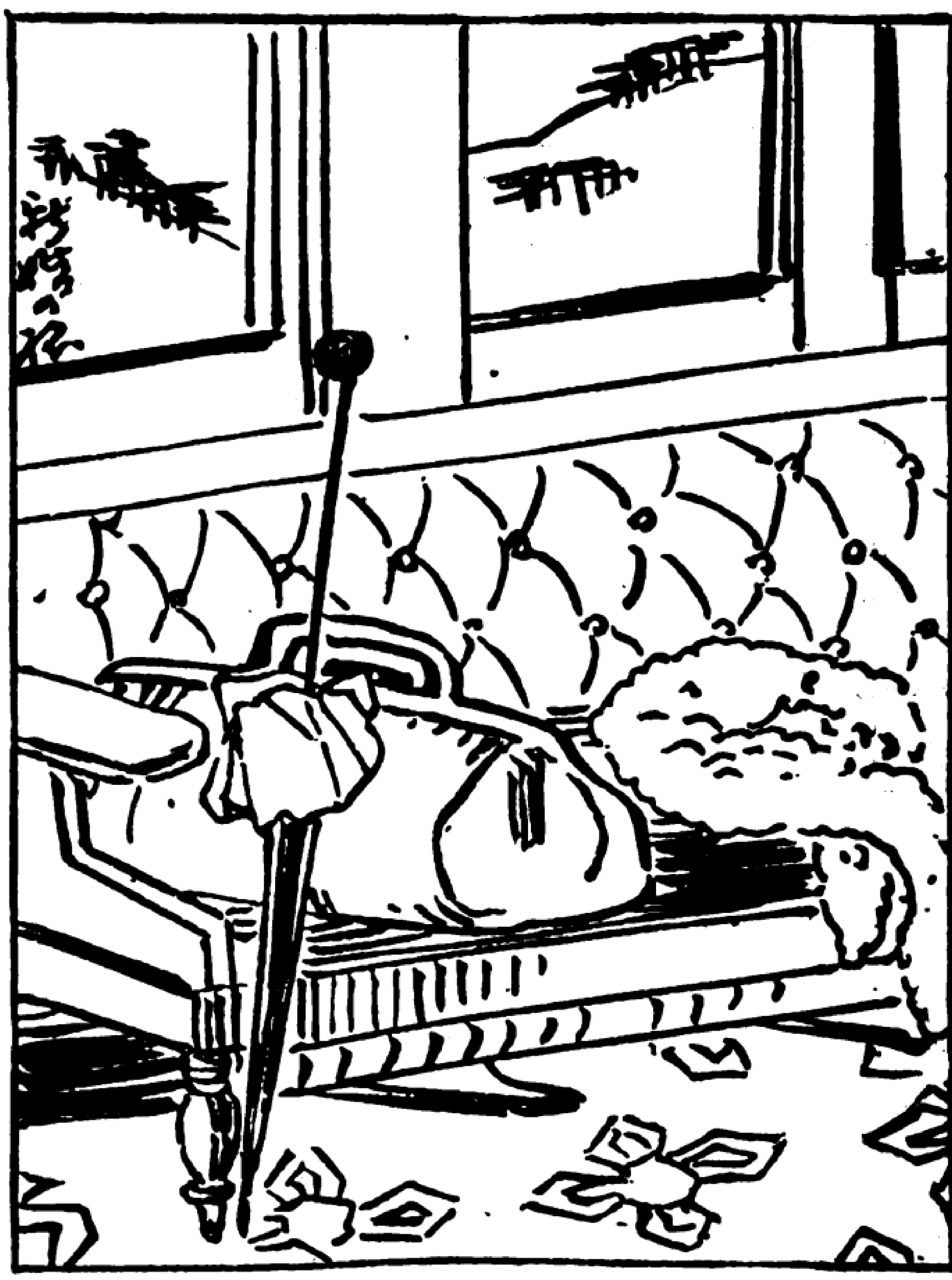
つて來る樣子、見れば演奏會などでよくお目に掛る、セロのお上手の〇〇伯の令息、私は愕然としてつい俛首くと彼方でもお氣が附かれたか凝然と此方を御覽遊ばした樣だつたが何と思はれてか開きかけた扉を又閉て何所かへ行てお了ひになつた、まあよかつたとホツと息をつくと良人は。

「今のは誰だらう、見た樣な人だが。」つて考へてらつしやる。」

「〇〇伯の若樣ですのよ。」

「知つてたのか不二樣は、何故挨拶しなかつたの？」

「だつてきまりが惡うござんしたもの。」



「何故？」

「それともあれが不二樣の理想の人ぢやなかつたのかい？」

「まあ餘りですわ。」

「オヤ怒つたの？どうも失敬。」

「もう澤山、後生ですから。」

私は宛然花の香に包まれて樂しい夢路を辿る思ひ、只恍然とほゝゑめば香ばしい朝風は二人の魂も溶けよと計り窓より流れ入るのである。

幸福なりし妾の結婚

水仙女史

妾も今でこそ田舎者になつてしまいましたが是でも水道の水で初湯をつかはせられた東京ッ子なので御座います。

鬼も十七の妙齢に成りますと元よりお多福な妾風情の、一人娘に婿八人とまではまゐりませんが、それでも相應に結婚を申込んで下さいました、中にも早婚論者にして且つ其實行者なる親友千代子さんなどはお目に掛る度に勸めて下さいましたが妾は未だ早いからとお斷りすると、千代子さんは

「ですが靜江さん、貴女獨身主義、老孃が希望と被仰る譯では無いでせう。」

とお訊きなさる、

「なんぼお多福でもねえ、ほゝゝ」

「あら貴女お多福なら妾七面鳥よ、」

と妙なことを口早に被仰て、

「では貴女もう立派な許嫁がお有んなさるのでせう、」

「いゝえ、そんな者なんぞ無くつてよ、」

「嘘言よ、貴女の顔に約婚濟みと書いてあるわ、」

「あら―」

「ほゝゝほゝゝ、」

いつも、こんな事で別れて了ひますが兎に角熱心に被仰て下さる、けれ共妾は唯早いの一點張りで體よく逃げて居りました、

さらば妾が生意氣に選り好みでもするのでせうか、否、否、唯妾の胸の底に深く〱刻み込まれた或者が如何しても「諾」と返辭をさせないのでした、嗚呼千代子さんの云ふ婚約者！　是ぞしも衛婚約者と申しませうか、忘れもせぬ妾が十五の春、學校から歸つて來ると見世に意氣な女の塗下駄がありましたので、

「誰方？」

と訊くと
「浦和の御新造さんです、」
と小僧の傳吉が頓狂な聲で云ふ、妾は袴をぬぐと其儘客間へ行かうとするのを女中の房やが
「靜江さま、お止し遊ばせ、」
と小聲で止める、
「あら何故？」
と不審ると、
「ほゝ御新造さんと浦和の御新造さんと今佳いお話し中で居らつしやいます、」
と笑つて居る、妾は「若しや」と思ひ當る節がありましたのでソッと次の間へ行つて見ると、
「希一も未だ丁年にも成りませんし、旁々今直ぐにと申す譯ではありませんが只貴女や兄さんの思召だけ伺つて置きたいと思ひまして……」
と浦和の叔母さんの聲、妾は思はずハッとして居ると
「眞當に左樣なればこんな佳い事はありませんわねえ、」
と母上は煙管をはたいて、
「靜江も希一さんのお話をすると直ぐ顔を赧くするやうですから滿足ねえ、ほゝゝゝ、」
とお笑ひなさる、妾はもう夢中に成つて自分の居間へ逃げ込んで了ひました、すると妾の机の上へ片假名で「シヅエ、バカ」と樂書してあるのが眼に留まる、それは希一さんが未だ十一二の惡戯盛り、冬期休暇に遊びに來て妾とかるた取りして負けた口惜しまぎれに書いたのでした、

さて當時母上からは何のお話しもありませんでしたが、それからの妾は全く別人のように成つて了ひました希一さんが御出京の都度お立寄りになつても兎角御遠慮勝にして前のように親しく致しませんでした、

永く居る女中の房やでも話したのでせう、希一さんが來ると
「あの方が靜江さまのお婿さんよ、」
など丶奉公人の陰口も耳へ這りますので態と自分の書齋にばかり隱れて丁ふ、

春雨が糸のやうに降る或る日のこと妾は……の手套をあんで居りますと阿母さんがいらつしやいましたので吃驚して机の下に匿しますとニッコリ笑ひながら
「隨分よく降るわねえ。」
と座について
「突然ですがね、お前田舍へお嫁に行くのは厭？」
とお訊きなさる、妾は心の秘密でも探り當てられたやうに思はず顏を赧めて
「え。」
と問ひ返すと
「實は浦和の叔母さんが希一さんにお前を貰ひたいと云ふのですが……」
「………。」
「嚴父さんとも實は内々相談したのですが東京で育つたお前が浦和あたりへ行つては少し淋しいかも知れないが、然し姑になる叔母さんはお前とは切つても切れぬ血を分けた仲、況して當人の希一さんは快活な男らしい方ですし、それに亦知つての通り小姑は居ず、お前さへ承知ならと思ふのですがね。」
妾は何日になく身體を小さくして聽いて居りましたが
「嚴父さんや慈母さんさへ御承知なら……」
と遂に承諾して了ひました、
嗚呼妾の胸に刻み込まれた或る者……夫れは快活な男らしい、而して親切な希一樣の面影……それなのでした、ほゝゝゝ、記者樣御免遊ばせ、是は眞實僞なき妾の自白で御座います。

△其　前　日

元より其仲の萬事話は早く、妾のお嫁入も愈々明日になりました、荷物は總べて前日に送る事に定めてありますので朝早くから出入の職人が來る、兼て頼んで置いた人足が來る、扨は宰領に頼んだ以前の番頭の佐吉も來ましたので箪笥、長持、小道具の數々、定紋の油團を掛けて運び出しました、此時まで妾は自分の居間に隱れて居りましたがいざ運び出すとなると、さす

が氣になりますので一寸店へ出ますと物珍らし氣に釣臺を見て居た近所の誰彼、耳打しては妾の顔を見て居りますので亦居間へ逃げ込んでしまいました、

午後妾は母上と共に祖先の墓へ訣別旁々參詣に行きました、

祖母樣が死去るとき、

「お前のお嫁入を見てから死にたいがのう」

と仰言いましたが今かうしてお參りに來たら祖母樣も定めし地下でお喜び下さるでせう、が、若し今までお健康で居らしつたら、まア甚麼に喜んで下さつたらうと思ひますと妾は云ひ知らぬ淋しさを感じました、それから仲見世へ廻つて買物をしながら歸つて參りますと途中でお友達の藤子さんに逢ひました、



藤子さんは駈け寄りざま、

「靜江さん、お目出度う御座います」

と笑つて居らつしやる、妾は此場合何と御返辭して宜いか唯眞赤になつてしまひました、と、母上が、

「は、有り難う御座います、是からとてもお變りなくお交際してやつて頂戴」

と、代つて云つて下すつたので妾はホッと致しました常ならば夫れから夫れと話の絶える所では有りませんが今日は何と無く顔見らるゝも羞かしいので早々藤子さんにお別れして宅へ歸りますと父

上は奥座敷で謡曲のお稽古に夢中に成つて居らつしやいます、
「まア貴郎、明晩のお復習ですか、」
と母上が笑ひながら訊ねると、
「はゝゝ、まア彼方へ行つてお居で、」
と父上は亦猩々の老せぬやを謡ひ出す、
「ですが貴郎毎日老ひせぬやと、よも盡きじばかりお復習なすつて若し他所様の方に先き謡はれて了ふと大變ですわね、」
と亦母上が笑ふ、
「はゝゝ、夫れでは吾輩が先登第一に謡つて了ふかな、」と、父上は大笑ひ、
「ねえ靜江、彼方へ嫁ても間があつたらちよい〳〵遊びに來てお呉れ、」
と母上が思ひ出したように仰言ると、
「馬鹿奴、女が一度嫁入りして實家を戀しがるようで什麽する、」
と父上は眞面目になつてのお叱言、
「それではお父さんやお母さんがチヨイ〳〵被入つて頂戴、」
と妾が申しますと、
「ところが吾輩は眞平御免蒙る、」
「あら、どうしてゝ御座いますの？、」
「かう見えても吾輩未だ三十九歳だよ、」
「三十九歳がどう遊ばして？、」
をかしな事をと妾は重ねて訊ねると、
「だつてお前が嫁に行くと直ぐ赤ん坊を產むだらう」
「まア……、」
妾は思はず眞赤になつて了ひました、
「すると吾輩が行く度に、ヤー材木町の祖父ちやんが來た、祖父ちやんが來たと云はれると閉口だからね、はゝゝ、」
とお笑ひなさる。
「あら何日まで若い氣で居らつしやるのです、もう白髪が生えて來ましたわ、」
と母上も笑ふ、

「白髪は生えても而も明治ッ子だよ、」

「では坊が產れたら伯父ちやんと云つてお貰ひ遊ばせな、」

「伯父ちやんも感心しないね、」

「では何?、」

「先づ兄さん……かな、」

と仰言つた儘眞面目になつて態と眞顔を撫で居らつしやるので母上も妾も吹き出して了ひました、

「笑談は兎に角、お前の座右銘として呈げる物が有、」

と父上は本箪笥から一枚の短冊を出されました、手に取つて見ると、それは父上とは親しき友の其角堂機一先生の作



「橋になる力かくして藤の花」

と云ふ名句で御座いました、

「橋になる力かくして藤の花——實に佳い句ぢや無いか、吾輩男子も勿論だが最も女子の守るべきはこれだ、女子なぞは少し教育でもあると得て姑小姑を馬鹿にする、お前なぞも明日からは社會學の一年生に成つた心算で、よくお姑さんの云ふ言に從ひ圓滿なる家庭を作るように心掛けてお吳れ、」

と父上は泌々敎訓され

る、

「眞當にお父さんの仰言る通りですからね、」と母上も注意して下さいますので妾は親の心の有り難さに思はず頭を下げてしまいました、

其内お夜食もすみ用事も大概方付きましたので臥床に這入りましたが中々眠られません。

あゝ產聲揚げて十八年、其懷かしき我が家に父上母上と枕を幷べて寢るのも今宵を限り、明日からは死しても他の菩提所の土となるかと思ひますと喜ばしかるべき明日の、何となう悲しいようにも思はれました、が、亦明日の今頃は？ と想ひ出しますと爍く銀燭、三三九度の盃、父上の謠曲、色直しの席、思ひは夫れから夫れと起つて云ひ知らぬ羞かしさに面を夜着の襟に匿くしてしまひました。

△其　當　日

昨夜は終によく眠れなかつたので今日は何日に無く早く起きて了ひました、

今更に懷かしい自分の書齋に這入て見ると本箪笥や机は昨日皆先方へ送つて了つたので何一つありません、唯古い手文庫が一ッ隅の方にありましたので開けて見ると既に整理したと思つて居たのが心急しかつた爲めつい忘れたのでせう、お友達から來た手紙が澤山入れてある儘でした、伊香保から來た貴美子さんの繪葉書、去年結婚した文子さんが今度男のお子さんを產んだと云ふお手紙、菊の花が咲き始めたから是非遊びにお出で下さる樣にとの濱子さんの面白い言文一致、一々手に取りながら讀んで行きますと中に一通男文字の墨色濃く、『松島希一より、靜江樣へ、』！ 妾は思はず顏を染めて了ひました、

なつかしさに今亦繰り返して讀みますと、

拜啓今回御身と婚約致し候は小生に於ても誠に滿足とする所に有之候（中略）十歲にして父を失ひし小生を今日まで養育されし大恩ある母上、況して小生には義理ある御方に候へば御身と結婚の上は一層の孝養仕るべき所存、尤も母上と御身とは肉親の叔母姪に候へば一家團欒の喜びは今より思ひやられ候

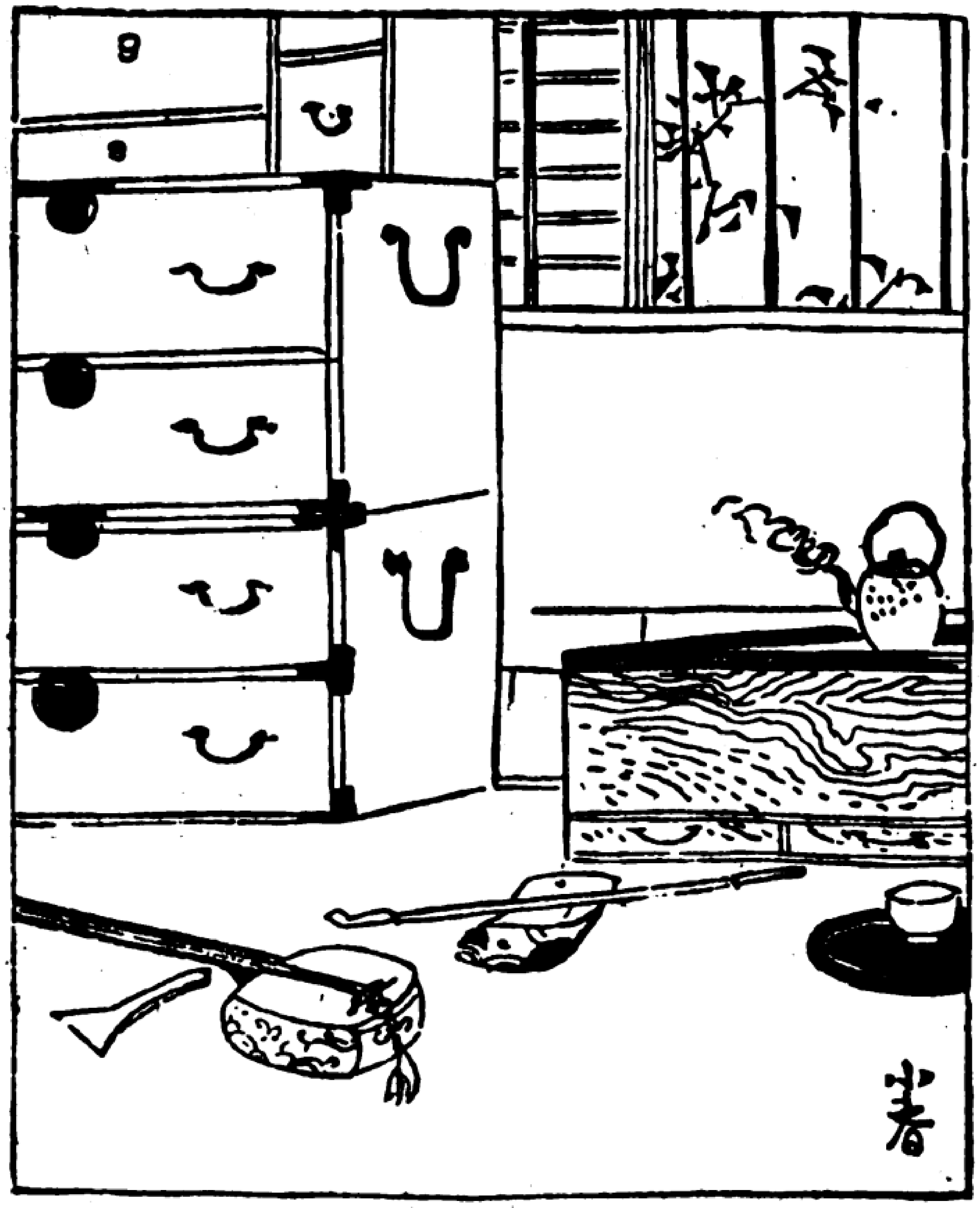
へども然しながら其愛におぼれ恩に慣れ候ようにては後日臍の悔あるべくと存じ候間よく／＼御諒察御孝養専一に祈り上げ候、定めて萬々御承知のごととは存じ候へども唯老婆心までに一言申置き候次第に御座候、御申上ぐべき事は山山有之候が、そは亦後の夜の寝物語にと

……

「静江、お前何をしておいでなの？」

いつの間に來たのか母上が後ろに立て居ますので妾はハッとして讀みかけた玉章を袂へ入れて了ひました、

母上は何も仰言らず只ほゝ笑まれて居られました、



やがて髪結のお金さんが來て是まで結び馴れたひさし髪を今日は文金の高島田に結ひました。

「ひさし髪も宜いが島田髷は亦格別ですよ、」

と母上はニコ／＼して居らつしやる、

其所へ丁度濱町の伯母さんがお出でになつて、

「オヤ／＼佳い花嫁さんが出來ましたわね、」

と例の調子でお笑ひなさる。妾の父上と姑になるべき浦和の叔母さん、それに此濱町の伯母さんが三人兄妹なのですが快活な故か一番若く見える、眞實に面白い方で御座います、

「眞實にツイ此間まで赤ちゃんだと思つて居たのにモ

ーお嫁に行く樣になるなんて月日のたつのは早いものですわねえ」

と被仰る、其時可愛い小さな金時計と箱寄を戴いた嬉しさは未だに忘れません、

「ですが若い時は可笑しい事もあつてね、妾がお嫁入した翌る朝、伯父さんー其時は頭の禿げない花婿さんですよ、ほゝゝゝー其花婿さんが寒いから羽織を出してお呉れと被仰るの、」

「えゝ、」

「妾は未だ嫁たばかりでどの簞笥に入れてあるのか知らないので姑に、アノお羽織は何所に入れて御座いませうと訊いたのよ、」

「えゝ、」

「すると姑が羽織?、誰の?、と被仰るちやアありませんか、さア妾は何と云つてよいか旦那樣のと云ふのも羞かしいし唯眞赤になつて了つたのよ、ほゝゝゝ、」

と笑つて居りますので側に居た母上も妾も餘りの可笑しさに吹き出してしまひました、が妾は若しやそんな事があつたら什麽しようと心配でなりませんので、

「それから伯母さん什麽遊ばして?、」

とお訊き申しますと

「ほゝゝ靜江さんも心配になると見えますね、」

とお笑ひになる、

「あら、」

とばかり、妾は面を赧めますと

「其先は無價では厭、靜江さんの長唄を聽かせて下されば敎へて上げるわ、」

と、おからかひに成ります

其内月下氷人の櫻井樣御夫婦、濱町の伯父樣、小石川の叔母樣ー此方は母上の妹ーなどがお出になりましたので妾は奧座敷へ行てお嫁入の仕度を致しました、

表衣は縮緬の振袖、染色模樣は二藍路の葉の中松竹梅、下着は紋羽二重紅絹の二枚襲ね、長襦袢は紋縮緬、帶は厚板織白茶地色分け金通し光琳の梅墨繪、帶揚は白縮緬、帶留は緞子金通しの平絎、それを母上や濱町

の伯母さん、小石川の叔母さんなどが何かとお世話して、下すつて先づは一通り出來上りました、
　すると濱町の伯母さんは細い金の煙管で煙草を召し上りながら、
「ヤレ〳〵お嫁さん一ッこしらえるには骨が折れますこと、」
と被仰たので皆さんどッと大笑ひなさる、妾までツイ吹き出して了ひました、
　やがて時刻も來ましたので妾達の一行はゴム輪の俥で上野の停車場へと走らせました、
　それより午後三時四十五分の急行列車で浦和停車場へ着くと既に松島家の使者が待ち受けて居たので亦其俥で愈々松島家へ向ひました、
　着くと同時に待女郎に手をひかれて新座敷へ導かれ、茲に希一様と改めて三々九度の盃事をした羞かしさは今思ひ出しても顔が赧くなる位で御座います、次いで良人と共に座間へ導かれての祝宴、お床入の式などは餘り管々しいから態と茲には書きませぬ、祝宴の席で父上が「老いせぬや」と「よも盡きじ」と謡つたのは今更申すまでもありません。

△其　翌　日

　眼を覺ますともう枕元へ光線が一ぱいに射し込んで居たので妾は吃驚して臥床を出ました、良人は未だよく眠むつて居りますので、ソッと自分の枕だけ戸棚へ入れて顔を洗ふのもそこ〳〵叔母さん……では無いお姑さんの居間へ行つて見ると、お姑さんも引續いてのお疲れと見えて未だお寝みになつて居らつしやる御様子、妾はホッと安心して亦自分の居間へ歸ると良人が床の上へ坐つて居ました、
「馬鹿に寝坊したね、」
と良人は心持顔を赧くして被仰る、
「あの……未だ彼方でもお寝て居らつしやいます、」
と妾も一寸眼をそらして申上げると、
「彼方でも？……………お母さんか、」
「え、」

今まで叔母さん叔母さんと呼んで居ましたのでお母さんと云ふのが何となく差かしいので……、

良人の後ろから着物を掛けて上げると袖へ手を通しながら、

「此間僕が上げた手紙を讀んだか？」

「え〻」

「僕が云ふまでもないがお前もよく注意してね」

「はい」

實家を出るときまでは良人にお目に掛つた上、お手紙の通り出來得る限り姑に孝養を盡すべき事、良人の命令には何事にあれ服從すべき事など色々申上げる心算でしたが、さてかう面と對ひ合つては唯お返辭するのが關々で御座いました、

其内彼方でもお目覺になつた樣なのでお姑さんの所へ行くと、もう煙草を喫て居らしやいました、

「どうも寐過しまして……」

と手をつくと、

「何の、妾こそ大朝寢して……」

とほ〻笑まれる、

正午頃になると兼て招待した近所の妻居達が來ましたので妾はお姑さんにお紹介して戴きました、

やがて夫れが終りますと今度は夕刻から見世の番頭、出入の職人などの祝宴を開きました、始めの内こそ眞面目くさつて正座して居ましたが醉の廻るにつれて禿頭の左官が活惚を踊り出す、若い大工が木遣節のような謠曲をやる、一座は大變な騷ぎで御座いました、最後に番頭の德兵衛さんが松島家の萬歳を唱へて茲に目出度く今宵の祝宴を閉ぢました。

△其結果

斯くて都育ちの妾は田舍町の商家の妻と成りました、始めの馴れぬ内こそ少しは淋しいとも思ひましたが何所も住めば都とやら、今は情ある姑、優しき良人、さては此春産んだ愛くるしき男の兒と、先づは樂しき家庭をつくつて居るので御座います。

（完）

結婚の栞

婚禮式の順序

抑も夫婦の緣を結ぶは貴賤共に家の相續の爲めにするものなれば、其妻を娶るは必らずしも容色美しきものゝみを取らず、專ら心操の善き婦女にして常に品行の正しきものを選ぶべし、又婦人の嫁入る家は即ち我身を終るまでの家となす事なれば、たとへ身代よき家なりとて不正の家には嫁ぐべからず。

△媒酌の事

媒酌を爲す人も緣談はすべて、媒人の言葉を雙方共に定規となすものなれば世の諺にいへるが如き媒酌口を聞かず、雙方へ對して何事も包み隱さず、語るこそよけれ、これ雙方共に婚儀を取結びたる後、必らず顯はれて苦情起り、緣組不熟の基となればなり、又緣組を爲さんとする家も深く媒酌の言葉のみを信ぜず雙方共に緣因を求めて相手方の素性、容貌、才學、品行は更なり、其家の財產家族の人數、父母の性質、親戚の身分等を聞き糺す事肝要なり。

△見合の事

斯くて相手方の内聞も濟み、果して媒酌の言葉の如くなれば、こゝに吉日をえらみ、適宜の場所を定めて、雙方共に兩親つき添ひ、媒介人の案内にて其場に至り、男女互に相まみゆるを見合といふ、これ古へよりの習慣にて其場所は貴賤貧富によりて定めなきも、或は花見、又は物詣で、芝居見物などにことよせて對顏せしむる事あれども、中人以上は新婦の家に就て見合をなす事多し、近頃は又夜會宴會などに伴ふて見合をなさしむることあり是等の事も又一策なれども、一二回の面識にては雙方の性情を知りつくす事能はざるべければなるべく、久しく交際して其の心性を熟知する事望ましけれ。

△結納の事

さて見合も濟みて雙方共、あの人ならば身をよせんと定りたらば、普通の嫁入の場合は吉日を撰みて男の方より、緣組を申入るゝを結納といふ、其時の贈り物は身分に應じて異なれども、まづ普通には酒五荷、魚五種、又は酒三荷、肴三種、若しくは酒一荷、肴一種等なり、其の肴五種とは昆布、するめ、鹽鯛、串鮑、堅魚節等なり、又小袖一重ね、(内一つは表裏共白綿なるべく、一つは表赤、裏は何色にても見計らひにてよし、)これは奉書又は杉原紙二枚づゝにて包み水引をかくべし、但し婚姻の事は二度せざる旨とすれば、水引は結び切にして左右に剩すべし、これより下に至りては身分相應に略式を用ゐて、一定せざれども帶一筋は必らず、添ふべきものとす。されど中等以下にては多くは現品を用ゐず右

の品を奉書紙に目錄書にして、これに五圓なり、十圓なりの現金を包みて添へ、白木の臺にのせて、媒人これを持參し、先方より受取書を取り來るを常とす、

目　錄

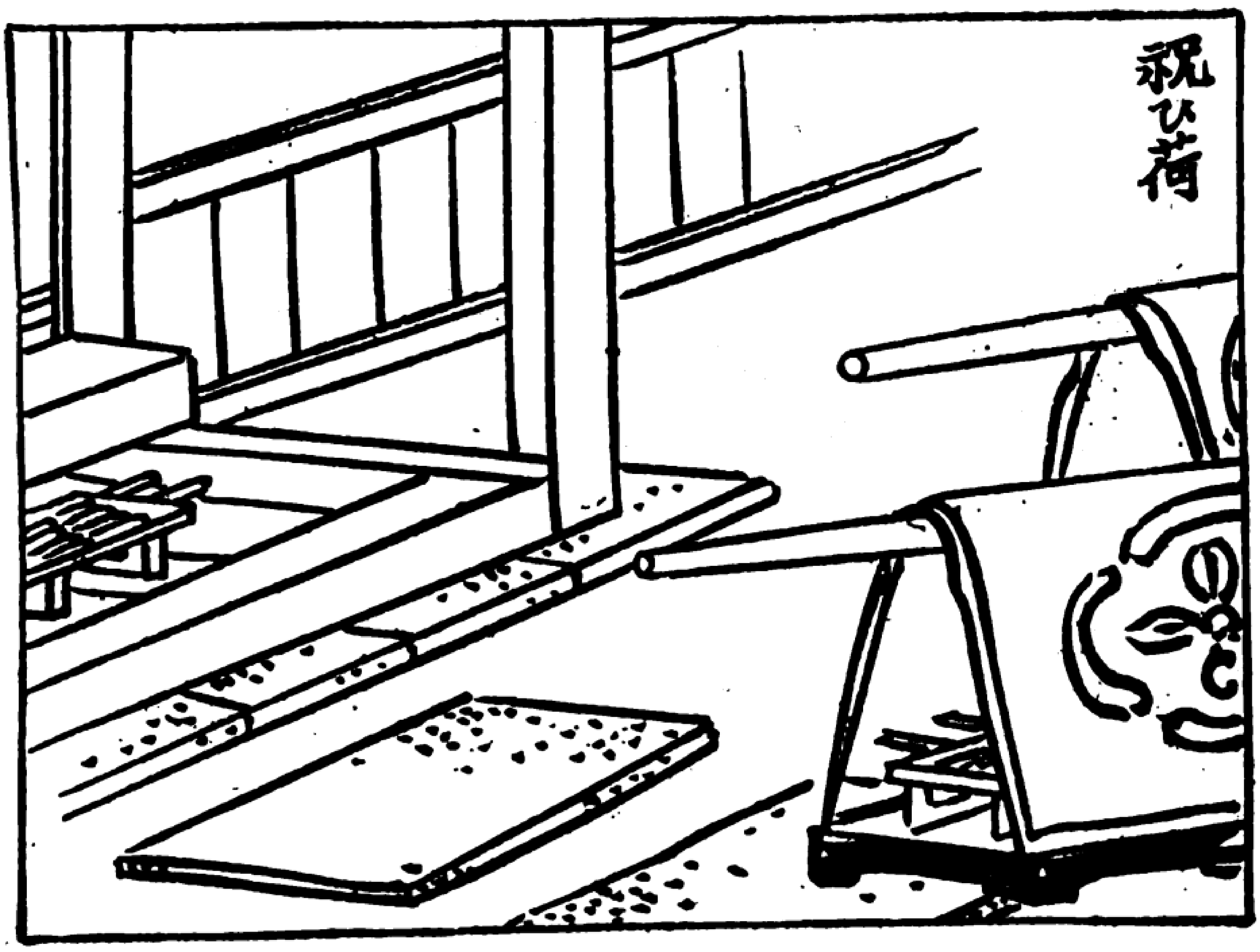
一　鯛　一折
一　帯　一筋
一　緋鹿子　一反
一　白綾　一反
一　紅絹　一正
一　眞綿　二把
一　昆布　一折
一　熨斗　一折
一　御樽　一荷

以　上

月　日

以上の如く鯛を始に書き、帯小袖これに次ぎ最後に昆布、熨斗、樽を書きて留むるものなり、

婿の方より結納を贈り、嫁の方にてこれを受納めたる時は結納披露とて一家親類朋友等を招きて身分相應に酒宴を開くべし。



△送荷の事

新婦の道具類は昔は婚姻の當日又は其夜にすべて送りたるものなるが今は前日に送る事あり、それは荷物の品數の多少によりて便宜に從ふべけれども、いづれにしても送る方にて荷物目錄を造りてこれを媒人に渡し、宰領人附添ふて人夫に擔はせ、婿の家に送るべし媒人は又荷物より先に婿の家に至りて待受け、其屆きたる時はこれを受取り指圖をなし、婿の兩親又は兩親なき時は、新郎に渡し、受取書を取りてこれを新婦の家に屆くべきものとす、但し荷物目錄の書式は結納目錄と同じ樣に奉書紙にしたゝめ、受取書も又同紙を用ふる方よろし。

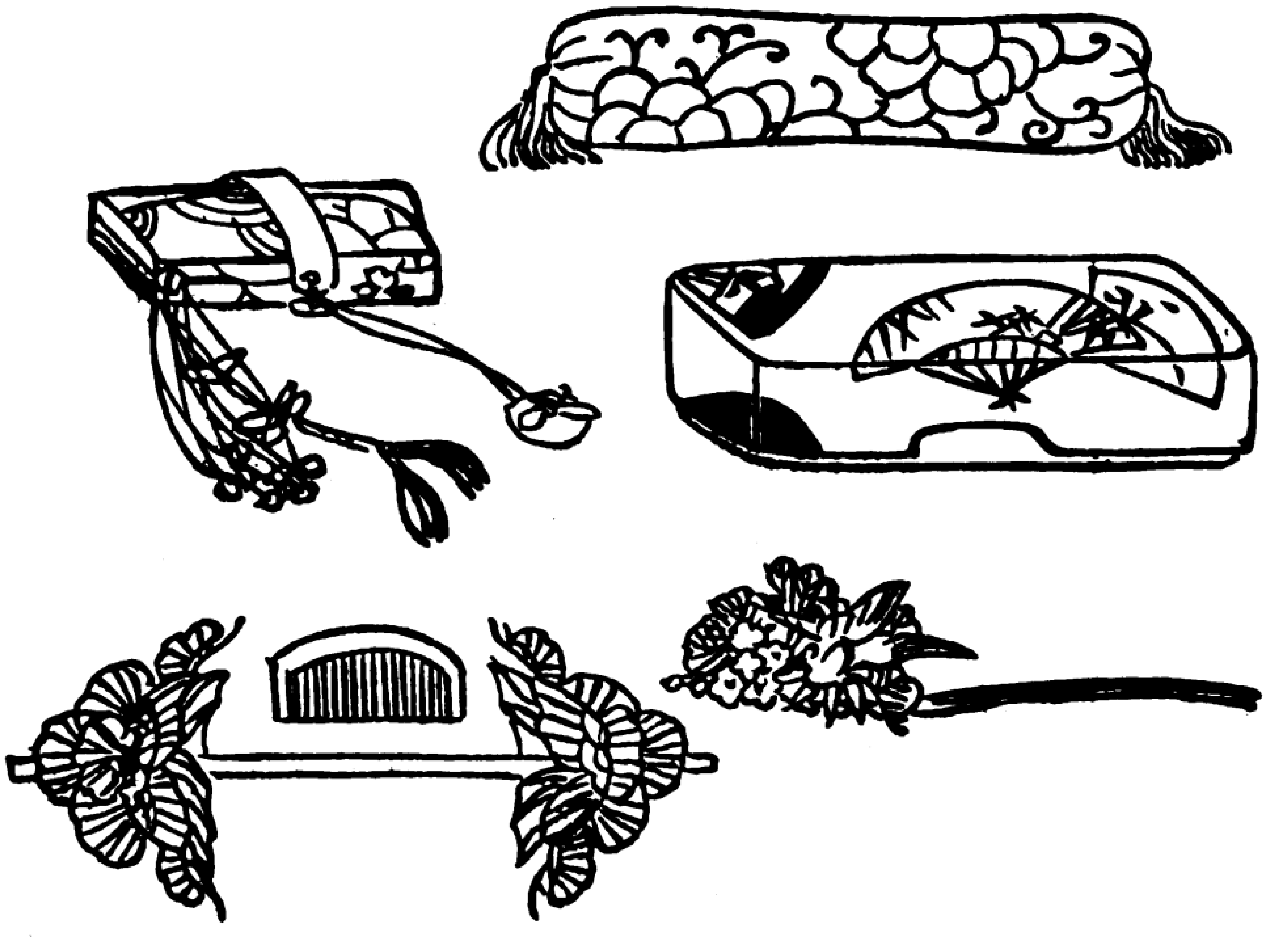
△輿入の事

さて當日新婦は新郎の家に到るには以前は駕籠に乘りたるものなれども、今は多く人力車を用ゐ、やゝ身分

尊き家にては馬車にて行くを常とす最もいづれにても媒酌人夫婦は案内がてら先に立ち両親附添ひ、行き既に先方へ到着したれば、腰元出迎へ化粧の間に案内して暫らく休息さすべし、斯くて祝言の座敷の仕度とゝのへたる報を待て、媒人の妻新婦を導きて其席に至り、上座の方に着座せしめ、媒酌人は其次に座するなり。

△式三献の事

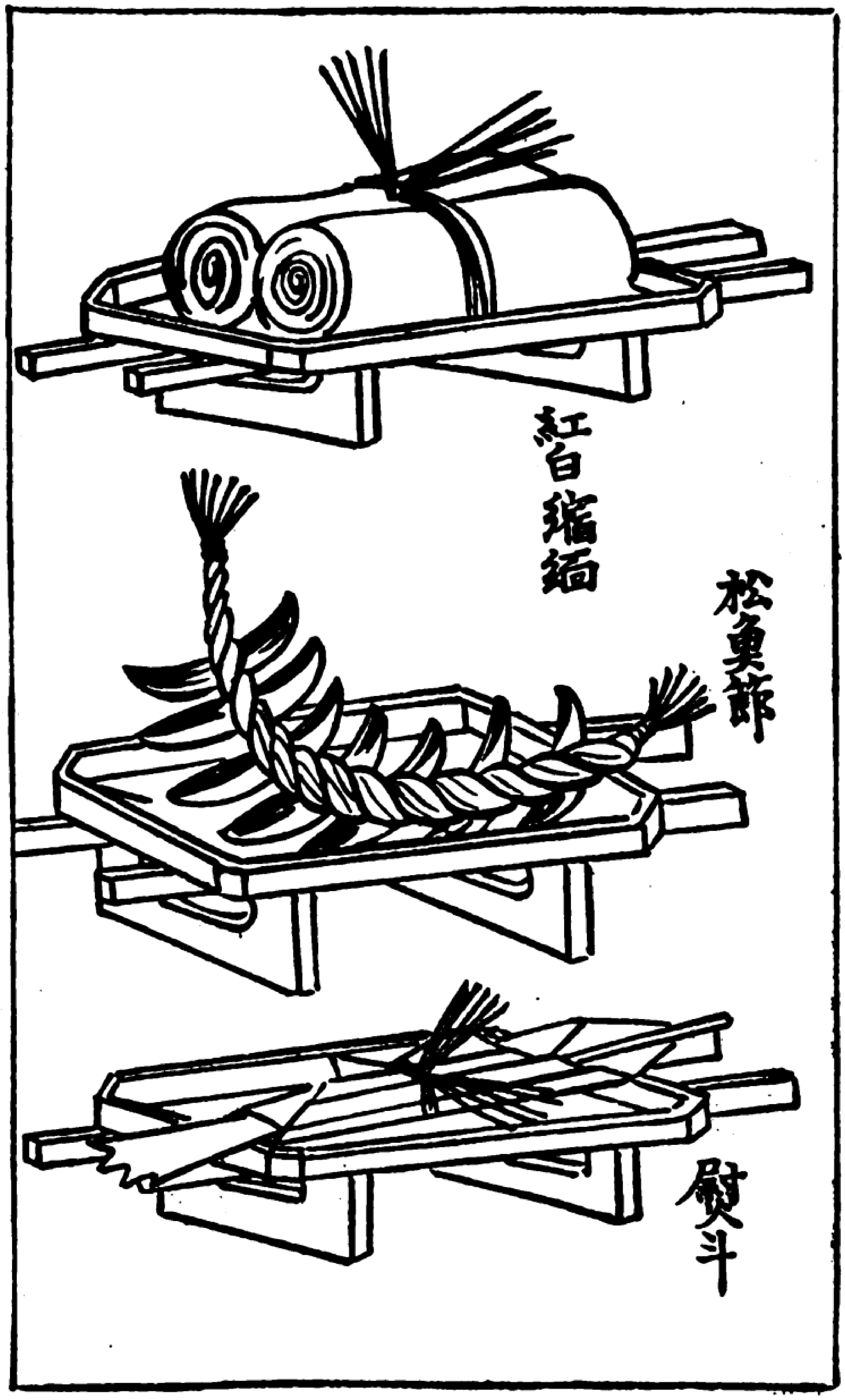
中等以上の祝言の盃には媒酌人夫婦の外に親戚又は懇意の家の十三四歳にして両親の揃ひ居る童男童女に酌取をたのみ、雄蝶雌蝶の附きたる銚子を持たせて次の間にひかへさせ、媒酌人、新郎を誘ひ来りて上座の左方に着座せしめ媒酌人の妻又は腰元は其着座を待ちて白木の三宝に三組の土器をのせあるものを持ち来りて新婦の前におき、同時に酌取人をよびて近くすゝませ、そ



れより妻女は腰元は上の土器をとりて新婦にわたし、新婦はこれを両手にうけ、酌取人すゝんで酒をつぎ（注つて少し）新婦これを飲み重ぬること三口の後、土器を三宝の上におくとき腰元又は酌取人、其三宝を新郎の方に持ち行きひざまづきてこれをすゝむべし、新郎はこれを受けて飲むこと前の新婦の如くす、この時媒酌人は高砂の謡をうたふ、かくて新郎飲み了りて土器を三宝の上におけば酌取人はその三宝を持ちて媒人の前におき、媒人は上の土器をとりて最下におき直せば、酌取人又は腰元三宝を持ちて新郎の前にすゝむ、新郎上の土器(中)を取りあぐれば三献酌し、これを飲みをはりて新婦にさせば、新婦も前のごとく飲みて土器を三宝の上におく時、酌取人は又其の三宝を媒酌人の前に持ち行き、土器を置き直すこと前の如し、三度目の土器(大)を新婦にすゝめそれより新郎に

すゝめ、新郎これを飲み了りて土器を納むるなり、いづれも三獻づゝ加へて飲むが故に三々九度の盃といふ。但しむかしは此式の座中に島臺、舟もりの臺、羽もりの臺、控へ臺、奈良臺、式三獻臺引渡し等の飾り物を用ゐたるもの、今は多くこれを略し上等の婚禮にて僅かに其面影を存するのみ。

かくて式三獻の盃事目出度すみたれば婿嫁共に一まづ座を立ちて休息所に入り茲で小袖と着替ふるを色直しといふ。

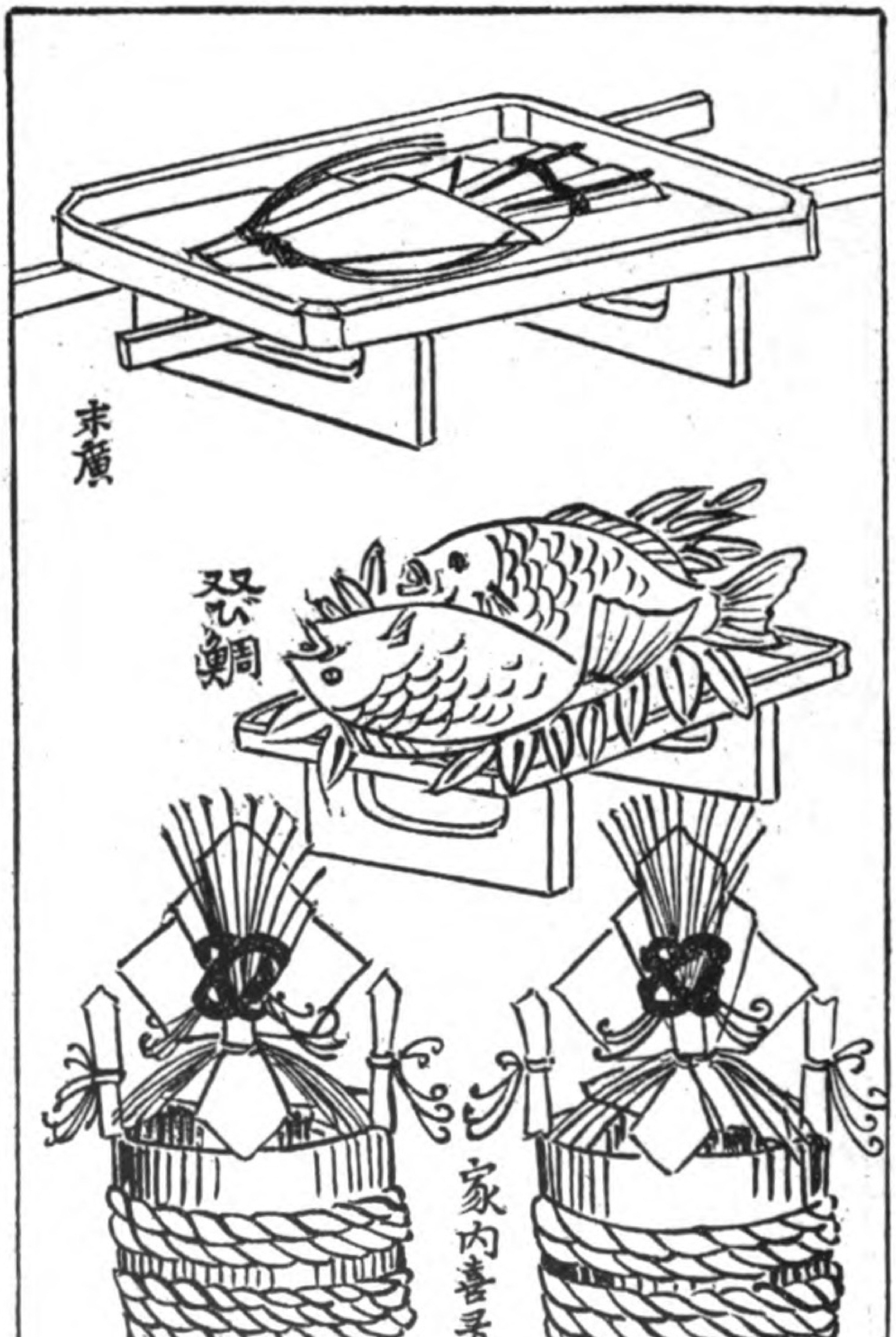


△婚姻披露の事

扨て新婦の着替へすみたれば、兩親及び媒人の妻と共に座につき、婿の方も兩親及び近き親族媒人等と共に座につき、それ／″＼披露の盃事あり、各々挨拶をなし、それより膳部を運び來りて酒宴を開き、媒酌人は程をはかりてまづ新夫婦に高盛の本膳をすゝむ、（高盛とは椀に赤飯を山盛にしたるものにて此席にては新夫婦に限りたるものにて昔しよりの例とす）食事既に濟みたらば媒酌人夫婦は席を開くべき事を言ひ出て新夫婦は兩親始め一統に挨拶して、席を立ち媒酌人の妻に導かれて閨房に入るなり、此時床盃と唱へて閨房の中に嫁と盃事をなす式あれどこれは場合によりて略するも可なり。

媒酌人の心得

媒人は結婚に就て尤も大切なる役目なり、總て媒人の言ふ事は雙方に於て最も信用し片言雙語も又よく兩家の定規となるものなれば其本人の辭又は持病、其外類大となく少しも包み隱すことなく悉く打明けてこれを語らざるべからず、この如く媒人たるものが誠實になす時は子々孫々長久の基となり、幾久しきに渡りて双方の喜びとなるなり、されども若し偽りや飾りを以て其縁談を結ぶことあらば其媒人の言葉の相違よりして、遂に双方の間に紛議を醸しめ家内の不和合を惹き起さしむるに至るものなれば、媒人たるものは誠實を以て双方の爲めに其縁談を結ばざるべからず。



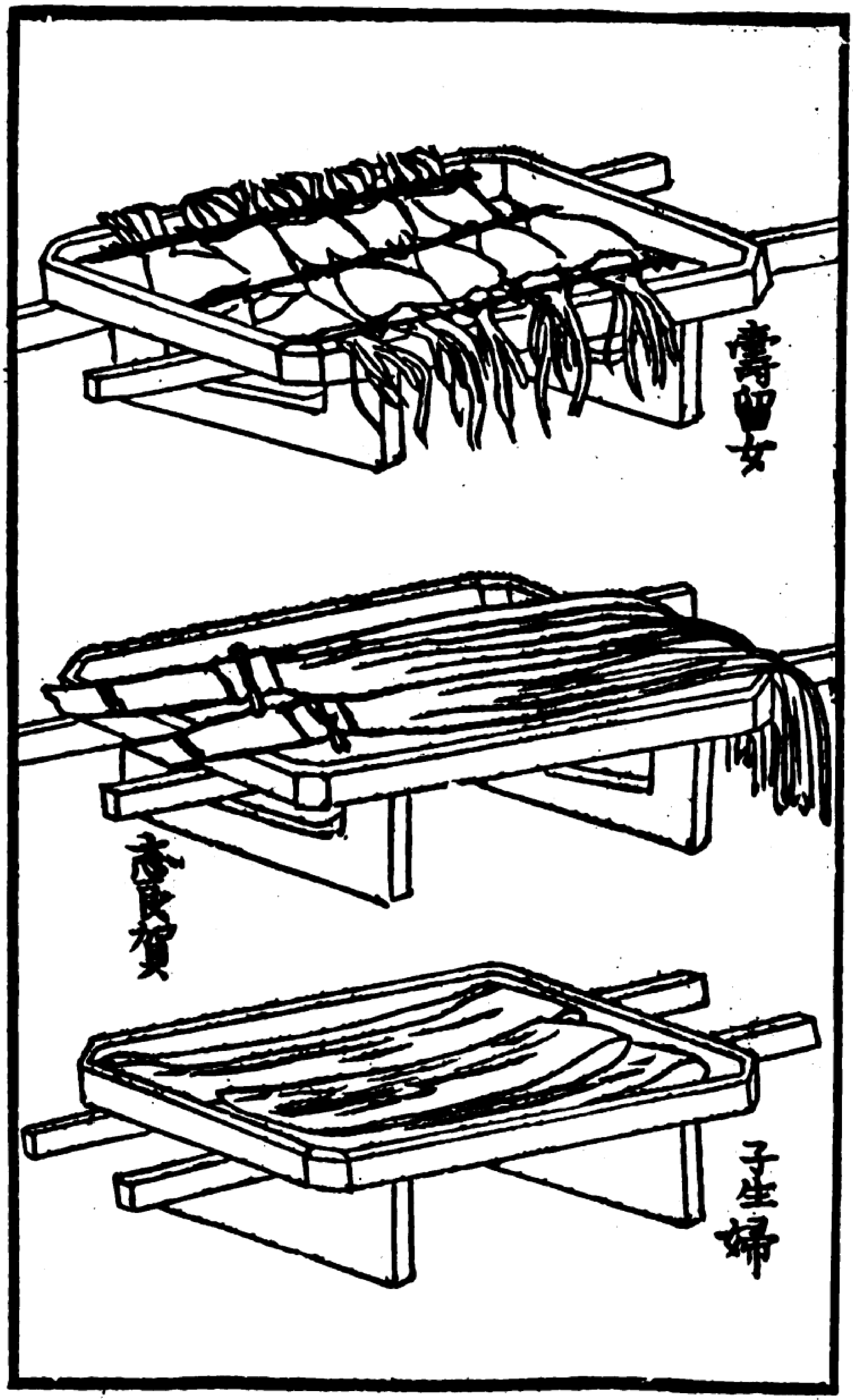
△媒人が見合の席で心得べき事

媒人が既に双方の間に奔走して見合の當日となり、其見合する男女の中いづれか一方にて極り惡さうに物の言ひ振りはつきりとせず、又恥かしき處ろより顔を横に反向け下に俯向ける樣な事あらば媒人は側より氣轉をきかして他をして物を口籠らぬ樣に言はせ、顔を正面に向かしむる方法を用ゐざるべからず、一體見合の席では媒人は何事に限らずよく心をつけて其見合をす

るところの男女に見合しや、見合しのなき様に、十分注意する事の肝要なる様に双方不滿足の感じを與へざる様にする事最も肝要なり。

△見合の後結婚成立までの手續

既に見合も滞りなく濟みたる上は媒人は双方の家に往來して其の氣に入りたるや否やを問ひ糺し、而して双方共に氣に入りて申分なくば結婚の日取並びに結納の程度まで萬事其の相談にあづからざるべからず、且つ結納の使ひは媒人の役目にて、結納を先方へ渡したらば必らず其請取證を取りて來るものなり。



△婚禮當日の儀式を双方に打合す事

婚禮の日其式場に於て新郎新婦にその禮法に悖る如き不都合のなき様、豫め其禮式等の打合をなするは媒人の役目なり、故に媒人は双方の間に奔走して其當日に至り、式場に於て禮法に缺ぐる様なる事のなきやうに、當事者と打合せをなする事肝要なり。若し當日彼等一方の内に少しにても、非禮の事ありとすれば其の責は媒人に於て負はざるべからず。

△婚禮當日式場の命令

この如く媒人は、その嫁婿共に自分の命令に從はしむる權力のあると共に待上臈、及び女房役より酌人其他手傳人取扱人に至るまで悉く皆自分の左右し得べきものなれば、これ又豫め手筈を申しつけて置くべきものなり。

△婚禮當日の盃の順序

婚禮の當日夫婦獻盃一通りの式了りて後ち、嫁を婿の兩親及び其兄弟姉妹、其他婿方の親族などに見參せしむるに當り、其席順及び獻盃の順序を誤らぬ樣よくこれを見はからうて定むるは媒介者の役目なり、然るに若し媒人に於てよく其の邊に心を用ゐざる爲め、其の席順及び獻盃の順序を誤る時は途にこれが爲めに親戚の交誼を斷つが如き場合に至ることあるものなり。故に媒人は尤も深くこゝに注意せざるべからず。



△燕宴を長くすべからざる事

婚禮の式が悉く了つて後、當日招きし處ろの親戚朋友を會し、夜通し其の祝を張ろ事は中流社會によく行はるゝ事なるが、其の序に婿と嫁とを出して來客一統を接待する事徹夜に至ることあり、この習慣は甚だ未開的のものなり、一體結婚の本意は、新夫婦に滿足な快樂を與ふべきもので其の當日の來客に十分の歡娛を與ふるは決して結婚の本意にあらず。されば婚禮の式事終りたらば、速やかに新夫婦を閨房に入るゝが媒酌人の役目なり。

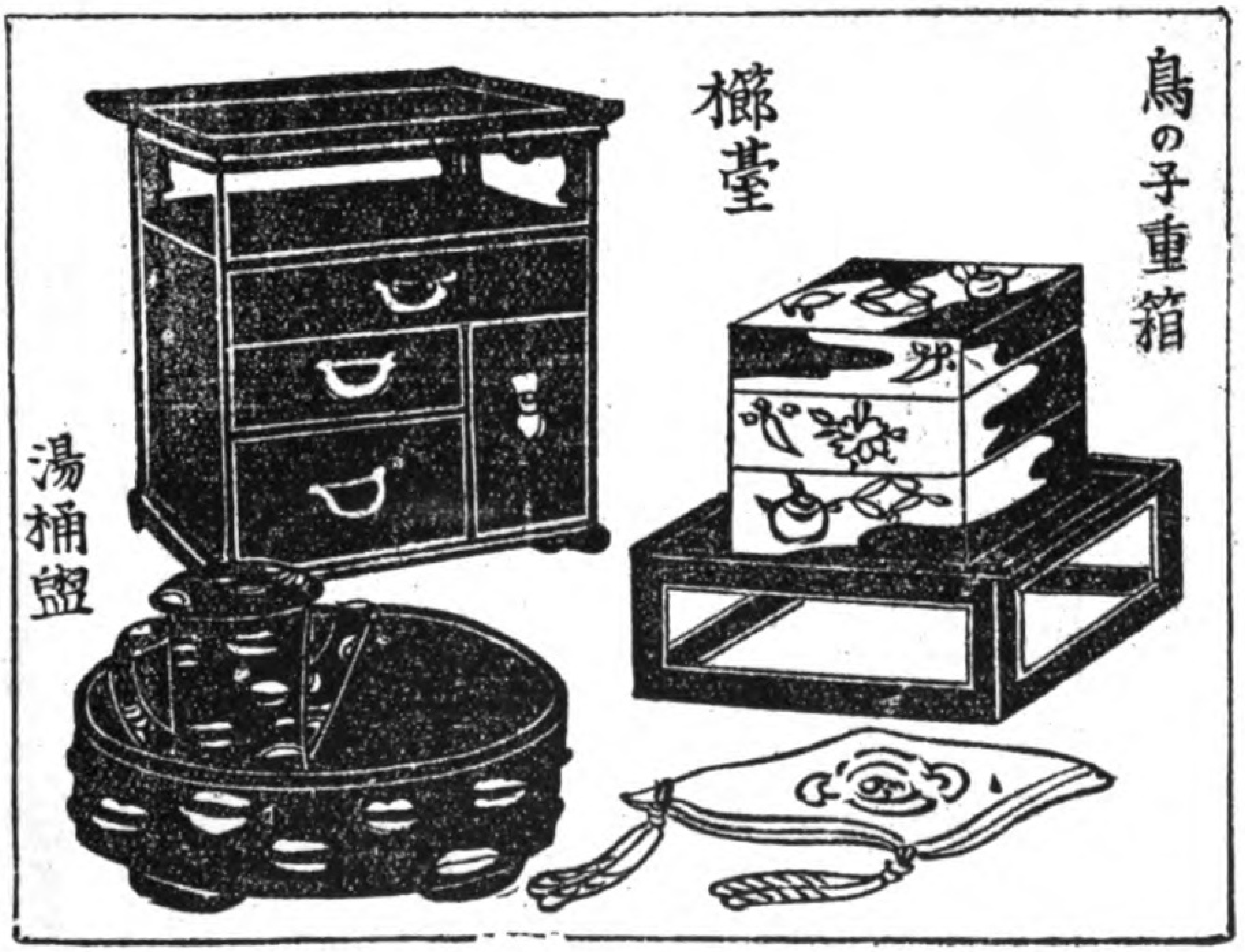
△閨房の設備

又媒人は婚禮の式を擧げざる前女中にさし圖して新夫新婦の夜具蒲團などを見はからひ置くべし、男を南、女を北、として枕はすべて西になるやうに命ずべし、これは小笠原流の禮法なり。

次に枕元には盃一個載せたる三寶と又卷鯣をのせたる三寶と外に銚子一個を備へ置く事をば媒人から女中へよく指圖し置くべき事且つ又嫁婿こゝに入り來り、衣服を着替へ終らば豫て備へ置くところの道具を以て盃事あるべし、この時酌人は小笠原流にては女中なれど、略式にては媒人がこの任に當る事あるべし。

見合の心得

そもそも、男女結婚せんと欲してこれが良縁を求めんが爲め其事を媒酌者に謀り、又は媒介者ありて縁談を双方の間に往復してこれを申込みたるところより、されば兎も角も相互に見合をせんといふ順序となるなり、



故に見合の性質は男女互いに其の顔容の善悪又は其の着服の美醜を見くらぶるにあらずして、まづ其の根本の性情を見るにあり、されば女の男を見るに尤も注意すべきは其擧動活潑なるや否や又其の天性の誠實なるや否や、又其の技倆は如何とよくこれを見還ぶこと肝要なり、而して男の女を見るに尤も注意すべきは貞操なるや否や、又其の家事を整ふに足るべきや否や、又一家の良婦としてよくこの責任に堪へ得るや否や、よくこれを見還ぶこと大切なり。

さて双方共に見合をなさんと欲するに當つては其の日限、時刻、場所などに至るまで双方の都合よき樣にこれを取極むるは媒人の役なり而して其見合の常日に至り見合の場所に赴かんと欲するに當りては

男は自分の母親をつれ、

女は自分の父親を伴ひ行くべし。

凡そ始めて結婚せんと欲する處のものは男女共に見合の席に於

て何となく氣恥しく極りの惡きものなるが故に十分の見合は雙方共に出來ざるものなり、されど父親若しくは母親にして附添へ行かば、其親々は既に自分に於て結婚したる經驗あるが故に自分の娘にこの男は相應はしからずとか又自分の思ふにこの娵ならば相應せりとか其互ひの所作を見合してこれを觀察すべし若し然らざるに於ては十分の見合は決して出來ざるものなり、是れ見合をする時は男は自分の母親を、女は自分の父親を伴ひ行くの必要ある所以なり、且つそれ青年男子の品格及び擧動の如何を觀察するに巧みなるものは父親に如かず。

妙齢處女の心操禮容の如何を觀察するものは母親に如かざるものなり、故に見合に當つて母親父親を伴ひ行くは尤も深き注意より出でたる事と知るべし。

婚禮の式場に於ける忌み詞

婚禮の式場へ招かれたる人は勿論たとへ婚禮のある家へ手傳にゆきたるものといへども婚禮は苟くも人間一生の大禮なるが故に言葉に忌み嫌ひして縁起をいふはまた敢て論ずるまでもなし、蓋し禮は恭ひを本として言葉に至るまで此の恭ひの意を缺きてにならぬ事なれば人々の忌み嫌ふ言葉を遠慮なく遣ひたらんには、これが爲めに他人の感觸を害し自から恭ひの意を缺ぎ、禮の効用を無にするに至る道理なり。

されば婚禮の時にはよく心を用ゐて他人の感觸を損れるが如き忌み嫌ふ言葉は決してこれを遣ふまじき事なり、今この忌み嫌ふべき言葉左に示さん。

○はなる○さる○わかるゝ○さむる○かへる○もどす○かはる○きるゝ○かへす○しりぞく○うすく○ながるゝ○とくる



結婚前の娘へ與ふる書

深山さくら

萩の下葉に露深の、夜寒をかこつ蟲の音も日に〳〵弱り行く今日この頃、御前樣には御かはりもおはさずや、私は相かはらず達者にて、ひたすら御佛に仕へまつり居り候まゝ御安心相成度候、さても俄かに御寒に相成候事よ、當方はわけて山かげのゆゑにや、夜など火鉢の傍はなれにくき迄に候、今宵も夕のおつとめすませ、本堂より廊下づたひ、藥師堂の方へと參り候折から、松の木の間にさし出し月かげは、御堂の屋根をてらして、さながら源氏繪卷の宇治うばそくの宮も、かくやとしばし珠數の手とめてたゝずみ申候、さはれ身は憂世の外の世捨人とはいへ、晩秋の風衣の袖をはらふ時、さすがに故しらぬ淚とゞめかね候、思へば此世に生を享けて三十有八年、老ひたる母を幾度泣かせし此身ぞと、我身の罪の空おそろしう、現在生みの我兒にも、はれて逢はれぬ身の心苦しさ、われから捨てにし憂き世の中ながら、流石に老母や我兒の事を思へば、夜半夢なりがたき事もたび〳〵に候、古しへの聖も「たらちねは、かゝれとてしも、うば玉の」と詠せられし通り、誰れかはかゝる姿にならんとは、かけても思ひ申すべき、是れも宿世より定まれる因緣とは申ながら、また一は兩親の膝下にて我儘いつぱいに育ち候身の、何の考へもなくうか〳〵と結婚致し候ひしより、優しき夫の言葉も露嬉しとも思はず、たゞ〳〵傾きし家の心細う、なれぬ水仕の業のいとはしの、實家に居ればかやうな賤しき業はせずともすむものをと、我まゝな心より、いとしき我子をもふりすてゝ、實家に歸り候てより後は、御前樣も御承知の通り、さまざまの境遇を經て世の憂さもつらさも知りつくし候につけては、つく〴〵以前の身の行のはづかしく、年經るまゝに我子いとしの、念はいやまして塵のこの世につゆ心の殘るまじに、墨染衣は身にまとひ候へども、ともすれば心の池の波たちさわぐ淺ましさ、御笑ひ下

され度、承れば御前樣も御緣談大分御はこびのやう昨夜御母樣よりの御文にて承知いたし、御よろこび申上ぐるにつけても、我身の失敗にかへりみて、御前樣には決して〳〵御あやまちなき樣、大事の上にも大事をとられるやういのりまゐらせ候、もとより御前樣には高等教育も受けられし御身ゆゑ、充分御考へもおはす事とは存じ候へども、世にはたゞ處女の折に空想へ居りし事とは、思ひの外異なれることも少からず、申迄もなき事ながら結婚は、人生の一大事に候へば、先方の血統は勿論當人の性質品行、經歷等は充分〳〵御しらべ相成やう御すゝめ申上候、世間には財產の多寡、舅姑小姑の有無等にて、大切の結婚を左右せらるゝ人も多く候よし、聞き及び居り候へども、たとへ幾百萬の財產これあり候とも、本人に缺點多からば何の益か候べき、翠帳紅閨に人しれぬ涙にむせぶ佳人は、少からぬよしに候ものを、また或は財產よりはたゞ氣樂な舅姑は勿論、小姑も無き人を望む人もこれあるよしに候へども、人間たれか父母無き者これあり候べき兩親あらば隨て兄弟もでき申すべく、またよし何の系累もなき人に嫁したりとするも、舅姑の機嫌一つとれぬ人の、いかで一家をよくとゝのへ收めて行かれ申すべき、其上家にはそれ〳〵其家の家風もあり、また世間へのつきあひや何やかや學校を卒業しばかりにて、實際にうとき机上の學問にてはさとりかねることも決して少かるまじく候へば、多年の經驗を經來りし舅姑に從て、これを習ひてこそ始めて世事にうとからぬ主婦となり得候ことゝ存じ候、戶棚のすみには汚れもの山をなし、おしろいびんは臺所の隅にころがるといふやうなとりしまりなきありさまは、よく新夫婦のみの家にて見られ候よし、又何の苦のあるべき筈なき夫婦さしむかひの家に、思ひのほか云々多きなどはあまりに氣兼ねなきにまかせ、お互に我まゝがつのり候よりの事と存し候、何にいたせいよ〳〵それと御きまりの上は、充分〳〵の御覺悟相成べく、先方の人となりし上はたとへ如何なる苦しき事あるも、よく堪へ忍びて己れのつとめはどこ迄も盡さんの御決心あり

度、また舅姑に對してはたゞ誠心を以て肉身の親兄弟として隔てなく對されなば、いかなる人といへども遂には心もとけ申すべく、世には結婚とは極樂への入口のやうに考へ、美しきよそほひをこらし、相たづさへて物見遊山に出あるき、或は馬車やゴム輪の車に、今日は芝居、明日は園遊會とおのが美をほこらん事をのみ理想とする婦人も少からず候よし、かゝる虚榮心のつよき婦人のいかで家庭をとゝのへ、子女を教育し得られ申すべき、また嫁して後この理想かなはずとて不平をおこし、引ては一家に波らんの絶え間なく、遂には破鏡の歎に遇ふ人もこれあり候よし、これ皆最初の覺悟の足らざるより起ることゝ存じ候、昔より月にむら雲花に嵐とも申候通り、世の中の事萬事おのれの意のまゝになるといふことは、決してこれあるまじく候まゝ、一たん嫁されし上にはいかなることも不平を起さず、これが己れに定まれる天職と信ぜられ、夫に缺點あらば己が誠心を以てこれを知らず／＼の中に感化して、ともに／＼家をおこし、社會國家人類のためになさんといふほどの御決心あらまほしう候。

かゝる事を申さば浮世はなれし身の現代の有樣にうとき古風な考へよと御笑ひあるかは存せず候へども、折々世間の事を見聞いたし候につけても、常々なげかはしく思ひ居り候事とて、かつは以前の我身にかへり見て、いかで御前樣には御過ちなかれかしと御身の行末思ふのあまりそこがましさもかへりみず右迄あはれこの尼の言葉も實にと御心の底にとゞめ給はらば嬉しうこそ。

筆にまかせて書きつらね居り候ほどに、はや月も山の端近う傾き初め候まゝ今宵はこれにて筆とめまゐらせ候末ながく御兩親樣へ宜敷願上候かしこ。

西の京香羽山のふもと

靜山尼より

時子樣

精神教育の不足なりし爲め不幸に終りし私の結婚

(家庭教育の足らざる女に對する好訓戒)

緋葵

私は私が如何にして結婚に失敗したかを話說するに先立つて結婚前に於ける私の經歷を一通り聽いて戴たき度いのです、私の父は教育家で嚴格な學者肌の人母は勝氣な才の鋭どい人で家は中流の生活をして居ます、私が此家に生れたのは明治十七年十一月一日、六歳迄は何事もありませんでしたが六歳の秋或事情の下に叔父夫婦に貰はれて東都を北へ去る五十哩許の某地へ伴なはれました、是が漂泊生活の始とは後年思ひ知つたのですが、未だ肩過ぎぬ振分髮の頭に何を辨へませう、當座のもの珍らしさにチヤホヤされる頃は無上に嬉れしくやがて其熱が冷めて冷酷に待遇られる樣に成ても親とは斯うしたものかとばかり温かるべき實親もいつとはなしに忘れ果てゝ其處に十年の星霜を過しました、身體は弱く精神はいぢけて感情は病的に走り不斷の恐怖と不安に囚はれつゝある十七歳の少女が唯一の慰安は讀書に耽ける事と自然に親しむ事とで世に華やく玉が君達の樣に帶の色小袖の模樣に苦勞するでもなく美しい戀の幻に醉ふでもなく唯學問がしたい、高等の學校に入り度い、そして詩人になり度いなどゝ果敢ない空想に憧がれつゝ沈鬱な生活を續けたのでしたが思ひもよらぬ運命の波瀾は此處に一線を劃して其年の夏私は實家へ引取られました其原因は養母の病死で養父に後妻を迎へるに就て私が在では邪魔だと云ふのが動機と成たのです、斯くして東北の僻地に貧しく育つた繼子は一躍花の洛の而も比較的富裕な家の長女として迎へられました其當時の心持は唯眩ゆく憧しかつたと云へば足りるのです多感的な都人の性

情や華美な歡樂の多い代り煩累も亦多い都會生活の印象やさま〴〵の刺戟を一時に受けた私の小さい胸は、如何に劇しく波立つた事でせう生れて始めて味はつた弟妹間の交情に笑つたり怒つたり夢の樣な日を送るうち早くも十九の春を迎へましたが餘りに劇しい境遇の變化に生れた土地生れた家とは何うしても思へない程落附のないさすらひ心地の不安もまだ去らぬ間にもう緣談が始まつたのです、二口あつて一方は東京で母の遠緣の者一方は東海道最寄の或港で同じ教育界の人是は父方の叔母――、其近傍に住む、――からの申込でした叔母の云ふには本人は中學卒業其叔父に國文漢籍に達した人が在て其と協同して私塾を經營して居るので中々盛大にやつてる樣子外に不動產もあり舅姑は無し本人の品行は方正で寡言な鷹揚らしい人物僕も近邊に親戚が無て淋しいから千枝さんをやらぬかとの事、體は虛弱なり多年田舍の平靜な空氣を吸た者が繁雜な東京生活には堪へられまい其よりは地方で財產が有て舅姑が無て私塾にもせよ經營して居る其上人物が穩健と云ふのだから此方が千枝子の一生の安樂を計るには適當だらう且さう成れば姉――叔母の事――も喜こぶから違つてもいゝとは父の意見母も大體同意で殊に一方は自身の緣類である處から押切てすゝめるも面白からずと云ふので遂に私は嫁く事に定りました一應私の意も尋ねられたのですが何分取止のない若き心に是非の考のあらう筈もなく有耶無耶の間に承知と認られて了つたのです、嗟!!!結婚とは如何なる意義を有するものか？、亦も流轉の吾を迎へる新しい國はどんなであらう？、東北の地は山であつた東都は野である彼地は海の國と聞く、左らば吾を圍む人々も山の夫の如く冷に壓迫するであらう？野の其の如く熱く刺すであらう？それとも冷に僻せず熱に過ぎず溫に吾を抱いてくれるであらう？、是等の想に迷ひながらも日を經るにつれ俄に增して來る衣服調度の花紅葉、髮飾の金銀珠玉を見た私の心はわけもなく浮立ました今迄小說の口繪や都大路の行ずりに憧がれの眼をひきつけた華美姿其を自身に實現し得ると思ふと矢も楯も堪り

ません恐も不安も何處へ行たのか白粉の乘らぬを氣にして毎日鏡と首引するやら束髪に馴れた髪の癖を直すやら或公園で型斗りの見合を濟ました後で
(三ヶ月程前死んだ先方の母の病氣が肋膜炎だと云ふが氣にかゝる)
だの

見合した日に聟が直接家へ來るなんて沒常識だ(見合を濟ますと直ぐ媒妁同道で私の家へ來て如何ですと問ふたさうです聟君が)と母が不安らしく云ふのも夢の心地に聞流がす始末、夫になる人は頭の小さい脊の高い人で仙臺平の袴がキラ〳〵光つてたと見たのは唯それだけ、かくて櫻も散てゆく春の雨わびしく降暮らす頃 私 は妻と呼ばれる身となりました。

世に遠美近醜といふ事を申ますが私程此語の意義を痛切に味つた者は多くあるまいと思ひます私が嫁して第一に知つたのは舅姑共に肺結核で死んだのみならず現に末の弟は同病で廢人同様ブラ〳〵して居る事です第二に知たのは私塾を經營して居るとは名のみ唯會計を預つて居るばかりで育英事業に盡すのでも何でもなく其から生ずる利益の一部と不動産の所得とで無爲の生活をして居る事です欺かれたとの悔恨は私自身よりも兩親が却て切實に感じたのですが今更何と取返しがつきませう、何事も運命だ惡疾に感染せぬ樣精々注意して家道の興隆を計れ、とは當時兩親から聽かされた訓戒です、姑なき家に嫁つた私は直に主婦の任を實地に行はねば成らぬので夫は月々一定の額を私に渡して生計費を辨ずる事に定めました其額は僅少な物でしたが儉ましい生活には馴れてる私左程不足の念も起りませんでしたが困るのは家族の習慣です一體に生活程度の低いのはまア止を得ないとしましても行住坐臥に規律と云ふ物が些もなく飢ゆれば食らひ飽けば眠ると云ふ風で其が弟妹七人の員數ですもの其亂雜さ加減はお話になりません、衣食萬端の世話に餘計な手の掛るはまだしも一同が食事時に集まつた事は殆なく菜の撰好そして各勝手に刺身を取る者もあれば蕎麥を誂らへる者もある其等の支拂のみでも渡された金子の過半を要

するので月末の決算がつきません、最初一二ヶ月は實家から持參したのを出して間に合せましたが其も長くは續かず且帳簿の整理の出來ぬので止なく夫に打明けました夫は

「そんな事をして居るのか、ちつとも知らなかつた、一體母が惡い無暗に甘くしたもんだから增長したんだ、而し今迄は自分一人で監督も屆かなかつたが汝が來た以上さう云ふ事のない樣にするのが汝の務だらう決して遠慮は要らんからドシ〳〵叱て斷然不經濟な所爲はさせない樣に、」

と云ひます私も嫁入つたばかりで小姑に叱言を云ふのも厭なり世間のきこえも如何と思ひましたから、

「それは漸々改めさせる樣には心がけますが一時に全廢させるわけにはまゐりますまいから不足の分だけ拂つて下さいそのうちにはお預りしたゝけで足りる樣に致しますから」

と押返して賴みましたが、

「イヤそんな事をしては癖になる斷然全廢させなきやいかん」

と申て聞き入れません、無理な注文とは思ひましたがやれる丈はやつて見樣と決心して其の後は同じ魚を料理するにも各自の好を聞いて幾色にも作り一週に一度は刺身でも蕎麥でも好な物を御馳走するから平日は出來る物で食べて頂戴そして冷めると不味くなるから御飯の時は早くいらつしやいと賴む樣にしましたが中々きゝません、僕はこんな魚ァ大嫌だ鰻なら喰つてやる、と一人が云へばお腹も空かないのに御飯食べると胃が惡くなるお母樣がそんな事しちやいけないつて言ひましたと一人が口をとがらせる、實にほと〳〵困り切りました、兄弟喧嘩は引切なし夫に叱責されるとフイととび出して二日も三日も歸らないと云ふ有樣、七人が七人皆惡い性質と云ふでもあるまいに何故かう不和なのだらう殊に七人が徒黨して夫＝延いて私＝に反抗する風の見えるのは何故かと段々氣を附て見ると了解りました、連枝の榮長久に春なるべき家庭を秋風落寞の悲境に轉ぜしめた罪の半以上は確に夫にあるのです、

夫の言動は弟妹に對して實に冷酷を極めます小遣錢さへもロク〱與へないで二言めには折檻の笞を加へます、この冷酷な處置は弟妹に對する時のみに止つたでせうか否々妻に對しても日一日と其鋒鋩を顯はして來ましたそれは結婚後僅半年程後からの事で、夫は常にかう云ひます、

「實に弟妹程厄介なものはない食ひ潰ぶされる丈でも大抵ぢやないのに將來もヤレ學費だソレ何だと金遣ふ事はかり考へてるおまけに不治の病人はあるし實際自分の兩親程不心得な人間は無いよ子を多數生みつ放しで將來の計も立てないで死でしまふ、其もいゝが父は企業狂の盛な人で學校事業の爲に財產を悉消耗ちまつたんだ財產は讓られないで厄介を七人も讓られたんだから世話アないや、實に子供なんぞ持つものぢやないね、千枝さんはどう思ふの、」



私は餘りの事に暫時は言葉も出ませんでした。

「良人は小兒はお嫌ですか」

ときゝますと、

「嫌とも大嫌だ不經濟で不潔で、小兒が殖ゑると反比例に金が減るよ死んだ兩親を見なさい財產は失くす多數の子を抱へてどんなに困つたと思ふ自分が中學を四年で廢めて

歸つてから一心不亂に整理して辛と是丈に回復したんだ、吾々が子を持てば又兩親の二の舞をやるんぢやないか馬鹿々々しい、」

親を呪ひ同胞を咀ふてひたぶる蓄財に熱中する夫の頭腦には唯金あるのみで他は一切ないのです、愛も情も趣味も嗜好も、

「何故さう金が欲しいんです？」ときけば、

「何故つて金が無けりやつまらんぢやないか、……せめて十萬とまとめて欲しい、」

と黄いろい貧相な顏を斜に、にぶい眼を光らして空に憧がれる樣な面持、私は情なくなりました。

「千枝さん汝は貴族主義でいかんもつと儉ましくせにや、昨夜も飯櫃に冷飯がウント殘てたうめ（下婢の名）が捨てやしないか、そんな事をよく注意してくれないと實に困る積れば大きい物だから――」

夫は密に庖厨から掃溜の隅迄見廻るのです、宿無犬が來たから可哀さうに飼てやりませうと云ふと、

「馬鹿なッ食潰しは人間で澤山だ犬迄脊負込んで如何する、」

と怒ります、交際費がかさむ、衣服が奢侈だ、と口汚ない叱言が日夜絕えませぬ、さうして溜めた金は大方銀行へでも預けるのでせう小簞笥の鍵はいつも固く閉じられて私が怪我にも手をつけ樣ものなら火の樣に腹を立てます、其上日常の行爲の野鄙な事お話になりません一二を云へば、外出する時外套を着ると下の衣服をグルリ端折ります何故さうするのかと問へば裾が切れるからなとの答出先から歸ると袂に菓子の包紙ばかり殘つて居ます人にやつたのかと思つたら人通りのすくない路で歩きながら喰べるのださうです、其他奕棋は打つ移にはよからぬ者にすゝめられてマニラの富まで秘密に買ふのです、つまり新婚の樂しさと云はふより他人を入れた當座の心づかひから被ぶつて居た頭巾がぬぎ捨てられたのです、最初苦勞の種であつた弟妹は其後追々惡習も矯り從順にもなつて大によくなつたのですが今度は夫の方が手がつけられなくなりました

私は夫を感化しようと企だてました、おほけない業

ではありますけれど他人では出來ない事迄やり遂げる覺悟で其後は事にあたり折にふれて諫めもし手ひもしましたが其功蹟は……お恥かしい次第ですが、擧らないのみならず夫はひどく私を嫌ひはじめました、悉く私が至らないからで今に悔恨の極みに堪へませぬ、

翌年は私が二十夫が二十六の歳です、七月末から八月へかけて何となく心地勝れず胸惡さに食を廢する日も重なりましたので醫師に見せました處姙娠らしいと申ますので嬉[illegible]に胸を躍らせました、人形を見ても直ぐ欲しくなる程小兒好の處へ長年寂寞な暗い月日を送つて來た私が淸い愛らしい天使を授かつたのですもの嬉しく無くてどうしませう、夫も日頃あんな事は云ふけれど他人の子ちやなしマサカ嫌ひもしまひと思つて早速話しました、其と聞いた夫の顏は……曇りました、

「困るナもう出來たのかい、チョッ大失費だ」

私は堪り兼たので

「良人餘り非道ちや御座いませんか沒人情にも程があります」

涙と共に心にありたけの情なさ口惜しさを搔口說ましたが夫は牛の角に蚊の止まつた程も感じません、處が三ケ月程後の事、或日夫が柿を買て來まして食べろと申ます、何處へ行てもみやげなぞ持て來た事は無いのに珍らしい事と思ひながら一つ二つ喰べました其の所爲かあらぬか下痢を催し次いで風邪の樣な症狀を顯し五六日床



に就て居るうち遂に流産致しました、醫師は風邪の爲であらうと申ます私も柿を食べた爲に流産したとは信じませんが訝かしいは夫の行爲です何故と申ますと一週間程經てから見舞に來た借家人の老婆に柿の事を話しますと、

「まア奥樣とんだ物を食りました、お若い方は其だから困ります先月でした旦那樣が私共へいらしつた節私が種々申あげて食物等もよくお氣をおつけ成すつて時の物ですが柿などを食つたら大變冷を起して忽流産してしまひますよつて申あげましたのに……」

と云ふではありませんか、夫の心事を怪しまずに居られませうか、事實の有無はとにかく此一事で夫に對する私の情は氷よりも冷になつて終ひました、感化する望も絶えました、かゝる冷酷無情なしかも愚昧な人と苦樂を倶にして囚はれの生涯を終るのが私の運命かと思ふと深かい深かい絶望の谷底へ投込まれた心地、流産後の肥立の惡い處へこの悲痛に接したので私はそれなり枕が上らずうつら病む身となりました、ヒステリーだのヤレ子宮病だのと田舍醫者の勝手は診斷種々な藥を服まされますが心の破れた者に何の効が有りませう、其年も暮れましたが私の病は重りもせねば治りもせず、春雨秋風徒に送り迎ふる三年越私は二十三に成りました、其間叔母や實家の兩親に事情を話した事もありましたが一體私は愚痴らしい事を口にするのが嫌で悲しい事でも左程でない樣に冗談らしく言つてのける癖があります其上離婚して貰はふとも思ひませんから大概な事は默して居りましたのでマア〳〵辛抱するがいゝと申て居りました、日一日と衰弱してわれからの心地に唯一日も早く死に度と望んだ私はせめては一期の思ひ出に好める讀書を飽きる迄したいと文藝に關する書物を借り集めては讀耽つて居りました、中にも悲慘な運命や暗い生活を描いた新作を喜んで讀みましたが其書籍をよく貸してくれましたのは近傍に住む若い海軍士官、長弟の友人なので私とも交際しました、軍人に似合はない文學好で感情の熱い眼の美しい人、新派の和歌に熱中して晶子女史の崇拜者だつた

其人の私に對する暴動が漸々變になつて來たのです、和歌を作ると紙片に記しては持て來て私と弟に見せるのでしたが後には私にばかり見せる樣になり時々穩ならぬ文字が書かれて在る樣になりました、私は言ひ樣のない程恐の念に打たれました、是は斷然交際を絶たなくちやいけないと思ひまして借りた書籍を返すにつけて其となく諫言の書狀を送つたのですが其が爲却て反動力を起したと見えて猶頻々書狀をよこすのです、惱める君へだの慘ましき紅芙蓉の君だのと表記された千尋の文、中には熱烈な同情の文字がくどい程並べてあります、彼人は私と夫との仲も夫の性質もよく知て居るのです、世に貴女程慘ましい運命を持つ人は無い私は同情に堪へぬ同情の極逐に戀に落ちた此頃の惱ましさ苦しさを察してくれと綿々の情を語る文字、是を見た私の心が針の先で突いた程も動かなかつたと申せば虛僞になります、實際動きました、けれども何うする事が出來ませう、私と彼人の間には越えられぬ溝が横たはつて居ます、初戀の甘酒に醉ふべく餘りに私の心に思慮があり過ぎました、どうかして是危險な渦中から身を免れ度いと悶えましたが何分病床に在る身で思ふに任せず、情なく當れば當る程募る形で終には自暴自棄になつたのでせう、毎日の樣に來ては暇を窺つて私の室へ這入つて來て思を訴へます、せん術つきた私は止なく夫に打明けました、是々の事情ですからこれから成る可く家に居て下さい其うち彼人も艦に乘るとか聞ましたから暫時の間ですからと頼みましたが夫はさうかと言つたぎり別に心にかける樣子もありません、兎に角家にさへ居てくれゝば安心して居りますと或日來ましたが夫が私の傍に居るので弟の室に談して居ます、處が夫の處へ他から書狀が屆きました金錢上の用事で直ぐ來てくれとの事です。

「一寸行て來る」と夫は立上りました。

「アッ良人彼が居るぢやありませんか、歸る迄家に居て下さい」と縋りましたが

「グヅ〳〵しては居られん這入て來たつて白晝何ができるものか、何なら自分が逢つて絶交を申渡してや

らうか」

「そんな事をして怒らせるよりまア良人……」

云つてる間にサッサと支度して遂に夫は外出してしまひました、例の事とは云ひながら何故あゝだらうと私は腹立しさをつぶやいて居りますと又も玄關の障子が開いて出て行くのは弟らしい……ハテナと考へてる間にサラリ襖が開きました見ると彼人の立姿!!! 絣づくめの服裝に薄紅の顏美しい眼は一種の光に輝やいて居ます。

「千枝子さん御氣分は如何です？」

と云ふを冒頭に例の話を繰り返し始めます。

「貴郎もう其お話は止めて下さいそして私は氣分が惡いのですから歸つて下さい、病人を苦しめるにも程があります。」

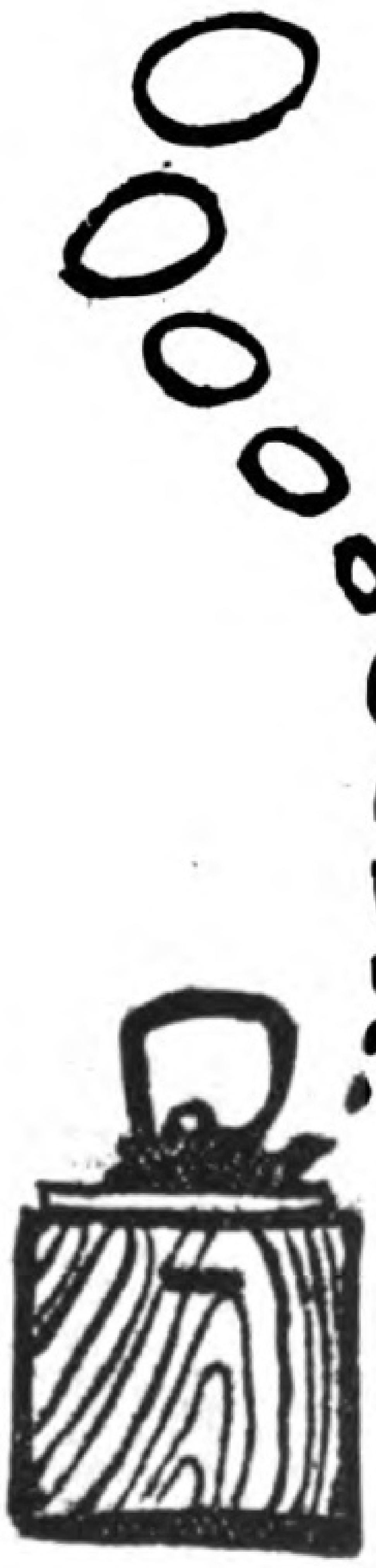
云ひ捨てゝ私はツト立上りました、室を出樣としたのですがいけません、四五日物も食べぬ上絶えぬ悶に頭は破れるばかりヨロ／＼と倒れかゝる體は男の手に抱かれました。

「千枝さんひどいです、是程思ふ僕の心が……エ、ッ」

振り放さうともがく私の顏へ熱い／＼男の唇が……

男は風の樣に飛び出しました、私は疊に喰ひついて泣きました。

三ケ月過ぎた六月の初旬私の病氣はいよ／＼重つたので實家からの申越もありさすがの夫も捨て置けず私をつれて出京しました、そして某病院へ入院しました、病症は十二支腸蟲と高度のヒステリー、其年の秋漸く全快して退院を許された時はもう私は人妻ではありませんでした、實家の兩親が事實の眞相をきいて離婚をさせたのです。



△私の縁談　（一等五拾圓）　初しぐれ

△嫁にゆかぬ人　（二等參拾圓）　内藤千代子

△私のは平凡　（三等貳拾圓）　秋　風

△當世七人娘　（三等貳拾圓）　うき雲

△當世見合の聞書　（四等拾圓）　月下氷人

△幸福なりし私の結婚　（四等拾圓）　水仙女史

△待たるゝ春　（四等拾圓）　花子の姉

△蠻殺女の結婚　（四等拾圓）　紫　子

△不幸に終りし私の結婚　（四等拾圓）　緋　實

△結婚前の語らぬ心△ゴム輪の車十二輌△二圓の結納で結婚した人△親の犧牲となつた女△彼女は如何にして輝く夫人となりしか（以上五等五圓）

但し五等賞にて他に未掲載の分五種ありこれは次號の誌上に發表す。

化粧のしをり

新婚旅行の前夜

艶子

華燭の典を擧げてから未だ一と月も經たない。今から思ふと夢のやうで、四海浪を謡はれたのも、手を引かれて座敷を立つたのも自分のやうではなかつた。それが、夫といひ、妻と呼ばれるやうに變つて、今は新婚旅行に出掛けるところ。もう恥かしいのも過ぎ去つたとはいへ、それでも何だか氣が落ち付かぬ。明日の仕度も怠れから手を付けてよいやら、殆んど持て餘してゐると、

「花さん怎うして居るの？。」

と言ひ乍ら伯母さんは襖を開けて這入つていらした。あまり取散らして居るので目を丸くされる。

「伯母さん、ホヽヽ妾何だか忙しくつて。」

伯母は此の赤兒にも困つたといふ風、

「花さんは餘り嬉しいもんだから……、ホヽヽ一體何をしてゐるの？」

自分が身廻り物を調べて居ると、御料クリームと御料たつた白粉が出た。伯母はそれを取り上げて、

「之れは何うして用ゐるの？」

と言はれる。自分は先づ御料クリームを顔や頸筋にすり込み、それを拭き取つて、又御料たつたでお化粧する事を言ふと、

「婚禮の晩も之れだつたの？、道理で美くしかつたわね」

自分は結婚當時を思ひ出して顔を眞赤にしてうつ向く。伯母は口にハンカチを當てヽお笑ひになる。折から庭下駄つヽかけて飛石づたひに來た夫は唐突に座敷へ上つて來て、此の光景を見て又からかひはじめる。

「花さん、大へん御狼狽だね、伯母さんに兜を脱がされたんだね」

と快活に言ふ。自分は何と言はれても仕方がない、

實際此れは重寶なんだから。何時ぞや隣家の醫學士の先生に伺つた時も、無鉛で完全なものは少ないが、御料たつたなどは先づ無難で良く出來て居るとおしやつたから、其後自分はずつと之を用ゐてゐる。クリームを頸筋から顔へ塗つて摩擦すると、垢が紙捻の様になつて出る。それを落してから、濡れ手拭で拭いて地を拵らへ、それへ白粉をつけると延びがよくて附着がよくつて、ほんとに上等のお化粧が出來るのですもの。今度の旅行にも之れ丈はどうしても忘れられないと思つて荷物に入れたら、二人から又笑はれた。

「だつて、大和や山城へ行つたら、恁んなものは無いでせう？」

「オヤツ、これはしたり、そんなものは何處にでもある、特に關西は其の本元ぢや、はツはゝゝ」

夕日は庭の紅葉に光を投げて、新婚旅行先の秋色を語り、和らかな風は籬の菊を渡つて此の温かき室に香を送る。

其後旅程も早や半ばを過ぎ、法隆寺を訪ひ、奈良に一泊して歸京しやうといふ日、二輛の車は三室の山近くに乘り捨てられた。夫と自分は川の堤防を散策しながら龍田神社へ志ざした。龍田の川の錦といひ、渡らば錦中や絶えなむと詠ぜられし名所だけに、紅葉は二月の花よりも紅で、紺碧に澄み渡つた空を彩り、瀬々らぐ川には影砕けて錦を裂くやう。兩人は低徊去るに忍びないで、五歩行つては止まり、六歩行つては仰ぎ見た。夫は、一本の楓樹の霜に遇て殊に美事なのに恍惚と眺め入る自分を顧みて、

「花さん、紅葉は美くしいね、然し花さんも美くしいよ白粉が良いから、決して紅葉に負けないね。」

自分は莞爾とした。

「ほんとに白粉は人を美くしくするのでせうね妾、これも龍田姫の賜かと思つてよ、縁ですね。」

食卓日誌

波津子

(月曜日)

小春日和と言ふのであらう、今日は、日本晴の上天氣で、南緣近くに針を運ばせて居ると、額が汗ばむのを覺える。今日の献立は、

(一)ミートコロッケー、
(二)松茸と豆腐の椀、
(三)松茸の三杯酢、

(一)は、馬鈴薯の大四個を、皮を剝き芽を去り、暫時水に浸して灰汁をぬき、食鹽少し加へたる水にて柔かに茹で、湯を捨てゝ水氣を取るため火にかけて鍋をゆり動かし、鉢に入れてよくつぶし置く、次ぎに牛肉半斤挽き肉にして玉葱も細かく刻み、先の馬鈴薯と玉葱と肉を一緒にし、小匙四分の一程の食鹽と少量の胡椒にて味をつけ、縦一寸五分、丸さ八分位の形にまるめ、玉子液に浸し、パン粉にころがし、ラードにて兩面狐色になるまで揚げる。

(二)は、鰹節と昆布にて煑汁を取り、薄味をつけ、松茸は石突を去り、極めて薄くきり、豆腐は三四分位の賽にきり、煑汁の煮上りし時に入れ、煑立ちたれば、鍋を卸し、椀に盛る。

(三)は、松茸の石突を去り、軸のみを短冊形にきり笊に入れて熱湯をそゝぎ柔かくなりしとき、水氣をきり三杯酢（醬油、味淋、酢の同分量のもの）をかけ卸し山葵を添へる。

(火曜日)

昨日暖かゝつたので、今日はまた、今にも泣き出しさうな空模樣、今日は

(一)薩摩汁、
(二)小鰺のフライ、粉ふき芋、
(三)小蕪の酢漬、

(一)は、大根、人參、椎茸、八つ頭を茹で、別に味噌汁を薄く拵らへ、豚肉を入れて四十分ばかり煑て後先きの茹でし品々と、玉葱の輪ぎりにせしものをい

れ、また三十分ばかり弱火にて煮、椀に盛る。
(二)は、小鯵を三枚に卸し、米利堅粉をつけ、玉子液に浸し、パン粉にころがし、バターにて揚げる、粉ふき芋は馬鈴薯の皮と芽を去り、二分位の輪ぎりにして鹽をいれたる水にて茹で、柔かくなりたる時湯を捨て、火の上にて鍋をゆり動かし水氣をとり、其まゝ布巾をきせて暫らくむらして置く、両方を皿にもりソースを添ふ。
(三)は、小蕪の皮をむき、縦横に細かく庖丁の目を入れ、笊に入れて鹽を振りかけ、一時間ばかりの後、酢一合に砂糖大匙二杯程入れたる中に浸し、三十分ばかりの後、赤唐辛の皮を極めて、細かく刻み、蕪のきり目に程よくはさみて器にもり、酢を煮たて砂糖少し加へたる汁をかけて出す。

(水曜日)

朝から春雨の様な、細かい雨が、濕めやかに降つて居る、袖垣近くのダーリヤがあまり美しいので秋海棠をぬいて、机の花瓶に挿して置く、露ながらの風情、また一しほに、引きたつて見える。今日は、
(一)ロールキャベーヂ、
(二)自然生むし、
(三)梨の田楽、
(四)ポーチドエッグス、
(一)は、挽き肉半斤に、玉葱の細かく刻みたるものをませ、鹽と胡椒にて味をつけ、米利堅粉を小匙二杯程入れ、玉子をいれよく混ぜ合せ、バターにて色の變るまでいためて置く、次ぎに沸え湯に、重曹を入れたる中にてキャベーヂのよき葉の洗ひたるものを茹で、柔かくなりしとき、手際よく、先きにませ合したる肉を巻き、バターにて両面をやきいため、ホワイトソースをかけて出す。
(二)は、牛肉を薄くきり、茶碗むしの茶碗に入れ、三つ葉と椎茸を添え、別に自然生のすりて、濃き煮出し汁にて薄くのばしたるものを、其茶碗に八分目程入れ、蒸籠に入れて十五分ばかりむす。
(三)は、梨の皮をむき、半月形にきり、心をぬき、水

に浸して灰汁をぬき、串にさして胡麻の油を塗りてあぶり、味噌をよく擂り、玉子、砂糖を加へたるものを味淋と湯にてゆるめ、先の菜に塗りつけ、焦げぬ程に乾かし、卸し柚子を添ふ。

(四)は、食パンの縁のかたき所を取り去り、厚さ三分位にきり、弱火にて金網の上にのせて炙り、バターをつけ、兩面を狐色になし、別にフライ鍋に湯を煮たゝせたる中に、玉子を割り入れ、形の損れぬ様、半熟にて出し、皿に先のパンを敷き、上に玉子をのせ、バターを添へる。

(木曜日)

今日もまた雨、肴屋は來ても、思はしいものもない仕方がないので、今日は、

(一)ポータシチウ、
(二)むし松茸、
(三)里芋の甘煮、
(四)キャベーヂの酢漬、

(一)は、豚肉一斤、其まゝ、バターにて兩面をよく炙りつけ、熱湯をそゝぎ、其汁のまゝ、深鍋に移し、弱火にて、二時間ばかり煮、後取り出して細かくきり、再び前の鍋に入れ、バター大匙一杯、米利堅粉大匙二杯をときて入れ、食鹽にて味をつけ、また弱火にて一時間ばかり煮詰めて皿に盛る。

(二)は、松茸の石突を去り、傘軸ともに、手にて裂き小丼にもりて、青松葉を上よりかけてむし、味噌をすり、玉子と卸し柚子砂糖を加へたるものを、むし上りたる松茸の上にかけて出す、勿論松葉はむし上りたるときに取り除く。

(三)は、里芋を皮をむき、柔かくむし、昆布と松魚にて味をつけ器に盛る。

(四)は、キャベーヂを細かく刻み適宜の鹽加減にて一晝夜程漬けて置き、搾りて砂糖をいれし酢の中に浸す。

(金曜日)

朝の中は雲が出て居たが、午後からはからりと晴れて、さすがに心持がよい。さて、今日は、

(一)牛肉の味噌吸物、
(二)栗、かしわ、ごばうの甘煮、
(三)ポテトコロケー、
(一)は、牛のラン肉を細かく叩き、米利堅粉と、玉子をよき程入れて小さき團子を造り、松魚汁に味噌を庖丁にて叩きたるものをいれ、煮立ちしとき、火より卸し、五分間ばかり其まゝむらし置き、後水漉にて卸し、再び火にかけ、煮立ちしとき、前の肉團子をいれ、三つ葉を添えて椀にもる、吸口と柚子。
(二)は、鷄をそいれて牛蒡を柔かく茹で薄く短冊形にきる、栗は上皮をむき甘皮を擂り鉢にてすりとり、水に浸して灰汁をぬき茹で置き、最初、味淋と醤油砂糖にて、鷄肉を煮、次ぎに栗を煮、最後に牛蒡に味つけす。
(三)は、馬鈴薯の皮をむき、芽を取り、水に浸してあくをぬき食鹽を加へたる水にて柔かく茹で湯を捨て水氣をきり、鉢に入れてよくつぶしバターと牛乳、鹽胡椒、何れも少しづゝ入れ、味をつけ、よき程の形に拵らへ、玉子液に浸して、パン粉にころがし、ラードにて両面狐色になるまでやく。
(土曜日)
今日はまた曇、明日の日曜は、何うやら雨らしい、床の間の花を、挿し代へて置く、今日の献立は、
(一)ミートオムレツ、
(二)豚の刺身、
(三)梨のフライ、
(一)は、肉と玉葱の細かくしたるものを、鹽胡椒にて味をつけ、ラードにていため置き、別に玉子を白味と黄味を別々にし、白みを泡だて黄味をとき牛乳と鹽と胡椒をいれ、白みの泡立てしなかへかき廻しながら黄身をませ、バターをひきたるフライ鍋に玉子を注ぎ、下のやけしころ、先の肉をいれ、柏餅のごとく、二つに折りて燒く。
(二)は、豚肉を大ぎりのまゝ、水煮し、一夜醤油に浸し置きたる醤油豚を小口より薄く刺身につくり、馬鈴薯の鹽ゆでにしたるものを添へソースをかけて出

す。

(三)は、梨の皮を去り、心を拔き、薄くきり、玉子液に浸し、米利堅粉をまぶし、バターにて揚げる。

(日曜日)

また今日も雨？眞個にこの頃はいやな天氣ばかりで氣がめいりさうな、今日は、

(一)鷄肉團子のすまし汁、
(二)チキンカツレツ、
(三)林檎のフライ、
(四)ゆりの甘煮、

(一)は、松魚と昆布にて煮汁を取り、醬油と鹽にてかげんしたるなかへ、鷄肉の叩きて小さくまるめたるものを入れ、みつばを添え、吸口はそぎ柚子。



(二)は、鷄肉を巾二寸、長さ三分位にきり、棒または庖丁の脊にて切れぬ樣に叩き、鹽と胡椒を入れし、玉子液に浸し、パン粉にころがし、ラードにて兩面狐色になるまでいためる。

(三)は、林檎の皮をむき、心をぬき、二分位にきりて米利堅粉と、玉子、砂糖、鹽少し加へ水にてゆるめたるものを衣としてヘットにて揚げる。

(四)は、百合を一枚づゝにはがし、水にて洗ひ黑き斑點を去り、沸湯の中に鹽をいれて、ざつと茹で、水氣をきり置き、砂糖水に鹽少し入れたる汁の中に、五六枚づゝ、茹でたるゆりをいれ、煮上りて、うき上るをまちて、網杓子にてすくひあげて器に盛る。

家庭に於ける伊藤公

△氣質は全く歐洲風

公爵の性格は至極磊落、且つ當國の元勳でありながら少しも藩閥の臭味なく何人に對しても城府を設けず、されど物事に對しては極めて熱心で、又勉強家で精力の強い方で暇さへあれば讀書をして居られ、常に新進の思想を養ふ事には多くの注意を拂つて居られた。學は漢洋を兼ねて通ずるといふ方で、元勳中稀に見るの學者であつたが、只日本在來の書物はあまり手に觸れられなかつたやうです。學問の素養が歐洲風である處へ、種々と實際上の學問から錬め爲された修養が全偉大な性格をつくつたものと見えます。

△福相耳と長壽耳

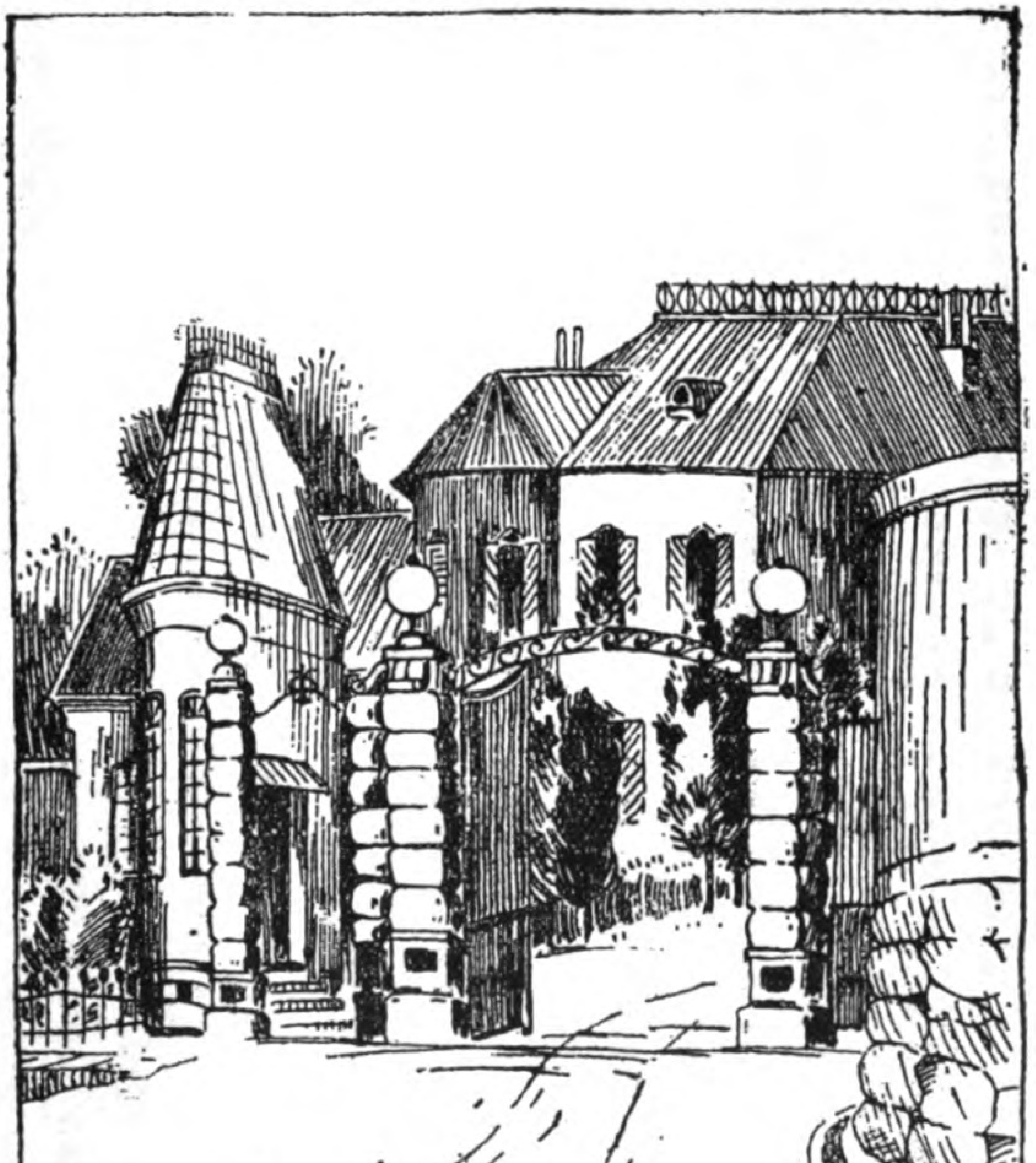
お身體は至つて健康な方で、滅多に病氣などに罹られた事はありません。公に昵懇であつた或る醫師の話に、「公にして壽を保たれたならば、必ず百歳近く迄は齡を重ねられたことゝ思はれる、それは血統上から見ても言ひ得る事で、二三代前の人は知らぬが、公の父たる十藏翁は確か八十四歳で亡くなられ、母堂も亦隨分の長壽を保たれた。血統が既に長壽の家であるのみならず、公の身體を見ると長壽せねばならぬ樣に出來て居る。即ち身長は五尺二三寸、重量は十六貫前後で、肥瘦其度に適ひ、殊に[illegible]圓滿である。殊に其耳を見ると嚴父十藏翁の耳の大きな事尋常でなく、そして公の耳も亦然うである。元來大耳は福相として我國人の喜ぶ所であるが、大耳は單に福を意味するばかりでなく、身體の健康精力の强弱にも關係を持つて居る。ツイ一週間程前に死亡した伊太利の大醫ロンブロゾー氏なども耳に依つて人間のあらゆる方面を觀察して居た程で、公の耳を同氏に見せたならば必ず其長壽と精力の强大なる事を保證したであらう。」と言つた。

△驚くべき精力の人

實際公が日常の言行上に表現された精力を見ますと、其健康であつた事、又長壽であつたらうといふ事が察せられます。即ち記憶の强かつた事、殊に讀書が好きで、手より書卷を離さなかつた事などが其著しいもので、身體の健康なものでなければ決して然ういふ事は出來ませぬ。又睡眠時間の少かつた事なども能く世間に知られて居ますが、睡眠時間の長短は習慣にも依りませうけれども、生來身體の强健な者でなければ然も出來ません。即ち身體の弱い者は寢るのに輾々反側する時間が多いけれども、公などは頭を枕につけられると直ぐ寢入つて了はれるさうで、斯樣に熟睡されるから驚くべき少時間でも少しも身體を害しませぬ。

△好物は刺身に鯉のせごし

食事は平常何んなものを召上つたかと申すに、決して贅澤なものではありません。尤も公爵獨特の嗜好はありました。十數年來滄浪閣で公の廚房を司どつて居た人の話によれば、以前は一切日本料理であつたけれども、七八年前に洋行して歸られてからは、日本料理でも西洋料理でも召上られて、主な食事はお寢酒を召し上る時即ち夜の十一時から二時三時の間に取られますが、十年も前は却々の大食家であつたと言ひます。日本料理でお好なのが刺身で、それも魚は何でもよいので、新らしくて珍らしいものをお好みになり、それに飽けば鮨や鰻のせいこしを召し上るといふ風でしたが、此の兩三年は齒がお惡い爲にそれもお止になりましたとか。植物性の物ではセルリがお好でした。



伊藤公爵の官邸　（赤坂靈南坂）

△お汁と飮料の嗜好

お汁や野菜は料理屋で出す樣なのはお嫌で、ソップで煮込んだり、肉を煮しめたりして、濃くて溶けるやうなのをお選みになるので、西洋のシチュー式に作つて、飽かない樣にと色々と手を變へ品を變へたものださうで何方かといふとサッパリしたものがお好きであつたけれども、物によつては

随分脂こいものを召し上つたと申します。飲料は十年前迄は日本酒を澤山召し上つたさうなれど、二三年前からは醫者の勸告もありましてそれを全然お止めになつて葡萄酒をお用ゐになりましたが、薬用のもの乍ら、實はさまで頁いのではなかつたさうです。

△偉人の一面

金錢上には誠に淡白な方で、御自分の地位を利用して株式に手を出したり、大金を儲けやうといふ樣な了見は微塵もなかつた。それなればこそあれ丈の奉公をされたのでせう。けれども不思議な事には公の家庭へ這入つて見ると、公の氣質は全く變つてゐたと申します。公が久振りで大磯へ歸られると、先づ夫人に向つて、此頃一ヶ月の經濟は幾何位で足りるかなと御問ひになる、それから侍女共の給金は幾何宛與へてあるか、いやそれ丈けでは少なからう、もう五十錢宛增してやらう、と云つた風で、夫人が之を承諾されると、次には家令を呼んで其會計を細大となく質問されると申しますが、實に大人物は却て細心な所があるもので御座います。

△公爵の一族

公の御家族を擧げて見ますと、先づ公爵(六十九)を初めとして、夫人梅子(六十二)、長女生子(四十二)、次女朝子(三十三)、世嗣博邦君式部次官(四十)、同夫人たま子(二十九)、外にお孫の方が博精(十一)、博春(九ツ)、博道(八ツ)、琴子(七ツ)、愛子(四ツ)でありますが、其内長女生子は子爵末松氏に、次女朝子は西源四郎氏墺國大使館一等書記官に嫁され、博邦氏は始め勇吉と呼ばれて、井上侯爵の甥で、大使勝之助君の令弟です。そして博邦君の夫人たま子は横濱の豪商高島嘉兵衛氏の長女で、高島嘉右衛門氏の孫女に當る方です。尚ほ其の外に此程兒玉伯夫妻の媒介で桂首相の令孃壽満子(十四)と婚約がなつた男爵法學士伊藤文吉(二十五)といふ方が今度の賓主となつた方です。

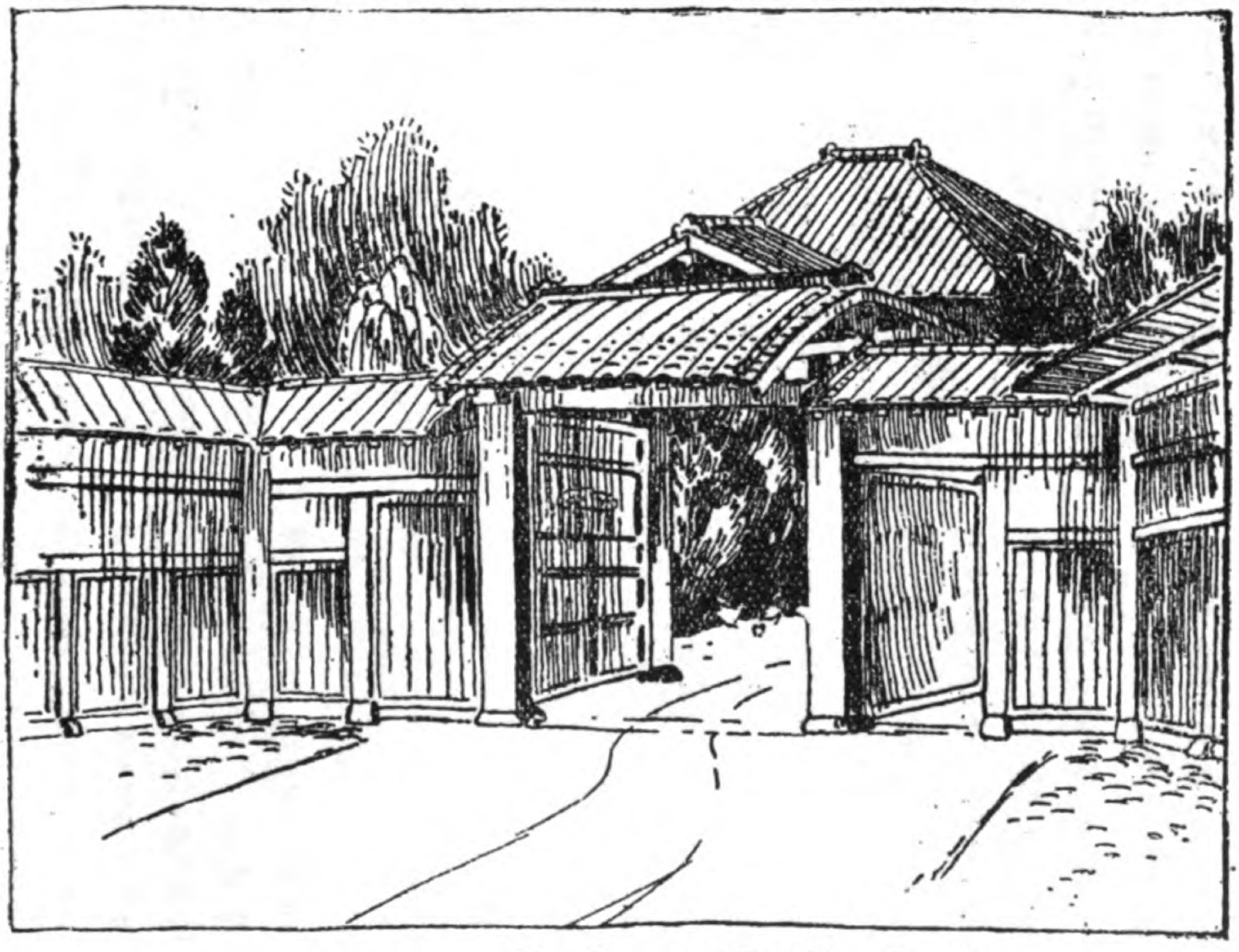
△夫人との交情

公は平常は半ばを大森の恩賜館に、半ばを大磯の邸に暮されて、靈南坂の官邸に入らるゝ事は極めて稀でした。そして大森に居られる時は、毎夜愛孫を呼び寄せて膝に抱き、頭を撫でつゝ博邦君夫妻と共に無邪氣な物語に夜を更かさるゝが常だつたと申しますが一體公は家庭に於ては誠に優しい方で、之れに就て面白い話があります。それは九月二日は公の誕生日ですから、例年大磯の邸で其日には、公爵夫人が今日は公爵の誕生日だといふので自ら眞先に立て家で大騒ぎをなされるのが格式になつてゐるのださうで、家族の人々も殘らず參集されるのです。ところが或年の其朝公爵は何處かへ出て居て却々歸つて來られません。で遲く歸へられますと、夫人は突如玄關へ飛び出して來て、貴方今日は何日だと思つて居らしやる！と曾て見た事も無い散々の不機嫌。公爵は吃驚してだんだん考へて見られると、成程誕生日なので

す。さあ失敗たと平謝りに謝つて、どうも俺れが悪るかつたと閉口頓首されましたが、何時の間にかこそ〳〵と裏門の方へ出て行かれた。どうもをかしいと思ふてお附の者が其の後を追ふて行くと、公爵は丹前姿で荒物屋へ入り込んで店の物を掻き廻はして種々の物を買ひ集てらつしやる。何をお買ひになるかと覗いて見ますと、袂から小銭を掴み出して箒や杓子や塵取などを山の様に買つて居られた其真面目な風體と言つたら迚も公爵といふ柄の人では無かつたさうですが、之れは夫人の機嫌を取る爲に福引の材料を買集めて居らしたのでございます。

△召使は感泣す

然しだいじになさるのは夫人、



井上侯爵の私邸（麻布宮村町）

や家族ばかりではなく、召使共に向つても同様で、十數年か公の厨房を司どつたといふ料理人などでも決して叱られた事がなく、料理が拙ければ食らない丈で、下の者をお叱りになる事はないと言つて居る程で召使には平素極めて同情を以つて接せられ、如何なる過失があるとも聲を荒らげて叱責せらるゝといふ事なく、何時も靜に其不注意をたしなめらるゝのが常ですから、召使の者も其寛大に服しつゝ而かも決して狎るゝ様な事がなかつたと申します。

△宮中女官服の由來

思へば公は色々の事に頭を御使ひになつたもので御座います。明治十七年の頃、宮中女官の服制をお改めになる節、畏く

も其國度の命に接したのは公爵夫人でありました。夫人は奥の御下命を如何にして全うせんかと心勞のまゝ歸宅して其由を公に告げられますと、公は打肯かれて、早速「大島(眞吉)を呼べ」と言はれました。やがて大島氏が参ると、夫人を招いて此處で三人寄つて智慧を絞り、公は韓國の風で特に文明國の長所を圖に畫き、夫人は日本婦人に似つかはしい優美なところ、大島氏は婦人服として最も衛生に叶つた上品なものを書かれ、茲に三人の考案を斟酌して適當なる女官服が出來て御下命を全うする事が出來ました。公が婦人の服裝に迄注目されて居つたとは世間恐らく知る人が稀れでありませう。

△非常な平民主義

公爵は決して世間で言ふ樣な御前樣氣取りに氣取つてゐられるといふやうな事はなかつた。從つて紋附などいふものは大嫌ひで、和服も隨分召されたけれども、紋附はあまり着られなかつた、尤も時と場合に依つて着られた事もあるが、實際は紋附の羽織や着物は非常に嫌つて居られました。夏などは大抵木綿の單物でした。公の平民的であつた事に就ても面白い話があります。韓國統監の任にお在りの時に、仁川を下つて鮮樓に御宿まりになつた事がある。其夜富田仁川民長をお呼びになつて、刀劍の嗜みある者を呼べとの事に、民長は畏つて捜し廻りました。漸う仁川京城中通りに米穀商を營んでゐる林某を連れて來ました。ところが此の林といふ人は評判の變り物で、秘藏の刀劍十數口を舁いで御前に行きました。公は大喜びで、刀劍を一々見て鑑定の物まで鑑定をされたが外づれなかつたものですから、「伊藤さん貴所は少し判りますな。」と憚らず刀劍談を試みました。すると公は面白い男と思はれたか、箱の中から「よい物を見せよう。」と小さい觀音像を取出されました。林は熟と見て負けぬ氣で「私の家にも印度の佛像で三千年も經つたのがある。」と肩を聳やかせば、公も亦負けずに「此れは持つまいがの。」といつて恩賜の金時計を見せ付けられる。すると林は負けると思ひの外「何の／＼私の家には日清戰爭の時獻金して貰いた木杯がある。其金時計だつて木杯と理窟は違はぬ。」との大氣焰。それからは林は度々刀劍を舁いで統監府に乘込み、門衛の一喝に逢ふと「伊藤さんに林が來たと言へ。」と誰憚からずに公の前に通つて快談するのが常で、公も亦非常に愛せられたと云ふ事であります。偉い人は何處か違つた處があるでは御座いませんか。

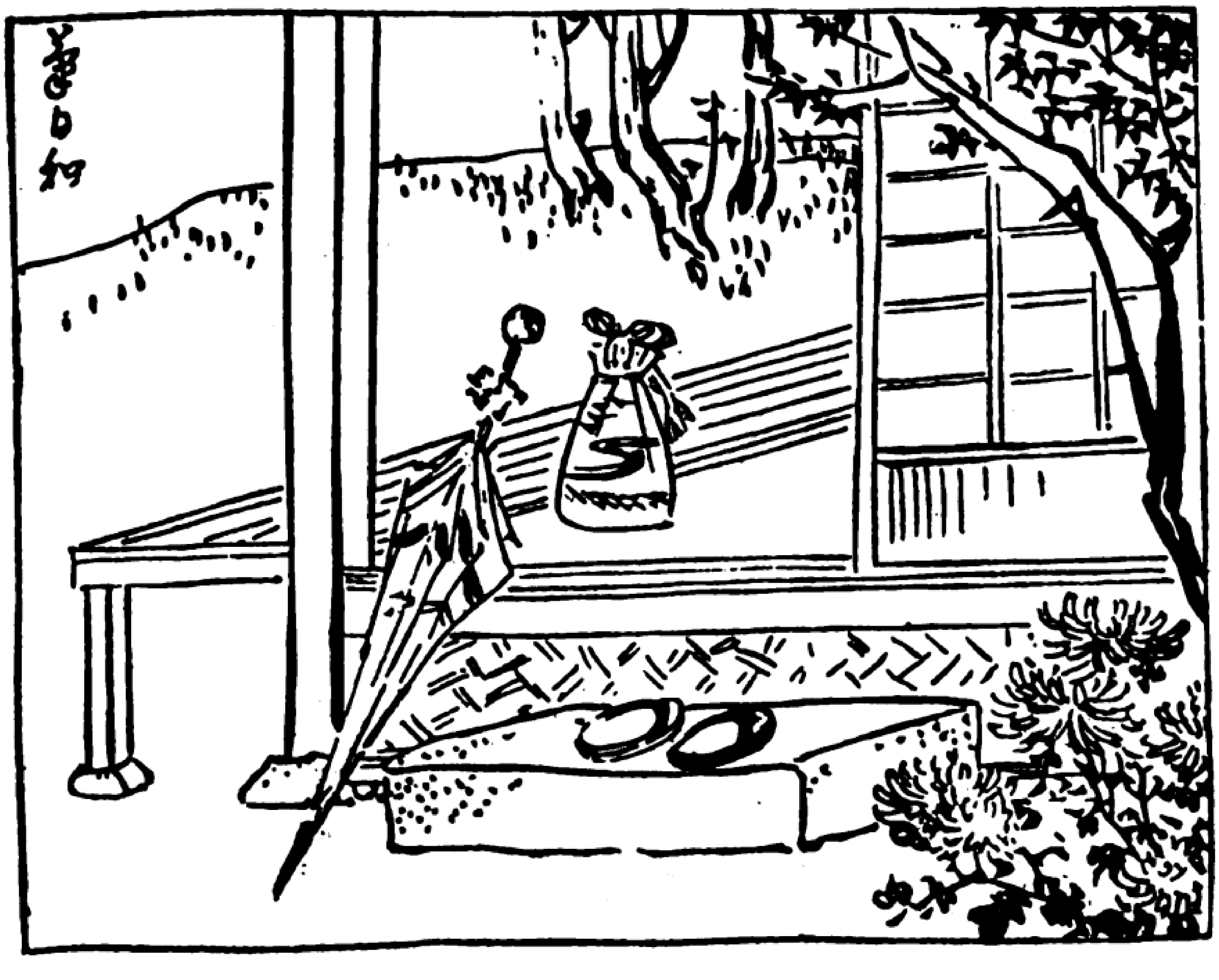
△遭難當時の實況

以下に記すは公の遭難當時其側に附いて居られた滿鐵理事中村是公氏、及び貴族院議員室田義文氏の當時の實況に就ての御話です。

「兇漢が公を狙撃した時は其距離は僅か一間に過ぎなかつた。中村が銃丸が公に命中したと知るや、直に室田と共に後方から公の身體を支へ、お怪我はありませんかと聞くと、三發ばかり中つたやうだと答へながら、十五六間も歩いて列車の中に引返へされ、兇漢は何者かと聞

かれたから韓國人ですと答へると、馬鹿な奴だと稍や怒氣を含まれた容子が見えた。中村は、はやくも公の容態の尋常ならざるを見て取つて確かりなさい、公爵確かりなさらなくてはいけませんよと聲を揚げて勵ますと、よし大丈夫だと答へられた。小山醫師はブランデーを勧め、室田は片手に公の首を抱き、片手に右手を握りて一杯を傾けしめた。公は苦悶の容體となつて、更に一杯を傾けられたが、物の十分も經たぬ間に顔色が蒼白くなり、手足は冷却して來た。重ねてブランデーを勧めたけれども、唯唸らるるばかりで、受付ける事が出來なくなつた餘儀なく水をガーゼに浸して口の端を拭ひながら、小山醫師は中村に向つて、もう駄目ですから今の中に早く遺言をと囁いたが、間も無く公の口は再び開かずなつた。」

「公の致命傷は最初右肩から下の方約二寸の所を貫通して右肋骨を貫き、左肺部に止まつたものを第一彈とし、第二彈は第一彈の下約一寸の右腕外面から同様内側を貫き、肋骨を射て左肺に止り、第三彈は右腕を貫き胸部及び左腕をかすめて居るが、之れは身體に入つて居ない。隨員の傷状は、田中満鐵理事は左足ブリくの下内側より外側に貫通し骨を折つて傷が最も重い。川上哈爾賓總領事は右腕から肩にかけて貫通創を負ひ、森槐南氏は左腕から背中をかすめて居るが傷は輕い。室田は右膝頭の外側から内側に貫通し、ズボントとズボン下を破られ、尉に外套の右の裾に二個所、同左の裾に一個所の彈痕がある。また中村も右膝下にズボンを貫通されたが、求費射の彈丸に就て検査すると、丸は凡て其先を十文字に切つたダムダム彈と認められる。」云々。



讀者倶樂部

▲内藤千代子樣失禮ながら誌上にて申上げます、私の樣な奥州の田舍娘からこんな事を申上げてさぞお驚きなさるでせう、誌上にて床しき君がみ筆のあとを拜し、なんとなく御なつかしく御目にかゝりたい樣な氣がしてなりません、私貴女の日記文なにより好き、幾度もくりかへして見ますの、オヽ貴女にも御兩親は揃ふて入らつしやらないのですつてネ、あゝ千代子の君よ、私にも父はないのです、だから尚更自分の身に引きくらべ御いたはしう思て居るのです、あゝ翼あらば鵠沼へ飛んで行つても御會ひ申したいのです、御なつかしき千代子樣よ、願はくは誌上にて御交際のほどを、(宮城大和田花子)

▲御田文子樣、あの記事が誠事實であるならばどうぞあなたと田代樣の御寫眞を此の次の誌上に載せて下さいまし、今の世のあつかましい戀路にひきかへて、テヱサテモ奥床しい御方々、御育柄も偲ばれてお懷しう存ます、左樣な御心がけの方々は定めし御生涯御幸福に御はすらんと人事ならずうれし其御心の清らかにお優しさの限りもなく實に男らしく女らしき二方よと床しうて、(大阪北河内郡秋子)

▲栗林海軍將校の御夫人と承るまへうらやましくて／＼涙こぼるゝ程なるに何の煩ひも心配もなく御心長閑にお待ち遊ばす御樣子、殊に御夫妻の御なからいもなみ／＼ならぬ御有樣、夫の君樣の御人格も偲ばれて奥床しう存ます、どうぞ此次の誌上には御夫妻の御寫眞を載せて下さいまし、あやかりたく存ます、世に此程清かに美しい交りはなからうと人事ならずおうれしうて、(大阪府北河内郡秋子)

▲私は皆樣から詩的だとか畫だとか可い名を頂戴致して居ります、花賣女ですが、世間往々私共は八瀬大原から出る樣に思召していらつしやいますが、私共は石で御ぞんじの白川村から出ますので、大原へ柴うりに出るのです、八瀬は石うりに出るので皆各自賣る品が違ひますが、貴誌の宮さよ子樣の「女の樣な京都の町」にもやはり八瀬や大原から出る樣にかゝれて有ましたから一寸申上ておきます、京都へ御越しでしたらとくと御らん遊ばせ、眞の大原女と花賣女とは俗に申す「ハヾキ」のはき方が違ひます、(京都白川花賣女)

▲記者先生に申します。今月の御雜誌に御かゝげになつた金子先生の「秋の月」は拜見して大へんおもしろく又益を受けたことです、(麻布紫苑女)

▲鏡子樣の仰の通り私も内藤千代子樣を大變御なつかしう存じて居ります、どうか御住所を御知らせ下さい、そして御交際も願ひ度御座います、

佐渡恒子樣私も大變花卉やなんかは非常にすきで每々小さな庭の畑で熱心に栽培して居ります、どうか以後は御交際を願ひます、(森野)

▲秀子樣のお仰せの通り、私も内藤千代子樣の御筆には、ホト／＼熱中致して居る者です、まだ御年も若くて入らしやるのに、よく、まアれ、これが本當の天才とでも申上げるのでせう、殊に松風、はすつかり氣に入つて終ひました、失禮ですが御住所、誌上で御知らせ下さいな、お願ひよ。(麻布にて君子)

▲女學世界に度々お作を拜見する内藤千代子樣、ほんとうにおなつかしく思ひますよ、此の後も思ひ切つたハイカラ式のお作をだして下さいませ、洗髮の無造作の束髮を寶石の簪でとめて緋羽根樣の帶を下げめに小意氣に結んだそして步く時に一寸横向き氣取つた樣な御方ぢやなくつて、ホヽヽ御免なさい、(淡濱桂川たか子)

▲誌友の諸嬢樣、本誌の改良と共に本欄を發展させようではありませんか、誌友相互の友誼を厚くするは本欄かと考へます、序に誌友の皆樣私は片田舍の娘が女にてどうする事も無く暮し

て居ります。何卒御見捨なく御交際否御教導下さい、(備中雄子)

▲四谷の銀波樣あなたはずゐぶん立派の御言葉をお持です事ネー、私はあなたの樣な御氣質の御方が大すきです、私はほんとにあなたの御氣質にラブ致しました、何卒御交際下さい、私あなたの心の聲音を是非承はりたいのです、(伊東操)

▲内藤千代子樣貴女はほんとに御上手れ、私いつも感心して樂しみに拜見致しますの、貴女の樣な方と御文通したらどんなに面白くまたためになるでせうれ、貴女ほんとに私と同じ年頃の少女で入らつしやるの? 何だか信じられない事、何だか貴女の氣質は私とよく似てゐる樣よ、何故つて文もよく似てをりますもの、もとよりずつと私の方が下手ですが、(東京名なし草)

▲諸友の姉樣方、御變り御座いませんか、私も本誌愛讀者の一人ですよ、どうか御手紙下さいな、他の木に負けないやうに本誌をます〳〵さかんにいたしませうれ、では姉樣方御きげんようさよなら、(名古屋市外吹上千石梅子)

▲行方定めぬ人生の行路、うら〳〵樂む春の野にも変風雨を呼時もあります、五日の雨十日の風、世は平々坦々ではありませんでせう、樂しいも悲しいも五十年の浪事と、口で申せば譯はありませんけれども、五十年は長い時と日でありますれた、どうせ一生なら愉快に送るのが勝利でせう、何方樣でも嬉しい時に御顏の點まで陽氣に滿ちて實になんとも申上樣もない御顏に現れます、ですから年中ピー〳〵感傷ばかりこぼさずに少し元氣溢るやうにといふ事を御忘れなく、泣いても笑つても成る樣にしかならぬなれば野心を捨てゝ天晴運命と御戰ひ遊ばせ、(千代子)

▲私は妹が六人ムいます、それも皆な小さいのばかりなのでその世話のやける事つて云つたらありませんよ、一日泣いたり笑つたりおこつたりそれは〳〵賑やかでムいます、明けて日曜日などはうるさくつて〳〵お仕事もろくに出來ませんの、何よりすきな女學世界も讀んで居るひまがない位なのでけれど又樂しいこともあると思ひます、皆樣、妹さまや弟樣について御實驗なされた有益なお話や可笑しいことつらかつた事などを讀者倶樂部で語り合つたら如何で御いませう?(岩代藤菊)

▲信大英子さまよあなたの御說は大さん成よこれより愛讀者の諸姉樣へ御願して是非記者先生の御許可をいたひものです皆さんよ御さん成を願上ます、(宮城靜子)

▲婦人に尤も大切なものは、幸は常識であらうかと思ひます、いくら深い學問をし、綺麗な姿を備ひましても、常識が無くては、到底浮世の荒波を泳ぎ越す譯にはゐりませぬ、ですから姿は日常高尚な藝術などよりか、常識を養ふ事に苦心して居ます。(大和すみれ)

▲私は雜誌の力の偉大なのに驚かずには居られません、殊に本誌などは日本は勿論大抵の所にゆかない所はないでせう、私はいつも讀む時にこの同じ文字が米國や獨國でも讀まれて居ると思ふと、實に愉快です、私なんかいつも漂泊の旅の身でございますが、行く所として女學世界を求めて無い所はありません、只今はゆくりなくも北海の空にさまよつて居ります、皆樣どうぞ御交際下さいまし、(福井靜子)

▲私しは本年高等女學を卒業しました、學生時代は前途に希望を持つて居りましたがなか〳〵世の中はまゝならず遂に自分の希望にむかつて行く事が出來ませんで今では女學世界を唯一の友とし運命を天にまかせて居りますどうぞ皆樣宜しく御導き下さいませ。(相模愛子)

▲私が初めて内藤千代樣の日記を拜見した時にはどんなにいゝ方なんだらうこんな方が姉樣だつたらと思ひましたの。でもだん〳〵此の頃御出になるのはいやになりましたのネ。ほんとに十七でいらしやるか知ら。(奈良白百合)

懸賞募集

マダム振り

一名 新奥様の幸福なる生活

（〆切十二月二十日）

マダムは女性が理想の一部を現實したるものにて婦人光榮の表彰なり、光榮のあるところは嫉みの集るところなり、マダムは女性の品位なり、又權威なり而して又歡樂を伴ふ、由來歡樂の滿つるところに患難生じ來たる、女性はマダムとなつてこの光榮と嫉みを受け、この歡樂と患難を受く、彼女は如何にしてこの間に處すべきか、吾人は光彩あるマダム振りの描寫によつてその暗示を得んと欲す。

賞金

等	賞金	人數
一等	五拾圓	一名
二等	參拾圓	一名
三等	貳拾圓	二名
四等	拾圓	五名
五等	五圓	十名

規定

△文體は各種隨意
△紙數は二十枚內外の事
△當選したる文は明春一月上旬發行の本誌に掲載
△賞金は發表の當日發送す

讀者文藝懸賞募集（〆切十二月十五日）

▲樣々の社會觀察
▲各地風　の變遷
▲こゝろの日記
▲我家の料理法
▲笑話▲短文▲和歌
▲讀者倶樂部

投稿規則◎笑話、和歌、短文、讀者倶樂部は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

賞金

△社會觀察　一等貳拾圓　二等拾圓　三等五圓
△風俗の變遷　一等拾圓　二等七圓　三等五圓
△こゝろの日記　一等七圓　二等五圓
△我家の料理　一等五圓　二等三圓
△和歌、短文、笑話　甲一圓　乙七十錢　丙五十錢　秀逸三十五錢

毎月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊
　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓半錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年十一月十日印刷納本　第九卷第拾五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百廿九番

(後付の六)

英學新報社編纂

明治四十三年英文日記

DIARYS FOR 1910

當用 價五拾錢 郵稅八錢

懷中 價參拾錢 郵稅四錢

毎歳喝采を博しつゝある最良の英文日記＝明年度用には更に内容を根底より覆して日用の必須事項に至るまで一層の精撰を加へたり＝殊に英文にて日記の書き方を和英對譯して一例を示したる如きは最も參考するに足るべく＝印刷製本又た多く意を用ゐたり其の他敢て贅せず＝倍舊の御愛用あらんことを偏に希ふ。

發兌 東京本町 博文館

東京神田 東京堂

賣捌所 各地書店



（後付の八）

女學世界

（毎月一回二十六日發兌）

明治四十二年十一月十日印刷納本 第九巻第拾五號（増刊 嫁にゆく人）明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可



（定價金貳拾錢 ● 郵稅金貳錢）